
俺の日常と召喚獣

裂やん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の日常と召喚獣

【Nコード】

N2371W

【作者名】

裂やん

【あらすじ】

この作品はバカとテストと召喚獣の2次小説です。これはオリ主『神楽橙夜』が弟妹やAクラスとFクラスの主要キャラ、その他オリキャラたちと面白可笑しく過ごす物語。雄二×翔子以外のカップリングは基本オリキャラ×原作キャラです。いつかぴったりのタイトルが決まれば良いな・・・。

第零問目 プロローグ（前書き）

枠外放置で新作書いている私。

後ほど原作キャラも含めてこの小説の設定を書きます。

それでは第零問目、どうぞ！

第零問目 プロローグ

Side・橙夜

これが難しいと噂の振り分け試験ね……。

確かに標準的な高校一年生にとっては難しいだろうけど、問題は
ないな。

この程度なら俺や睦月や紫はAクラス入りは固いかな。
因みに睦月と紫というのは俺とは年子で双子の弟妹だ。

でも真面目にやる気になれないな……。……。

一応、それなりにやっておくか。

Side・end

Side・睦月

振り分け試験は難しいと聞いていたが、この程度の問題なら俺と
橙夜兄と紫は問題はない。

明久が10月のある一件で『観察処分者』になってから今回の振
り分け試験で汚名返上の為に俺たちで勉強を教えてきた。

その甲斐もあって得意科目の世界史と日本史はAクラスの「次元

の違う」10人、苦手科目の古典はDクラスの中堅、それ以外はBクラスの上位相当にまで上がった。

これなら何とかAクラス入り出来るだろう。

そう思いながら解答を書いていると。

ガタン！

と、教室の後ろのほうから何かが倒れる音がした。

確認する為に振り向いてみたら俺たちの幼馴染みである姫路瑞希が床に倒れていた。

明久「瑞希ちゃんっ！」

それを見た明久はすぐさま瑞希の許へ駆け寄っていた。

教師「吉井、席へ戻りなさい」

明久「で、でも！」

さらに監督の教師も近寄っていた。

教師「試験途中での退席は「無得点」扱いとなるが、それでいいかね？」

瑞希「は……」

明久「ちよ、ちよつと先生！具合が悪くなって退席するだけでそれは酷いじゃないですか！」

教師「吉井、それが文月学園の校則だ」

そう、この文月学園のテストは100点満点の上限が無い上に、

試験途中での退席は無得点扱いになる。欠席や早退の場合も同じだ。再試験なんてものもない。

流石に退席だけで無得点は理不尽すぎる。解答している分だけでも採点されるべきだと思う。

明久「瑞希ちゃん、保健室に行こう」

まあーそれで明久が納得するはずもないよな。

教師「もう一度言う。吉井、席に戻れ。でないとカンニングとみなして無得点になるぞ」

明久「それなら僕もお腹の調子が悪くなったので保健室に行くので、途中退席で良いです」

やっぱりこうなるか……。まあーいいか。それじゃ俺も動くかね。

睦月「先生。二人の付き添いで保健室行くんで、俺も途中退席します」

そう言っただけ俺は明久と二人で瑞希に肩を貸して教室を出る。

瑞希「ごめ…んなさい…明久君、睦月君。私の…せいで、二人とも無得点に……」

明久「気にしないで瑞希ちゃん。僕が勝手にしたことだから」

睦月「俺は保健室に向かう途中で何かあったら大変だと思ってな」

どうやら瑞希は俺たちが付き添うことで無得点になったことに負い目を感じているようだ、俺たちが勝手にやったことだ。

睦月「Fクラスになっても楽しくやればいいんだよ」

明久「睦月の言う通りだよ」

睦月「それにこういう時は謝罪の言葉より相応しい言葉があるだろ？」

瑞希「えっと…そうですね。ありがとうございます」

俺の言葉に瑞希は少し悩んですぐに俺の意図を察したようで微笑んでお礼を言った。

睦月「そんじゃ、急いで保健室に行こうか」

そう言って俺たち3人は保健室に向かった。

Side・end

Side・橙夜

ん？あの廊下の人影って睦月と明久に瑞希か？

二人が瑞希に方を貸している様子からすると、瑞希が体調を崩して途中退席で睦月と明久は保健室までの付き添いってところか？

こりゃー途中退席の「無得点」扱いで3人はFクラス確定か。

これは好都合だ。俺もFクラスになって試召戦争を体験させてもらうとするか。

Aクラスは宣戦布告の権利がないからつまらんしな。

名前自体はまだ無記入だからこのまま試験を受けるとするか。

一年生になるのが楽しみだな。

S i d e . e n d

第零問目 プロローグ（後書き）

神楽橙夜（以降：橙）「おい、裂」

裂やん（以降：裂）「なんだ？」

橙「なんかゲストが来ているんだが」

裂「ゲスト？まだプロローグなのに一体誰だ？」

神儀紫稀（以降：シ）「私だ」

裂「紫、紫稀だと！？何故ここにいるっ！？」

シ「いや、ちょっと聞きたいことがあってな？」

裂「なんだ？」（ガクブル）

シ「私がいる枠外の方はどうなっているんだ？」

裂「えつとですね…実は……」

シ「実は？」

裂「……全然考えていない」

シ「は？」

裂「し、しょうがないんだ！バカテスの2次小説モノを読んでいた

ら無性に書きたくなつたんだ・・・！」

シ「しょうがなくねーよ！？一体何してたんだよ！？」

裂「枠外のプロットそつちのけでバカテスモノのオリキャラの設定
考えていたんだぜ・・・」

シ「ふざけるな！白い魔王登場させといて放置してんじゃねーよ！
急いで考えろ！私のために！！」

裂「分かつてるさ・・・。9月10日までには更新しているはずだ
から、それまで待ってる」

シ「本当だな？」

裂「本当だ。・・・多分だけど」

シ「有言実行しろよ！？」

裂「頑張るさ・・・。それではサラダバー！」

シ「あつ！逃げるな！」

橙「あれ？この小説の主人公って俺だよな？なんか影薄くない？」

ルール・試験科目設定（前書き）

「点数設定がちょっと違うんだ」by 神楽 橙夜

「原作通りの点数計算じゃないから気をつけろよ？」by 神楽 睦
月

ルール・試験科目設定

【文月学園におけるクラス設備の奪取・奪還および試召戦争のルール】

一、原則としてクラス対抗戦とする。各科目担当教師の立会いにより試験召喚システムが起動し、
召喚が可能となる。なお、総合科目勝負は学年主任の立会いのもとでのみ可能。

二、召喚獣は各人1体のみ所有。この召喚獣は該当科目において最も近い時期に受けたテストの

点数に比例した力を持つ。総合科目については各教科最新の点数の和がこれにあたる。

三、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減算され、戦死に至ると0点となり、

その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。

四、召喚獣はとどめを刺されて戦死しない限りは、テストを受けなおして点数を補充することで

何度でも回復可能である。

五、相手が召喚獣を喚び出したにもかかわらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄とみなし、

戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける。

六、召喚可能範囲は、担当教師の半径10m程度（個人差あり）。

七、戦闘は召喚獣同士で行うこと。召喚者自身の戦闘行為は反則行為として処罰の対象となる。

八、戦争の勝敗は、クラス代表の敗北をもつてのみ決定される。

この勝敗に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。

あくまでもテストの点数を用いた『戦争』であるという点を常に意識すること。

その他のルール・慣習

上位クラスは宣戦布告を断る事は出来ない。上位クラスは試召戦争によるメリットは特別の事情を有しない限り無いため、布告した生徒は上位クラスの生徒達にしばしばリンチを受ける。

敗北した側が下位クラスだった場合、下位クラスの設定が1段階下がる（Fクラスの場合、ちゃぶ台&mp;畳からみかん箱&mp;;ごぎ、その下は画板&mp;シートになる）。逆に上位クラスが敗北した場合、下位クラスと教室設備が入れ替わる（通常は使用されないが、上位クラスが勝利した場合に、勝利したクラスが望めば下位クラスのランクダウンした設備と設備交換の権利を行使することは可能）。

基本的に代表を討ち取るまで戦いは続くが、両者が望めば勝敗なしでの終結も可能。そのためクラス代表が撃破された場合でも、撃破した側が敗北設備を交換か条件を呑んでの引き分けなどの二択を提示した場合、勝敗なしでの決着もあり得る。

勝敗が決した場合、負けたクラスは3ヶ月の間自分達から試召戦争の申し込みはできない（ただし、勝敗が発生しなかった場合は適用

されない)。これは負けたクラスがすぐに報復を行うことによる泥沼化を防ぐ為。

両クラスの合意の上で且つ、テストの点数を用いていけば別の方法（代表を選出するの「一騎打ち」、通常と違う「小学生レベル」かつ「点数上限あり」のテストなど）での勝負も可能である。

戦争に負けてランクを落とされた設備は学期が変わる毎にリセットされる。

試召戦争が行われている間は、クラス代表は居場所を公開する義務がある。

【試験科目】

国語科目

現代国語・古典の2教科

数学科目

地理歴史科目

日本史・世界史・地理の3教科

理科学目

理科総合A（化学・物理）か理科総合B（生物・地学）のどちらか1教科

選択教科が違う場合、化学vs地学、物理vs生物となる

英語科目

英語リーディング（R）・英語ライティング（W）の2教科で
1教科扱い

公民科目

現代社会、倫理、政治・経済の3教科のうちの1教科
理科科目同様、選択教科が違う場合は現社vs倫理vs政経と
なる

保健体育科目

芸術科目

音楽・美術・工芸・書道の4教科のうち1教科
理科・公民科目同様、音楽vs美術vs工芸vs書道となる

総合科目

国語・数学・地理歴史・理科・英語・公民・保健体育・芸術の
8科目12教科

【点数設定】

単教科

Aクラス	180点	↘	Dクラス	120点	↘	140点
Bクラス	160点	↘	Fクラス	100点	↘	120点
Cクラス	140点	↘	Fクラス		↘	100点

次元の違うAクラス 300点

総合	
Aクラス	2160点
80点	
Bクラス	1920点
40点	2160点
Cクラス	1680点
00点	1920点
	Fクラス
	1200点
	1440点
	16

次元の違うAクラス 3600点

召喚獣の腕輪は単教科400点以上の時に装備される。
 総合科目では4800点の時装備される。

ルール・試験科目設定（後書き）

橙「英語科目の設定がよく分からんぞ」

裂「基本、試召戦争とかは英語Wの点数しか使用しないからな。英語Rは受験で必須だから授業でやるけど試験ではやらないって独自解釈だ」

橙「それでいいのか？それと慣習のランクダウンした設備と設備交換の権利って何だ？」

裂「私は6・5巻までしか持ってないから詳しくは知らん。9巻だったかの2次試召戦争のことだろ？」

橙「7巻から早く揃えろよな……。それとそろそろ俺たちの設定公開か？」

裂「次回そうなる予定だ」

橙「それでは次回で」

キャラ設定【神楽家】（前書き）

主要3キャラ+モブ的2キャラ紹介。

「私の本編出演はまだなの？」 by 神楽 紫

キャラ設定【神楽家】

【神楽家】

両親は仕事の都合上海外のため、吉井家の隣の部屋に現在は橙夜^{（とじや）}、睦月^{（むつき）}、紫^{（むら）}の3人暮らし。

家事は洗濯だけは各自、その他の炊事や掃除などは1週間の交代制。

金銭関係は橙夜が一切を管理している。

木下家とは父親と木下母、桜儀家とは母親と桜儀母が兄妹・姉妹関係。

両親と木下親、桜儀親、吉井親は学生時代からの付き合い。
子供達は木下姉弟・桜儀兄妹とは従兄妹姉妹、吉井姉弟とは幼馴染。

姫路瑞希も小学生の頃から幼馴染。

両親の仕事と言うか家は世界有数企業「神楽グループ」。
あらゆる分野にかなりのコネがあるため、霧島家と縁がある。
そのため子供3人は高校進学前から翔子と面識がある。

一般家庭より少々裕福程度の生活水準で暮らしている。
これは贅沢に慣れすぎない為の措置である。

【子供】

神楽^{（かぐら）} 橙夜^{（とじや）}

性別：男 神楽家長男

誕生日：4月19日

身長：173cm 体重：65kg

髪：黒で長さは胸くらいまで。首の後ろで一つに纏めている
顔：中性的だが言動や身長もあってきちんと男と扱われている
総合的に容姿は上の中程度

性格：冷静沈着、たまに感情的に動く時もある

好き（人・物・モノ）：愛子、家族（両親弟妹、木下家、桜儀家）、
吉井家、静かな時間、食事、昼寝、本

嫌い（人・物・モノ）：大切な人達（特に愛子・睦月・紫）を傷
つける存在、食事や昼寝の邪魔をされること、理由なく騒がしいこ
と、他人の迷惑を考えない行動、卑怯者

特技：暗器術（物語シリーズの戦場ヶ原ひたぎ）

料理（明久以上）

ゲーム（明久に付き合っているうちに最強に）

趣味：読書（小説・漫画・実用書・純文学問わず）

得意科目：政治・経済、数学 800～1000点

国語・英語 700～800点

苦手科目：なし

その他：500～700点
総合点：7200～9300点

召喚獣

服装：無地のシャツに革のズボン、召喚獣より短いコート（黒一色）
狐の仮面

武器：メインは糸系列（鋼糸など）、サブで鉄扇

腕輪：爆破（消費点数で威力増減）

補足：糸は切断や捕縛などが可能、糸の一部を腕輪の能力で爆破も可能、1対多向き

備考：

睦月と紫は年子の弟妹

試召戦争をやる為に振り分け試験で7500点以上を取るが全科目無記名で提出し0点でFクラスへ。

文月学園の入試時にも6000点以上を取るが情報管制をしいている為、この事はあまり知られていない。「幻の入試トップ」「幻の学年主席」

一年時はあまり目立たないようにAクラスの平均程度に抑えていた。実質的な学年主席。

8、9歳の頃に父親を隠れ蓑の社長として会社を設立。以後数年で世界有数の企業「神楽グループ」に。「神楽グループ」の実質的トップ。

1年の終わりごろに転入してきた愛子に恋愛感情を持っており、愛子の方も少なからず意識しており、友達以上恋人未満な関係。

趣味の読書が高じてオタク化している（暗器術がいい例）。

ムツツリー二以上の情報収集処理能力を誇る。

体も鍛えているがマッチョではない。実力は本気になったりすると雄二よりも強く、キレると愛子や家族関係など以外では止められ

なくなる。

神楽かくら
睦月むつき

性別：男 神楽家次男

誕生日：3月27日

身長：170cm 体重：61kg

髪：黒で長さは肩に届かない程度

顔：橙夜と比べると男性的

総合的に容姿は橙夜と同じく上の中程度

性格：感情的に動くこともあるが、時には冷静に状況を把握出来る感情コントロール型

好き（人・物・モノ）：家族（両親兄妹、木下家（特に優子）、桜儀家）、吉井家、橙夜の作る食事（甘味含む）、優子との時間

嫌い（人・物・モノ）：大切な人達（特に優子）を傷つける存在
理由なく暴力を揮うモノ、朝（低血圧）、話を聞かない人

特技：剣道二段、柔道初段

料理（美波以上明久未満、紫も同等）

ゲーム（橙夜同様、明久に付き合っている内に橙夜に次いで明久・雄二・康太と四天王に）

趣味：音楽鑑賞

得意科目：数学・音楽 750～850点

英語・地理 600～750点

苦手科目：古典 350～450点

その他：450～550点

総合点：6200～7400点

召喚獣

服装：紺色の剣道着

武器：日本刀二本

腕輪：ダメージ無効化（2000点消費で30秒間無効化）

補足：腕輪は1回の戦争で2回のみ使用可

備考：

橙夜とは年子で紫は双子の妹。

振り分け試験の時に途中退席した瑞希に明久と一緒に付き添い無

得点でFクラスへ。

橙夜同様に目立ちすぎないようにAクラス平均程度に抑えていた。
実質的な学年次席。

幼少時から優子一筋。両想いだが、お互い自身に向けられている
好意に鈍感。

喧嘩などの実力は雄二よりは劣るが十分に強い。

橙夜や紫、優子などが肉体的精神的問わず傷つけられるとキレる。

橙夜同様キレると手が付けられなくなり、止められるのは橙夜、

紫、優子、両親、煉の6人だけ。

神樂かぐら
紫ゆかり

性別：女 神樂家長女

誕生日：3月27日

身長：161cm 体重：56kg

髪：黒で長さは腰くらいまででストレートだったりポニーテール
だつたりと気分で変えている

顔：橙夜と比べるとかなり女性的

総合的に容姿は上の上から上の中程度

性格：クール系 普段は消極的だが、やる時はやるタイプ 明久
が関わるとたまに暴走する

好き（人・物・モノ）：家族（両親兄、木下家、桜儀家）、吉井
家（特に明久）、橙夜と明久の作る食事（甘味含む）、小動物、本

嫌い（人・物・モノ）：大切な人達（特に明久）を傷つける存在、
礼儀知らず、お化けや幽霊、怖い話

特技：合気道（護身程度）、弓道

料理（美波以上明久未満、睦月も同等）

趣味：読書（恋愛モノ）、小説・漫画問わず）

明久の世話

得意科目：日本史・世界史 700～750点

地理 600～700点

苦手科目：数学 250～300点

保健体育 200～250点

その他：350～550点

総合点：4900～6600点

召喚獣

服装：白の弓道着

武器：メインは弓矢（同時射出は最大30矢まで）、サブは小太

刀二本

腕輪：必中（1回の使用で150点消費）

補足：腕輪使用時の同時射出は最大3矢まで（つまりは1矢で50点消費）

備考：

橙夜は年子で睦月は双子の兄。

振り分け試験時、適度に手を抜いて翔子、久保に次いで学年三席。一年時は目立たないように優子と同程度まで抑えていた。

実質的に橙夜、睦月に次いで燐、翔子、瑞希と学年三～六席を競い合う。

幼少時から明久一筋だが、明久が超鈍感な為、中々振り向いても
られない。

【親】

神楽父（名前募集）

備考：

橙夜たちのスペックの高さの要因。

会社設立の際に橙夜に隠れ蓑にされた、若干不幸な人？

元々有名企業の社員だったため能力は高い。

現在は妻と一緒に世界中を回って仕事をしている。

橙夜たちの証言によると砂糖を吐きたくなるほどに今でも妻とラブラブラしい。

神楽母（名前募集）

備考：

橙夜たちのスペックの高さの要因。

神楽父とは別の有名企業の敏腕社員だったが、橙夜が会社設立時に職場を変えた。

「神楽グループ」が現在まで大きくなったのはこの人の手腕による部分もある。

現在は夫と一緒に世界中を回って仕事をしている。

橙夜たちの証言によると砂糖を吐きたくなるほどに今でも夫とラブラブラしい。

キャラ設定【神楽家】（後書き）

橙「俺たちの成績は異常すぎないか？」

裂「大丈夫だ、問題ない」

神楽睦月（以降：睦）「いやいや！問題ありまくりだろ！？」

神楽紫（以降：紫）「原作の翔子でも単教科の最高点は500点くらいだし総合でも5000点超えるかどうかじゃない！」

橙夜兄さんなんて最低でも500点とかインフレしすぎよ！！」

裂「他の作者さんの作品には単教科1000点超えとかあるから平気なんだって！」

橙「成績のことはもういいか。で、この物語はどの辺まで方向性が定まっているんだ？」

裂「詳しくは話せんが1巻の試召戦争は大体決まっている。

問題があるのは2巻の清涼祭の導入部分なんだよな。

姫路の転校がどうたらってやつ」

睦「なるほど。原作ではござとみかん箱になったことでその問題が浮き出てきたんだっただな」

紫「それで、この物語では転校話はどうなるの？」

裂「だからそのことで悩んでるんだって。案が一つあったんだが、没になった」

橙「どうしてだ？」

裂「今はまだ言えない。Aクラス戦が終わったらな。

理由だけ言つとそれをしてしまつと登場できないキャラが増えるからなんだが」

睦「そういうことならそれまで待つことにするか」

紫「今回はこれくらい？次回は隣たちの設定公開になるのかな？」

裂「そういうことになる。それではまた次回」

キャラ設定【桜儀家】（前書き）

「私の出番はまだ来ないの……？」 b y桜儀 燐

「もう少しだろ……俺なんて此処で紹介されたのにまだまだ先だぜ
……？」 b y桜儀 煉

キャラ設定【桜儀家】

【桜儀家】

両親と兄である煉は「神楽グループ」の傘下の有力企業の幹部役員や社員。

両親と煉は仕事などで海外にいたので、吉井家と同じファミリーマンションで吉井家の神楽家じゃ無い方の隣の部屋に燐の1人暮らし。4、5ヶ月に一度くらいに煉は帰ってくる

神楽兄弟妹とは従兄弟妹、木下姉弟とは血縁の無い親戚。

平日の夕食や休日の昼食をよく神楽家に明久と一緒に集りに来たり、逆に招待したりしている。

生活水準は神楽家と同様の措置をとっている。

【子供】

桜儀 燐

性別：女 桜儀家長女

誕生日：6月8日

身長：153cm 体重：45kg

髪：藍色に近い青で長さは肩より少し下くらい

顔：中性から若干女性より
総合的に容姿は上の下程度

性格：穏やか系ドジっ娘

好き（人・物・モノ）：家族（両親兄、神楽家、木下家（特に秀吉））、吉井家、秀吉との時間、研究、橙夜の作る甘味

嫌い（人・物・モノ）：大切な人達（特に秀吉）に害なす存在、秀吉との時間を邪魔する存在（橙夜達を除く）、辛いもの

特技：料理（美波以上睦月・紫未満）

趣味：秀吉の演技観賞・差し入れ

実験

得意科目：理科総合A（化学・物理） 650～700点（選択していない理科総合B（生物・地学）も同程度）

数学 550～650点

苦手科目：地理歴史 250～350点

その他：350～500点

総合点：4700～6100点

召喚獣

服装：軍服に赤いコート

武器：銃

腕輪：停止（100点消費で20秒間対象の召喚獣1体の動きを止める）

補足：連続使用不可、再使用する為には効果が切れてから2分間

のクールタイムが必要

備考：

煉の妹。

何でもないときによくミスをするが、肝心な場面では確りしている。

成績は橙夜、睦月、紫と次いで翔子と実質学年四、五席。

振り分け試験では翔子、久保、紫に次いで学年四席。

社会科目は比較的苦手だがAクラスとしては申し分ない。

昔から理科科目が得意でよく研究や実験をしている。

優子が腐なのを知っている数少ない人物。

中学時代から一生懸命に演劇に取り組む秀吉の姿勢に惚れて時々差し入れをしたりと応援している。

秀吉とは両想いだが、お互い告白する機会に恵まれず友達以上恋人未満な関係が続いている。

桜儀さくらぎ
煉れん

性別：男 桜儀家長男

髪：燐の髪色に若干赤みを足した感じの紫？青？藍色？

顔：知的な感じ

総合的に容姿は上の下程度

性格：飄々として掴みどころが少ない

備考：

燐の兄。玲と同年。

「神楽グループ」の有力企業の社員として世界中を回っている。

4、5ヶ月に1回程度日本に帰国する。

明久の姉の玲と只ならぬ仲。その件で紫（というか橙夜）に世話になった。玲に紫ならと明久との不純異性交遊を容認させた。

料理の腕前は明久と同程度かそれ以上

【親】

桜儀夫妻（どちらも名前募集）

備考：

学生時代からの恋愛結婚。

二人とも優秀な為、「神楽グループ」の傘下の有力企業の幹部役員。

海外で神楽夫妻とは別系統の仕事を担当している。

キャラ設定【桜儀家】（後書き）

紫「燐たち桜儀家の紹介したけどさ」

裂「うん？」

紫「煉兄さんの出番って原作5巻の時なんでしょ？」

裂「その通りだ」

桜儀煉（以降：煉）「だったらどうして今紹介したよ……」

裂「家族は家族で纏めた方がいいと思っただからだ」

桜儀燐（以降：燐）「煉兄頑張つて。それで私と秀君との絡みはいつなの？」

裂「Aクラスに宣戦布告する時までは一緒に登下校したりする位かな？」

燐「そつか……。お弁当作ってお昼一緒に食べたかったのに……」

裂「昼休みは試召戦争の戦術指令も兼ねているからな……フリーファイenge……新学期開始してから4日目位なら大丈夫そうだ」

燐「それなら秀君のために美味しいの作ってあげようつと」

橙「で、キャラ設定公開は後どのくらい掛かるんだ？」

裂「オリキャラ1人と原作キャラの設定を若干改変する程度だから2つ分くらいかな？それと使い捨てのFクラス生徒の設定くらいか」

睦「使い捨てって……。酷い言い様だな」

裂「FFF団に入るようなキャラなんて使い捨てで言いと思うんだ。そういえば忘れていたけどこの物語の明久はFFF団には加入していないからな？」

橙「それは重畳だ。愛子や紫たちに近寄ってくる害虫の駆除が存分に出来るぜ……。くくく」

裂「なあー睦月」

睦「あん？」

裂「橙夜のキャラが既に壊れてんだけどどうするべきだ？」

睦「こうなった橙夜兄は放置するに限る。害を受けるのはFFF団だから構わんだろうし。つつか壊したのお前じゃねーか！」

裂「いや、気付いたら壊れてた。私のせいじゃない！まあー放置ってことで、今回はこれでさよならだ」

紫・燐「また次回ー」

煉「俺の出番は最初の一言だけかよー！ー！」

橙「どうやって肅清してやるうか……。

あれ？みんなどこ行った？おい！

これってまた俺の影が薄いオチかよー！！」

キャラ設定【原作キャラ】（前書き）

原作キャラの改変設定など。

「姉さんはアキくんのことを愛しています　姉として」b y 吉井

玲

「女である私より弟の秀吉がモテるだなんて……」b y 木下　優子

「ワシは男じゃ！」b y 木下　秀吉

「学力だけが全てじゃないと証明してやる」b y 坂本　雄二

「………エロに興味なんて無い」b y ムツツリーニこと土屋　康太

「ウチだっていつかは……」b y 島田　美波

「……私の夢は雄二のお嫁さん」b y 霧島　翔子

「好きな食べ物はシュークリームだよ。特に橙夜君のが」b y 工藤

愛子

「……性別なんか関係ない、か……」b y 久保　利光

キャラ設定【原作キャラ】

【吉井家】

両親、子供2人の4人家族。

現在は仕事の都合で両親は海外へ、姉の玲も海外なのでファミリーマンションに明久が1人暮らし。

原作どおり家庭内の権力図は母>玲>父>明久である。

【子供】

吉井 よしい 明久 あきひさ

性別：男 吉井家長男

誕生日：10月18日

得意科目：歴史 500～600点

苦手科目：古典 100～150点

その他：150～200点

総合：2450～3150点

召喚獣

服装・武器：原作どおり

腕輪：武装強化（消費する点数で木刀の強度などが向上する）

補足：150点以上消費すると日本刀や西洋剣などに変化する

形状は刀や剣と呼ばれるもののみ。槍や弓などには変化する

ない

備考：

神楽兄弟妹、桜儀兄妹とは小さい頃から隣人で幼馴染。 姫路瑞希とも小学生の頃から幼馴染。

ある事情で仕送りの管理を橙夜にされているため規則正しい生活をしている。

以前はよく平日の夕食や休日の昼食を神楽家や桜儀家に集っていたが、以降は招待したりしている。

学校に持つていく弁当は橙夜・睦月・紫・燐の4人と日変わりです人分作っている。

紫のことが大切で好きだが超鈍感な為自身のその気持ちが恋愛感情だと理解できていない。

観察処分者にされた時から神楽兄弟妹・燐・瑞希に一方的に勉強を見てもらっていた。

振り分け試験の時に睦月と一緒に体調を崩した瑞希を保健室に連れて行き途中退席扱いでFクラス。

他は原作どおり。

吉井よし 玲あき

性別：女 吉井家長女

備考：

明久の姉。 煉と同じ年。

理由不明だが海外にいる。

燐の兄の煉とは只ならぬ仲。 その件で紫（というか橙夜）に世話

になった。

煉經由で橙夜に明久と紫の不純異性交遊を容認させられた。
煉の存在により原作ほどブラコンではなく、異性ではなく姉として愛している。

この作品での初登場時はバスローブ姿ではない。
その他は原作どおり。

【親】

吉井夫妻（夫・吉井明彦、妻・吉井秋）

10月に明久が観察処分者になった際に仕送りの管理を橙夜に頼んだ。

その他は原作どおり。

【木下家】

木下家は夫妻が神楽夫妻・桜儀夫妻・吉井夫妻と学生時代からの仲で家族ぐるみの付き合い。

さらに神楽家とは木下母が神楽父と兄妹なため子供達は従兄姉弟妹関係。

他は・・・原作に出てこないから知らない。

【子供】

きのした
木下 優子 ゆうこ

性別：女 木下家長女

得意、苦手科目：なし 250～400点

総合2900～4800点

召喚獣

服装：西洋鎧

武器：ランス

腕輪：火炎（消費点数によって威力増減）

補足：敵召喚獣に炎を飛ばしたり武器に纏わせてる 最弱威力で

30点消費

備考：

秀吉の双子の姉。

橙夜たちの存在がある為、原作ほど下位クラスを見下したりはしない。

睦月とは幼少期から両想いだが本人の前であまり素直になれない。
お互い向けられている好意に気付いていない為、友達以上恋人未満な関係。

他は原作どおり。

きのした
木下 秀吉 ひでよし

性別：男（性別：秀吉？） 木下家長男

得意科目：なし

苦手科目：古典 40～60点

その他：70～90点

総合：810～1050点

召喚獣

服装・武器：原作どおり

備考：

優子の双子の弟。

演劇を応援してくれている燐に恋愛感情を持っている。友達以上恋人未満な関係。

告白する機会がなく、したとしてもその後の関係が壊れるのが怖いため告白はしていない。

他は原作どおり。

【Fクラス】

坂本 雄二
さかもと ゆづじ

性別：男

得意、苦手科目：なし 70～100点
総合：840～1200点

召喚獣

服装・武器：原作どおり

備考：

Fクラス代表。

翔子に対する感情は原作とは若干異なる。
他は原作どおり。

土屋 つちや
康太 こうた

性別：男

得意科目：保健体育 400～600点

苦手科目：保体以外 20～40点

総合：620～1040点

召喚獣

服装・武器・腕輪：原作どおり

備考：

ムッシューニ
寡黙なる性識者。

須藤結子の幼馴染で隣人。

結子に恋愛感情を持っているが、生死に関わる為告白などはしていない。

他は原作どおり。

姫路 ひめじ 瑞希 みずき

性別：女

得意科目：不明

苦手科目：物理（自称） 250～350点

その他：350～450点

総合：4100～5300点

召喚獣

服装・武器・腕輪：原作初期どおり

備考：

小学生の頃から神楽兄弟妹・燐・明久と幼馴染。

他は原作どおり。

島田 しまだ 美波 みなみ

性別：女

得意科目：数学 150～200点

苦手科目：国語 10～30点

その他：50～80点

総合：620～980点

召喚獣

服装・武器：原作どおり

備考：

原作どおり

【Aクラス】

霧島きりしま 翔子しょうこ

性別：女

得意、苦手科目：なし 350～500点

総合：4200～6000点

召喚獣

服装：武者鎧

武器：日本刀

腕輪：一重力操作（あらゆる重力を加減する）

補足：加減倍率は消費点数の5分の1倍 持続時間は消費点数の4分の1秒

例：100点消費で25秒間20倍加減

備考：

文月学園進学前から神楽兄妹と面識有。

Aクラス代表。学年主席。

橙夜、睦月、紫と次いで燐と実質学年四、五席。

雄二曰く「一度覚えたことを忘れない」らしいので得意、苦手科目がない。

唯一の間違いは「大化の改新」を625年で覚えていること。

橙夜の助言により雄二へのお仕置きなどは原作より弱体化、アピールの仕方も若干変化している。

他は原作どおり。

工藤 くどう 愛子 あいこ

性別：女

得意科目：保健体育 300～500点

苦手科目：理科総合A 150～200点

その他：200～300点

総合：2400～3600点

召喚獣

服装：原作どおりセーラー服

武器：原作どおり模様の入った大斧

腕輪：雷気（電気属性の付加）

補足：点数は一定しか消費しない 付加出来るのは武器と自身の召喚獣のみ

備考：

(自称) 78・56・79。ノーブラ。スパッツ常備。水泳部所属。作中の数少ない(?)常識人。

好きなものはシュークリーム(特に橙夜が作ったやつ)。

1年の終盤に一年時の橙夜のクラスに転入してきた。学園案内などを橙夜たちにもらった。

色々とおつて橙夜のことを異性として意識している。友達以上恋人未満な関係。

久保^{くぼ} 利光^{としみつ}

性別：男

得意科目：文系(7教科) 350～450点

苦手科目：理系(3教科) 150～250点

その他：英語 保体 200～300点

総合：3300～4500点

召喚獣

服装：鎧袴

武器：二振りの大鎌

腕輪：交換(2000点消費で対象の召喚獣と場所を交換する)

備考：

学年次席。原作どおり。

明久への気持ちはどうなるかは分からない。

キャラ設定【原作キャラ】（後書き）

橙「結構時間が掛かったな」

裂「まあーね。途中で決めてなかった設定もあったから」

睦「次は残っているオリキャラの設定公開か？」

裂「そうなる」

燐「秀君に会いたい〜」

裂「スルースルー」

紫「結局のところ試召戦争の結末って決まってるの？」

裂「二つ準備してある。どちらにするか迷いどころ」

霧島翔子（以降：翔）「……雄二が付き合ってくれるならなんでもいい」

紫「翔子来たんだ。相変わらず一途だね」

翔「……紫も一途」

紫「あ〜……」

燐「真っ赤になってる〜。可愛いね」

紫「そういう燐だつて秀吉のことになれば」

翔「……燐も木下のことになると真っ赤になる」

燐「あうあう……」

裂「はいはい。ガールズトークに突入するのは勝手だがここでやらないでくれよ」

橙「それもそうだぞ」

睦「早く終わらそうぜ。いい加減設定だけじゃなく本編に進みたい」

裂「そうだな。次は残りのオリキャラの設定公開だ」

橙「それじゃまた次回」

キャラ設定【オリキャラ】（前書き）

これでキャラ設定公開は終われるな……。
後は前書きや後書きで最高点での実質的な学年順位発表や料理の腕
前発表くらい。

「康君のお世話は私の仕事」 b y 須藤 結子

「召喚システムは興味深い」 b y 織斑 朱雀

「朱雀と離れ離れにならなくてよかった」 b y 神原 日向

「僕の近くで桃色の空間を作らないで……」 b y 織斑 燕

「燕……それについては、もう諦めよう……」 b y 神原 焰

キャラ設定【オリキャラ】

【Aクラス】

須藤 結子すどう ゆいこ

性別：女

誕生日：9月13日

身長：156cm 体重：47kg

髪：茶色のショートカット

顔：美少女系

総合的に容姿は上の下程度

性格：のんびり

好き（人・物・モノ）：家族、康太、康太の作る食べ物（甘味含む）

嫌い（人・物・モノ）：康太に害なす存在（橙夜たちは除く）、康太との間を邪魔する存在（FFF団など）、虫全般、お化けや幽霊

特技：家事全般（料理は燐と同等）

趣味：康太の世話（平日は起こしたりお弁当を作ったり、休日は康太の部屋の掃除など）

読書（恋愛モノ）

得意科目：保健体育 350～500点
英語 350～450点
苦手科目：数学 100～200点
その他：300～350点
総合：3500～4300点

召喚獣

服装：西洋風の鎧

武器：ランス

腕輪：氷凍（優子の火炎の氷版）

補足：1000点消費で指定した地点を中心に直径30cm範囲を凍らせる

備考：

ムツツリー二こと土屋康太の幼馴染で隣人。土屋家と須藤家は家族ぐるみの付き合い。

得意科目の保健体育は康太の影響。試験がないが家庭科は花嫁修業的に頑張っている。

康太一筋。康太も満更ではないがFFF団や生死に関わる為いまいち発展しない。両家公認。

ムツツリ商会で唯一取引されない学園の美少女（愛子は橙夜、睦月は優子、明久は紫、燐は橙夜経由で秀吉が買占めている為、取引自体はされている）。

康太そっくりのぬいぐるみを作り部屋に飾っている。

【織神グループ】

建築関係の会社の織斑と飲食店関係の神原が合併して出来た企業グループ。

建築関係と飲食店関係に力を入れている。

合併事業体系なので、神原側が代表取締役になっているが、実際は織斑と神原の権力の差はない。

合併した理由は社長二人が学生時代からの付き合いだったからと
言うそんな理由。

その為、織斑家と神原家は家族ぐるみの付き合いで仲が良い。子供達は幼馴染の関係。

海外進出する際に子供達が日本に残ると言ったので、知り合いである神楽家がいる文月学園近くのファミリーマンションに引っ越した。

このファミリーマンションは橙夜たちとは別である。

【織斑家】

「織神グループ」の建築分野を取り仕切っている。両親と息子2人の4人家族。

現在は「織神グループ」が海外進出する際に息子2人が日本に残ると言ったので、兄弟の2人暮らし。

ファミリーマンションの隣の部屋には神原家の双子が住んでいる。

【子供】

織斑 おりむら
朱雀 すざく

性別：男 織斑家長男

得意科目：理科総合A 600～800点 (理総Bの地学も同程度)

数学 600～700点

苦手科目：歴史 200～300点

その他：300～500点

総合：4300～6400点

召喚獣

服装：騎士鎧

武器：両手剣

腕輪：地震(1回の使用で150点消費)

補足：フィールド内の敵召喚獣を転ばせて身動きを取れなくさせるだけ

敵召喚獣自体にダメージはない

備考：

「織神グループ」の織斑建築の社長子息。燕の兄。

清涼祭準備期間前に文月学園に転入してきた。

編入試験でAクラス最上位の点数を取るが途中編入の為、Fクラスへ。

神原日向とは恋人関係で婚約者でもある。

料理の腕前は美波と同等。

織斑おりむら 燕つばめ

性別：男 織斑家次男

備考：

「織神グループ」の織斑建築の社長子息。朱雀の弟。
小学5年生。葉月のクラスメイトに。
朱雀と日向のイチャつき振りには呆れている。
料理の腕前は人並み程度。

【神原家】

「織神グループ」の飲食店関係を取り仕切っている。両親と娘2人の4人家族。

現在は「織神グループ」が海外進出する際に娘2人が日本に残ると言ったので、姉妹の2人暮らし。

ファミリーマンションの隣の部屋には織斑家の兄弟が住んでいる。

【子供】

神原かんばら 日向ひなた

性別：女

得意科目：英語 600～700点

苦手科目：保健体育 100～200点

その他：300～500点

総合：3700～5900点

召喚獣

服装：セーラー服

武器：日本刀と小太刀が一本ずつ

腕輪：常時加速

補足：使用開始から10秒ごとに40点消費

備考：

「織神グループ」の神原食品の社長令嬢。焰の双子の姉。
朱雀と同様に途中編入の為、Fクラスへ。
織斑朱雀とは恋人関係で婚約者でもある。
料理の腕前は燐・結子と同等。

かんばら
神原 焰 ほむら

性別：女 神原家次女

得意科目：国語 500～600点

苦手科目：理科総合A 200～300点

その他：300～500点

総合：3800～5800点

召喚獣

服装：文月学園の制服（衣替えで夏冬変更）

武器：大鎌

腕輪：火炎（優子と同様）

備考：

「織神グループ」の神原食品の社長令嬢。日向の双子の妹。

朱雀や日向と同様に途中編入の為、Fクラスへ。

姉の日向と朱雀のイチャつき振りに、燕と同様に呆れている。

料理の腕前は睦月・紫と同等。

キャラ設定【オリキャラ】（後書き）

須藤結子（以降：結）「私の紹介もやっとされました」

織斑朱雀（以降：朱）「俺たちの紹介してもいいのか？」

織斑燕（以降：燕）「ネタバレになるのでは？」

裂「問題ない」

神原日向（以降：日）「途中編入は問答無用でFクラスって酷いわよね」

神原焰（以降：焰）「確かにそうだね」

裂「橙夜たちと絡ませるにはそうさせるしかないんだから仕方が無い」

橙「そうだとしても酷いな」

紫「燕くんの出番って葉月ちゃんと一緒に清涼祭に来るまで無いよね？」

燕「……家では桃色空間のせいで疲れるのに出番まで少ないなんて……」

裂「しょうがないだろうが！小学生がちよくちよく学園に侵入したらしたで変じゃないか！」

睦「それもそうだな」

燐「という事で諦めて欲しいらしいよ」

燕「はい……」

橙「さて、キャラ設定公開も今回で一区切りついたわけだ」

裂「そうなる」

橙「つまり、やっと物語が動き出すってことで良いんだな？」

裂「そういうことだ」

裂以外「やったー！」

裂「と言ってもFクラス以外はAクラス戦になるまで出番はあまりないが」

紫「Aクラス戦になれば出番があるってことよね？」

裂「そういうことになる」

燐「そうなれば秀君と絡めるんだ……」

結「康くん、Aクラス戦まで待ってるね」

男達「はい、そこ。桃色空間作り出そうとしない」

裂「それじゃ今回はこれで終わりだ」

橙「次回からやつと本編スタートだ！」

第老問目 Fクラスと自己紹介と戦争の引き金(前書き)

バカテストと翔子と雄二の会話は前書きで書きます。

「……ねえ」

「ん？なんだ？」

「……さつき雄二が話していた、大化の改新っていつのこと？」

「三年生になつて、まだそんなことも知らないのか？翔子は馬鹿だなあ」

「……まだ習つてない。雄二の頭が良すぎるだけ」

「覚え方は簡単だぞ？『無事故の改新』で覚えるんだ」

「……無事故？」

「忘れるなよ？大化の改新は無事故で起きたから」

「うん」

「……625年だからな」

「……わかった。きちんと覚えた」

「よし。忘れるなよ」

「……大丈夫。絶対に忘れない」

【バカテスト】 化学

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一

つ挙げなさい』

姫路瑞希、桜儀燐の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っかけ問題なのですが、姫路さんと桜儀さんは引っかけかりませんでしたね。

神楽橙夜の答え

『問題点……マグネシウムを空气中で加熱すると炎と強い光を発して燃焼するため』

合金の例……鋼』

教師のコメント

『鉄』では間違いですが、『鋼』は『鉄』を主成分とした合金なので正解です。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。それと吉井君は去年の終わりごろからすごい勢いで成績が上がったと思ったのですが……。

「俺は俺の目的のために試合戦争をやる」by 神楽 橙夜

第巻問目 Fクラスと自己紹介と戦争の引き金

Side・橙夜

俺達が文月学園に入学して二度目の春が訪れた。

そんな今、俺は文月学園までの通学路を一人で歩いている。

いつもは睦月と紫、明久に隣のうちの誰かとは一緒なのだが、今日に限っていつもよりかなり早い時間に目が覚めてしまったのだ。

二度寝出来るほど早くは無かったから、とりあえず自分の朝食を作り、食べ終わってから睦月と紫の分の朝食を作って家を出た。

今日はクラス発表があるわけだが、俺はFクラスだと分かっているからドキドキ感がないな。

そう思いながら歩いていると

？「おーい。橙夜くん」

ふと呼びかけられた。

なので声のした方を振り返ってみると、そこには

？「おはよう。今日はいつもより早い上に一人なんだね」

一年生の終わりごろに俺がいたクラスに転入してきた女生徒、工藤愛子がいた。

橙夜「おはよう、愛子。今日はいつもより早い時間に起きちゃったからな。だから一人なわけだ」

愛子「なるほどね。それじゃ一緒にいこっか」

橙夜「そうだな」

そう言っただけで一緒に学園に向かう。

愛子「昨日の動物番組観た？」

橙夜「あれだろ。子供のパンダを育てるみたいなやつ」

とか。

愛子「駅前のクレープが美味しいって噂の喫茶店には行ってみた？」

橙夜「あぁー『ラ・ペティス』って名前のところだろ？行ったことはないな」

愛子「実はボクもまだ行ったことないんだよねー」

橙夜「それなら今度一緒に行ってみるか？」

愛子「いいの？なら一緒に行こっか」

とか。

愛子「そういえば、今日はクラス発表だけどドキドキするね」

橙夜「まあー愛子ならAクラスも余裕だろ」

愛子「そういう橙夜君だってAクラスは固いでしょ」

橙夜「いや……俺はちよつとあつてな」

愛子「ちよつと何があつたの？」

橙夜「話すようなことでもないしな。っと校門が見えたぞ」

こんな感じに他愛もない話すること十数分。学園の近くについ

ていた。

愛子「あっ、本当だね。えっと玄関のところに誰かいるっぽいよ」
橙夜「あれは……。西村教諭か？」

愛子「どうしたんだろうね？まあ早く行こう」

そう言いながら俺と愛子は校門を通って玄関の前まで行く。

鉄人「おはよう。神楽兄と工藤」

すると西村教諭に呼び止められた。

橙愛「おはようございます。西村教諭（先生）」

だから挨拶をかえすことに。

西村教諭には生徒の間で『鉄人』と言う渾名がある。

その由来は、趣味のトリアスロンだ。真冬でも半袖でいるあたりも理由なわけだが。

鉄人「神楽兄が一人なのは珍しいな。一体どうしたんだ？」

そう聞かれて愛子に話したのと同じ内容を西村教諭にも説明する。

鉄人「そういうことが。それと受け取れ」

納得した西村教諭は徐に足元に置いてあった箱から封筒を取り出し、俺と愛子に渡してくる。

頭を下げながら受け取った封筒には宛名の欄にそれぞれ『神楽橙夜』『工藤愛子』と書かれていた。

愛子の封筒の中にはAと書かれた紙が入っていた。どうやらクラス発表のようだ。

橙夜「どうも。でも、いちいちこんな渡し方って面倒じゃないですか？」

愛子「そうだね。掲示板とかで大きく張り出すなり、春休み中に郵送すればいいんじゃないですか？」

効率の悪い渡し方に俺と愛子が意見をす。と、予想の範囲内だったのか西村教諭はすぐに理由を説明してくれる。

鉄人「そっちの方が楽なんだが、ウチは世界的にも注目されている『試験召喚システム』を導入した試験校だからな。これもその一環というワケだ。それと早く封を切って中を確認したらどうだ？」

中の確認を促す西村教諭。それに返答しながら封を切って紙を取り出す。

橙夜「クラスなんて分かってるんですけどね」

鉄人「そりゃそうだろうな。テストを受けた張本人なわけだから」

橙夜「当たり前ですよ。だってあのテストそこまで難しいものはありませんでしたし」

鉄人「ならなんであんなことをしたんだ、お前は……」

愛子「先生が呆れるほどのあんなことって一体何？」

鉄人「簡単だ。それはな工藤「おっとそこからは自分で言いますよ、そうか」

西村教諭が全部言う前に遮って愛子にアルファベットが一文字書かれた紙を見せながら言う。

橙夜「全科目のテストを無記名で提出しただけだ」

俺がそういつと愛子は、開いた口が塞がらないと言った顔をしていた。

それから数秒。何とか自力で何処かから（精神が）戻ってきた愛子が俺を問い詰める。

愛子「橙夜君は一体何がしたいの？成績的にはAクラスなんて余裕のはずなのに態々最下級クラスにいくなんて！」

橙夜「大した理由はない。悪ふざけの一環だな」

鉄人「悪ふざけの一環で無記名で提出するとは……。相変わらずお前らしいな」

橙夜「ここは褒め言葉として受け取っておきます」

鉄人「それに理由はそれだけじゃないんだろう？」

愛子「え？どうということ？」

どうやら西村教諭 タイピングが面倒だ。これから地の分では鉄人で統一しよう には気付かれているようだ。

愛子は再び困惑状態だが。

橙夜「まあーそっちの理由も大したことじゃないんだけどな」

鉄人「途中退席で無得点扱いにされた弟や吉井と同じクラスになるのは十分大したことだと思っただが」

愛子「弟って睦月君のこと？途中退席って一体どうしたんだろう」

鉄人「神楽弟は体調を崩して倒れた一人の女生徒を吉井と一緒に保健室まで連れて行っただけらしい」

愛子「へーその子のために途中退席なんてかっこいいね」

橙夜「まあーその女生徒は幼馴染なんだがな。それとFクラスを選んだ理由はもう一つあるんだがな」

愛子「教えて」

愛子が次の言葉を急かす。

橙夜「『試召戦争』をやるためだ」

それを聞いて愛子はよく分からない顔をしていたが、鉄人は納得いったと何回か頷いていた。

鉄人「なるほど……そういうことか」

愛子「先生。『試召戦争』とFクラスの関係性って一体なんですか？」

鉄人「『試召戦争』は勝利クラスと敗北クラスの設備を入れ替えるだろう？ そうするとAクラスは設備に不満が出るわけがなく、『試召戦争』を起こす理由がない。それに宣戦布告の権利もないからな。

それに比べてFクラスの設備は学年で最悪だ。当然のように設備に不満が出る。1年間設備が変わることがないから我慢しなければならぬが、『試召戦争』で勝利すれば上位クラスの設備と交換出来る」

愛子「なるほど。それなら設備を交換する為に『試召戦争』をやる気になるってことですね」

橙夜「その通りだ。それと西村教諭。Fクラスの代表は『アイツ』なんでしょ？」

鉄人「よく分かったな。お前の想像通り『アイツ』だ。『試召戦争』をやりたいお前にすればかなり都合がいいだろうな」

橙夜「そういうことです。それじゃ愛子。俺達も自分たちの教室に向かおう」

愛子「あつ、うん。それじゃ西村先生また」

橙夜「では西村教諭。俺たちはこれで」

鉄人「ああー時間はたっぷりあるからゆっくり行くといい」

そう鉄人に挨拶をして俺達は靴を履き替えて2年生の教室がある3階に向かった。

橙夜「どこの高級ホテルだ、ここは」

愛子「橙夜君、Aクラスだよ。ボクもそう思ったけど」

そう呟いてしまった理由は簡単。Aクラスの設備だ。

教室の前面には大型スクリーンが設置され、各生徒には個人用の冷蔵庫（食料・お菓子入り）・エアコン・ノートパソコン・リクライニングシート・システムデスクなどが支給され、部屋の調度も高級ホテル並みなんて……。

たかが高校の設備にここまでやるか？普通。

橙夜「ここで突っ立ててもしょうがないか。俺はFクラスに向かうとする」

愛子「うん。それと気軽にAクラスに遊びに来てもいいからね」

橙夜「Aクラス代表じゃないんだからそんな権利、愛子にはないだろうが。まあー紫や燐、優子に翔子辺りはAクラス確実だろうから遊びに来るさ。じゃあな」

愛子「またね」

その言葉を交わして愛子はAクラスの教室に入っていく。

俺はそれを確認しながら旧校舎にあるFクラスに向かった。

二年F組と書かれたプレートのある教室の前で俺は躊躇していた。

新しいクラスメイトが誰か不安だとかそんな理由ではない。

廊下から教室の中を窓から覗いたからだ。

卓袱台と座布団……。床の畳もなんだか腐っついていそうだ。

「Aクラスがあそこまで豪華だったからある程度予想はしていたが……まあいい。まだ誰も来ていないようだから後ろのほうの席でいいか」

そう言いながら教室に入り窓際から2列目の一番後ろの席に座る。

ホームルーム
HRまで40分ほどあるな。

時間まで眠るとするか。

S i d e · e n d

S i d e · o t h e r

橙夜と愛子が鉄人から封筒を受け取り各自の教室に向かってから徐々に多くの生徒が登校してきた。

その中にFクラス代表の坂本雄二やAクラス代表の霧島翔子、木下優子と木下秀吉の姉弟、島田美波、土屋康太と須藤結子の二人組、久保利光などが含まれていた。

時が経つごとに登校してくる生徒は減っていき、HR開始時間より少し前には人波は絶えていた。
そんな遅刻確定となった時に新たな人影が玄関前に現れたのだった。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 睦月

俺達が文月学園に入学してから二度目の春が訪れた。

……なんだか二番煎じのような気がする。

道の両脇には満開の桜が咲き誇っている。いつもなら桜をゆっくりと眺めながら登校出来るのだが、今の俺にそんな余裕は無い。
なぜかって？既に遅刻確定の時間だからだ。

？「睦月、急がないとさらに怒られるわ。既に遅刻確定だけど」
？「そっだよ睦月。急ごう」

？「明久だけはそれを言えないと思うけどね」
睦月「そうだな。これも全部明久のせいだ」

紫と明久、燐に注意された。

だが、明久にだけは言われたくないな。

これも全部、明久が寝坊なんてするからだと言っのに。

俺が起きた頃には橙夜兄は既に起きて登校していたようで、俺達
2人分の朝食を作っておいてくれていた。

紫も既に起きていて、5人分の弁当を作っていたが。

そんな考えを巡らせながら校門を走り去り玄関に向かっていた時

鉄人「神楽弟妹、吉井、桜儀。遅刻だぞ」

ドスのきいた声に呼び止められる。声のした方を見ると、そこには浅黒い肌をした、いかにもスポーツマン然とした男が立っていた。

紫燐「おはようございます。西村先生」

睦月「朝からお疲れ様です。西村先生」

明久「あ、鉄じ じゃなくて、西村先生。おはようございます」

と俺達は軽く頭を下げながら挨拶をした。

鉄人「おはよう。それと吉井、今、鉄人って言わなかったか？」

明久「ははっ。気のせいですよ」

鉄人「ん、そうか？」

何とか明久は誤魔化し切ったようだな。

鉄人「それにしても、お前達は普通に『おはようございます』じゃないだろうが」

睦紫燐「遅れてすみませんでした」

明久「あ、すみません。えーっと 今日も肌が黒いですね」

鉄人「……吉井、お前には遅刻の謝罪よりも、俺の肌の色の方が大事なのか？他はまともに答えているのに。それに神楽弟妹。神楽兄は40分以上も前に登校してきたぞ」

睦月紫「それは橙夜兄さんが早く起きすぎただけです。それと遅刻は明久が寝坊したせいです」

明久「そっちでしたか。すみません」

鉄人「まったくお前というヤツは……いくら罰を与えても全然懲りないな。神楽弟妹の方はそれもそうだな」

鉄人に不要なことで注意された。不服だ。それにしても何でここにいるんだろう？遅刻した俺達を叱る為ではないだろうし……。

明久「先生。僕、遅刻はあまりしてないですよ？」

なんか明久が変なことを言い出した。

大方、遅刻の常習犯扱いされたと思っただろう。

鉄人「遅刻は、な。ほら、お前たちも受け取れ」

そう言って予め持っていた封筒をそれぞれに渡してくる。

俺達は頭を下げながら受け取る。

紫と燐は既に中を確認出来たように入っていらしき紙を見せて

くる。

書いてあるのは、二人ともアルファベットの『A』。どうやら振り分け試験の結果発表のようだ。それなら俺と明久は中を確認する必要はないな。

明久「それにしても、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を発表してるんですか？」

確かに明久の言うとおりだ。

それに対して鉄人はうんざりしたようなため息を吐いて返答する。俺たちの前にも数十回は聞かれたのだろう。

鉄人「最先端システムを導入した試験校だから、クラス発表の変わったやり方もその一環なワケだ」

明久「ふーん。そういうもんですかね」

明久はそう返事をしながら中身が分かっている封筒の中を確認していた。

鉄人「それにしても神楽弟と吉井は残念だったな。今のお前達ならAクラスは余裕だったろうに」

睦月「別にどこのクラスでもいいんですよ。楽しくやれば。それと俺は元々Aクラスは余裕です」

明久「睦月の言うとおりです。僕は後悔してませんから」

鉄人「そうか。今回の振り分け試験で好成绩だったら観察処分の件を検討しようと教師の間で話していたんだがな」

やっぱり振り分け試験の成績で見返そう作戦は間違いじゃなかったんだな。まあーそれもペアになったんだが。

明久「そうだったとしても、みず　姫路さんを保健室に連れて行ったことを僕は後悔してません」

睦月「俺の場合は完全におまけだったけどな」

俺は明久の自信たっぷり言葉に若干茶化すように言ってみた。
そこへ鉄人が言葉を出す。

鉄人「よく言った。試験の結果は残念だったが、お前達のやったことは人として誇れることだ。胸を張れ」

明久「胸を張れだなんて……幼馴染として当然のことはしたただけです」

鉄人「お前がそういうならそれでいい。ほらさっさと自分たちのクラスに向かえ。そろそろHRが始まるからな」

4人「はい！」

鉄人の言葉に返事をして俺達は靴を履き替えて3階に向かったのだった。

3階についた俺達は高級ホテルとも思われるAクラスの教室の中を見て言葉を失いながら紫と燐と別れて旧校舎にあるFクラスに向かった。

明久「Aクラスの設備はすごかったね……」

睦月「そうだな……AクラスであれってことはFクラスはやばいんじゃないか？」

明久「まさか……そんなわけない……よ……ね？」

睦月「……そんなわけあったようだぞ……」

Fクラスの前まで来た俺達は再び言葉を失うことになった。Aクラスの時とは正反対の意味で。

『廃屋』

Fクラスの教室を言い表すのにこれ以上びつたりの言葉はないだろう。

睦月「とりあえず中に入るぞ」

明久「そうだね。幸いにも先生はまだ来ていないみたいだし」

睦月「それじゃ。すいません、遅れました」

？「早く座れ、このウジ虫野郎」

は？

誰だ今のは？

睦月「誰かは知らんが死にたいらしい」

？「何を言ってる……って何で睦月がここにいるんだ！？」

俺のことを知っているやつらしい。少し冷静になって相手を確認するか。

えっと、180cm強くらいの身長に、中々に引き締まっている体系でもっと上に視線を動かすと、意志の強そうな目をした野性味たっぷりの顔。短い髪の毛がツンツンと立っていてまるでたてがみのようだ。

うん、雄二だな。

睦月「雄二。殺される準備は十分か？」

雄二「待つてくれ、睦月！お前のことじゃない明久に言ったつもりなんだ」

睦月「それはそれで殺してもいいんだがな、紫の為に」

雄二「すまん！謝るから勘弁してくれ！！」

明久「それで雄二は何やってんの？」

俺と雄二が殺す殺さないの問答を繰り返しているとき明久が雄二に質問をしていた。

雄二「あ、ああー（助かった）。先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみただけだ」

明久「先生の代わり？……もしかして雄二が代表？」

雄二「そういうことだ。これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

睦月「あまりそういう事を言わないほうがいいぞ」

雄二の発言を注意していると後ろから声がした。

？「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

振り返ってみると、そこには寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにも冴えない風体のオジサンがいた。

？「それと席についてもらえますか？HRを始めますので」

どうやらFクラスの担任のようだ。確かこの人は地理歴史科目の福原先生だったかな？

明久「はい、わかりました」
雄二「うーっす」

先生の指示に従って空いている席に向かう俺と明久と雄二。

明久が窓際の一番後ろに、雄二はそこから1つ空けて窓際から3列目に座る。俺は雄二の後ろの席に。

席に座ると左隣から声を掛けられた。振り返ったその場にいたのは、なんと

?「やっと来たか。待ちわびたぞ」

Aクラスにいたと思っていた橙夜兄だった。

Side・end

Side・橙夜

橙夜「やっと来たか。待ちわびたぞ」

おーおー。睦月に声を掛けてみたら驚いているよ。明久や雄二も今のが聞こえたらしく振り返っている。

教室での二度寝から目覚めたのは睦月と明久、雄二のやり取りの物音だったんだけどな。

明久「橙夜……なんでここにいるの？」

睦月「そうだが、橙夜兄……。Aクラスじゃないのかよ？」

雄二「……お前なんているんだ？……そういえば寝ていて顔が確認出来なかった奴がいたが……」

福原「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願ひします」

やっぱりその質問か。

それとさっきまで寝ていたことに雄二以外には気付かれていないらしい。

橙夜「簡単に言うと、振り分け試験の全科目を無記名で提出しただけだ」

3人「……はあ!?!」「」

明久「一体どうして?」

とりあえず理由を話すことに。

睦月と明久が瑞希と廊下を歩いているのを目撃したこと、試召戦争をやりたいということ、その為に戦争の機会が多いFクラスにしたことの3つだ。

福原「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

明久「なるほどね。橙夜らしいよ」

睦月「全くだ。試召戦争やりたいからって態々Fクラスに行く物好きは橙夜兄くらいだけだな」

雄二「戦争をやりたいからFクラスね。これはいよいよやる気になったぜ」

雄二の台詞からするとやはり最初からやる気だったらしい。

福原「　始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

ん？設備に関しての説明が終わったらしいな。次は一体何をするんだ？つと、今立ったのは秀吉じゃないか。

秀吉「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある」

なるほど自己紹介か。それにしてもやっぱり見た目美少女だよな……。念を押す為に「ワシは男じゃからな」と言ってたけど……。無理だろ？

さて次は誰かな？

？「……………土屋康太」

康太か。相変わらずの寡黙振りだな。本名よりも二つ名のほうが有名だからな、康太は。

それにしても見渡す限り男ばっかだな……。やっぱりAクラスで愛子たちと一緒にいるべきだったかな……。？

？「　です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

と思っていたらどうやら女子がいたらしい。

自己紹介の内容を聞く限りでは帰国子女のようだ。それにしても

聞き覚えのある声だな……。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は」

ドイツ？ドイツ育ちの帰国子女って2学年には1人しかいなかったはずだ……。

？「趣味は吉井明久を殴ることです」

……やはり島田嬢か。

美波「はろはろー」

明久「……あう。し、島田さん」

美波「吉井、今年もよろしくね」

流石に明久も怯えているな。

いくら照れ隠しでも、関節技はな……。島田嬢はちょっと『教育』しなきゃならんかな。

橙夜「島田嬢、明久を脅すのはそれくらいにしてもらえるか？」

美波「脅してなんかいないわよっ！？って神楽兄の方じゃない。どうしてFクラスにいるのよ？」

秀吉「何故橙夜がここにおるのじゃ！？」

橙夜「ちよつと理由があるんだよ。それと明久に暴力を揮ったりしたら俺じゃ止められないからな……紫を」

美波「暴力なんて揮ってないわよ！それと紫のことは兄としてきちんと止めなさいよ！？」

いや、無理だから。明久に関する事で紫を止めることは俺や睦

月の二人掛かりでも無理だ。

止めたきや明久に止めさせるか玲さん連れてくるべきだ。

橙夜「とりあえずは暴力さえ揮わなければ問題は無い。揮ったりしたら俺と睦月も動くけどな」

美波「わ、分かったわよ。極力、吉井のことを殴ったりしないように気をつけるわ」

気をつけなくても殴らないでくれ。対処するのは俺や睦月なんだから……。

福原「次は吉井君の番ですよ」

明久「もう僕の番ですか？分かりました」

そう聞き返しながら立ち上がる明久。

明久「えーっと、吉井明久です。後ろにいる神楽兄弟とは幼馴染です。よろしく願います」

明久は少し考えてそう言う。恐らく軽いジョークでも織り交ぜて自己紹介しようと思っただけだろう。

昔の明久なら間違いなく「ダーリンって呼んでください」とか言っていただろうし。

睦月「次は俺の番だな。神楽睦月だ。隣にいる神楽橙夜とは年子でAクラスにいる神楽紫の双子の兄でもある。明久の言ったとおり明久とは幼馴染で家も隣だ。あと秀吉とは従兄弟だ」

『秀吉と従兄弟だと？』

『お義兄様！妹さんをください！』
『異端者には死の鉄槌を！』

睦月「おつと俺に向かってカッターを構えるのはいいが、俺の喧嘩の實力は悪鬼羅刹より若干劣る程度だから覚悟しろよ？」

それと、俺に取り入っても相手を選ぶのは紫だから無意味だぞ？」

『悪鬼羅刹だと！？』

『そんな……な……』

『神楽さんのこと密かに狙っていたのにこれじゃ無理じゃないか！』

『悪鬼羅刹よりも若干劣る程度って言うとかかなりの實力者だ』

『……軽はずみな武力行使はやめたほうがいいな。返り討ちにあうぞ』

「秀吉と従兄弟」の部分でクラスの男子が睦月に向かってカッターを構えたのを察したのか睦月は牽制を織り交せてなんとか回避したようだ。

橙夜「じゃ俺だな。神楽橙夜。睦月の紹介どおり睦月とAクラスの紫は年子の弟と妹だ。」

明久とは隣人で幼馴染、秀吉とその双子の姉の優子とは従妹弟。Aクラスの桜儀燐も従妹だ。それと今名前を挙げた奴らは俺の大事な人間達だ。そいつらに危害などを加えるつもりなら死を覚悟しておけ。俺が殺してやるから」

『木下姉妹と従妹弟だと言っただけで憎いのに、桜儀さんまで従妹だと！』

『総員狙ええー！っ！』

『っおおおおおおお！』

橙夜「因みに睦月は悪鬼羅刹より弱いと言っているがそこらのチンピラ程度じゃ何人集まっても勝てない。そして俺は悪鬼羅刹と喧嘩して勝ったことがある。その辺をよく覚えておけ。」

最後に俺と睦月は諸事情でFクラスになった。以上だ」

「神楽兄のほうは悪鬼羅刹に勝つただと!?!」

「どうなってやがるんだこのクラスは!?!」

「今すぐに異端者として審問会に掛けたいが逆にやられちまう……!?!」

これだけ言っておけば紫たちへの求愛行為やFFF団による明久たちへの武力行使は激減するだろう。

そんな感じで自己紹介は続いた。

その後もしばらく名前を告げるだけの単調な作業が続き、いい加減面倒になった頃に不意にガラリと教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

?「あの、遅れて、すいま、せん……」

「えっ?」

まあ、瑞希だったわけだけど。

福原「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

瑞希「は、はい!あの、姫路瑞希といます。よろしくお願いします……」

小柄な身体をさらに縮こめるようにして声を上げる瑞希。

保護欲をかきたてるその姿は、男だらけのFクラスでは異彩を放っている。

『はいっ！質問です！』

瑞希「あ、は、はいっ。なんですか？」

『なんでここにいるんですか？』

『そういえば神楽兄弟も何でFクラスにいるんだ？』

事情を知らないクラスメイトはびっくりしていた。事情を知らなければ俺も驚……かないな。

瑞希が睦月たちに連れて行かれてなければAクラスになってただろうし。

……ちやっかり俺たちにも質問しているやつがいるが。

瑞希「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

睦月「俺と明久はそれの付き添いで途中退席だ」

橙夜「俺は大した事情じゃないから気にするな」

俺たち三者三様の回答を聞いて『ああ、なるほど』と頷くFクラスメンバー。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』
『今年一番の大嘘をありがとう』

意味不明な言い訳を始めたFクラスの男ども……。こいつらはや
っぱりバカだったな……。

今現在Fクラスにいるというのが自分の実力だと認めるよ……。

瑞希「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

そんな中を逃げるように瑞希は空いていた雄二と明久の間の卓袱
台に着こうとする。

瑞希「き、緊張しましたあ……」

雄二「ひ」

明久「お疲れ、瑞希ちゃん」

瑞希「あ、明久君。おはようございます。それとよろしく願
いします」

明久「うん、よろしくね。それで体調の方は大丈夫？」

瑞希「はい。もうすっかり平気です」

雄二が話しかけようとしたのを明久が遮った。

恐らく雄二は明久と会話させないように先手を取ろうと失敗した
んだな。哀れ、合掌。チーンってな。

雄二「そろそろ俺もいいか？」

瑞希「は、はいっ。何ですか？えーっ……」

雄二「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

瑞希「あ、姫路です。よろしく願います」

何とか瑞希に話しかけることに成功した雄二。それに対して瑞希は深々と頭を下げた。別にそこまで丁寧じゃなくてもいいんだがな。

雄二「それで、明久が確認したようだが姫路の体調はもう大丈夫なのか？」

瑞希「あ、はい。大丈夫ですよ」

雄二「それならよかった。姫路の体調がいいなら行けそうだな」

瑞希「坂本君。行けそうって何のお話ですか？」

明久「雄二、僕もそれは気になるよ」

「恐らく雄二は試召戦争のことを考えてのことだろう。」

睦月「その辺は時期が来れば教えてくれるだろう」

瑞希「あつ、睦月君。振り分け試験の時はお世話になりました」

睦月「あの時も言ったが気にするなって」

瑞希「いえ、やっぱりこういうことはしっかりしとかないといけませんから」

橙夜「瑞希は生真面目すぎだな。その辺適度に調整しないと疲れるぞ」

瑞希「橙夜君！？なんでここにいるんですか!？」

橙夜「その辺は後で説明してやるさ。体調の方は本当にもう平気なんだな？春休み中明久が心配していてな」

明久「ちょ、橙夜！人の秘密を勝手に暴露しないで!？」

福原「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

「どうやら声量が大きかったようで教卓を叩いて福原教諭に警告された。」

明久「あ、すいませ」

バキィッ バラバラバラ……

突如、教卓がゴミ屑と化した。ここまでぼろいとは……。

福原「え〜…… 替えを用意してきます。少し待っていてください」

このクラスの設備の酷さを思い知ったのか、俺の前の席で瑞希が苦笑いしているようだ。

明久「……雄二、ちょっといい？」

雄二「ん？なんだ？」

明久「ここじゃ話しにくいから、廊下で」

雄二「別に構わんが」

それを見ていた明久が雄二を連れて廊下に向かう。それを確認した俺と睦月は廊下側まで向かって聞き耳を立てる。

雄二「んで、話って？」

明久「この教室についてなんだけど……」

雄二「流石に酷すぎるな。これでは勉強しようとする意思すら生まれない」

明久「雄二もそう思った？それでAクラスの設備は見た？」

雄二「ああ。凄かったな。あんな教室、高校だところか金持ち学校くらいしかないだろう」

そりゃそうだ。試験校でスポンサーが沢山いるから出来る真似だし。

明久「それで僕からの提案。折角二年生になったんだし、『試召戦

争』をやってみない？」

雄二「戦争、だと？」

明久「うん。しかもAクラス相手に」

雄二「……何が目的だ」

本題に入ったようだ。雄二の奴は外面は警戒しているように見せて内心では手間が省けたとでも思ってたんだろうな。

明久「瑞希ちゃんにこの環境は最悪すぎる。紫や燐は女子でも比較的丈夫なほうだから平気だろうけど流石にね」

雄二「なるほどね。大切な幼馴染の為って奴か」

明久「うん、そういうことだね」

そろそろ突入するか。

橙睦「俺も混ぜろ」

明久雄二「うわっ(うおっ)！」

橙夜「戦争をやるんだろ？俺は戦争に興味があつてFクラスになつたんだから混ぜろよ。それと雄二は隠してないで本音を言っちゃまえよ」

睦明「えっ!？」

雄二「橙夜にはバレていたか「モロ分りだったぜ?」……そうか。

橙夜の言うとおり俺も『試召戦争』をやるつもりだったんだよ」

明久「へーそうだったんだ」

睦月「それで目的は？」

雄二「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明を試してみたくな」

睦月「そういうことか」

明久「???」

明久は理解してないようだ。俺は雄二が悪鬼羅刹になった理由を大体知っているから。何だかんだ言っておきながら素直じゃないだけだよ。

橙夜「俺も戦争やりたかって目的以外にもあるんだが。それはAクラス戦後に教えるさ」

雄二「俺にだけ本音を話させるなんて卑怯だな」

橙夜「そういうな。俺の目的はお前にも悪い話じゃないさ」

雄二「そうか。それとお前らがいてくれたお陰で、Aクラスに勝つ作戦も思いついたし　おっと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ」
明久「あ、うん」

橙夜「雄二、作戦立案には俺も噛ませろよ。後午前中の回復試験の手配を頼む」

雄二「分かっているさ。『幻の入試トップ』殿」

橙夜「知っていたのか。どうやって知ったか知らんが、その件はAクラス戦までは黙っているよ」

雄二「当然だ。こんな早い時期にバラして情報を広めるなんて悪手だから」

雄二と会話を交わしながらのりくらしと教室に戻る。

福原「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

壊れた教卓を替えて（それでもボロなんだがな）、気を取り直してHRを再開する。

？「えー、須川亮です。趣味は　」

それ以降は何も起こらず再び淡々とした自己紹介の時間が流れた。

福原「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」
雄二「了解」

福原教諭の言葉に答えながら雄二はゆっくりと教壇に歩み寄っていく。

福原「坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね？」

その質問に雄二は鷹揚に頷く。

と言つても、学年最低のFクラス代表なんて自慢にもならんがな。

教壇に上がった雄二は俺たちのほうを向いて口を開く。

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

雄二がそういったのでからかうことに。

橙夜「じゃあ、『霧島雄二』ってのはどうだ？」

雄二「ッ！？やめろ、橙夜！それだけは勘弁してくれ！？」

橙夜「了解」と

大げさに反応する雄二。一瞬嬉しそうな顔をしたのを俺は見逃さないぜ？

やっぱり満更でもないじゃないか。

雄二「さて、皆に一つ聞きたい」

やはり雄二は統率力があるな。間の取り方が上手い上に話術も巧みだからな。

そしてクラスメイトの様子を確認した後、雄二は視線を教室内の各所に移す。

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

他のメンバーは雄二の視線に釣られて、それぞれの備品を順番に眺めた。

雄二「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

そこで一旦区切って静かに告げる。

雄二「不満はないか？」

『『『『大ありじゃあつ!!』』』』

クラス中の殆どが魂の叫びを上げた。

雄二「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そつだそつだ!』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？　あまりに差が大きすぎる！』

雄二の言葉で堰を切ったように次々とあがる不満の声。

……改善を要求する前に自分達の学力をどうにかしろよ。

雄二「みんなの意見はもつともだ。そこで」

どうやらクラスの反応に満足したらしい雄二は、自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて

雄二「これは代表としての提案だが　FクラスはAクラスに『試召戦争』を仕掛けようと思う」

戦争の引き金を引いた。

Side・end

第巻問目 Fクラスと自己紹介と戦争の引き金（後書き）

橙「今回はかなり長いな」

睦「文字数はどうなっているんだ？」

裂「今確認してみたが12800文字超えだった。バカテストを本編で書いてたら13000文字超えていたな」

橙「書きすぎだろ」

シ「枠外でも10000超えたのは殆どがキャラ設定だけだからな？」

裂「ちよっ！作品が違う紫稀は来るんじゃない！」

紫燐「「と云うか、私達の出番ってあれだけ？」」

裂「次話で多少出番があると思うから我慢してくれ」

紫燐「「分かった（わ）」」

裂「それとさ、今回の話での没ネタがあるんだ」

橙「なんだよ？」

裂「愛子の『橙夜君は一体何がしたいの？（ry）最下級クラスにいくなんて！』の直後なんだがな」

鉄人「そうだぞ、神楽兄。情報管制がしかれているからあまり知られていないが、本来ならお前が学年主席だろうが」

愛子「え？」

問い詰める愛子に加勢した西村教諭 タイピングが面倒だ。これから地の分では鉄人で統一しよう の新事実に再び驚愕する愛子。

橙夜「西村教諭。情報管制しかれているのに一般生徒の前で言っているのかよ」

鉄人「むっ、しまったな。つい口に出してしまった」

愛子「先生！橙夜君が学年主席って一体どうということなんですか！？」

ああー愛子が今度は鉄人を問い詰めている。

鉄人「工藤は1年の終わりごろに転入して来たから知らんと思うが、今の2年生がこの学園の入試を受けたときの話だ」

愛子「入試？それ関係の噂なら聞いたことがあります。…確か『幻の入試トップ』だったと思いますけど」

鉄人「それを知っているなら話は早い。そこにいる神楽兄がその正体だ。その時の点数は6000点オーバーだった」

愛子「6000!?!?6000って生徒の出せる点数じゃないですよ
ね！」

鉄人「担当科目に特化している教師と同じくらいだな。それと今回の試験では7000点オーバーだったらしい」

愛子「は？7000って確か才女と呼ばれている高橋先生クラスですよね？」

橙夜「今回は7000だったのか。最初の方はのんびりとやってたからそれくらいか」

鉄人「工藤の言うとおり高橋先生クラスの点数だな。そして神楽兄を含める神楽兄弟妹は真面目に試験を受ける気がないのか…」

橙夜「試験なんて適度に出来ればいいんですよ。今回はそれなりに真面目にやるには丁度よかったですしね」

色々と会話のキャッチボールをしながら意味深なことを言う俺。

鉄人「今回は？うーむ…。ああーそういうえば神楽弟と吉井が途中退席で無得点扱いだったな。つまりそういう事か？」

橙夜「正解ですよ、西村教諭。Aクラスになるのは簡単ですけど、『試召戦争』をやる機会が無に等しいですからね」

鉄人「つまり神楽兄が無記名で提出したのは弟や吉井と同じクラスになる為と、『試召戦争』をやる為という事か」

橙夜「そういうことです。それじゃ愛子。俺達も自分たちの教室に向かおう」

愛子「あつ、うん。成績のことに關してはもう何も言わないことにするよ」

橙夜「では西村教諭。俺たちはこれで」

鉄人「ああー時間はたっぷりあるからゆっくり行くといい」

そう鉄人に挨拶をして俺達は靴を履き替えて2年生の教室がある3階に向かった。

裂「こんな感じだ」

橙「この時点で『幻の入試トップ』ってバレルんだな」

裂「そうするとAクラス戦でやりたいことが出来なくなるから没にしたんだ」

睦「なるほどな。で、俺たちは活躍できるのか？」

裂「出来るぞ。その為のシナリオだからな。それとここに登場する人物を3人まで募集したい。選肢肢は以下の通りだ」

神楽橙夜 神楽睦月 神楽紫 桜儀燐 吉井明久
坂本雄二 霧島翔子 土屋康太 須藤結子 木下秀吉
木下優子 姫路瑞希 島田美波 工藤愛子 久保利光
清水美春 西村宗一 高橋洋子 福原慎 藤堂カヲル
神儀紫稀

裂「この21人から3人選んで感想に書いてくれ。毎回本編投稿後から一番早い組み合わせでお送りする予定だ」

橙「登場させるキャラを制限してアンケートしないと収拾がつかなくなるからだろ？」

裂「そういうことだ。それじゃ疲れたから今回はこの辺で」

紫「また次回もよろしくお願いします」

燐「またね」

翔「……よろしく」

全「いつの間にか」?

第式問目 根拠と宣戦布告（前書き）

【バカテスト】 国語

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

吉井明久の答え

- 『(1) 河童の川流れ』
- 『(2) 弱り目に祟り目』

神楽橙夜の答え

- 『(1) 麒麟の躓き』
- 『(2) 鬼は弱り目に乗る』

神楽睦月の答え

- 『(1) 竜馬の躓き』
- 『(2) 不幸は単独では来ない』

神楽紫の答え

- 『(1) 知者も千慮に一失あり』
- 『(2) 弱身につけこむ風の神』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』などがメジャーですね。

吉井君も勉強の成果が出たようですね。

それにしても神楽三兄弟妹はよくそんなマイナーなのを知っていましたね。

土屋康太の答え

『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

島田美波の答え

『(2) 蹴ったり殴ったり』

教師のコメント

いくら国語が苦手でも、新しくことわざを作らないでください。

「モブキャラにだって出番はある!!」 by 速水

第式問目 根拠と宣戦布告

Side・橙夜

雄二によるAクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとっては夢物語のような提案にしか思えないだろう。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

当然の如くクラスメイトから悲鳴のような声がかかる。

確かに例年通りのAクラスとFクラスの戦力差は明らかだ。

そう、例年通りのFクラスなら、そうだろう。だが、今回は異例のFクラスなんだ。

雄二「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

それを十全に理解した上で雄二は自信満々に宣言する。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

しかし、雄二の自信の理由を知らないクラスメイトからは否定的

な意見が飛び交う。

雄二「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

その雄二の言葉を受けてクラスメイトはざわめきたつ。

雄二「それを今から証明してやる」

再び不敵な笑み浮かべて、壇上から皆を見下ろす雄二。

なんかイラツとしてきた。後で殴ってもいいかな？

雄二「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

康太「……………！！（ブンブン）」

瑞希「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズをとる康太。

瑞希がスカートの裾を押さえて遠ざかると、康太は顔についた畳の跡を隠しながら壇上へと歩き出した。

あそこまで恥も外聞もなく低く覗き込もうとするのは康太以外にはいないだろうな……………。他にも世界のどこかにいるかもしれないが……………。

雄二「土屋康太。こいつがあのある有名な、寡黙^{ムツムツ}なる性識者だ」

康太「……………！！（ブンブン）」

『ムツツリーニ
寡黙なる性識者』

その名は男子生徒には異怖と畏敬を、女子には軽蔑を以って挙げられる。

『ムツツリーニだと……?』

『馬鹿な、ヤツがそうだといいのか……?』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして
いるぞ……』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

たとえどういった状況であろうとも、自分の下心は隠し続ける。
異名は伊達じゃない。伊達じゃないが、俺には何故か無性に哀れを
誘う……。

瑞希「?????」

瑞希はムツツリーニというあだ名の由来が分かっていないようで、
頭に多数の疑問符を浮かべていた。

ただの『ムツツリスケベ』だからな。悩むだけ無駄だ。

雄二「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力は
よく知っているはずだ」

瑞希「えっ?わ、私ですか??」

雄二「ああ。ウチの主戦力の1人だ。期待している」

確かに公開されている分だけの成績情報でなら、瑞希は戦力にな
る。

『そつだ。俺たちには姫路さんがいるんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』
『ああ。彼女さえいれば何もいらぬいな』

さつきから瑞希に熱烈ラブコールを送っているのは一体誰なんだ？

雄二「島田美波。こいつは帰国子女で日本語が読めなくて殆どの教科は戦力にならないが、数学はBクラス並だ」
美波「ウチもなの？」

雄二「ああ。Bクラス並なら十分な戦力だ」

『一点特化型という事か』
『数学での主戦力という事だな』

問題さえ読めれば他の科目教科も充分戦力になるんだがな……。
後で指導するべきだな。

雄二「木下秀吉だっている」

秀吉は演劇部のホープだったり、双子の姉の優子のことでも有名だ。

『おお……！』
『ああ。アイツ確か、木下優子の……』

雄二「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』
『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』
『それじゃあ、振り分け試験のときは姫路さんと同じで体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！』

『元』神童なんだよ。雄二はある理由で勉強を疎かにしていたからな。

だから今このFクラスにいるわけだし。普通に気付いても良さそうなんだがな……。

やっぱりバカばかりってことか。

だが、確実にクラスの士気は上がっていた。

雄二「それに、吉井明久だっている」

……シン

そして一気に下がる。

なるほど。明久の名前はオチ担当だったわけだな。

明久「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『俺、吉井って何か聞いた気がするな……』

『俺も耳にしたような気がするが…思い出せねえー……』

明久「ホラ！折角上がりかけていた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから、普通の扱いを…つて、なんで僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょー！」

弄りたいが為に名前を出したんだろうけど、それ以外の理由もきちんとはあるはずだ。

雄二「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは観察処分者だ」

……更に下げたが、これも伏線だよな？ そうなんだよな？

『それってバカの代名詞じゃなかったっけ？』

明久「ち、違うよっ！ ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」
雄二「そうだ。バカの代名詞「ヒュッ、ドスッ」（雄二の手元の教卓にカッターが刺さる音）「…って、危ねえ！？ 橙夜！ 俺を殺す気が！？」」

いやいや。殺すつもりなんてないぜ？ お前の為にやってたやっただぞ。

橙夜「今の発言を最後まで言い切ってたら間違いなく紫に殺されてたんだから感謝しろよ」

雄二「ッ！？（ブルッ）」

前に明久に危害を加えたのを紫に知られてボコボコにされたのを思い出したんだろうな……。

……それでも懲りずにちよくちよく危害を加えているが。本当、バカだよな。

橙夜「さて、トラウマを思い出した雄二の代わりに説明するが、観察処分者」と言うのは学生生活を営む上で問題のある生徒に課せ

られる処分だ。極端に言えば、類を見ないほどのバカだったり、暴力沙汰を起こす不良生徒だったりだ」

瑞希は知らなそうだから説明しといてやらんな。

橙夜「で、観察処分者の仕事なんだが、具体的には教師の雑用係だ。力仕事とかいった類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

瑞希「そうなんですか？ それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよ」

明久「あはは。そんなたいしたもんじゃないんだよ。皆と同じで先生の許可がないと召喚できないし、先生に都合よく使われるし、召喚獣の受けたダメージや疲れの何割かがフィードバックされるしね」

「おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？」

「だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな」

橙夜「待て待て。今のはデメリットの部分だけだ。肝心のメリットの話をしていない」

ここからが本題なんだ。

橙夜「雑用係を押し付けられるという事は通常の生徒よりも操作する機会が多いという事だ。つまり明久の召喚獣の操作技術は学年一だ。操作技術が優れていれば自身の点数を上回る相手にも勝つことも可能だ。明久、お前の持ち点が100点なら何点相手までなら勝てる？」

明久「うーん相手の武器次第だけど……250……いや、300点弱くらいまでなら何とかいけるかな」

『おお！』

『確かにそれはかなりの戦力になるぞ！』

先ほど下がった士気も大分戻ってきたな。

『観察処分者で吉井……？あつ！思い出したぞ。吉井って一年の後半から急激に成績を上げたって噂の奴じゃないか！』

『凄い勢いで成績を上げた奴がいるって噂なら聞いたことがあったが吉井のことだったのか！』

雄二「そうだ。こいつは一年の後半から成績を上げた。振り分け試験の時に何の問題もなければAクラス入りも出来たくらいだ」

いつの間にトラウマから復活したんだ？見ていた俺からしても、あれは結構えげつなかったと思うんだが……？

『おいおい、Aクラスレベルが三人とか。Aクラス打倒もあながち夢じゃないんじゃないか？』

『これは試召戦争やるしかないだろ』

『やってやるぞー！』

歴代のFクラスがこれほどやる気に満ちるのって中々ないんじゃないか？

……歴代って言っても設立してから4年くらいしか経っていないがな。

それにしても雄二の奴、まだ何か企んでいそうだな？

雄二「待て待て。まだ一番大事な要素を紹介していない」

『他にもまだいるのか!』

『誰のことだ?』

雄二「それは、神楽橙夜と神楽睦月の神楽兄弟だ!」

うわあー……。俺らを巻き込むのかよ……。確かに、俺は戦争やりたいって言ったけどさ。

『神楽兄弟ってAクラスの神楽さんの兄弟とかってやつらか?』

『木下姉妹と従兄弟とかって言ってたな』

『桜儀さんの従兄弟でもあるとも言ってたな』

雄二「その神楽兄弟だ。類を見ないほどのバカだった明久の成績がAクラスレベルになったのはこいつらが勉強を教えていたからだ!更に言えばこいつらの本来の成績は学年主席と次席だ!」

『なんだと……!?!』

『学年主席って霧島翔子よりも上だというのか!?!』

『これで試召戦争もかつる!?!』

雄二「そして、俺達の力の証明として、まずDクラスを征服してみようと思う」

『幻の入試トップ』『幻の学年主席』とは明言してないから、一応約束は守っているようだな。限りなくブラックに近いグレーだけだ。

雄二「皆、この待遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！』

雄二「ならば、全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

雄二「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！！』

瑞希「お、おー……」

相変わらず雄二は人を乗せるのが上手いよな。俺たちの存在もあるんだらうけど。

雄二「そこで明久にはDクラスへの使者に「待て雄二」……なんだ、橙夜？」

橙夜「現時点で明久をDクラスへの使者にしてFクラスにいると教えるのは非常に拙い。一部を除いて明久が途中退席したことを知っているものは少なく、逆に観察処分者になってから成績を上げたのは二年では結構浸透している。そんな明久を使者にしたら警戒させてしまう」

雄二「確かにそうだな……だがそれならどうする？」

橙夜「その事については考えてある。おい、速水！確かお前は陸上部だったな？」

速水「……確かに陸上部だが、それがどうかしたのか？」

橙夜「お前にDクラスへの宣戦布告の使者を頼みたい」

速水「下位勢力の宣戦布告の使者って酷い目に遭うよな……?」
橙夜「だから陸上部のお前に頼むんだ」
速水「???」

流石Fクラス。理解しやすいようにヒントを結構出したのに分かっていないようだ。

雄二「橙夜が言いたいののは、宣戦布告をして了承が取れたら暴行される前に走って逃げ切れという事だ」

橙夜「そういうことだ」

速水「なるほど。そういうことなら任された」

そうして速水はクラスメイトの歓声と拍手で送り出され、使者としてDクラスへ向かっていった。

S i d e . e n d

第式問目 根拠と宣戦布告（後書き）

燐「ねえ？」

裂「……………」（ダラダラダラ）

紫「前回何か言ってたけど……………何か弁解は？」

裂「すみませんでしたー！ー！ー！」

橙睦「（こええええええええー！ー！ー！）」

燐「ねえ？約束は守るためにあるんだよ？」

裂「ひっ！？」

紫「約束を守らないなんてどうしたのかな？」

裂「く、来るな！？」

紫燐「少し、頭冷やそうか……………」

裂「いやあああああああああああああああああああああ！
！ー！」

裂「やんはログアウト……………出来ませんでした。
場所を移して紫と燐とOHANASHIしています。」

橙「さ、さて。気を取り直して話を進めるぞ?」

睦「あ、ああー。そうだな橙夜兄。そういえば今回出てきた速水つてのはこれからどうなるんだ?」

橙「速水は今回の宣戦布告のために即興で考えたキャラらしい」

睦「つまり名前と陸上部であること以外は考えてないってことか。で、他には?」

橙「後は前回同様ここに出すキャラの募集だつてよ」

睦「募集も何も、1つも来なかったよな?」

シ「言つてやるな。ネギま!モノと比べてバカテスモノは中々人気が出辛いんだ」

橙「そういうもんか。まあー以下のメンバーから3人選んでくれ」

神楽橙夜	神楽睦月	神楽紫	桜儀燐	吉井明久	坂本
雄二	霧島翔子	工藤愛子	姫路瑞希		
土屋康太	須藤結子	木下秀吉	木下優子	島田美波	
久保利光	西村宗一	福原慎	神儀紫稀		

睦「前回と比べて数人減っているな」

橙「今回は18人だ。何でも本編でまだ名前の出てないキャラを出すのは変だと思つたらしい」

紫燐「「ただいまー」」

橙「あ、ああーおかえり（その真っ赤な制服姿は突っ込んだら地雷なんだよな!?!）」

睦「（そりゃそうだ。藪蛇はゴメンだからな）それじゃ、そろそろお別れだ」

シ「次回もよろしくな」

燐紫「「また次回」」

第参問目 ミーティングとお弁当(前書き)

【バカテスト】 英語

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
y.」

姫路瑞希、神楽橙夜、神楽睦月、神楽紫の答え

「これは私の祖母が愛用した本棚です。」

教師のコメント

正解です。神楽君たちはやれば出来るので真面目に試験を受けてください。

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはthisだけですか。

吉井明久の答え

「これは私の本棚です

」

教師のコメント

勝手に自分の本棚にしないでください。しかしきちんと勉強出来ているようですね。感心しました。

島田美波

「 \$

」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

「こんなのアタシのキャラじゃないわ!?!」 b y 木下 優子

第参問目 ミーティングとお弁当

Side・橙夜

速水がDクラスへ宣戦布告に行つて十数分後。

廊下から物凄い音が聞こえたと思つたら教室の扉が勢いよく開いた。

そして、そこに居たのは宣戦布告に行つた速水だった。

速水「ハア……ハア……なんとか、無事に、戻つてこれた……」

橙夜「おー速水。どうやら無事みたいだな」

速水「と、当然だ。襲つてくると分かつていたから宣戦布告を了承させて即行で逃げたからな」

雄二「ご苦労だったな速水。それで開始予定時間は何時と伝えてきた？」

速水「一応、今日の午後とだけ」

雄二「よし。速水はゆっくり休んでおけ。それじゃ今からミーティングを行うぞ」

そう言つて雄二は扉を開けて外に出て行つた。

その後を秀吉と瑞希が追いかけて俺たちもそれに続く。後ろでは何か変なやり取りをしていたが。

Side・end

Side・睦月

雄二「それじゃ今からミーティングを行うぞ」

他の場所で話し合いをするつもりのもりのようで、雄二は扉を開けて外に出て行った。

その後を瑞希と秀吉、橙夜兄の順で追っていた。

康太「……………（サスサス）」

自分の頬の辺りをさすりながら康太が続くのを明久が声を掛けた。

明久「ムツツリーニ。覗いていた時の畳の跡ならもう消えてるよ？」

康太「……………！！（ブンブン）」

睦月「いや、今更否定しても、お前がHなのは知ってるからな？」

康太「……………！！（ブンブン）」

明久「ここまでバレているのに否定し続けるなんて、ある意味凄いやと思う」

康太「……………！！（ブンブン）」

睦月「何色だった？」

康太「みずいろ」

即答か。

明久「やっぱりムツツリーニは色々な意味で凄いや」

康太「……………！！（ブンブン）」

そっやっつてのんびりと教室内で話をしていると、

美波「ほら吉井。アンタも来るの」

明久はぐいつと島田に腕を引っ張られていた。

面倒そうだと思って逃げようとしていたんだろっな。若干、嫌そうな顔してるし。

明久「あー、はいはい」

美波「返事は一回！」

明久「へーい」

美波「……一度、Das Brechen ええと、日本語だと

……」

康太「……調教」

島田が言いよんどんだと思ったら二人の近くに居た康太が答えていた。

美波「そう。調教の必要がありそうね」

明久「調教って。せめて教育とか指導って言ってくれない？」

確かに明久の言うとおりだな。

美波「じゃ、中間とってZuchtingung」

康太「……………それはわからない」

睦月「折檻だろ」

美波「そうそう。折檻だったわ」

明久「それ悪化してるよね」

美波「そう？」

確かに悪化しているな。それを実行して、実行したのを紫が知っ

たら島田とOHANASHIしそつだな……。

止めることなんて出来ないから見ていただけになるだろうけどな！

明久「というかムツツリーニと睦月。どうして「調教」や「折檻」なんてドイツ語を知ってるの？」

康太「……………一般教養」

睦月「そんな教養はない。俺が知っていたのは最近必要でな」

明久「相変わらずムツツリーニは性に関する知識だけズバ抜けてるね」

康太「……………！！（ブンブン）」

俺もそれは思うな。康太なら性に関するあらゆる言語の知識を持つてそつだし。

そんな会話をしながら校内を歩いていると、先頭の雄二が屋上に出了たから俺たちもその後を追って屋上へと出了た。

Side・end

Side・橙夜

屋上へと出了た俺たちは雄二の言葉に耳を貸す。

雄二「速水が今日の午後にDクラスに開戦予定と告げてきた」

美波「それじゃ先にお昼ご飯ってことね？」

雄二「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいは……………っと、今はまともな物を食べているんだつたな」

明久「その通りだよ、雄二。今の僕はきちんと3食摂っているからね」

明久への仕送りは全て俺が管理しているから当然だな。

瑞希「えっ？明久君って前はお昼食べてなかったんですか？」

瑞希が驚いたように明久を見ているが、知らなかったか？

ああ。そうか。瑞希は去年違うクラスだったから知らなかったか。

一年時のクラス分けは以下の通りだ

Bクラス 橙夜・愛子・優子・翔子・燐・久保

Cクラス 瑞希・結子・紫

Dクラス 睦月・秀吉・明久・雄二・康太・美波

なにやら俺の思考の途中で電波が遮ったような……？まあいいか。

明久「まあ、色々とあってね。今はきちんと食べているから安心して」

雄二「……確かにあれはな」

確かにあれは酷かったよな……。

明久「何が言いたいのさ」

雄二「いや、お前の主食って水と塩だっただろう？」

明久「むっ、失礼な。砂糖だって食べていたさ！」

瑞希「あの、明久君。水と塩と砂糖って、食べるとはいいいませんよ

……」

秀吉「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

ああ、俺と睦月以外の目が妙に優しくなっている。こんな目で見られると辛いだろうな……。

雄二「ま、飯代まで遊びに使い込んでいたお前が悪いよな」

明久「し、仕送りが少ないんだよ！」

橙夜「月に10万送ってもらっておいてどこが少ないんだよ……。マンションは既に支払いが済んでいるから住居費はいらなし、保険関係だって税金だから秋さん達が払ってくれてるじゃないか」

明久「うっ！」

橙夜「それに俺たち兄弟妹3人は住居費や税金は明久と同様に父さん達が払ってくれているから、食費込みの生活費で15万。それぞれにお小遣いとして1万ずつの計18万だぞ？」

俺の発言によって明久に対する視線が冷たいものになっていた。

橙夜「そういえば睦月。今日の弁当担当は紫だったよな？」

睦月「ん？ああ、紫で間違いない。あつ！」

橙夜「どうした？」

睦月「今朝、弁当受け取るの忘れてた」

橙夜「なら俺が飯前にAクラスにいつて3人分受け取ってくるか」

睦月「悪いな、橙夜兄」

橙夜「気にするな」

美波「弁当番って何？」

俺と睦月が弁当について話していると疑問に思ったのか島田嬢が質問してきた。

橙夜「それはな、俺たちと明久が隣人つてのは話したよな？」

美波「確かに聞いたわね」

橙夜「桜儀燐も明久の家の隣人なんだが、一日交代で一人で毎日五人分の弁当を作ってるんだ」

美波「へえー。それって結構大変じゃない？」

橙夜「毎日一人分を作るよりは五人分を一度にやるほうが楽なんだよ。それで今日は紫が当番で、明日は俺だったかな？」

美波「なるほどね。確かに毎朝早起きするのは大変よね」

瑞希「橙夜君たちもお弁当を作るのは大変でしょうから、良かったら明日は私も作ってきましようか？」

はい？今なんて言ったんだ、この子は。

橙夜「睦月、明久。さっきのは俺の空耳だよ……な？」

状況を確認する為に睦月と明久に質問する。が。

睦月「橙夜兄。信じたくないのは分かるが……」

明久「……事実だよ」

俺の質問に睦月が言いかけ、最後を明久が言う。

瑞希が弁当を、料理をするだって？おし、状況は確認した。ならば俺たちがやることは一つ。そう

橙夜「やめろ、瑞希！」

睦月「そうだ、瑞希！お前は何も心配しなくていいんだ！」

明久「そうだよ、瑞希ちゃん！僕たちは今までそうやって来たから何の心配もいらないよ！？」

瑞希「ふえ？」

瑞希の暴挙を止めることだ！

雄二「如何したんだ、橙夜たちは？女子の手作りお弁当と聞けば普通に喜びそうなのに」

康太「……………俺たちにも幸せをよこせ！」

秀吉「そうじゃぞ、橙夜に睦月、それに明久よ。ここは姫路の好意を受け取るべきじゃ」

美波「そうよ、木下の言うとおりよ。人の好意を無碍にするんじゃないわよ」

美波（瑞希のを受け取ったら私のも受け取ってくれるだろうし）

俺たちが瑞希の暴拳を止めようとするのを雄二たちが止めようとする。

橙夜「黙れ、貴様ら！貴様らは真実を知らないからそうやって呑気にしていられるんだ！」

睦月「そうだ、その通りだ！お前らはあの恐怖 いや、地獄を知

らないから気楽にいられるんだ！」

明久「……………おじいちゃん。明日にはそちらに行きます……………」

雄二「明久が変なことを言い出したぞ！どういつことだ！」

康太「……………説明を頼む」

秀吉「一体お主らに何があったのじゃ！」

美波「一体なんなのよ！」

やはり説明せねばならんか……………。

橙夜「小学生の頃の話だ。瑞希がからかわれていたのを俺たち三人が助けた」

雄二「ありがちな。それで？」

睦月「その翌日に瑞希がお礼と言って手作りのクッキーを持ってきたんだ」

秀吉「ふむふむ？」

明久「それを食べた僕らは意識を失って起きたときには病院だったんだ。2日くらい意識不明だったらしいよ……」

美波「よし、瑞希。アンタは料理しちやダメよ」

瑞希「え、ええ？美波ちゃんどうしてですか！」

こ、これで俺たちが死ぬことはなくなったな……。後はもう一押しするだけだ！

橙夜「瑞希。料理のさしすせそって知ってるよな？」

瑞希「勿論です！」

睦月「それじゃ、言ってみろ」

瑞希「えっと、さは酢酸ひくせん、しは硝酸しつじゆんさん、すは水酸化ナトリウムすいさんか、せは青酸せいさん、そは砒素ひそですよね？」

雄二・秀吉・康太・美波「……」

睦月「……俺たちの行動の理由を理解したたる？」

康太「……すまなかつた」

明久「ああ、生きてるって素晴らしいよね……」

雄二「悪かつた……。姫路。頼むから今後一切、料理をしないでくれ……」

瑞希「坂本君も!？」

秀吉「そうじゃぞ、姫路。お主の料理の犠牲になっていい奴は居らぬからの……」

瑞希「木下君まで!？」

お前の料理の腕前を知ればみんなそう言うんだよ。

雄二「さて、話がかかり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

瑞希「ちよっと私の話を無視しないでください!」

殺戮兵器の話のせいで忘れていたな。

そして瑞希は黙れ！お前はそんなにも俺たちを殺したいのか！？

秀吉「雄二。一つ気になっただけじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

瑞希「むう。無視するなんて酷いです。もういいです……」

美波「そういえば、確かにそうね」

雄二「まあな。当然考えがあつてのことだ」

美波「どんな考えなの？」

雄二「色々理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

明久「え？でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

成績でクラスが分けられているから、Eクラスは当然Fクラスよりは点数が良い。

雄二「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれないな。けど。実際のところは違う。オマエの周りにいる面子を見ってみろ」

明久「えーっと……」

明久は雄二の言うとおりに俺たちを見回している。

明久「美少女が二人とイケメンが二人と馬鹿が二人にムツツリが一人いるね」

雄二「誰が美少女だと！？」

明久「ええっ！？雄二が美少女に反応するの！？」

康太「……………（ポツ）」

明久「ムツツリー二にまで！？どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない！」

秀吉「まあまあ。落ち着くのじゃ、代表にムツツリー二」

橙夜「時間が勿体無いからあまりふざけるなよ。(翔子に雄二が浮気していたって言ってもいいんだぞ?)」

雄二「そ、そうだな。(やめてくれ、橙夜)」

明久「いや、その前に美少女で取り乱すことに対してツツコミ入りたいんだけど」

雄二「コホン。ま、要するにだ。姫路に橙夜、それに睦月と明久に問題のない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味が無いってことだ」

明久「？それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

橙夜「いや、俺が本気で回復試験を受けた後ならDクラス以上でどんな教科だろうとも余裕だが、俺たちに回復試験を受けさせる為の時間稼ぎが厳しいんだ」

明久「だったら、普通に回復試験受けて最初から万全の状態でAクラスに挑もうよ」

雄二「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？」

橙夜「それに観察処分者の仕事で操作技術の高い明久やその手伝いをしていた俺とは違って他の奴らの操作技術はどんぐりの背比べ状態だ。そうなると点数が高いAクラスが圧倒的に有利だ。流石に万全な状態の俺でもAクラスを相手に一人で無双するのは厳しい。だから俺たち4人の回復試験の時間稼ぎと召喚獣の操作に慣らすのにDクラスが適してるんだよ」

雄二「大雑把に言えば橙夜の言ったとおりだ。後は、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

何となく雄二の考えてる策は分かるな。策としては間違っていないから何も言わんけど。

瑞希「あ、あの！」

瑞希にしては珍しく大きな声だな？

雄二「ん？どうした姫路」

瑞希「えっと、その。さつき言いかけた、って……明久君と橙夜君、坂本君は前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

橙夜「ああ、それが。俺は前々から試召戦争に興味があつたんだ」

雄二「俺もちよつと考えがあつてな。それとついさつき、姫路の為に明久に相談されてな」

明久「幼馴染の瑞希ちゃんの中にはFクラスの環境は毒だからね。で、さつきの話、Dクラスに勝てなかつたら意味がないよ」

雄二「負けるわけないさ」

橙夜「雄二が本気で策を考えるんだ」

雄二「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

睦月「当然だ。俺たちが揃っていて勝てないほうがおかしいんだ」

橙睦雄「……いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

自信満々に言い切る俺と睦月に雄二。

美波「いいわね。面白そうじゃない！」

秀吉「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

康太「……………（グッ）」

瑞希「が、頑張りますっ」

打倒Aクラス。確かに荒唐無稽な夢で、実現不可能な絵空事も
しれない。

だとしてもやってみなければ何も始まらないしわからない。

共に何かを成し遂げるって言うのは悪くないだろう。

雄二「そうか。それじゃ、さっき少し話したがDクラス戦の作戦を説明しよう」

涼しい風がそよぐ屋上で、俺らは勝利の為の作戦に耳を傾けた。

因みに、明日の昼食は俺が弁当当番だったのでこの場にいる俺を含めた8人分の弁当を作ることになった。

雄二による屋上での作戦についての説明が終わって俺たちは昼までの4時間全てを回復試験に当てた。

Fクラスの連中は振り分け試験の時よりも点数を伸ばせそうな教科を4つ受けさせた。

主戦力になる俺と睦月、明久に瑞希は30分1教科で8教科を受けた。

残りは戦争中にFクラスが時間稼ぎをしている間に1時間ずつ2教科受ける予定だ。

俺は政経と数学、睦月は数学と音楽、明久は歴史、瑞希は国語を受ける。

さて、試召戦争についてはこれくらいでいいな。そろそろ飯にしたい。

橙夜「んじゃ、Aクラスに行って紫から弁当を受け取ってくるか」

睦月「よろしく」

明久「頼んだよ」

橙夜「言われなくても分かってる。お前らは先に屋上でも行ってる」

睦明「はいはい」

橙夜「そうだ、秀吉」

秀吉「何のようじゃ？橙夜」

橙夜「今日の昼は何を食うんだ？」

秀吉「今日は弁当を持ってきておらんから購買でパンでも、とおもうてるが、それが何じゃ？」

橙夜「丁度いいな。秀吉も購買行かずに睦月たちと屋上に行ってくれ」

秀吉「何か知らんが、分かったのじゃ」

橙夜「それじゃ俺はAクラスに行ってくる」

そう言っただけ俺はFクラスを出て、まっすぐ新校舎のAクラスに向かった。

Aクラスについた俺は入り口の近くに居た女子生徒に声を掛けた。

橙夜「すまんが神楽紫を呼んでくれないか？」

？「あれ、橙夜じゃない」

橙夜「ん？ああ、優子か。やっぱAクラスだったな」

優子「当然でしょ？というか橙夜がAクラスに居ないと知ったときは驚いたわよ。何クラスになったのよ？」

橙夜「Fクラスだ。それと早く紫を呼んでくれ」

優子「また、真面目に試験受けなかったのね……っと、紫だったわね。今呼ぶわ。紫、ちよつと来て！」

そう言つて優子は大きな声でクラスの中に呼びかける。

紫「何の用、優子？つて橙夜兄さんじゃない」

優子「用があるのは橙夜のほうよ」

橙夜「優子が言った通り、用があるのは俺だ。紫、俺たちの弁当を受け取りに来た。あと隣も呼んでくれ。どうせ、秀吉の為に弁当作つてきてるだろうからな」

紫「分かったわ。ちよつと待つてて」

それを聞いて紫は自分の机と思わしき場所へ走つていった。

優子「そういえば交代で弁当作つてたわね」

橙夜「俺は今日早く登校したから受け取つて無くてな。睦月たちも今朝はバカな幼馴染のせいで遅刻しそうだったらしくて紫が全員分持ってきたのを受け取り忘れらしい」

優子「なるほどね。あつ、そうだ。今日はアタシもお弁当だから一緒に緒してもいい？」

橙夜「いいぞ。と言うか、秀吉は購買つて言つてたのに姉のお前は弁当かよ」

優子「アタシは自分で作つたのよ」

橙夜「それなら秀吉の分も作つてやればいいだろうに。一人分も二人分も変わらないだろう」

優子「別に作つてあげても良かったんだけど、どうせ隣が作つてくると思つたからね。案の定作つてきてたし」

橙夜「なるほどな。燐の日頃の行動を鑑みれば簡単に予想できるな」
優子「あれでまだ付き合っていないとか……。いい加減にしてほしいわよね」

橙夜「全くだな。どっかの誰かもいい加減告白しちまえばいいのによ（ニヤニヤ）」
優子「うるさいわね！」

？「何々。楽しそうだね。ボクも会話に混ぜてよ」

橙夜「おー、愛子じゃないか。今朝ぶり」

愛子「今朝ぶりだね、橙夜君。それで何の話をしてたの？」

橙夜「どこかの誰かが素直にならないって話だ（ニヤニヤ）」

優子「ちよ！余計なことを言わないでよ！」

愛子「へえー、なるほどねー（ニヤニヤ）」

途中で参戦した愛子と共に優子を弄ること2、3分。紫が四人分の弁当と二人分の弁当を持った燐と一緒に戻ってきた。ついでに言う、優子は真っ赤になっていた。

紫「はい、橙夜兄さん。兄さんたちの分の弁当持ってきたわよ。それと例によつて秀吉の弁当を作ってきた燐も連れてきたわ」

燐「ちよ！紫、変なこと言わないで！」

橙優「今更誤魔化さなくても燐が秀吉Loveなのは知っている（わよ）」

燐「あう……」

橙夜「それじゃ、場所を移すぞ。睦月たちが待ってる。勿論、燐の『大好きな』秀吉もな」

燐「プシュー……」

橙夜「やべ。流石にやりすぎたか……？」

愛子「橙夜君たちは今日もお弁当なの？それならボクも今日はお弁当だから一緒にいいかな？」

橙夜「優子にも言ったが構わんぞ。それじゃ屋上に行くぞ」

紫優愛「「はい」「」
燐「……………」

燐は紫と優子が手を引つ張って、愛子が背中を押してやっと動か
せた。

俺たちは屋上で各自のお弁当を広げている。

燐はその後、なんとか再起動して自力で屋上へと歩いて行って、
待っていた秀吉に弁当を渡していた。

燐「はい、秀君。これお弁当。よかったら食べて」

秀吉「おお、燐。悪いのう、態々弁当を作ってくれて」

燐「ううん。秀君の為だから気にしないで」

秀吉「燐は料理が上手じゃからのう。有難く頂戴するのじゃ」

なーんてやり取りがあつたわけだ……。

いい加減、告白しあつてくれないかなー……。

愛子「相変わらず橙夜君たちのお弁当は美味しそうだね」

橙夜「今日は紫が作ったんだ。話はこれくらいで頂くとしよう。そ
れじゃ、いただきます」

7人「……………」いただきます「……………」

俺が音頭を取って全員で弁当を食べ始める。

優子「そういえばFクラスがDクラスに宣戦布告したって聞いたけど本当？」

睦月「本当だぜ。優子、その唐揚げ美味そうだな。俺の肉団子と交換しないか？」

優子「いいわよ。ほら、あ〜ん？」

睦月「あ〜ん。（モグモグ）結構いい出来じゃないか。それじゃ俺も。あ〜ん？」

優子「あ〜ん。（モグモグ）そっちの肉団子も美味しいわね。流石紫ね」

あの無自覚バカップルめ！いい加減、お前らも告白しろよな！

愛子「（あの二人、自然とあ〜んってやってるよ？）」

橙夜「（あいつらは無意識であれをやってるんだ）おっ、愛子の卵焼き美味しそうだな。こっちの卵焼きと味比べしてみないか？」

愛子「いいよ。それじゃ、あ〜ん？（ニヤニヤ）」

橙夜「ツ！？あ、あ〜ん……（モグモグ）愛子のはちょっと甘めなんだな」

愛子「ちよっとしよっぱいのもいけるけどボクは甘い方が好きなんだよね」

橙夜「それじゃ、愛子。あ〜ん？（ニヤニヤ）」

愛子「こ、これはかなり恥ずかしいね」

橙夜「俺もやったんだ。遠慮せずにはね。あ〜ん？（ニヤニヤ）」

愛子「イジワルだね橙夜君は。あ、あ〜ん。（モグモグ）砂糖と塩の量が絶妙で卵本来の味を引き立てているね。相変わらず紫ちゃんはいいい仕事をするね」

紫「ありがとっ、愛子。でも、橙夜兄さんが作ったほうがもっと美味しいわよ」

愛子「……そうなんだよね。男の子なのに橙夜君の方が料理上手く

て女のボクとしては自信をなくしちゃいそうだよ……」

橙夜「気にしなくてもいいだろうに。俺の場合は他人が作るなら別にどんな味でもいいんだが、自分で作るなら半端な味にはしたくないんだよ」

明久「橙夜の自分がやるなら妥協せず何でも極めるところは相変わらずだね」

紫「そうだね、明久」

明久「どうしたの、紫？」

紫「よかつたら私もあ〜んしてあげましようか？」

明久「是非お願いします！」

即答だと!？

紫「それじゃ、あ〜ん？」

明久「あ〜ん(モグモグ)美味しかったけど、紫が食べさせてくれたことでもっと美味しくなったよ！」

紫「明久は調子がいいわね。他には何かないの？」

明久「それなら、僕も。あ〜ん？」

紫「あ〜ん(モグモグ)自画自賛のようだけど美味しいわ」

橙夜「(あいつらも体外無意識なバカップルだよな……明久は鈍感だけど)」

愛子「(そうだね……あまり表情が変化しない紫ちゃんも笑顔のようだし……吉井君もいい加減に自分の気持ちに気付いてもよさそうだけど……)」

なんて恥ずかしい思いをしながら俺たちは弁当を食べていた。因みに秀吉と燐は

燐「秀君、食べさせてあげるね?あ、あ〜ん？」

秀吉「あ、あ〜ん(モグモグ)お、美味しかったのじゃ。しかし、

あくんは恥ずかしいのじゃ」

燐「そ、そうだね。……良かったら、秀君もしてくれない？」

秀吉「むっ、燐の頼みならば分かったのじゃ。あ、あくんなのじゃ」

燐「あ、あくん（モグモグ）やっぱり、するのでもされるのでも恥ずかしいね……」

秀吉「そ、そうじゃな……」

こうなっていた。

橙夜「いつまでも弁当の話で盛り上がってないで箸を進めようぜ。

昼休みが終わったら俺たちはDクラスとの試召戦争だからな」

秀吉「そうじゃな。ワシは試召戦争の後にも部活があるからあまり長引かせるわけにもいかんのじゃ（モグモグ）」

燐「今日も秀君の部活しているところを見学してるね」

秀吉「う、うむ。頑張るのじゃ」

優子「はいはい、イチヤついてる秀吉たちは放っておいて、正直Dクラス戦はどうなの？（モグモグ）」

睦月「どうって？別に何の問題もないが？（モグモグ）」

明久「そうだね。一応午前中に色々な教科の回復試験を受けたし、残りの教科も戦争中に受けるつもりだしね（モグモグ）」

優子「（モグモグ）へえ。凄い自信ね」

橙夜「（モグモグ）そりゃ、当然だろう。Aクラス相当の俺たち3人にFクラスの代表はあの雄二なんだからな」

燐「やっぱり坂本君がFの代表なんだ。代表の言ってた通りだね（モグモグ）」

睦月「（モグモグ）Aクラスの代表というと……やっぱり翔子か？
愛子「そうだよ。流石に代表のことは知ってるよね？（モグモグ）」

橙夜「そりゃ、俺たち兄弟妹は前から面識あったし、俺は去年同じクラスだったからな」

明久「あ、お弁当のおかずこれで最後だ（モグモグ）」

睦月「(モグモグ)俺も食べ終わったぜ」

優子「(モグモグ)アタシもよ」

橙夜「(モグモグ)俺もだ」

紫「私もよ」

愛子「ボクも食べ終わったよ」

秀吉「ワシらもじゃ」

橙夜「それじゃ、ごちそうさま」

7人「……………」(ごちそうさま)でした「……………」

良い具合に腹に溜まったな。これなら試召戦争やっても夕食まで十分にもちそうだ。

紫「明日の当番は橙夜兄さんだからね。期待するわ」

橙夜「分かっているっての。どうせだからデザートも作ってくるか」

愛子「それなら、明日も混ぜてもらおうかな。デザートは出来たらシュークリームがいいな」

橙夜「となると明日はここにいる8人に雄二・康太・瑞希・島田嬢の12人分か? ……いや、雄二と康太が混ざるなら翔子と須藤の分も準備するか。てことは14人分だな。そうなると重箱で作った方が良さそうだな。 ……確か睦月は明後日の当番だったから手伝え。

燐も手伝ってくれると助かるな」

睦月「了解」

燐「大丈夫だよ」

愛子「ボクの分は自分で用意するつもりだったんだけど……………いいのかな?」

橙夜「愛子は気にするな。それじゃ睦月と燐の当番を短縮して明後日は明久な?」

愛子「橙夜君、ありがとう」

明久「それくらいなら僕は構わないよ」

橙夜「Aクラスの優子たちには翔子と須藤に話を通しておいでくれ。」

まあ、雄二や康太と一緒にお昼が食べれるならすぐに受けそうだが……」

優子「それなら代表にはアタシが声を掛けておくわ。須藤さんの方は紫に頼むわね」

紫「結子とは去年同じクラスだったから任せて」

橙夜「話もまとまったしこれで解散つと」

そうして俺たちは各自の教室に戻っていった。

S i d e . e n d

第参問目 ミーティングとお弁当（後書き）

橙「……なあ。今回の話って、裂やんに一体何があったんだ？」

睦「俺も知らない。ん？何か紙がおいてあるぞ」

橙「えーと何々？」

『紫と隣にOHANASHIされたので出番を早めるというか約束を守るために書いてみた。』

『こんなの優子のキャラじゃない！秀吉じゃない！なんて突っ込みは受け付けない。』

『ついでにいうと私に甘甘は難しい。梓外の方でも公言しているがな』

橙「だとよ」

紫「当然の義務よ」

隣「前回、約束を守らなかったのだから当たり前だと思っよ」

睦「裂やん、南無……」

橙「それにしても助かったぜ」

睦「そうだな。瑞希の弁当フラグを見事に叩き折ってくれて感謝したい気持ちでいっぱいだ。ん？今度は紙が降ってきたぞ？えーと、何々？」

『今回は叩き折れたが、以降どうなるかは知らん。

その時の私の気分次第で犠牲が出ると思う。特に強化合宿の際は。

それと南無言うな。まだ死んでない』

睦「橙夜兄……」

橙「……大丈夫だ。強化合宿なら犠牲になるのは明久だけのはずだ！」

睦「そうだよな？」

橙「それにしても今回もまた長くなったな」

睦「何文字なんだろうな？一万近くだろうけど。また紙が振ってきた」

『10000文字超えだった。詰め込みすぎだな』

橙「さて、余計な話はおしまいにして、そろそろ時間だ。アンケート出して終わるぞ。以下の中から3人選んでくれ」

神楽橙夜 神楽睦月 神楽紫 桜儀燐 吉井明久 工藤

愛子

坂本雄二 霧島翔子 土屋康太 須藤結子 木下秀吉

木下優子

姫路瑞希 島田美波 久保利光 西村宗一 福原慎 神

儀紫稀

翔「……次回もよろしく」

紫「よろしくね」

燐「またね」

第四問目 Dクラス戦、開始と終わり（前書き）

【バカテスト】 数学

問 以下の問いに答えなさい。

□ (1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を1つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、？の中から選びなさい

? $\sin A + \cos B$? $\sin A - \cos B$

? $\sin A \cos B$? $\sin A \cos B + \cos$

$\sin B$

姫路瑞希、神楽橙夜、神楽睦月、桜儀燐の答え

□ (1) $X = \pi / 6$

(2) ?

教師のコメント

そうですね。角度を「 \circ 」ではなく「 π 」で書いてありますし、完璧です。

それにしてもお兄さんたちの名前があるのに妹さんの名前がないよ
うな……。

土屋康太の答え

□ (1) $X = \pi$ およそ π

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

『(2) およそ?』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

神楽紫の答え

『(1) X〃およそ』

(2) およそ?』

教師のコメント

土屋君と吉井君だけじゃなかったんですね……。

苦手科目と言ってもこれは酷いと思いました。

「出番や名前をもらえるのは嬉しいけど、今回はいらなかった!？」

b y速水 劉太

第四問目 Dクラス戦、開始と終わり

Side・秀吉

ワシが率いる先行部隊は現在、渡り廊下でDクラスと交戦中じゃ。

秀吉「文系科目の国語や歴史、現代社会を中心に二人以上の多対一で掛かるのじゃ！決して一対一でぶつかるでないぞ！」

F男「おおーっ！」

ワシら先行部隊は16人。対するDクラスは7人。これなら一対一になることはまずないじゃろ。

F男「高橋先生、Fクラス男子AとBがDクラス男子Aに世界史勝負を申し込む！」

F男「先生、Fクラス男子CとDがDクラス男子Bに現国勝負で挑む！」

F男「こちらも男子EとFとGが現代社会勝負で行きます！」

『試獣^{サモ}召喚！』

状況を確認していると、いよいよ戦闘が始まったようじゃ。

『Fクラス 男子A & 男子B VS Dクラス
男子A

世界史 68点 & 62点 VS
121点』

『Fクラス 男子C & 男子D VS Dクラス
男子B

現国 73点 & 64点 VS
105点』

『Fクラス 男子E & 男子F & 男子G VS
Dクラス 男子C

現代社会 59点 & 72点 & 84点 VS
153点』

こちらの戦力がFクラスでも流石に多対一は厳しいようでDクラスのほうも苦戦しているようじゃ。

？「戦死者は補習うううー！」

そうやって部隊の後方辺りで戦況を確認していると、両クラスから戦死者が出たようで数人が鉄人に捕まっておった。

鉄人「さあ来い！この負け犬が！」

生徒「て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだっ！」

鉄人「黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるからな」

生徒「た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！」

鉄人「拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやるっ」

生徒「お、鬼だ！誰か、助けっ イヤァァ (ボタン、ガチャ)」

戦死者はどこからか現れた鉄人に連行されていった。

その光景にこの場に恐怖感が漂っておった。

F男「木下隊長！Dクラスの後方より奴らの援軍らしき人影が！化学教師の五十嵐先生と布施先生を連れている！」

秀吉「なんじゃと！それは拙いじゃ！皆の者、敵方の援軍が到着する前に出来るだけ数を減らすのじゃ！」

F男子「了解！」

それじゃ、ワシも敵方の援軍が到着するまで頑張るとするかの。

S i d e . e n d

S i d e . 速水

F男「島田！木下たちがDクラス連中と渡り廊下で交戦状態に入ったらしい！」

俺がいる、島田の率いる中堅部隊は今現在前線にいる木下が率いる先行部隊と、Fクラスとの中間辺りに配置されている。

とりあえず今は、耳を済ませて前線部隊の様子を聞き取ろうと思う。

鉄人「さあ来い！この負け犬が！」

生徒『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだっ！』

鉄人『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるからな』

生徒『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！』

鉄人『拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやる』

生徒『お、鬼だ！誰か、助けっ　イヤァァ　（ボタン、ガチャ）』

……試召戦争の雰囲気は大体分かった。

速水「なあ、島田」

美波「なに？速水？」

速水「……退避しないか？」

美波「この意気地なし！」

臆病風に吹かれた俺に、島田は一発、拳骨をくれた。

美波「ウチらの役割は木下の前線部隊の援護よ。アイツらが戦闘で消耗した点数を補給する間を、ウチらの部隊で前線を維持するのよ。それに木下たちだって頑張って敵を弱らせてるんだから、ウチらは逃げるわけには行かないのよ！」

速水「島田……」

なんてお前は男　いや、漢らしいんだ！

F男「島田、前線部隊が後退を開始した！」

美波「総員退避よ」

前言撤回。

速水「さつきと言っていることが全然違うぞ！折角見直したのに！」

美波「総員退避で問題ないわ！」

速水「よし、逃げよう。俺らには荷が重すぎたんだ」

美波「そうよ、ウチらは精一杯努力したわ」

決して握りこぶしを俺に向けている島田が怖くなったわけじゃない！

そう思いながらくるとFクラスに向かって方向転換すると、本陣に配置されているはずの横田がいた。

美波「ん？横田じゃない。どうしたの？」

横田「代表より伝令」

そう言っつてメモを見ながら読み上げる。

横田「『逃げたらクロス』」

美波「全員突撃よおーっ！」

気がついたら島田の号令と同時に俺たち中堅部隊は戦場に向かって全力ダッシュしていた。

？「おおー、島田たちではないか。援護に来てくれたんじゃない！」

前方から向かってきたのは先行部隊の隊長の木下秀吉だった。

美波「木下、大丈夫？」

秀吉「うむ。戦死は免れておる。じゃが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまったわい」

美波「そうなの？召喚獣の様子はどうか？」

秀吉「もうかなりへ口へ口じゃな。これ以上の戦闘は無理じゃ」

美波「なら早く戻ってテストを受けなおしてきなさい。それと坂本にもしもの時の為にすぐに援護にこれるのを数人準備させておくように伝えて頂戴」

秀吉「雄二には伝えておこう。全教科受けている時間はなさそうじやから、一、二教科受けてくるとうしようかの」

言うや否や、木下は教室に向かって走っていった。その後ろに前線部隊のクラスメイトが続いた。出陣時より人数が減っていたから補習室に連行されたようだ。

美波「速水、見て！」

島田が叫んだので、島田の視線の先をしてみる。

美波「五十嵐先生と布施先生よ！Dクラスの奴ら、化学教師を引っ張ってきたようね！」

学年主任の高橋女史だと勝負に時間がかかるから、立会人の教師を増やして一気に攻めてきたのか。

道理で木下たち先行部隊が予定よりも早く引き返してきたわけだな。

速水「島田、化学に自信は？」

美波「全く無いわ。60点台常連よ」

俺も人のことは言えないが、流石Fクラスだな。

速水「なら、五十嵐先生と布施先生に近づかないように高橋女子の
ところに行くか」

美波「そうしましょう」

方針を決めて戦闘の行われている渡り廊下を目立たないように隅
へ移動する。

？「あ、そこにいるのはもしや、Fクラス的美波お姉さま！五十嵐
先生、こっちに来てください！」

美波「くっ！ぬかったわ！」

Dクラスの一人に島田が見つかった。五十嵐先生を伴ってやって
来ているから、召喚獣を出して応戦しないと、一撃で補習室送り
になる。

それにしても「お姉さま」ね。俺としては百合って結構、良いと
思うんだよな……。

速水「よし。島田、ここはお前に任せて俺は先を急ぐ！」

美波「ちよっ……！普通逆じゃない！？『ここは俺に任せて先を急
げ！』じゃないの！？」

速水「そんな台詞、現実世界じゃ通用しない！それに百合って俺は
良いと思うんだ」

美波「は、速水！このゲス野郎！」

？「お姉さま！逃がしません！」

美波「くっ、美春！やるしかないってことね……！」

五十嵐先生から10メートル以上離れて島田の様子を窺う。島田

と美春と呼ばれていたDクラスの彼女は既に試験召喚獣を喚び出していた。

美春「お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の想いで待っていました……」

美波「ちよつと！いい加減ウチのことは諦めてよ！」

速水「ところで島田、お姉さまって」

美春「嫌です！お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんです！」

美波「来ないで！ウチは普通に男がすきな！」

美春「嘘です！お姉さまは美春のことを愛しているはずです！」

美波「このわからずや！」

どうやら美春っていう彼女の一方通行な想いのようだ。流石に俺は百合でも両想いでないのはだめだと思っな。

美春「ここまでですっ！」

美波「くっっ！」

考え事をしていたら戦闘が終わりそうになっていた。

『Fクラス	島田美波	VS	Dクラス	清水美春
化学	53点	VS		94点』

島田、サバ読んでたんだな。60点にすら届いてないじゃないか。

美春「さ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

美波「い、嫌あつ！補習室は嫌あつ！」

美春「補習室？……フッフ」

島田が取り乱すが、楽しそうに笑いながら島田の手を引っ張る清

水。

あれ？そっちにあるのは保健室だぞ？

美春「ふふっ。お姉さま、この時間ならベッドは空いていますからね」

美波「は、速水、早くフォローを！なんだか今のウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするの！」

島田が哀れになってきたから助けてやりたいのは山々なんだが、でも、

美春「殺します……。美春とお姉さまの邪魔をする人は、全員殺します……」

流星にソコに飛び込む勇氣は俺にはないんだ。

速水「島田、お前のことは忘れない！」

美波「ああっ！速水！なんで戦う前から別れの台詞を！？」

美春「邪魔者は殺します！」

って、島田の召喚獣の動きを止めてこっちにやって来た！逆に俺は推奨派なのになんで！？

？「速水。危ない！
試^{サモン}獣召喚っ」

と、脇から割り込んできた声。確かあいつはクラスメイトの須川！ありがたい！

『Fクラス 須川亮 VS Dクラス 清水美春』

化学

76点

VS

41点

須川の召喚獣が清水の召喚獣を斬り倒した。

清水は、島田との戦闘で消耗していたから簡単に勝つことが出来たようだ。

須川「島田、大丈夫か？」

美波「ええ、助かったわ須川。本当にありがとう。補習の鉄じ

西村先生、早くこの危険人物を補習室へお願いします！」

鉄人「おお、清水か。たつぷりと勉強漬けにしてやるぞ。こっちに
来い」

美春「お、お姉さま！美春は諦めませんから！このまま無事に卒業
できるなんて思わないでくださいね！」

清水はとても危険な捨て台詞残し、補習室に連行されていった。

その後、俺は島田に襲われかけ、その島田は須川に連行されてい
ったのだった。

Side・end

Side・橙夜

Dクラスとの試召戦争開始から既に結構な時間が経っていた。

瑞希「次の問題をください」

睦月「俺にもください」

秀吉や島田嬢たちが前線と補給試験を行き来している間、俺と睦月、明久に瑞希は回復試験を受けていた。

俺たちの近くには雄二と近衛の本陣が控えていた。

俺は試験を受けながら次々と雄二の元に次々と挙がってくる情報を整理していた。

島田嬢が最初に戻ってきたときは大変だった。なぜなら

美波「須川。放しなさい！今すぐに速水を殺しに行くんだから！」

雄二「島田はどうしたんだ、須川？」

須川「木下たちが補給に向かって前線の維持をしているときに速水が島田を見捨てたらしい」

雄二「なんだそりゃ？」

橙夜「新しい問題ください」

須川「俺もよく分からないんだが、島田と戦っていたDクラスの女子が島田の事をお姉さまと呼んでいたな」

睦月「それって清水美春じゃないか？次をお願いします」

瑞希「私にも次、お願いします」

雄二「清水？……ああ、あの噂のか」

須川「噂？どんな内容なんだ？」

雄二「経緯は知らんが、島田Loveの同性愛者らしい。恐らく島田を見つけた清水の相手を島田一人に任せて逃げたところだろ。確か清水は男は豚野郎としか思っていないらしいからな」

美波「ハヤミコロス……ハヤミコロス……！」

こんなやり取りがあったからだ。はっきり言ってかなり怖か

ったぜ。

……ところどころやりとりとは関係ないのもあったが。

入ってきた情報を雄二とは別に俺なりに整理すると結構前線が厳しいみたいだ。

雄二「そろそろ前線の維持も厳しくなってきたか。明久、試験の調子はどうだ」

明久「世界史はさつき受け終えたから大丈夫。今受けている日本史も大体200点分ぐらいは解けたかな」

雄二「よし、なら明久は今受けているプリントで切り上げて採点が終わり次第、前線に行ってくれ」

明久「分かった。けど僕って一応主戦力だから最後まで温存するんじゃないの？」

橙夜「お前の存在は有名だから今日戦わなくても明日にはバレる。そうなると思匿のアドバンテージがなくなるから、そろそろ前線に投入しても平気なんだよ」

睦月「次、お願いします」

瑞希「私も次、お願いします」

明久「そういうことか。っと、終わったよ。先生採点お願いします」
福原「はい、分かりました。それとあまり私語はしないように。カニンングと見なして無得点にしますよ」

橙夜「分かりました。これから気をつけます」

少し喋りすぎたか。一応、俺は雄二の参謀だから点数はあまり必要じゃないんだけどな。

F男「報告！Dクラスが数学の木内を呼びに行ったらしい」

雄二「戦況が大分拙くなってきたな。明久、採点は終わったか？」

明久「丁度終わったよ」

雄二「それなら須川と一緒に前線に行ってくれ。それと指揮を執っていると思われる速水に木内の情報を教えてきてくれ」

明須「了解！」

雄二の指示に従って明久と須川は前線に行った。

橙夜「回復試験は退屈だ」

雄二「黙って試験を受けてる。今回の戦争でのお前の役割は試験受けるだけなんだからな」

橙夜「そうだとしても俺も戦争やりたい。先生、次ください」

雄二「午前中に沢山の教科を受けたのは念の為の保険でしかないんだぞ。だから試験を受けてる」

橙夜「しようがないから次まで我慢してやるか」

睦月「せんせー、次ください。ところで次ってどことやるんだっけ？」

雄二「それは勝ってから教えてやる」

瑞希「先生、次お願いします」

竹中「分かりました。これをどうぞ。それと神楽君たち兄弟は試験のほうに集中してください。本当にカンニングと見なして無得点にしますよ」

橙睦「今度こそ気をつけます」

結構真面目に受けてるからここで無得点になるのは辛い。公民科目はあまり真面目に取り組む奴がないから俺にとって最大戦力なんだよな。

Side・end

Side・明久

僕と須川君は雄二の指示の通りに現在前線にいる中堅部隊と合流して、Dクラスと戦っている。

F男「吉井指揮官！横溝がやられた！これで布施先生側は残り二人だ！」

速水「五十嵐先生側の通路だが、現在俺一人しかいない！援軍を頼む！」

F男「藤堂の召喚獣がやられそうだ！助けてやってくれ！」

僕の成績はBクラス以上で操作技術が学年一だとしても流石に一对多は厳しい。本陣に援軍を要請したいけど、作戦につき込む戦力が足らなくなってしまう。なんとか僕らで持ちこたえるしかない！

「布施先生側の人たちは召喚獣を防御に専念させて！速水君は総合科目の人と交代しながら効率良く勝負をするように！須川君は藤堂君の救出を！」

F男『了解！』

皆が僕の指示に従って陣形を組み始める。援軍として後から来たのに指揮官として扱ってくれるようだ。

D男「Fクラスめ、明らかに時間稼ぎが目的だ！」

D男「何を待っているんだ！！」

どうやらDクラスの連中は僕らの意図に気付き始めたようだ。これはやりづらくなりそうだ……。

D男「大変だ！斥候からFクラスに世界史の田中が呼び出されたって報告が！」

D男「せ、世界史の田中だと！」

D男「Fクラスのヤツら、まさか長期戦に持ち込む気が！」

Dクラスの偵察部隊にウチのクラスにテストの採点でやってきた田中教諭が見つかったようだ。

世界史の田中教諭はおつとりとした初老の男性で、採点の甘さに定評がある。その代わり採点に少々時間がかかるけど、長期戦の場合は田中教諭の方が都合がいい。

それに対してDクラスは数学の木内教諭を連れ出している。

数学の木内教諭は厳しいけど、採点の早さは群を抜いている。Dクラスはこちらとは対照的に、一気にケリをつけようとしているみたいだ。

僕らの役割は唯一つ。試召戦争を行っていないクラスが今日の授業を終えるくらいまで前線を保つこと。

その為には

明久「須川君！」

須川「なんだ？」

藤堂君を救出し終わって近くに來ていた須川君にあることを頼む。

明久「偽情報を流して欲しいんだ。時間を稼ぐ為に」

須川「偽情報？それは構わないけど、スグにバレるんじゃないか？

Dクラスで前線の指揮をとってる塚本は声大きいから、うまくいってもあつと言う間に混乱を収められてしまうぞ」

明久「須川君の言うとおりだが、でも大丈夫。対象はDクラスじゃないから」

須川「と、言うത്?」

明久「先生たちに流すんだよ。他の場所に向かってくれるように」

須川「……なるほど。それは確かに効果的だ」

明久「でしょう?流す内容は橙夜や雄二と相談してくればいい」

須川「ああ。確実に騙してみせよう」

明久「うん。よろしく」

そう告げて、須川君は駆け足でこの場を離れていった。

明久「僕らは一対一じゃ勝てないからね!コンビネーションを重視して!」

とりあえず僕は指揮官として後方から指示を出す。危なくなった僕も前方に出ることにしよう。

Side・end

Side・橙夜

須川「坂本!吉井からの伝言だ!」

ん?数分前に明久と前線に行った須川じゃないか。伝言って一体?

雄二「内容は？」

須川「先生たちに偽情報を流して欲しいとのことだ。内容は坂本や神楽兄と相談するようにと」

雄二「なるほど……ムツリーニ。Dクラスが呼んだのは誰だ？」

康太「……数学の船越先生だ」

雄二「そうか。……だったら「雄二」、その考えはやめておけ」……何故止める？」

橙夜「お前が明久を不幸にしたいのは分かっている。今回は船越女子の囿にするつもりだってこともすぐに分かる。だが、それだけはやめておけ」

雄二「そこまで分かっているならやらせる」

橙夜「お前は頭が回るくせに明久を貶める時だけは自分に被る損害のことを忘れているよな」

雄二「俺に被る損害？……あっ」

橙夜「やっと理解したか。放送を流して、それを指示したのがお前だと分かれば真っ先に紫が殺しに来るだろうに……」

雄二「……」（ガタガタブルブル）

橙夜「須川、この内容を流せ。……速水には悪いが今回は地獄を見てもらおうか」

須川「これは……。速水には悪いが、絶対に成功させてもらう」

須川は俺が書いたメモを受け取って確認した後、そう言って教室を出て行った。

口調は残念そうだったが、顔はにやけていたな……。

橙夜「速水には後で何か奢ってやろう……」

そう呟いてから数分後。

ピンポンパンポーン《連絡致します》

遂に来たか。……速水、本当にすまん！

S i d e . e n d

S i d e . 速水

吉井が須川に何か指示を出していたようだが、一体どんな内容だったんだ？

D 男『塚本、このままじゃ埒があかない！』

D 男『もう少し待っている！今数学の船越先生も呼んでいる！』

数学の船越先生を呼んだのは採点目的ではなく立会人になって貰う為か！

速水「吉井！これ以上、戦線を拡大されるとかなりマズイぞ！」

明久「もう少し悪化したら僕も出るよ！」

ピンポンパンポーン《連絡致します》

ん？いきなり校内放送？この声は須川か？となると吉井の指示は先生を別の場所に誘導することか。

《船越先生、船越先生》

しかも呼び出し相手は丁度今話題に上がった船越先生だ。素晴らしいぞ須川！

《速水劉太君が体育館裏で待っています》

……へ？須川？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

ちよつと待てええ！なんて危険なマネを！相手はあの船越女子だぞ？確かに確実に体育館裏に向かうだろうが、俺の貞操が大変なことに！

F男「速水……アンタあ男だよ！」

F男「ああ。感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやってくれるなんて！」

俺はこんなことを承してないぞ！

速水「吉井！貴様の指示だな！」

明久「誤解だ、速水君！僕が指示したのは先生を別の場所に誘導することまでで、内容は橙夜や雄二と相談するようにと言ったんだ！」

アイツら……！人がDクラスへの宣戦布告の使者をやってやったと言うのに、恩を仇で返すだなんて……！

D男「おい、聞いたか今の放送」

D男「ああ。Fクラスの連中、本気で勝ちにきてるぞ」

D男「あんなに確固たる意志を持つてる奴らに勝てるのか……？」

Dクラスからもそんな眩きが聞こえてきた。

外堀が埋まってきて、どんどん否定出来なくなっていく！

F男「皆、速水の死を無駄にするな！」

F男「絶対に勝つぞーっ！」

ああっ！うちのクラスの士気にまで良い影響が！もうやめてくれ
っ！

F男「指揮官、いけますよ！この勢いで押し返しましょう！」

明久「そうだね……」

速水「……す」

明久「速水君。……頑張つて」

速水「須川あああああっっ！坂本おおおおおっっ！神楽あ
あああああっっ！」

吉井の励ましが唯一の救いだっただ……。

Side・end

Side・橙夜

速水「須川あああああっっ！坂本おおおおおっっ！神楽あ
あああああっっ！」

前線からはかなり離れているはずなのに此処まで速水の怨嗟の声

が聞こえてきた……。

とりあえず対処法はすぐに準備出来るからいいか。

橙夜「雄二、俺たちの回復試験終わったぞ」

雄二「そうか。それなら一旦、中堅部隊と明久を回収してくるか」

睦月「それじゃ俺たちはここで待機しているぞ」

雄二「ああ。ゆっくりしている。姫路はともかく、今回お前たち二人は参戦させないからな」

そう言っただけ雄二は近衛を連れて前線へと向かって行った。

橙夜「次の戦争を楽しみにするか」

睦月「暴りたいぜ。そういえば橙夜兄は次の相手は知っているのか？」

瑞希「それは私も気になります」

そういえばまだ説明していなかったか。

橙夜「知っている。と言うか、今回のDクラス戦は次回の作戦の為にでもあったからな」

睦月「で、どこなんだ？」

橙夜「それはまだ言えない。Dクラス戦が終わった自然と分かるからそれまで待つてろ」

その後は雄二たちが戻ってくるまで、明日の弁当のおかずをどうするか睦月と話し合っていた。

雄二「お前たち、よくやった」

速水「坂本おおおお！」

橙夜「おっと。速水少し落ち着け」

速水「神楽ああああ！お前もだあああああ！」

橙夜「だから落ち着け！ちゃんと対処法は準備してある」

速水「……本当か？」

橙夜「本当だ。戦争終了後に俺も一緒に体育館裏に行って対策してやるから安心しろ。それと俺びに今度何か奢ってやるか」

速水「それなら今回のことは水に流してやる」

何とか速水の暴走？は収まったようだ。

雄二「さて、そろそろ決着をつけるか」

秀吉「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、頃合じやろう」

康太「……………（コクコク）」

雄二「おっしや！Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」

F男「おっっ！」

そう言っつて今度は瑞希を連れて雄二たちは再び教室を出て行った。

教室に残っているのは俺と睦月の二人だけだ。

それから十数分後、新校舎の方から耳をつんざくような大音響が聞こえてきた。

どうやら作戦通りに事が進み、瑞希がDクラス代表の平賀源二の首を獲ったようだ。

こうしてFクラスとDクラスの試召戦争はFクラスの勝利で終わりを告げた。

第四問目 Dクラス戦、開始と終わり（後書き）

裂「1話あけて華麗に復活だ！」

橙「裂やんの復活なんてどうでもいい。とりあえず今回の速水の扱いは酷かった……」

睦「そうだな……本格的に可哀相だ」

裂「私だつてこうするつもりはなかった。Dクラスへの宣戦布告の為にだけに作ったキャラだったんだがな……」

紫「私達よりモブキャラに出番を与えている気がする」

燐「そうだよね。裂やんは一体何をしたいんだろう？」

裂「次回はきちんとお前たちに出番を与えられると思うからその手に持っているものを下ろせ」

紫燐「ちっ……」

裂「女の子が舌打ちなんてするんじゃないやありません！」

翔「……そんなことはどうでもいいこと。次回はどうなるの？」

裂「とりあえずDクラス戦の後始末だな。和平交渉とか橙夜の暗躍、Bクラスへの宣戦布告までだな」

紫「橙夜兄さんの暗躍って一体何をするつもり？」

橙「それはAクラス戦後のお楽しみってやつだ」

燐「そういわれると益々気になっちゃうなー」

睦「そう言えば今回の文字数ってどうなった？」

裂「後で確認する。感覚的には前回と同じくらいかそれより少ない感じだ」『9108文字だった』

橙「ふーん。まあ今回もまた以下から3人選んでくれ」

神楽橙夜 神楽睦月 神楽紫 桜儀燐 吉井明久 工藤

愛子

坂本雄二 霧島翔子 土屋康太 須藤結子 木下秀吉

木下優子

姫路瑞希 島田美波 久保利光 西村宗一 福原慎 神

儀紫稀

速水劉太

睦「速水の名前が増えてるな」

土屋康太（以降：ム）「……………若干レギュラー化し始めたかららしい」

工藤愛子（以降：愛）「ムツツリーニ君も来たんだね」

橙「康太に愛子まで……………。これは本格的に收拾がつかなくなりそうだな」

紫「それじゃまた次回」

燐「よろしくね」

愛「またね」

第五問目 戦後の後始末と暗躍と昼食会（前書き）

【バカテスト】 物理

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希、神楽睦月、神楽紫、桜儀燐の答え
『粒子』

教師のコメント
よくできました。

土屋康太の答え
『寄せては返すの』

教師のコメント
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
先生もRPGは好きです。

神楽橙夜の答え
『エクスカリバー』

教師のコメント

それはアーサー王が持っていたとされる聖剣です。

「誰がババア長だい！」by 藤堂 カヲル

第五問目 戦後の後始末と暗躍と昼食会

Side・明久

Dクラス代表 平賀源二 討死

F男『うおおーっ！』

その報せを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

F男「凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！」

F男「これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」

F男「ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな」

F男「坂本雄二サマサマだな！」

F男「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！」

F男「坂本万歳！」

F男「姫路さん愛しています！」

代表である雄二を褒め称える声がいたるところから聞こえてきた。最後のは違うけど。

さっきまで雄二がいた方を見ると、がっくりとうなだれているDクラス生徒たちの奥でFクラスの皆に囲まれている姿があった。

雄二「あー、まあ。なんだ。そう手放しで褒められると、なんつか」

頬をポリポリと掻きながら明後日の方向を見ている。あの雄二が照れるなんて意外だな。

F男「坂本！握手してくれ！」
F男「俺も！」

Dクラスを倒しただけで英雄扱い。この光景を見るだけであの教室への不満度が如何に大きいか分かる。

僕も雄二のところに行って皆に混ざろう！

明久「雄二！」

雄二「ん？明久か」

雄二が振り向く。

そこへ右手を挙げながら颯爽と駆け寄って、

明雄「イエエーイー！！！」

ハイタッチをする。

？「まさか姫路さんがFクラスだなんて……信じられん」

背中から誰かの声。

振り向くとそこにはヨタヨタと歩み寄る平賀君の姿があった。

瑞希「あ、その、さっきはすみません……」

違う方向から瑞希ちゃんも駆け寄ってくる。

平賀「いや、謝ることはない。全てFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ。まあ、噂どおりに吉井君の成績が上がっていたのも驚いたが」

これも勝負。騙し討ちっぽかったけど、瑞希ちゃんが謝る必要は全くない。……僕のことを噂になっているのはちょっと恥ずかしいけど。

平賀「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか？」

敗残の将か。なんだか可哀想に見える。これから彼は再び試召競争を行ってできる権利が回復するまでの三ヶ月間を、あの教室でクラスメイトに恨まれながら過ごさなくてはならない。勝てば英雄のようになれるのが代表なら、負ければ戦犯として扱われるのも代表なのだから。

明久「もちろん明日で良いよね、雄二？」

雄二「いや、その必要はない」

流石にその姿を見て今日中にとは言えないので、雄二に聞いてみると、僕の予想しなかった返事をしてきた。

明久「え？なんで？」

雄二「Dクラスを奪う気はないからだ」

明久「雄二、それはどういうこと？せっかく普通の設備を手に入れることができたのに」

雄二「忘れたのか？俺達の目標はあくまでもAクラスのはずだろうか？」

打倒Aクラス。それは僕と雄二、橙夜の到るべき到達点。だが、僕には雄二の言いたいことがさっぱりわからない。

明久「それなら、標的をAクラスにしないのさ。おかしいじゃないか」

雄二「（橙夜も言っただろうが）お前らの回復試験の時間稼ぎと召喚獣の操作に慣らす為だ。他にもあるが、少しは自分で考える。そんなんだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

明久「なっ！そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ！」

雄二「おっとすまない。近所の小学生だったか」

明久「……人違いです」

雄二「まさか……本当に言われたことがあるのか……？」

み、見るなあー！そんな目で僕を見るなあー！それに呼ばれてたのは 観察処分者 になっただけだ！

雄二「と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない」

平賀「それは俺達にはありがたいが……。それでいいのか？」

雄二「もちろん、二つ条件がある」

そりゃそうだよな。このまま解放したら意味が無い。ここに橙夜が居ても何かしらの条件を出していただろうし。

平賀「一応聞かせてもらおうか」

雄二「なに。そんな大したことじゃない。一つ目は、俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かさなくしてもらいたい。それだけだ」

そう言って、雄二が指したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。

でも、この室外機はDクラスの物じゃない。ちょっと貧しい普通

の高校レベルの設備でしかないDクラスにエアコンなんてものはないのだから。おいてあるのは、スペースの関係でここに間借りしている

平賀「Bクラスの室外機か」

雄二「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思うが、そう悪い取引じゃないだろう？」

確かに悪くない。うまく事故に見せかければ嚴重注意で済み、三ヶ月もの期間をあの教室で過ごす状態から逃れられるのだから。

平賀「それはこちらとしては願ってもない提案だが、なぜそんなことを？」

雄二「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな」

平賀「……そうか。ではこちらはありがたくその提案を吞ませて貰おう」

雄二「タイミングについては後日詳しく話す。二つ目は三ヶ月間Fクラスに宣戦布告しないことだ。今日はもう行っていいぞ」

平賀「ああ。ありがとう。二つ目の条件も呑む。お前らがAクラスに勝てるように願っているよ」

雄二「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思っているだろう？」
平賀「いや。他にも何か隠し玉がありそうな気がしてな。何となくだが勝てそうに思えてな」

じゃあ、と手を挙げてDクラス代表、平賀君は去っていった。

雄二「さて、皆！今日はご苦労だった！明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆっくりと休んでくれ！解散」

雄二が号令をかけると、皆雑談を交えながら自分のクラスへと向

かい始めた。

明久「雄二、僕らも橙夜たちと合流して帰ろうか」
雄二「そうだな」

流石に疲労がかなりある。まだ試召戦争は続くようだから、今日
は大人しく帰って寝ることにしよう。

Side・end

Side・橙夜

あの大きな音響から暫くして、補習室送りにされていたFクラスのやつらも解放されたようで、生き残っていた他の面々のように戻ってきて自分の鞆を持って帰っていった。

俺と睦月はその様子を観察しながら明久たちが戻ってくるのを待っていた。

雄二「待たせたな」

瑞希「お待たせしました」

明久「お待たせ。橙夜、睦月。帰ろう」

数分後、殆どのクラスメイトが帰った頃に明久と雄二、瑞希の三人が戻ってきて、そう言った。

睦月「おう。帰るか」

橙夜「ちよつと用事があるから、待たずに帰っていいぞ。それと睦

月は帰り際に紫たちとこのメモに書いてあるものを買っておいてくれ」

その提案を俺は断る。

睦月「ああ、分かった」

明久「そう？なら僕たちは先に帰るね」

雄二「当然待つわけがないな」

瑞希「それじゃ先に帰りますね」

そう言って4人は鞆を持って教室を出て行った。やはり雄二は薄情だった。どうでもいいな。

橙夜「さてと。速水。そろそろ行くぞ」

速水「ああ……」

用事とはあの放送の後始末である。速水はかなり恐怖している。

速水「本当にお前の対処法で俺は無事に帰れるのか？」

橙夜「安心しろ。確実に上手くいく」

速水「その言葉を信じるからな？」

かなりの念の押しようだ。

俺の言葉は決して自惚れではない。絶対の事実だからだ。あの船越女史って結構扱いやすいと思うんだがな。

拳動不審な速水を落ち着かせながら俺たちは体育館裏に向かった。

今、俺は速水と船越女史と別れて校舎のある場所に向かっている。

ん？船越女史の対処はどうなったかだった？

そんなもの既に解決したに決まっているじゃないか。

何をしたかって？そんなのは簡単だ。

「見合い話を持ち掛けたかった」

そう説明しただけだ。船越女史は嬉々として話に乗ってきた。

何故、見合い話を持ち掛けれるかということ、俺の家はあの『神楽グループ』だ。

傘下には多くの会社があるわけで、その分社員も居る。

それなら結婚相手を探している人間もいるわけだ。

幸いにも今日はノートパソコンを持ってきていたので社員のデータなんかも手元にあったわけだ。

船越女子と同世代で独身の社員を数人ピックアップして今度紹介すると約束した。

その話が済んだときの速水は長年の憑き物が落ちたように晴れやかだった。

それはたしかめ
閑話休題。

話が逸れたな。説明している間に目的地の扉の前に到着した。

コンコン

と、俺はその扉をノックする。

ん？その扉の先はどこだって？それはすぐに分かる。

？『入りな』

橙夜「失礼します」

その言葉と共に俺は扉を開いて部屋の中に入る。そこにいたのは

？「何の用だい」

長い白髪が特徴の妖怪、藤堂カヲル学園長 通称、ババア長がいた。

橙夜「ちょっとしたお願い いえ、取引に来ました」

学園長「……取引、ね。それと、その前に自分の名前くらい名乗るのが礼儀ってモンだろうに」

俺の言葉に訝しげな顔をしながら名乗りを促してきたババア長。
一応名前を名乗ることにする。

橙夜「失礼しました。俺は二年F組の神楽橙夜です」

学園長「神楽？もしかして、振り分け試験を無記名で提出したあの『神楽』かい？」

橙夜「その通りです。で、取引の件なんです……」

どうやら振り分け試験を無記名で提出したことは教師陣の中では有名のようだ。

橙夜「俺が所属する二年F組がD組に試召戦争をしたのはご存知だと思います」

橙夜「盗聴器が仕掛けられている。俺が全て外すから他人への普段通りの対応を」

学園長「……そりゃ知っているさね。その戦争の最終許可を出しているのはアタシなんだから」

俺は取引内容の説明の前置きをすると共に、手に持っていたノートパソコンをババア長の机の上において文字を打ちながら学園長室の現状を説明する。

盗聴されている可能性は知っていたようで、ババア長は僅かに顔を顰めただけであまり動揺はしていなかった。

橙夜「それなら、我々F組の最終目的がA組の設備なのは予想済みだと思います」

橙夜「全て外した。仕掛けられていた数は三つ。三つとも同じ物だった」

学園長「そりゃ、D組との戦争後に設備交換してないんだからある程度は予測できるさね」

口で説明を片手でタイピングしながら、仕掛けられていた三つの盗聴器を手際よく全て無力化する。

橙夜「全て無力化した。ここからは全て口で説明する」

橙夜「で、ここからが取引の内容になるのですが、ある条件を満たした状態でF組がA組に勝つか引き分けるかしたらF組の設備をA組との交換などではなく同等にしてもらいたい」

学園長「ある条件が何かは知らないけど勝利して交換以外での設備の向上は認められないね。そうと分かっただらさっさと帰りな」

橙夜「何となくそう言うと思ってましたよ。しかし、こちらのメリ

ツトに関してしか取引内容は説明していませんから最後まで聞いてください」

学園長「なら、勿体ぶってないでさっさと言いな」

時間を掛けすぎたか。確かに時間も勿体無いからな。

橙夜「単刀直入に言いましょう。」

は欠陥品なんでしょう

？

学園長「なっ！？そのことはまだアタシしか知らないはずさね！一体どうやって知ったんだい！？」

やっぱり驚くよな。アレはまだ開発したばかりだろうし。

橙夜「お忘れですか？俺の家はあの『神楽グループ』ですよ？種類問わずに情報は集めるに決まってるじゃないですか」

学園長「……：そっいえばそうだったね。で、そのことを口外されないことが私のメリットかい？」

ふーむ……。やっぱりそういうふうに思われるか。まあ、説明するか。

橙夜「そうではありません。」

の欠陥を改善することが私

から提示する学園長のメリットですよ」

学園長「はっ。アンタにそんなこと出来るはずがないね。システムの仕組みなどを知っているのはアタシを含めた開発グループだけさ。いくら『神楽グループ』の御曹司だろうと不可能さね」

橙夜「出来ますよ。それと勘違いしているようですが、俺は御曹司ではありません。俺の家は、と言ったかもしれませんが」

学園長「それは一体どういう……：まさか、あの噂は本当だとも言うのかい」

橙夜「知っていたようですね。なら話は早い。その噂は真実ですよ。だって俺が」

そこで一旦言葉を切り、再び口を開く。

橙夜「『神楽グループ』の本当の総帥ですから」

俺の言葉を信じられないものを見るような顔で見てくる学園長。流石に高校生が本当のトップと言われて納得なんて出来ないだろうよ。

ここで説明するが『神楽グループ』ってのは世界有数の大企業だ。傘下には多種多様な企業がある。

まあ、その始まりは俺が8、9歳の頃に気紛れで設立した会社なんだがな。

法律上、当時の俺が会社なんて設立出来る訳がないので、父さんを隠れ蓑として社長にして設立したんだが。

現在なら法律上問題なく表立って総帥になれるのだが、面倒だから当面はそのままの予定だし。

それで、色々なものに手を出したら全部が全部成功してドンドン大きくなって行き、現在の状態になったわけだ。

それと、俺たち兄弟妹の家が『神楽グループ』だと知っているのはあまりいない。

精々、桜儀家と木下家、吉井家に霧島家の関係者位だろう。後は瑞希も知ってたかな？雄二は霧島家の関係者扱いだからきつと知っているだろう。

で、ババア長が言っていた噂ってのは俺たち兄弟妹の誰かが本当

のトップなんじゃないかってやつだ。誰が言い出したんだろうね、本当。勘が凄すぎだろう。

学園長「アンタが本当の総帥だったとしても改善は無理さね」

おつと思考に耽りすぎた。まだ誤解しているようだ。

橙夜「誤解しているようですが、俺はシステムの仕組みなども殆ど把握済みですよ？」

学園長「……は？いやいや、待つとくれ。流石にそれは不可能だよ」
橙夜「別に不可能ではありませんよ。現に私の今持ってきているUSBメモリの中には全部ではないですが、その情報が入ってますし」

そう言いながら持っていた鞆からUSBメモリを二つ取り出して片方を持ってきていたノートPCに差し込んで操作する。

学園長「……本物のデータの様なね。一体どうやって入手したんだい……？」

橙夜「その辺は企業秘密という事で……で、理解して頂けましたか？」

学園長「ああ……。これを見せられちゃ理解する以外にないね。アンの言う取引に応じようじゃないか」

橙夜「感謝します。……と、言いたいところなんです、学園長側にもう一つメリットがあるんですよ」

学園長「まだ、他にもあるのかい？アタシとしてはアレの改善だけでも十分なのに、なんだい？」

橙夜「まずはこれを見ていただきたい」

そう言って、先ほどとは違うUSBメモリを差し込み、操作してババア長に見せる。

学園長「……ふむ。どうやら効果はアレと似たようなものようだね」

橙夜「その通りです。で、この情報を差し上げるので、設計図どおりにこれを開発して頂きたいんですよ」

学園長「システムの仕組みを知っているならアンタのほうで開発できるだろうに。何を企んでいるんだい？」

橙夜「何やら勘違いしているようですが、仕組みを把握していてもシステムを再現出来る訳じゃないですよ？開発する為の機材を準備できませんし」

学園長「なるほどね。理論自体は出来ているのに、再現する為の環境がなくて宝の持ち腐れ状態ってわけかい。いいよ、これを開発してやるうじゃないか。完成したらアンタに渡せばいいのかい？」

橙夜「感謝します。個数は二つ程で。別に俺に渡さなくてもいいんですけどね。なんだったら、俺が改善予定のアレと一緒に清涼祭で行う予定の召喚大会の賞品にでもしたらどうですか？それなら贖とかではなくて合法的に俺も手にすること出来ますし」

学園長「そうするとしようかね」

橙夜「それとアレなんですけど、改善後も改善できてないように対応することをおススメします。内部には学園長の失脚を狙っている人間もいるでしょうから都合がいいでしょうし」

学園長「……確かに尤もな意見さね。そういえば聞き忘れていたけど、勝利が引き分けでの条件ってなんだい？」

ああ、システム関係の話で盛り上がって忘れていたよ。……本題のはずなのに。

橙夜「それはですね、
が勝利していることです」

学園長「
の勝利？それってアレだろう？それと、試召戦争
でその条件を満たすのは不可能じゃないかい？」

橙夜「そういえばA組との戦争形式を覚えてませんでしたね。代表同士の一騎討ちです。ですが恐らくA組は呑まないと思うので五対五か七対七になると思いますがね」

学園長「なるほどね。それならさっき言った条件も分かるもんだね」
橙夜「では、取引成立という事でよろしいですか？」

学園長「新技術の情報が手に入るんだ、成立さね。それじゃこれを渡しておくからよろしく頼むよ」

橙夜「分かっています。それではこれで」

ババア長が机の引き出しから取り出したアレを受け取って、俺は学園長室から出て帰路についた。

Side・end

Side・紫

今私達の家には明久と燐が来ているわ。

燐「明久覚悟！」

明久「ちよ、燐！さらに睦月まで！それは酷すぎる！」

睦月「俺の近くにいた明久が悪い！さあ、ぶっ飛べ！」

紫「……なら、私は睦月でも狙おうかしら」

何をしているかというトニン　ンドーGCの大　闘スマッシュ
ラザーズDXよ。WiiのXもあるのだけど、何故かDXをやっているのよね……。

元々ライトノベルや漫画でオタクだった橙夜兄さんが明久の影響もあってゲームにも嵌ったのよね。

結果、殆どのゲーム機本体を所持しているくらいだもの。……ファミンなんて今時誰もやらないのに何故手に入れたのかしら？ GCに至っては通常のブラックに加え、シャ専用カラーも買ってるのよね。ブラックはリビングで、シャア専用は兄さんの部屋に固定されているけれど……。

ああ、因みにハード本体は全て兄さんの実費よ。

シャ専用みたいな特殊なの以外は全てリビングに置いてあるから私たちも自由に使えるのよね。通常のだけしか買って無くてモリビングに置いてあるのだけ。

だからやりたいソフトがあったら各自で買ってやってるのよね。

基本的に私や燐はあまりゲームをやらないのだけど、大人数参加型のは皆で楽しめるからそれなりに出来るのよね。

明久「僕への睦月と燐の集中砲火は酷いよ……」

紫「私が一位で明久は四位のようね」

燐「私は三位」

睦月「俺は二位だが、影の薄かった紫が一位だとはな……」

睦月と燐の集中砲火がなければ明久が一位だと思っただけだね。

それとスブラDXの使用キャラなのだけど、私はゼルダ/シークで睦月がガノンドロフ、明久はサムス、燐はフォックス、この場にはいない橙夜兄さんはネスよ。

ネスのPKサンダー技って卑怯臭いわよね。完全に場外にいるのに、自分に当てて復帰したり、その状態で敵に当たると吹っ飛ばすなんて……。

兄さんが強すぎて基本的にネスを選択することを禁止にしている

くらいだし。

紫「それにしても兄さん遅いわね？」

明久「少し用事があるとは言ってたけど……」

睦月「流石にちよつと遅いよな」

燐「いつもなら、夕ご飯作ってるもんね」

そうなのよね。燐の言うとおり今週は兄さんが当番だからいつもならこの時間には夕食の準備しているし。

紫「睦月と明久は兄さんの用事が何か聞いていないの？」

明久「聞いてないよ」

睦月「一つだけ心当たりはあるんだが、それだけだとここまで時間掛からないはずだし……」

燐「心当たりって一体何のこと？」

私も気になるわね。

睦月「FとDの試召戦争中に校内放送があつただろう？」

紫「確か船越先生の呼び出しよね？」

燐「速水って男子は勇気があるなって思ったよ」

睦月「そう、それ。その内容を指示したのが橙夜兄で責任を取って対処するって言ってたんだよな」

明久「そう言えば、そんなこと言ってたね」

なるほどね。最後まで自分がやったことの責任持つなんて兄さんらしいわ。

燐「それなら船越先生の相手に手間取ってるのかな？」

紫「そうだったとしても手間取りすぎよ」

睦月「そつだよな。他にも用事があつて、そつちに時間が掛かつて
るつて考えたほうが早いし」

明久「まあー橙夜なら大丈夫でしょ。何食わぬ顔して帰つてくるだ
ろつし」

睦月「ありえるな」

明久の言葉に睦月が同意すると同時に玄関が開く音が聞こえ、そ
の後に声が続いた。

橙夜『ただいまー』

明久「ほらね？」

紫「そうね」

紫睦明燐「「「「おかえりー」「」「」

私たちは明久の言葉に苦笑しながら兄さんに挨拶を返した。

S i d e . e n d

S i d e . 橙夜

少し遅くなつたと思ひながら俺はマンションの前まで走り、既に
家の前まで来ている。

橙夜「ただいまー」

？『おかえりー』

玄関の扉を開けながら「ただいま」と言うと少ししてから4人ほどの声が聞こえた。どうやら明久と燐がきているらしい。

橙夜「ただいまっと。なんだス ブラやってたのか。しかもDX」
睦月「おかえり。そそ。橙夜兄も後で一緒にやる？」

橙夜「そうだな。久々にネス使わないと腕が鈍りそうだから飯の後にでもやるか」

紫「兄さんがネスを使ったら私達に勝ち目ないわね」

明久「そうだよな。橙夜が本気でネスを使うと僕と睦月でも勝てなくなるし」

橙夜「まっ、今から飯作るからそのまま続きやっつけ」

燐「はい。夕ご飯楽しみにしてるよー！」

燐の言葉に背中を向けながら手を振って答える。

あの後、ご飯は朝のうちに米研ぎしてあったから炊くだけだったから、明日の弁当の為に睦月と紫に頼んでおいた物以外の食材で焼き魚にほうれん草の胡麻和え、豆腐の味噌汁を作って五人で食べた。

その後は睦月たちとスブラDXや他のゲームをやったり、明久の勉強をみながらまったり過ごして、明日の弁当にいれるおかずの下拵えとシュークリームを作って風呂に入って寝ることにしたのだった。

そして朝。時間は6時40分くらい。睦月は直接起こし、燐には携帯に電話して起こすことに。

7時前には二人とも覚醒していたのでお弁当を作る手伝いをさせることに。

と言っても昨夜に殆どの下拵えが終わっているので揚げたり焼いたりするくらいだが。

卵焼きとかの当日に作るようなものは俺が作るわけだし。

それから大体三十分後。

目の前には四段の重箱が四つ。無事に弁当が完成。

弁当のあまりを朝食として睦月と燐同様に紫と明久を起こして、五人で朝食を摂る。

食べ終えた俺は身支度をして一足先に登校することにした。

橙夜「んじゃ、先に行ってるぞー」
4人「いつてらっしゃーい」

その手には昨晚作っておいたシュークリームの入った箱を持って。弁当の重箱は四人に1つずつ持ってきてもらうことにした。

学園に着いた俺は靴を履き替え、二年A組の下駄箱の前であることを確認していた。

橙夜「ふむ。愛子は既に来ているみたいだな」

そう。愛子が既に登校済みかどうかだ。

確認し終えた俺は三階の二年A組まで向かった。

Aクラスの前まで来た俺は今回も入り口の近くにいた生徒に声を掛ける。

橙夜「悪いがその。工藤愛子に神楽橙夜が呼んでいるって伝えてくれないか？」

A男「ん？ああ、工藤だな。今伝えてくる」

Aクラスの男子生徒はそう言って教室に入ってしまった。

？「あれ、おはよう橙夜。今日は朝から来たのね」

橙夜「優子か。おはよう。まあーちよっとな」

声を掛けられて振り向いた先にいたのは、またもや優子だった。

優子「今日のお昼は期待してるわよ。お弁当を持っているようには見えないけど」

橙夜「存分にしている。思った以上に量が増えたから睦月たちに持ってきてもらうように頼んだんだよ。だから俺はこっちを持ってきた」

そう言いながら俺は手に持っていたシュークリームの入っている箱を優子の顔辺りまで上げた。

優子「デザートシュークリームね」

橙夜「そういうこと」

優子「だとしても、なんでこんな朝早くからAクラスに？」

橙夜「それはな」

？「ボクに何の用かな、橙夜君？」

優子に説明をしようとしたら遮られた。まあー遮ったのは俺が呼んだ愛子なんだが。

橙優「おはよう、愛子」

愛子「おはよう、二人とも。それで用件は？」

橙夜「それを今優子に説明しようとしたんだがな。まあーこれを愛子に支給されている冷蔵庫に保存しておいて欲しいってことだ」

優子のとき同様に愛子の顔の前あげる。

愛子「これはシュークリームかな？それならいいよ」

橙夜「お礼というわけじゃないが、ほれ。二人とも一個ずつ食って良いぞ」

優子「食後のデザートなんでしょ？今食べたら昼に食べれなくなるじゃない」

愛子「それは困っちゃうな。お昼に食べるのが一番美味しいんだから」

その優子と愛子の言葉に俺は苦笑を浮かべながら返す。

橙夜「それなら安心しろ。元々頼むために人数分より4、5個多く

作って持ってきてあるんだ」

愛子「なるほどね。それなら今のうちに一個頂こうかな」

優子「ギブアンドテイクってやつね。それじゃ、私も貰うわね」

橙夜「紫や燐たちが来る前に食べ終えとけよ。それと優子は翔子と一緒に睦月と明久が持つてくる弁当の重箱を受け取っておいてくれ。」

翔子にもおまけとしてシュークリームを一個渡すのを忘れずにな」

優子「それなら丁度代表も来てるから今のうちにあげときましょ。」

呼んでくるわ」

そう言っつて優子は翔子を呼びに教室に入っつていった。

愛子「相変わらず橙夜君のシュークリームは美味しいね。お店で買うものよりも美味しいから他のシュークリームが食べれなくなりそうだよ」

橙夜「そう言っつてもらえると嬉しいな」

愛子「そういえばDクラスとの試召戦争勝ったみたいだね」

橙夜「そりゃ、当然だろ。俺と睦月は参戦してないけどな」

愛子「Dクラスの代表を討ち取ったのが姫路さんつてのは聞いたけど参戦してなかったんだね」

橙夜「本格的に参戦するのは、予定では次の途中からだからな」

？「……橙夜、久しぶり」

愛子と雑談していると間を取っつて声が掛けられた。

橙夜「翔子か。久しぶりだな。それと学年主席おめでとうだな」

翔子「……ありがとう。でも、それは橙夜と睦月、紫に燐がこういつた試験のときに真面目に受けないから」

橙夜「俺たちはあまり目立ちすぎるわけにはいかないからな」

愛子「そういえば、橙夜君と代表つて一年の時にボクが転入してきた時から仲良かったよね」

俺の言葉に同意する優子と翔子。

優子「ボクだけ知らないってのが寂しいんだよ……」

橙夜「そう落ち込むな。わざと言わなかったわけじゃない。言う機会がなかったただけだ。学園内で知ってる生徒は10人もいないくらいだしな」

優子「知られると色々大変だし……ね？」

翔子「……媚びてくる人間が多い」

優子「そう言うことなら納得するよ……」

橙夜「そう拗ねるな、優子。残りのシュークリームはつとに、しろ、や……16個か。優子は昼に二個食べて良いから機嫌を直せ」

優子「ほんとに!？」

橙夜「本当だ。それに今、神楽家のことを知れたんだからそれでいいじゃないか」

優子「それもそうだね。それじゃ、全部で三個のシュークリームで水に流してあげるよ」

優子「優子だけ三個ってのはずるいわね」

翔子「……私もそう思う」

橙夜「二人だつて全部で二個食べるんだからいいだろ。他の奴らは一個なんだから。つと、そろそろ教室に行くか」

優子「それじゃあ、お昼のお弁当期待して待つわね」

翔子「……楽しみ」

優子「また、お昼にね」

橙夜「おう、じゃあな」

優子と優子と翔子にそう言うって俺はFクラスに向かった。

教室に入ってみると雄二が卓袱台で胡坐をかいて英語の教科書を持っていた。

橙夜「テスト前の悪あがきか？雄二」

雄二「おう、橙夜か。そんなところだ」

雄二は俺のほうを向いて確認すると、再び教科書を見て俺の質問に答える。

それを聞きながら俺は昨日も座った席に座る。

橙夜「英語も良いが、他のもきちんと勉強をしておけよ？特に日本史とか」

雄二「……本当にお前はどこまで知ってるんだ？」

俺の言葉に教科書を見ながら疑問をぶつけてくる雄二。

橙夜「一体どこまでだろうな」

雄二「はぐらかすなよ」

橙夜「はぐらかしてるつもりはないさ。俺の発言は情報を整理しての予測に過ぎないからな」

雄二「そう言うことか。確かにお前にはその能力が必要だしな」

橙夜「そう言うことだ。ところで康太はもう来ているよな？」

雄二「ああ。どうせどこかでムツツリ商会を開いてるだろ」

橙夜「ちよっと明日のBクラス戦で用事があったんだがな……」

雄二「どういうことだ？何か情報を掴んだのか？」

橙夜「まあな。その情報がなんとかな」

雄二に情報を開示しようとしたと同時に教室の戸がガラガラと開

いた。

睦明「おはー(よー)」「

どうやら睦月と明久が来たようだ。

橙夜「雄二。この情報は後でな」

雄二「分かった。後で聞こう」

睦月と明久がこっちに向かってきたのが見えたから切り上げることに。

雄二「おう明久に睦月。時間ギリギリだな」

明久「ん、おはよう雄二」

睦月「少し寄るところがあつてな」

きちんとAクラスに寄つたようだな。

明久「皆には何も言われなかったの？」

雄二「ん？何がだ？」

明久「Dクラスの設備のこと」

雄二「ああ。皆にもきちんと説明をしたからな。問題ない」

明久「ふーん」

最終目標がAクラスのシステムデスクなのだから、Dクラス程度で満足されては困るしな。

それから俺たちはHRを受けて補給試験を受けた。

午前中に俺たちは4教科の補給試験を受けた。

明久「うぁー……づかれだー」

明久はそんな言葉を喋りながら机に突っ伏していた。

秀吉「うむ。疲れたのう」

と気付いたら俺たちの近くに秀吉が来ていた。

今日は髪をポニーテールにしているが、本当に男として見て欲しいのか甚だ疑問だ……。

康太「……………（コクコク）」

いつも無口な康太もいた。

雄二「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

昼飯のメニューが明らかにおかしい。

美波「ん？坂本たちは食堂に行くの？だったら一緒にいい？」

雄二「ああ、島田か。別に構わないぞ」

美波「それじゃ、混ぜてもらうね」

康太「……………（コクコク）」

康太が頷いているのはどうせ下心だろう。

とりあえずそろそろ声を掛けるか。

橙夜「お前ら忘れてないか？」

雄二「ん？何をだ？」

秀吉「む？そういえば何か忘れておるのう」

睦月と明久以外では秀吉がうる覚えで覚えているだけか。

睦月「弁当だよ。弁当」

睦月が秀吉に助け舟を出した。

秀吉「おお、もしや昨日の約束のかの？」

秀吉はきちんと思い出せたようだ。

橙夜「そうそう。今日の昼は準備してやるって言っただろ」

雄二「おお、そうだったな。ありがたい」

秀吉「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上でも行くかのう」

明久「そうだね」

そりゃ、こんな腐った畳と男の臭いしかなない場所で食いたくはない。

橙夜「それじゃあ、俺と睦月でAクラスから弁当受け取ってくるから先に行っておいてくれ」

雄二「そうか。それなら俺もちょっと寄り道するから先に行ってくれ」

明久「ん？雄二はどこか行くの？」

雄二「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

美波「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ！」
橙夜「なら俺からも千円渡すから後6人分買ってきてくれ。この場にいる8人の後6人加わるから」

秀吉「全部で14人分かの？二人じゃ大変じゃろうからワシも行くかの」

雄二「悪いな。それじゃ頼む」

美波「おっけ！」

秀吉「うむ、任せるのじゃ」

島田嬢は珍しく気遣いを見せているようだな。明久も珍しいものを見るような顔で見っていたし。

雄二「きちんと俺達の分をとっておけよ」

橙夜「それなら大丈夫だ。人数分作ってきてあるから早々なくならない」

明久「それじゃ、僕らは先に行ってシートを敷いておくね」

睦月「あいよ」

そう言っただけで俺たちはそれぞれの目的地に向かった。

俺と睦月がAクラスの前に着くと、既に紫や燐たち6人が入り口の近くで待っていた。

橙夜「待たせたな」

紫「兄さんたちやっと来たのね」

燐「ちよっと待ったよ」

睦月「悪いな。少し教室を出るときに話をしているな」

優子「それなら仕方ないわね」

翔子「……大丈夫」

睦月「それじゃ、屋上に向かうか。他のも数人待っているから」

愛子「はい！」

結子「はい」

橙夜「弁当は俺と睦月が二つずつ持つから愛子はそれを任せた」

愛子「オッケー、任されたよ！」

俺と睦月は紫と燐、優子と翔子から重箱を受け取って屋上へ向かった。

屋上へと出た俺たちは明久たちを目に入れて敷かれたシートの上に乗る。

橙夜「持ってきたぞ」

明久「待ってたよ」

瑞希「重箱四つって凄い量ですね……」

睦月「14人分だからな。普通にこれくらいになるだろ」

康太「……何故此処に結子がいる？」

結子「紫ちゃんに誘われたからだよ。だから今日はお弁当作らなかつたんだよ」

康太「……理解した」

翔子「……雄二はどこ？」

橙夜「アイツは飲み物を買って行くから少し遅れる」

翔子「……分かった」

優子「そういえば秀吉がいないようだけど、どうしたの？」

睦月「秀吉なら雄二と一緒に飲み物を買に行ってる」

優子「そう。なら先に頂いてましよう」

燐「秀君たちには悪いけどそうしょっか」

紫「それなら早速広げましよう」

その言葉と共に包みを解いて重箱を広げる。

一同『おおっ！（美味しそうー）』

俺の弁当を初めて見た奴らは一斉に歓声をあげた。

橙夜「四つの重箱は全部同じ内容だ。一番下が稲荷でそこから上は卵焼きや唐揚げ、ポテトサラダに肉じゃがと色々なおかずをいれてある。一つの重箱に3、4人で食べてくれ。それと悪いが箸は割り箸で勘弁してくれ」

俺がそう言うと自然と班が出来た。

俺と優子と瑞希。

睦月と優子と今はいない島田嬢。

紫と明久と燐と今はいない秀吉。

康太と須藤嬢に翔子に今はいない雄二。

ご都合主義乙ってことで

なにやら電波を受信したような気がするが、気のせいだな。

橙夜「それじゃ、飲み物を買に行っている雄二たちには悪いが、いただきます」

一同『いただきます!』

それぞれが思い思いのおかずを箸をつけ、口に運ぶ。

『美味しいー』

誰が言ったか分からんがそんな言葉を聞いた。正直嬉しい。

愛子「(モグモグ)昨日の紫ちゃんの卵焼きも美味しかったけど、
橙夜君のはもつと美味しいね……」

翔子「(モグモグ)……やっぱり橙夜の作るものは美味しい」

優子「(モグモグ)本当、昨日の紫が作ったのなら同性ってことで
なんとか納得出来るけど、橙夜が相手だと自信なくすわ……」

結子「(モグモグ)紫ちゃんのお兄さんの手料理は初めて食べたけ
ど、本当に美味しい……」

燐「(モグモグ)本当に橙夜が作る料理はなんでこんなに美味しい
んだろう……?」

紫「(モグモグ)私は兄さんの料理の腕に慣れてるから自信をなく
すことはないのよね」

女性陣が色々と喋っている間に雄二たちがやってきたようだ。

雄二「やっぱり先に食べてやがった……か……ってなんで翔子がここに!」

翔子「……昨日のうちに優子経由で橙夜に誘われたから」

美波「坂本、いきなり立ち止まって一体どうしたのよ?」

秀吉「そうじゃ、雄二。邪魔になるから入り口のところまで立ち止ま
らんでくれんかの。進むか退くかどっちかにしてほしいのじゃ」

気付いたら翔子が雄二の目の前に移動していた。それは瞬間移動
か何かか?

翔子「……雄二はこっち」

雄二「あ、ああ……」

美波「やっと退いたわね。あら。これはかなり美味しそうね」

秀吉「おお。流石橙夜じゃな。美味しそうじゃ」

おかずの詰まった重箱を見て秀吉と島田嬢が感嘆の声を上げた。

優子「秀吉。美味しそうじゃなくて、美味しいのよ。それも自信をなくすレベルで……」

美波「それってどれだけ……。あ、誰か箸とって頂戴」

睦月「ほれ」

美波「ありがと。それじゃこの唐揚げ貰うわね。（モグモグ）本当に美味しいわね。これ神楽兄が作ったって本当？それが真実だったら自信をなくすわ……」

優子「真実よ……。私は何度も自信をなくされてるわ……」

なにやら優子と島田嬢が肩を落としていた。なんでだ？まあいいか。

睦月「そういえば初めてあった奴らもいるだろうから自己紹介といかないか？」

明久「それはいいね。じゃあ、誰から行く？」

橙夜「それなら俺からいくか」

睦月「それじゃ橙夜兄からよろしく」

一応分かりやすいように立って喋る。

橙夜「神楽橙夜。二年Fクラス。そこにいる睦月と紫の年子の兄で優子と秀吉、燐の三人とは従兄弟だ。明久と燐、瑞希は幼馴染だ。」

あまり接点や親交がない女子は苗字に嬢をつけて呼んでいる。呼称は神楽だと分かりづらいから区別する為に神楽兄か名前がいい。得意科目は政経に数学、国語、英語。苦手科目はない。特技や趣味は料理や読書。以上だ」

そう言っただけ俺は座る。そして入れ替わりで睦月が立った。

睦月「んじゃ次は俺だな。神楽睦月。さっき自己紹介した橙夜兄と同じくFクラス。橙夜兄の年子の弟で紫は双子の妹だ。親戚や交流関係などは橙夜兄と大体似たようなもんで、基本女子は苗字で呼び捨てだ。俺も神楽弟か名前です。得意科目は数学と音楽だな。特技や趣味は料理と音楽鑑賞といったところだ。よろしく」

紫「次は私ね。神楽紫。Aクラス。橙夜兄さんは年子、睦月は双子の兄。親戚関係は二人と同じで交流関係は女子が多いわ。呼び方は苗字か名前を呼び捨てね。私は神楽妹か名前が良いわ。得意科目は地理歴史よ。特技や趣味は料理や読書。後は明久の世話ね。よろしくたのむわ」

優子「それじゃ次は私ね。木下優子。Aクラス。秀吉とは双子で私が姉ね。私も苗字か名前でもいいわ。特技や趣味は特に無いわね。得意科目も苦手科目も特にないわね。まあよろしくね」

秀吉「ワシの番じゃな。木下秀吉じゃ。Fクラスで演劇部に所属しておる。姉上とは双子で弟じゃ。ワシも苗字か名前が構わぬ。特技や趣味は演劇かろう？得意科目はないのじゃ。それとワシはれっきとした男じゃから間違えぬように。よろしくたのむのじゃ」

燐「なら今度は私。名前は桜儀燐。Aクラスだよ。兄が一人いるよ。私も苗字か名前を呼んでくれればいいのか？得意科目は理科や数学

だね。特技や趣味は料理と秀君の演技を見ること。後は理科系の実験かな？これくらいかな？じゃあよろしくね」

俺と睦月の入れ替わり後、次々と続いていく。

雄二「俺の番か。坂本雄二。Fクラス代表だ。Fクラス以外は普通に苗字か名前で呼んでくれ。趣味は明久の幸せを邪魔することだな。得意科目などは木下姉と同じように特に無いあと料理は比較的得意だ。じゃあよろしく」

翔子「……霧島翔子。Aクラス代表。雄二とは幼馴染。代表でも霧島でも翔子でも坂本翔子「おい！」でも好きに呼んで構わない。私も得意科目や苦手科目は特に無い。将来の夢は雄二のお嫁さん「待て！」……それじゃ、よろしく」

康太「……土屋康太。Fクラス。ここにいる須藤結子とはお隣さんで幼馴染。苗字でも名前でも好きに呼んでくれて構わない。得意科目は保健体育。よろしく」

結子「それじゃ私だね。須藤結子。Aクラスで康君が言ったとおり康君とはお隣さんで幼馴染。私も須藤でも結子でも自由に呼んでいいよ。得意科目は保健体育と英語だね。特技や趣味は家事全般や読書。後は康君のお世話をすること。よろしく」

明久「次は僕かな。名前は吉井明久。Fクラス。橙夜の言った通り橙夜たちとは幼馴染でお隣さんだね。後は「観察処分者」そうそう。つて雄二は余計なことを言わないでくれる？得意科目は歴史だね。特技は料理かな？じゃあ、よろしく」

美波「なら次はウチが行くわ。名前は島田美波。Fクラスでドイツ

育ちだったので日本語での会話は出来るけど読み書きは苦手。小学生の妹が一人います。ウチのことは苗字でも名前でも好きに呼んで得意科目は数学。問題が読めれば他もそれなりには出来ると思うわ。料理はそれなりに得意かな？じゃあよろしく」

瑞希「それじゃ次は私が。名前は姫路瑞希でFクラスです。明久君や橙夜君たちは小学生のときからの幼馴染です。私も苗字や名前でも好きに呼んでもらっても構いません。得意科目は特にはないです。特技や趣味は特にはないですね。運動は少し苦手です。それではよろしくお願いします」

瑞希はそう言って座る。そして最後に俺の隣に座っていた愛子が立つ。

愛子「ボクで最後だね。工藤愛子、Aクラスで水泳部。去年の終わりに転入してきたんだ。ボクのことにも好きに呼んで構わないよ。得意科目は保健体育で、趣味は水泳と音楽鑑賞。好きなものはシュークリームだよ。結子ちゃんが得意なのは同じクラスになって知ったけど、土屋君も随分と保健体育が得意みたいだね。でも、ボクだつてかなり得意なんだよ？……キミとは違って、実技で、ね」

あ、マズイ。

愛子「吉井君。保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

明久「フツ。望むところ」

美波「吉井には永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

瑞希「そうです！永遠に必要ありません！」

明久「……………」

雄二「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが」

「やっぱりこうなったか……。はてさてどうするか。」

紫「安心しなさい、明久。もしものときは私が教えてあげるわ」

明久「紫……。ありがとう。こんな僕を慰めてくれて……」

「どうやら何とかならしい。」

愛子「おやあー？ふむふむ、まさかそうだとは（ねえねえ橙夜君。」

「やっぱり紫ちゃんって吉井君のこと好きなの？」」

橙夜「（恐らくな。あんまり表に出さないから兄である俺でも判断しづらいんだ）」

愛子「（どう見ても吉井君の方も紫ちゃんのこと好きだよな？なんであの二人付き合ってるの？）」

橙夜「（それは明久の鈍感スキルだ。あいつは自分の気持ちにすら気付いていない超鈍感だからな）」

愛子「（なるほどね。まあー紫ちゃん努力次第って感じかな？）」

橙夜「（そんな感じだろうな）さて、自己紹介も終わったしそろそろ飯を再開するぞ。俺たちFクラスは飯食った後に明日の戦争のミーティングがあるからな」

雄二「そうだったな。じゃ、さっさと食ってやるか」

秀吉「折角の橙夜の馳走じゃから味わって食べたいが、仕方あるまい」

橙夜「食後にはデザートも準備してあるから楽しみにしておけ」

瑞美結「それは楽しみね（ですね）」

「そうして俺たちは再び箸を動かした。」

美波「そういえば坂本、次の目標だけど」

雄二「ん？試召戦争のか？」

美波「うん」

あれから弁当を食べ終え、デザートシュークリームも食べた後、Aクラスの6人には悪いが早速、屋上から退場してもらった。

美波「相手はBクラスなの？」

雄二「ああ、そうだ」

確か、Dクラスの後にはBクラスとしか説明していなかったな。

美波「どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんでしょう？」

雄二「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

戦う前から降伏宣言は雄二らしくもない。

と言っても、実際のところ俺や睦月、明久に瑞希の四人がいて、雄二がどんな作戦を練ろうとも戦力が足りないから当たり前前なんだがな。

橙夜「雄二がどんな作戦を考えても、まともじゃなければどうやってもAクラスに勝てないからな」

美波「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

雄二「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

明久「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」

別にAクラスの設備じゃなくてもBクラスの設備で十分だとは思
う。

睦月「明久。さっき橙夜兄は言ったはずだぞ？まともによれば、と
雄二「橙夜と睦月の言うとおりだ。クラス単位の戦争では勝てない。
だから一騎打ちに持ち込むつもりだ」

明久「一騎打ちに？どうやって？」

雄二「Bクラスを使う」

成績は上がったが、明久の頭の回転はまだ良くなっていないよう
だ。

その辺の指導もしておくべきか？

雄二「試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知っ
ているな？」

明久「設備のランクが落とされるんだよね」

雄二「そうだ。BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ」

睦月「それくらいは当然知っているだろ」

雄二「では、上位クラスが負けた場合は？」

明久「えっと……下位クラスと設備を入れ替えられるんだよね？」

雄二「ああ。そのシステムを利用して、交渉をする」

瑞希「交渉、ですか？」

橙夜「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラス
へと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、A
クラスに負けるだけならCクラス設備になるだけだからな。まず成
功するだろうさ」

明久「つまり、それをネタに『Bクラスその勝負直後に攻め込む』
ってAクラスと交渉するんだね」

雄二「そう言うことだ」

秀吉「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。体力としては辛いし

面倒じゃが、Aクラスとしては一騎打ちよりも試召戦争のほうが確
実であるのは確かじゃからな。それに」

どうやら秀吉はこの作戦の欠点に気付いたようだな。

明久「それに？」

秀吉「そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろうか？こちらに姫路や橙
夜に睦月がいるということは既にAクラスに知られておるじゃろう
？」

雄二「確かにそうだ。その辺は橙夜に考えがあるらしい」

橙夜「まあーな。雄二にも考えがあったらしいが、酷く運頼みだっ
たから却下したんだがな。Aクラスは交渉の場で上手く誘導するさ。
それにFクラスがAクラスに勝つためにはこの作戦しかないからな」
雄二「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはBクラスに勝つて
からだ」

勝算がなければわざわざこんな作戦を取る必要もないからな。

雄二「で、明久」

明久「ん？」

雄二「今日のテストが終わったら、Bクラスに行つて宣戦布告して
来い」

明久「断る。雄二が行けばいいじゃないか」

やっぱりか……。明久を不幸にする為になら雄二は容赦が無いな。

橙夜「雄二」

雄二「なんだ、橙夜？」

橙夜「お前自ら宣戦布告に行かなかつたらこの紙に書かれているこ
とをお前の声真似をさせた秀吉に言わせて録音して翔子に渡すぞ？」

雄二「なっ！卑怯な！この文面をそのまま録音したら俺の人生が終わってしまうじゃないか！」

橙夜「分かったら宣戦布告はお前が行けよ。明久に行かせたら、今日がお前の命日になるかもしれないからな。（……紫の作業的に）」
雄二「よし、分かった。俺が責任持って宣戦布告してこよう」

最初からそうしろって話だったんだがな。

因みにそのころの明久はというと。

明久「????」

雄二の変わり身の早さに頭の上に？マークを浮かべていた。

……。
午後のテスト終了後、教室には少しだけ傷を負った雄二がいた。
それで済むなら最初からお前が行っておけばよかったじゃないか

S i d e . e n d

第五問目 戦後の後始末と暗躍と昼食会（後書き）

紫「橙夜兄さんの暗躍ってフラグよね？」

裂「フラグだな」

睦「フラグというか伏線。だけどモロ分かりだよな？」

裂「そりゃ、あの用語が出ているんだから何か分かるよな」

橙「はつきり分かってないのはある条件の勝利者が誰かってことだよな」

燐「なんとなく分かるけどね」

裂「まあーある二次小説やってたところの一部なんだがな」

愛「そういえば今回の文量凄いよね。もしかして今作最大文字数だったりするんじゃない？」

裂「かもしれない。後で確認する」『19341文字だった。もう少しで2万超えだった』

結「やっとまともに登場できた」

康「……………よかったな」

橙「それじゃ恒例のアンケートだ。読者のみんな、以下の中から3人選んでくれ」

神楽橙夜 神楽睦月 神楽紫 桜儀燐 吉井明久 工藤
愛子
坂本雄二 霧島翔子 土屋康太 須藤結子 木下秀吉
木下優子
姫路瑞希 島田美波 久保利光 西村宗一 福原慎 高
橋洋子
藤堂カヲル 神儀紫稀 速水劉太

睦「高橋女史とババア長の二人が増えたな」

紫「高橋先生はDクラス戦のときに名前出してたの忘れてたから今回から追加らしいわ」

橙「ババア長がここに登場したら混乱しそうだな。まあどうでもいいな」

愛「それじゃあ、また次回」

翔「……よろしく」

結「またね」

第六問目 Bクラス戦開始、ついでにCクラス(前書き)

【バカテスト】 化学

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希、神楽橙夜、神楽睦月、神楽紫の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね。

吉井明久の答え

『 C_6C_16 』

教師のコメント

ベンゼン違いです。それではヘキサクロロベンゼンの化学式です。発癌性物質とされているので気をつけましょう。

桜儀燐の答え

『 $C_6H_6C_16$ 』

教師のコメント

吉井君同様ベンゼン違いです。それはベンゼンヘキサクロリドの化学式です。こちらも毒性が高いので使用が禁止されていますね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

速水劉太の答え

『B・E・N・Z・E・N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

「やっと召喚獣出せたぜ……」 b y 神楽

睦月

「何だかんだで俺が活躍する」 b y 神楽

橙夜

第六問目 Bクラス戦開始、ついでにCクラス

Side・明久

雄二「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇にたった雄二が机に手を置いて皆の方を向いて喋っている。今日も午前中からテストで、ついさっき全科目のテストが終わって昼食を取ったところだ。

雄二「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺^やる気は充分か？」

『おおーっ！』

一向にモチベーションが下がらない。やっぱりDクラスに勝ったことが大きいのかな？

雄二「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

さつきからみんな「おおーっ！」しか言っていない気がするね。

雄二「そこで、前線部隊は姫路瑞希を筆頭に神楽睦月、吉井明久にそれぞれ指揮を取ってもらう。野郎共、きっちり死んで来い！」

Dクラス戦の終盤から参加した僕の他に、睦月も今回のBクラス戦は最初から戦争に参加するらしい。

瑞希「が、頑張ります」
睦月「一暴れしますかね」
明久「頑張るよ」

僕と睦月にノリについていけないみたいで、若干引き気味な瑞希ちゃんが一步前に出た。

『うおおーっ！』

瑞希ちゃんと一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気は最高潮に達しようとしていた。

? 『……ことは……るか?』
? 『……ばぬか……く』
? 『それ……じょう』
? 『……でも……のか?』
? 『まん……けん』
? 『……けん?』
? 『……Bクラ……あの……からな……』
? 『……した』

他の皆とは別に小声で話し合っている人がいるみたいだ。えっと、あれは……橙夜とムツツリーニ? 一体何の話をしているんだろう? 僕のいる場所からだと遠くてよく聞こえないな。

キーンコーンカーンコーン

あ、昼休み終了のベルが鳴った。橙夜たちの会話は気になるけどBクラスとの試召戦争に集中しよう。

雄二「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」
『サー、イエッサー！』

それじゃあ、前線に行こうかな。

Side・end

Side・橙夜

雄二「そこで、前線部隊は姫路瑞希を筆頭に神楽睦月、吉井明久にそれぞれ指揮を取ってもらう。野郎共、きっちり死んで来い！」
瑞希「が、頑張ります」
睦月「一暴れしますかね」
明久「頑張るよ」

雄二や他のクラスメイトの会話をBGMに俺は康太と話していた。

橙夜「頼んだことは出来てるか？」

康太「……………万事抜かりなく」

橙夜「それは重畳」

康太「……………でも、必要なのか？」

橙夜「万が一の保険だ、保険」

康太「……………保険？」

橙夜「そう、保険だ。Bクラスの代表はあの根本らしいから……………」
康太「……………納得した」

保険とは言ったけど、確実に利用することになるだろうけどな。

あの根本だし。

キンコーンカーンコーン

雄二「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

もう時間か。今回の俺の役割はクラスメイト数名と一緒に雄二の護衛だからな。殆どやることがないんだよな。

雄二「橙夜。昨日の情報は確かか？」

橙夜「ああ。あの根本がBクラスの代表だ。既に確認も取れてる。実力で代表になったのかは知らんが」

雄二「……そうか」

雄二は俺の肯定に少し考えて返事をする。

で、俺たちの会話に出てくる根本という男　フルネームは根本

恭二なのだが、とにかく評判が悪い。

先程の実力云々と言うのは、カンニングの常連だという噂があるからだし、他にも、目的の為に手段を選ばないらしく、曰く『球技大会で相手チームに一服盛った』、『喧嘩に刃物は当然^{デフォルト}装備』とか。

勝てば官軍って言うからあながち間違いではないんだけど、相手をするとなると気が滅入るな。

橙夜「もしものときの為に保険は準備しているから安心しろ」

雄二「橙夜が言うなら大丈夫そうだな。それじゃムツツリー二は作戦通りに動いてくれ」

康太「……………了解」

康太も雄二の指示に従って自分の仕事に向かったようだ。
さて。前線はどうなっているかな？

Side・end

Side・睦月

雄二の号令でクラスメイトは教室を出てBクラスへと向かう廊下を駆け出した。

その後を追うように俺と明久が、体力面でついて来れない瑞希が続く。

今回のこちらの主武器は数学。Bクラスは比較的文系よりだし、長谷川先生は召喚可能範囲が広いのが理由だ。俺と島田の得意科目が数学だからちようどいいいな。他にも英語ライディングWの山田先生と物理の木村先生も一緒だ。立会人に数学と英語の教師がいるのは俺にとってこの上なくありがたい。

F男『いたぞ、Bクラスだ！』

F男『高橋先生を連れているぞ！』

最前線に到達したクラスメイトが大声で報告する。

そこに追いついた俺と明久も正面を確認すると、Bクラスのメンバーが十人程度でゆっくりと歩いてくる。あくまで様子見といったところか。

生徒『生きて帰すなーっ！』

どっちのクラスが言ったのか分からない、物騒な台詞が皮切りとなり、Bクラス戦が始まった。

『Bクラス 野中長男 VS Fクラス 近藤吉宗
総合 1943点 VS 764点』

流石はBクラスか。Bクラスの総合としては低い方だが、Fクラスとは桁が違うな。

『Bクラス 金田一祐子 VS Fクラス 武藤啓太

数学 159点 VS 6

9点』

『Bクラス 里井真由子 VS Fクラス 君島博

物理 152点 VS 77

点』

圧倒的な実力差に第一陣がごとくやられていく。早くフオロ
ーしないと戦力が拙いことになる。

そうやってなんとか戦況を把握していると、

瑞希「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

息を切らしながら最後尾にいた瑞希がやっと来た。

B生「来たぞ！姫路瑞希だ！」

Bクラスの誰かが叫ぶ。やっぱりBクラスは下調べをしてFクラスに瑞希がいるのを知っていたか。俺や明久の成績については調べ

ていないようだが。

さっきの叫びでBクラスの生徒の目つきが変わった。明らかに瑞希を警戒しているらしい。

明久「瑞希ちゃん、来たばかりで悪いんだけど……」

瑞希「は、はい。行って、きます」

明久に言われてトタトタと戦場に紛れ込む瑞希。明久はあの姿を見て和んでいるみたいだ。この場に康太がいたら間違いなく写真を撮っていただろう。

？「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込めます！」

瑞希「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

？「律子、私も手伝う！」

早速勝負を挑まれたようだ。Bクラスは十人しか来ていないのにその内の二人がかりなんて、かなりの警戒の仕方だな。無駄だろうけど。

『^{サモン}試獣召喚！』

喚声に応じて顔を出した召喚獣。敵の二体は剣と槍を構え、瑞希の方は身の丈以上の大剣を持っている。

瑞希の方の召喚獣の腕にあるアレって。

明久「あれ？瑞希ちゃんの召喚獣の腕にあるそれって」

瑞希「あ、はい。数学は結構解けたので……」

明久「それなら安心だね」

明久も気付いたようで安堵していた。

岩下「そ、それって!?!」

菊入「私たちが勝てるわけじゃないじゃない!」

向こうの二人も気付いて顔色を変えている。

瑞希「じゃ、いきますね」

瑞希は小さな手を握り込んで、瑞希の召喚獣もその動きに合わせて左腕を敵の方に向けた。

岩下「ちょっと待ってよ!?!」

菊入「律子!とにかく避けなと!」

大げなくらい横に飛ぶ敵二人の召喚獣。その直後、瑞希の召喚獣の腕輪が光を発した。

瑞希「『熱線』」

キュボツ!

岩下「きゃあああーっ!」

菊入「り、律子!」

左腕から光線がほとばしったと思った瞬間、逃げ遅れた敵の召喚獣が炎に包まれた。

『Fクラス 姫路瑞希 VS Bクラス 岩下律子&菊入

真由美

数学 412点 VS 189点&1
51点

単教科で400点以上を取ると特殊能力を使える腕輪を装備して出るんだよな。去年までの明久だったら確実に無縁だが。

瑞希「ご、ごめんなさい。これも勝負ですのっ」

大きく避けていたもう一人の召喚獣に肉薄し、大剣を振り下ろした瑞希の召喚獣。武器ごと一刀両断し、一瞬で決着がついた。

B生「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

B生「なっ！そんな馬鹿な!？」

B生「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

Bクラスの残りの八人が驚愕の声を上げた。無理もないと思うけど。

睦月「それじゃあ、明久。俺たちも出るか」

明久「そうだね。僕は高橋先生の方にいくよ」

そう言っただけ俺は英語Wのフィールドに、明久は世界史か日本史のフィールドを出してもらった。高橋女史の方に向かった。

途中、瑞希の台詞で信者が急増したがまあいいか。

睦月「さて、始めますか。山田先生。Fクラス神楽睦月がこの場に

いるFクラス全員に代わりBクラス三人に英語勝負を申し込みます」

B生「なっ！」

B生「Fクラスにくせに俺たち三人相手に一人だと！」

B生「なめやがって！後悔させてやる！」

山田「承認します」

山田先生が勝負を承認したのを確認して、英語のフィールドにいたFクラスの面々に指示を出す。

睦月「この場のFクラスのメンバーは全員物理のフィールドに移るか回復試験を受けて来い。じゃ、サモン『試獣召喚』」

俺の喚声に応じて二本の日本刀を持った召喚獣が現れる。その腕には当然のように

B生「ちよつと！あれってまさか！」

B生「腕輪だと!？」

B生「Fクラスのくせに何であるんだ！」

腕輪がある。

さて、あつちの点数はどうなってるかなー？

『Fクラス	神楽睦月	V S	Bクラス	モブA	&
モブB	&	モブC			
英語W	641点	V S		157点	&
173点	&	164点	『		

Bクラスとしては平均くらいか。まあ、妥当か。

B生「641点って、なによ！」

B生「600点超えて担当教師並だろ！」

B生「なんでそんな奴がFクラスにいるんだ！」

睦月「んー、641点か。まあまあだな。今回はちよつと調子が悪

かったからな」

山田「神楽君。そう言われると私の教師としての威厳がなくなるのでやめてください……」

睦月「それはすいません。ですが最高点が750点くらいなんで」

俺の台詞で山田先生の背中に哀愁が漂い始めた。Bクラスの奴らも喚き始めたし、さっさと決着^{ケリ}をつけるか。

睦月「それじゃ、早速で悪いがお前たちには戦死してもらおうぞ」

言葉を言い終わると同時に俺の召喚獣が敵の召喚獣に向かって駆ける。その速さは加速の腕輪程ではないにせよ、かなりのものだ。

B生「早すぎて目で追いきれない！」

B生「どうにかしろよ！」

B生「くそっ！こうなったら自棄だ！」

あまりの速さに敵は混乱する。攻撃や動きが大雑把になったその隙に近づいて一体一体首を刎ねていく。

そしてあっという間に相手は残らず戦死した。

鉄人「戦死者は補習うううー！ー！」

そう言って鉄人がBクラスの生徒を担いでいく。

B生「補習はいやああああー！」

B生「誰か助ける！」

B生「まだ死にたくない！」

戦死した連中は色々と叫びながら連行されていった。そういえば

担いでいたのが6人だったけど、明久の方も無事に終わったのか？

Side・end

Side・明久

睦月「それじゃあ、明久。俺たちも出るか」

明久「そうだね。僕は高橋先生の方にいくよ」

瑞希ちゃんがBクラスの二人を戦死させたのを確認してから、僕と睦月はそれぞれのフィールドに移った。

明久「高橋先生、Fクラス吉井明久がこの場にいるBクラス三人に世界史勝負を申し込みます」

B生「Fクラスのくせにふざけるな！」

B生「アイツは 観察処分者 の吉井だ！なめやがって！」

B生「世界史は俺の得意科目だ！後悔させてやる！？」

高橋「承認します」

『^{サモン}試獣召喚！』

Bクラスの言葉が怖いけど僕も負けられないからね。

明久「この場にいるFクラスみんなは物理のフィールドに移るか、点数が危ない人は回復試験を受けてきて」

僕の喚声に応じて召喚獣が顔を出す前に指示を出す。

指示を出し終えたと同時に四体の召喚獣が完全に姿を現した。
僕の召喚獣の装備は

B生「木刀だと？」

B生「なめてるのか？」

B生「これはいいカモだ！やっちまうぞ！」

改造学ランと木刀だった。

……僕だつてもつとマシなのがよかつたさ！去年の学年末試験で頑張つたのに結局装備は変わらなかつたんだからしょうがないじゃないか！

でも、僕の装備はそれだけじゃない。そう

B生「おい！あいつの召喚獣の腕にあるアレって」

B生「ちよつと待てよ！ありえねーだろ！」

B生「何で腕輪なんて持ってんだよ！」

腕輪があるんだ。

とりあえずお互いの点数はどうなってるのかな？

□ Fクラス	吉井明久	V S	Bクラス	モブD	&
モブE	&	モブF			
世界史	591点	V S		163点	&
182点	&	231点	□		

明久「実は僕も世界史は得意なんだ」

B生「約600点って……」

B生「得意ってレベルじゃないだろ！」

B生「なんで教師でもないのにそんな点数取れるんだよ！」

去年までなら僕もそう思ってたよ。これも全部、橙夜や睦月たちのお陰なんだよね。

明久「早速腕輪を使おうかな。『武装強化』」

僕がそう言うのと召喚獣が持っていた木刀が日本刀に変わった。

B生「くそっ！点数差がなんだ！」

B生「いくら点数が高くて三対一だ！」

B生「数で押し込めばどうにかなるはずだ！」

そう言っただけで敵の召喚獣がぎこちない動きで僕の召喚獣に向かってくる。

B生「なんで当たらないんだよ！」

B生「掠る気配すらないぞ！」

B生「いくら点数が高くてもありえないだろ！」

相手は正面から突撃してくるだけだから操作に慣れてる僕なら簡単に避けられる。避ける瞬間におまけとして足払いもしている。

そして、足払いで転んだ隙に近づいて首に木刀が変化した日本刀を刺していく。

『Fクラス	吉井明久	VS	Bクラス	モブD	&
モブE	&	モブF			
世界史	441点	VS		0点	&
0点	&	『0点			

結果、揃って相手は戦死することになる。

召喚獣と言っても首や心臓のある辺りは急所だからね。一撃なんだ。

鉄人「戦死者は補習ううー！ー！」

そう言いながら鉄人は戦死者を担いでいく。

担がれたBクラスの人たちは6人くらいだったから、睦月のほうも倒せたようだね。

睦月「やっぱり明久の方も終わったか」

明久「あ、睦月もお疲れ様」

そう考えていたら睦月がやって来た。

明久「残ってるのは物理のフィールドだけ？」

睦月「そう言うことになる。俺と明久、瑞希の三人はとりあえず一旦下がるぞ」

明久「わかった。瑞希ちゃん！とりあえず下がって」

瑞希「あ、はい」

Bクラスの8割を戦死させたからあつちの前線部隊の崩壊は時間の問題だろうから、僕らが下がっても大丈夫だろう。

B生「中堅部隊と入れ替わりながら後退するぞ！」

B生「分かった！」

そんな相手の指示が聞こえた。と言っても前線に残っているのは二人しかいないんだけど。少し離れたところに数人見えるけど、あれがBクラスの中堅部隊かな？

とりあえず狙い通り、相手を徐々に下がらせることに成功かな。目的のBクラス教室に釘付けにするくらいで今日の戦闘は終了になりそうだね。本当なら一気に攻めきりたいんだけどね。

？「睦月に明久、ワシらは教室に戻るぞ」

明久「ん？なんで？」

睦月「なんかあったのか？」

戦況を眺めていた僕たちのところに秀吉がやって来た。

教室に戻るって、睦月の言ったとおり何かあったのかな？

秀吉「Bクラスの代表じゃが……」

明久「うん」

秀吉「あの根本らしい」

睦月「根本って、あの根本恭二なのか？」

秀吉「うむ」

そっか、あの根本恭二なのか……。

明久「なるほど。戻っておいた方が良さそうだね」

秀吉「一応、橙夜が対策を講じているらしいから雄二に何かあるとは思えんが、念の為にの」

睦月「それじゃ、俺はここで戦況を確認しているから二人は戻ってくれ」

睦月の言葉に従って、瑞希ちゃんにも一言報告してから、僕と秀吉は何人かを連れて教室に引き返した。

明久「……うわ、こりゃ酷い」

秀吉「まさかこうくるとはのう」

明久「卑怯、だね」

教室に引き返した僕らを迎えたのは、穴だらけになった卓袱台とへシ折られたシャープや消しゴムだった。

明久「酷いね。これじゃ補給がままならない」

秀吉「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

それにしても、なんか、根本君って器小さいなあ……。

Side・end

Side・other

時は少し遡り、睦月や明久が戦闘を行っている頃。

Fクラスの教室に来訪者があった。

それはBクラスからの使者だった。

Side・end

Side・橙夜

B生「Fクラス代表の坂本はいるか？」

雄二「俺が代表の坂本だが、何の用だ？」

B生「根本が今回の試召戦争について協定を結びたいらしい」

雄二「なるほど……橙夜、お前は協定のことをどう考える？」

協定……ね。根本は何を考えているんだか。

橙夜「一応受けるか」

雄二「それじゃ、協定場所まで案内してくれ」

B生「ついてきてくれ」

橙夜「待て。念の為に護衛としてついていくが問題ないだろ？」

B生「ああ。こつちも近衛部隊を連れていくから構わない」

橙夜「なら俺と3、4人でいいな。他は中堅部隊に合流してくれ」

F男『了解』

雄二「じゃ、案内をよろしく頼む」

そうして俺たちは教室を後にした。

案内されてついていった先は音楽室だった。

B生「ここだ。根本連れてきたぞ」

根本「ご苦労さん。それじゃFクラス代表の坂本。Bクラスと協定を結んで欲しい」

雄二「内容次第だ。さっさと話せ」

根本「ああ、そうだな。内容は4時までには決着が付かなかった場合、戦況をそのままにして続きは翌日の午前9時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止というものだ」

雄二「ふむ……」

雄二は少しばかり考えているな。それにしてもあのキノコがニヤニヤしていてうざい。

少し手助けしてやるか。

橙夜「(雄二。これは受けるべきだ。体力的に瑞希が危ないからな)」

雄二「(やはりそうか)」

橙夜「(それと試召戦争に関わる一切の行為の禁止だが、『Bクラスとの試召戦争』と強調してくれ)」

雄二「(分かった。4時を過ぎたら翌日の9時まで休戦。そしてBクラスとの試召戦争に関わる一切の行為の禁止だな。協定を受けよう)」

根本「ああ、感謝する」

一瞬キノコが怪訝そうな顔をしたが、すぐに戻して協定書を出してきた。

紙に書かれている内容を確認して、若干修正して雄二はサインした。

俺はその内容を持ってきていたノートPCに写した。

雄二「それじゃあ、俺たちはこれで失礼する」

そう言って俺たちは協定書のコピーを受け取って音楽室を出て教室に向かって歩く。

橙夜「康太。今の協定に関する映像は撮れているな？」

康太「……………問題ない。音声も画像も高解像度で記録した」

雄二「橙夜の対策つてのはこれのことか？」

橙夜「いや。これはその内の一つだ。後二つほどある。俺の予想が当たっていけばもう一つ作用しているが……………」

雄二「お前が味方で本当によかったぜ」

橙夜「やる時はとことんやるのが俺だからな。それと康太。あの情報の確認は出来たか？」

康太「……………それも問題ない。情報通りだった」

橙夜「それならBクラス戦の奥の手になるな」

雄二「どんな情報なんだ？それとお前の予想つてやつも教えてくれ」

橙夜「情報に関しては放課後に教える。それと予想の方は教室に戻れば分かる」

そう言いながら俺たちは自分達の教室がある三階に向かった。

調停もすんで教室に戻ってみると、入り口のところに明久や秀吉たちがいた。

明久「酷いね。これじゃ補給がままならない」

秀吉「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

雄二「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

明久「雄二がそう言うならいいけど」

橙夜「それにシャープや消しゴムくらいなら俺が持っているしな。ほれ」

明久と秀吉の言葉に雄二が混ざり、俺も混ざる。

秀吉「橙夜よ。今、一体どこから出したのじゃ？」

橙夜「あれ？秀吉は知らなかったっけ？俺って暗器術使えるんだぜ？こんな感じに」

そう言いながら今度はボールペンやカッター、定規など沢山の文具を出して見せた。

秀吉「初耳なんじゃが……」

橙夜「そうだっけ？まあいいんじゃない？」

明久「橙夜、それってもしかして物 シリーズのガ ラさんの真似？」

雄二「物 シリーズ？なんだそれ？」

橙夜「よくわかったな、明久。雄二、物 シリーズってのはある小説の通称だ」

なんかいいなあーって思って頑張ったら出来るようになったんだよな。

明久「それはそうと、どうして橙夜と雄二たちは教室がこんなになっっているのに気付かなかったの？」

雄二「協定を結びたいという申し出があっただけ。調印のために教室を空にしていた」

秀吉「協定じゃと？」

橙夜「あ、康太。例の確認してくれ」

雄二「ああ。4時までには決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前9時に持ち越し。その間の試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」

康太「……………了解」

俺は雄二たちが喋っているのを無視して康太と例の保険を確認することにした。

明久「それ承諾したの？」

雄二「そうだ」

橙夜「康太、どうだった？」

明久「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじゃないの？」

雄二「姫路以外は、な」

康太「……………完璧」

雄二「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦本番は明日という事になる」

橙夜「本当に完璧だな。これでもしもの時は安全だな」

明久「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうにないね」

雄二「その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路個人の戦闘力の方が重要になる」

康太「……………これくらい朝飯前」

明久「だから受けたの？瑞希ちゃんが無全の体勢で勝負できるように」

雄二「そういうことだ。この協定は俺達にとってかなり都合が良いで、橙夜とムツツリーニは何の話をしているんだ？」

ああ。近くで話されてたら気になるか。

橙夜「とりあえず明久と秀吉は前線に戻ってくれ。そしたら雄二には説明する」

秀吉「分かったのじゃ」

明久「ん。橙夜、雄二、あとよろしく」

雄二「おう。分かっている」

橙夜「お前からこそ気をつけてな」

明久は背中を向けて、先に行つた秀吉の後を追つていった。

橙夜「で、話していたのはこれだ」

雄二「カメラ？」

そう言つて俺は手に持っていたカメラを雄二の目の前に持つていく。

橙夜「そう、カメラだ。これが例の保険の一つだ」

雄二「カメラが保険？それって一体……そういうことか。よくやつた、橙夜にムツツリーニ」

康太「……………橙夜の指示があつたから」

流石は『元』神童だな。あれだけですぐに理解してくれる。

雄二「きちんと映像が撮れているんだらう？」

橙夜「そりゃムツツリーニの仕掛けたカメラだから当然だらう？」

康太「……………当たり前」

雄二「で、この映像の使いどころはいつだ？」

橙夜「康太に確認してもらつた情報があるからな。俺の読みどおりなら休戦になつてからだ」

雄二「そうか。ならこの件は橙夜に一任するか」

橙夜「とりあえずはこのままだな」

とりあえず映像に関しては保留し教室でのんびりしていると、前線に行つていた速水が戻ってきた。

橙夜「どうした速水。脱走か？」

速水「違うわ！島田が人質にとられた」

橙雄「「は？」」

速水「だから島田がBクラスの奴に人質にされたんだよ」

雄二「ふむ……。科目と人数はどうなっている？」

速水「英語Wで二人だ」

橙夜「なら睦月にフィールドの範囲ギリギリのところまで召喚させて一気に救出させる。明久に余計なこと言わせないように注意するの
も忘れずにな」

速水「分かった」

そう言って速水は再び前線に戻っていった

雄二「一体どうして人質にされたんだ？」

橙夜「知らん。そういえば島田嬢って明久のこと好きなのか？」

雄二「俺にも分からん。照れ隠しで暴力揮っているのか憎くて暴力を揮っているのか」

橙雄「「どうでもいいな！」」

それから暫くして島田嬢は無事救出されて、4時になり協定どおり休戦になった。

休戦になってFクラスのメンバーは俺達数人を残して大半が帰宅した。

雄二「協定どおり今日は休戦になったわけだが……」

そう言っただけで雄二は主要メンバーを見回す。

橙夜「油断は出来ないだろうな」

雄二「そうだな」

俺の言葉を肯定した雄二に続いて他のメンバーも頷いた。

康太「……………（トントン）」

雄二「お、ムツツリーニか。何か変わったことはあったか？」

情報収集に戻っていた康太が戻ってきた。どうやら動きがあったようだな。

雄二「ん？Cクラスの様子が怪しいだろ？」

康太「……………（コクリ）」

雄二「戦争の準備か……。漁夫の利を狙うつもりか？」

明久「雄二、どうするの？」

雄二「んー、そうだなー。Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラスを使って攻め込ませてやるぞ、とか言っただけで脅してやれば俺たちに攻め込む気もなくなるだろ」

明久「それに、僕らが勝つなんて思ってもいないだろうしね」

雄二「よし。それじゃ今から行ってくるか」

明久「そうだね」

橙夜「それなら俺にやらせてくれ」

俺は雄二と明久が腰を上げようとした時にそう言った。

雄二「何か策でもあるのか？」

橙夜「当然だ。例の情報の真偽の確認をもらったのはこの為で

もあるからな」

雄二「なるほど。なら交渉は橙夜に任せることにしよう」

明久「それじゃ行こうか」

雄二「秀吉は念の為にここに残ってくれ」

秀吉「ん？なんじゃ？ワシは行かなくて良いのか？」

雄二「橙夜の策が失敗したときの為に手札を残しておこうと思ってな」

秀吉「よくわからんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

素直に引き下がる秀吉。失敗なんて一切しないんだけどな。

橙夜「じゃ、メンバーは俺と睦月、雄二も明久、康太に瑞希でいいな」

睦月「ああ」

雄二「おう」

明久「うん」

康太「……………（コクリ）」

瑞希「あ、はい」

そうして俺たちはCクラスへ向かう。

途中、廊下でお手洗いに行っていたらしい島田嬢と須川に会った。

明久「あ、島田さんに須川君。ちょうど良かった。Cクラスまで付き合ってたよ」

美波「んー、別に良いけど？」

須川「ああ。俺も大丈夫だ」

何だかんだでメンバーが増えた。明久的には瑞希の為の盾とでも考えていそうだが。

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

教室の前につくなり扉を開いて雄二がそこにいる全員に告げた。やはりCクラスの教室内にはかなりの人数が残っていた。こうも予想通りに進むと怖いな。

？「私だけど、何か用かしら？」

これがCクラスの代表ね。感情で動きそうなタイプだな。

橙夜「ああ。名前は小山だったな。話の前に確認なんだが、お前がBクラス代表の根本と付き合っているってのは事実か？」

小山「事実だけど、それがなに？」

俺と小山のやり取りを聞いて須川が覆面を取り出そうとしていた。それは睦月が押さえたんだが。

橙夜「実は、お前の彼氏の根本に関する面白い映像が手に入ってな。彼女のお前にどうかと思っただんだ」

小山「是非見せて頂戴」

橙夜「ああ、勿論だ。それとそこにいる数学の長谷川教諭も如何ですか？」

一同「なっ！」

長谷川「お言葉に甘えて私も一緒に見させてもらいますね」

俺の言葉に全員が驚愕を露にしていた。まあー理由は正反対だったりするんだが。

橙夜「それと今話題になっている根本含むBクラスのメンバーはその場を動くんじゃないぞ？」

B生『ぐっ!』

雄二「なんでこの場にBクラスの代表とその取り巻きがいるかは追求しないでいてやるか」

橙夜「んじゃ、この映像だ」

そう言っただけ俺は持ってきていたノートPCを操作してある映像をCクラス代表の小山と長谷川教諭にみせた。

その映像の内容は根本がBクラスの生徒に命令してFクラスの設備を壊しているというものだった。

B生『いくら根本の命令でも面倒だな』

B生『そう言っただけやるな。これもFクラスに勝つための作戦っただけだ』

B生『おい、これ見てみるよ。ラブレターなんて書いてるぜ?』

B生『今時ありえねーって』

B生『アハハハ』

B生『このラブレター持っていかうぜ』

B生『いいんじゃね?これで脅せば有利になるだろ』

橙夜「といった内容なんですけど長谷川教諭。これをみてどう思いますか?」

長谷川「……そうですね。設備を壊すだけでなく、他人の物を盗んでいますから、西村先生に頼んで彼らに生活指導を受けさせた後、数日間の停学処分と言ったところでしょうか」

橙夜「それもいいですね。根本君は盗んだ物をこちらに引き渡してくださいね?」

根本「チツ……」

橙夜「さて、そろそろCクラスに来た本題と行くか。Cクラス代表

小山「

小山「……なに?」

長谷川教諭の言葉に根本と一部の取り巻きが苦い顔をしていたが、俺は根本から手紙を受け取り、ポケットにしまった後、小山に話しかけた。

橙夜「不可侵条約を結ぶ為に交渉をしにき、それは協定違反だ！」
たん……………」

最後まで言い切る前にキノコに遮られた。

橙夜「協定違反？言いがかりはやめてくれ。そんなもの俺たちはしていないが？」

根本「休戦中の間、試召戦争に関わる一切の行為を禁止としただろ！」

橙夜「確かにしたな。Bクラスとの試召戦争に関わる行為の禁止とな。今しているのはCクラスとの試召戦争に関わる行為だ」

根本「屁理屈だ！協定書には試召戦争に関わる行為の禁止と書いていたはずだ！これを見る」

そう言って協定書を見せてくる根本。

橙夜「確かにお前の持っていた協定書にはそう書いてあるな」

根本「当たり前だ！」

橙夜「ただし、それが改竄されていなければ、だ。康太、協定書のコピーを」

康太「……………ここに（スッ）」

ありがとう、と言って康太が懐から出した協定書のコピーを受け取りこの場にいる全員に見えるように持つ。

橙夜「これは調停後に受け取ったコピーだ。ここにはきちんと『Bクラスとの』と書いてある」

根本「そんなもの偽物に決まっている！」

橙夜「なんなら協定交渉をしている時の映像を見るか？実はきちんと撮影していたんだ。勿論編集もしていないオリジナルそのものだ。協定書もきちんと映しているからな。長谷川教諭、確認を」

長谷川「あつ、はい。………確かに撮影されていた映像を観るかぎりFクラスの持っているコピーの方が本物の様ですね。よってFクラスの行動は協定違反ではないと証明できます」
根本「くそっ！」

俺に正論を言われ、長谷川教諭が俺を正当化したのを見て、根本は忌々しげに言葉をはいた。

橙夜「で、話を戻すがCクラス代表の小山」

小山「なに？」

橙夜「丁度Cクラスは戦争の準備をしていたんだろう？本来ならば不可侵条約を結びに来たんだが、気が変わった。この場にいる俺を含む、Fクラス8人がCクラスに対して試召戦争を申し込む。宣戦布告の理由は先に協定を破ろうとしたBクラスに加担してFクラスに攻め入ろうとしたCクラスへの罰だ。そして開戦は今、この時からだ」

一同『なっ！』

俺の発言に敵味方問わずに驚愕の一言をあげる。

雄二「（勝手に宣戦布告するんじゃない！俺たちは認めていないんだぞ！）」

明久「（そうだよ！いくらなんでも8人じゃ厳しすぎるよ！）」

橙夜「（安心しろ。実際に戦闘をするのは俺一人だ）」

明久「（尚更危ないじゃないか！）」

橙夜「（Cクラス程度に俺が負けることはありえない。黙って俺の後ろで見ている）」

雄二「（……その言葉、信じるぞ?）」

明久「（ちよつと雄二！何言ってるんだよ!）」

橙夜「（当たり前だ。俺は出来ないことは言わない、俺の本気の力つてやつこの片鱗を見せてやる。そして精々それを脳裏に焼き付けるんだな）」

とりあえず味方であるFクラスの説得には成功した。後ろで雄二と明久が睦月を除いた面々に説明しているが。まあ、知らん。

橙夜「で、Cクラスとの戦争は何も問題ないだろう?両クラスの代表はこの場にいるし、Bクラスとは休戦中で戦争中ではないからな。それに上位クラスは下位クラスの宣戦布告を拒否できないから確定だ」

小山「うっ!……分かったわ。その宣戦布告を受けるわ……」

C生「勝手に受けるんじゃない!」

C生「俺たちは認めていない!」

C生「私たちはBクラスに加担なんてしていないわ!」

小山「黙りなさい!ルール上、私たちCクラスはFクラスの宣戦布告を断れないのよ!とにかく勝てばいいのよ!」

そりゃ、いきなり言われてすぐに開戦なんて嫌だろうな。だけど、受けるしかないんだ。根本の彼女がお前らのクラス代表になったのが運の尽きつてやつだ。

橙夜「話は纏まったな?それじゃ、長谷川教諭。Fクラス神楽橙夜がこの場にいる代表を含むCクラス全員に数学勝負を申し込む!」
C生「なっ!」

C生「なめてるのかっ！」

C生「返り討ちにしてあげるわ！」

長谷川「承認します」

橙夜「さっさと召喚しろ。でないとな敵前逃亡とされて補習室行きだぞ？」

C生「しょうがないわ！」

C生「補習室送りはいやよ！」

C生「そっちこそ補習室送りにしてやる！」

『^{サモン}試獣召喚！』

狐の仮面を頭の横につけて鉄扇を持った全身黒一色の俺の召喚獣とCクラスの召喚獣が顔を出す。

その直後、召喚獣の頭上に次々と点数が表示されていく。俺のほうはまだ処理しきれないようが表示が遅れているが。

Cクラスは代表の小山をいれて30人ちよっとなるところか。これなら余裕だな。

『Fクラス 神楽橙夜 VS Cクラス 小山友香 &

Cクラス32人

数学 ???点 VS 163点 &

合計約5000点』

C生「Fクラスのくせに生意気なのよ！返り討ちにしてあげるわ！」

C生「これだけの数に点数なら楽勝だな！」

C生「さっさと補習室に送ってやる！」

そう言って興奮しているCクラス。だが、残念だ。その台詞は死亡フラグだ。なぜなら

『Fクラス	神楽橙夜	VS	Cクラス	小山友香	&
Cクラス	32人				
数学	978点	VS		163点	&
合計約	5000点	』			

俺の召喚獣は一对多向きなんだ。教えていないし、根拠とは関係ないけど。

橙夜「実は数学は政経に並んで俺の得意科目なんだ」

C生「なっ！」

C生「あんな点数人間が取れるの!？」

C生「才女と専らの噂の高橋女史よりも高いんじゃないか!？」

美波「同じく数学が得意なウチって……」

睦月「流石は橙夜兄だな。俺でも数学で900点は取れないからな」

明久「そう言う睦月は何点なの?」

睦月「最高で850点前後だな」

雄二「……化け物だな……」

康太「……ありえない」

須川「神楽兄弟って一体……?」

瑞希「と、橙夜君って、凄いですね……」

一応俺って『神楽グループ』の総帥だから数字に強くないといけないだろ?みんなには秘密にしてるけど。

小山「い、いくら点数が高くてこれだけの数がいれば大丈夫よ! それにあっちの武器は鉄扇一つよ!」

C生「そ、そうだな! 接近しないとダメージは与えられないはずだ!」

C生「遠距離主体で攻めるぞ!」

C生「Fクラスなんかには負けられないわ！」

そう言ってCクラスの生徒達が動き出す。しかし、その直後

『Fクラス	神楽橙夜	VS	Cクラス	小山友香	&
Cクラス	20人	&	Cクラス	12人	
数学	978点	VS		163点	&
合計約	3000点	&		0点	』

最前線にいた12人もCクラスの生徒が一度に戦死していた。

C生「な、なんで私の召喚獣が戦死しているの!？」

C生「俺のもだ!一体何が!」

C生「腕輪の能力なのか!？」

C生「見ていたけど、腕輪は光ってないわよ!何があったの!？」

そりゃ、腕輪を使うまでもないし。それに、武器が鉄扇一つなんて誰も言っていないしね。

橙夜「動かないなら次々戦死させるぞ」

C生「い、いやあああああ!」

C生「誰かあいつを止めるよおおおおお!」

C生「無茶言うな!」

C生「どうやって攻撃しているのか分からないから防ぎようがないじゃない!」

『Fクラス	神楽橙夜	VS	Cクラス	小山友香	&
Cクラス	6人	&	Cクラス	26人	
数学	978点	VS		163点	&

合計約900点 &

0点

小山「本当に何があつたのよ！一度に10人以上が戦死するなんてありえないわ！」

C生「や、やめてくれええええ！」

C生「誰でも良いから近づいて攻撃して来いよ！」

C生「そういうならお前が行け！」

C生「そ、そうだ！お前が行って来い！」

『Fクラス 神楽橙夜 VS Cクラス 小山友香 &

Cクラス32人

数学 978点 VS 163点 &

0点

なんか気付いたら小山以外のCクラスが全滅していた。雑魚すぎじゃね？まあ、いいか。

橙夜「残つたのはお前一人のようだな、小山」

小山「ひっ！そ、その場から一步も動いていないのに、なんで遠くにいたのも戦死しているの！腕輪の能力じゃないなら、一体なんなのよ！」

橙夜「そりゃ、企業秘密だろ？じゃ、これで終わりだ」

そう言うって俺は、俺の召喚獣に攻撃しようとしている小山の召喚獣にその攻撃を避けながら近づいて召喚獣の首元に鉄扇を突き刺した。

『Fクラス 神楽橙夜 VS Cクラス 小山友香 &

Cクラス32人

数学 978点 VS 0点 &

約800点差の上に人体の急所の首元に突き刺したので一撃で小山は戦死した。

長谷川「Fクラス対Cクラスの試召戦争はCクラス代表小山友香の戦死によりFクラスの勝利です！」

C生「そ、そんな……」

C生「たった一人のFクラスの生徒に負けるなんて……」

C生「これは夢に違いないわ……そうよ！夢なのよ！」

小山「こ、こんなことってありえないわ……」

長谷川教諭の宣言により崩れ落ちるCクラスの生徒達。

雄二「まさか本当に一人でCクラスに勝つとはな……」

美波「点数もそうだけど、一体どうなってるのかしら……？」

睦月「橙夜兄だからしょうがないだろうな」

瑞希「本当に一人で勝ちましたね……」

康太「……腕輪の能力？でも、点数を消費していない」

須川「……一歩も動いていない上に腕輪の能力でもないなら本当になんなんだ？」

明久「……橙夜。鉄扇しかもっていないのに、一体どうやって勝ったの？」

こちらもこちらで何か打ちひしがれているようだ。

橙夜「だから企業秘密だつて。ヒントを挙げるとしたら、こつちが一人の時にこそ本領を発揮するってところだな。味方がいると巻き添えにしちまいそつだし。それと誰も俺の武器が鉄扇だけとは言っていないぞ？」

混戦状態だったら間違いなく敵味方関係なく皆殺しになっているだろうしな。それと何度も言うようだけど、鉄扇はメインじゃなくて付属品のな武器だしな。

橙夜「それじゃ、Cクラス代表。戦後対談と行くのか？あつ、Bクラス代表とその取り巻きはさっさと出て行ってね」

そう言っつて俺は根本たち、BクラスをCクラスの教室から追い出した。

S i d e ・ e n d

第六問目 Bクラス戦開始、ついでにCクラス（後書き）

橙「この展開って新しくないか？」

裂「私もそう思ってる」

睦「それでCクラスはどうするんだ？」

裂「原作どおりAクラスに戦争を申し込んでもらう」

愛「つまり、原作であった優子の評判を落とすことがないってことだね」

裂「そう言うことになる。流石に優子の評判落とすのも、秀吉が折檻受けるのもあれだと思ってね」

紫「今回は出番なしなのね」

裂「予定的には次回でBクラス戦が終わる予定だからAクラスの面々もでれると思う」

燐「やったね」

橙「それじゃ、今回も……というかりクエストなんてないんだけど、以下から3人選んでくれ」

神楽橙夜 神楽睦月 神楽紫 桜儀燐 吉井明久 工藤愛子

坂本雄二 霧島翔子 土屋康太 須藤結子 木下秀吉

木下優子

姫路瑞希

島田美波

久保利光

神儀紫稀

速水劉太

清水美春

藤堂カヲル

西村宗一

福原慎

高橋洋子

睦「いい加減これやめないか？」

裂「十問目まで一度もリクエストがなければやめる」

橙「そういえばキノコとか増えてないけどいいのか？」

裂「キノコを此処に出したら、キノコの罵倒しか書けなくなるから
いらない」

睦「そうか。確かにそれもそうだな」

愛「それじゃ、また次回よろしくね」

翔「……よろしく」

燐「またね」

第七問目 交渉とBクラス戦終結（前書き）

【バカテスト】 英語

問 以下の問いに答えなさい。

『 good および bad の比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希、神楽橙夜、神楽睦月の答え

『 good - better - best
bad - worse - worst』

教師のコメント
その通りです。

吉井明久の答え

『 good - gooder - goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

good や bad の比較級と最上級は語尾に -er や -est をつけるだけでは駄目です。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『 bad - butter - bust』

教師のコメント

『 悪い』『 乳製品』『 おっぱい』

「……………明久だけじゃなく、俺の活躍すらない」
by 土屋 康太

第七問目 交渉とBクラス戦終結

Side・橙夜

俺は根本含む、Bクラスの生徒をCクラスの教室から追い出してから本題に戻る。

橙夜「さて、Bクラスの連中は追い出したから戦後対談を始めようか」

小山「……ええ」

橙夜「こちらの条件を受け入れてくれるならCクラスとFクラスの設備の交換は免除する」

俺の発言に俺一人に戦死させられたCクラスの生徒たちは俄かに騒ぎ出す。

橙夜「いちいち騒がないでくれ。本来俺たちは不可侵条約を結びに来たんだ。Cクラスの設備自体に用はないんだ」

雄二「橙夜の言う通りだ。俺たちFクラスは、Cクラス代表の小山がBクラス代表の根本と繋がってさえいなければCクラス自体に来ることもなかったからな」

小山「……そうだったわね。続けて頂戴」

俺と雄二の言葉を聞いてCクラスの連中は安堵したように静かになった。

小山は雄二の『根本と繋がっていた』という部分で少し動揺していたが、先を促してきた。

橙夜「条件は二つ。まず一つ目は、この一学期中に俺たちFクラス

に『試召戦争』を仕掛けないこと。二つ目は先ほどの数学を含めた教科の補給試験などを済ませて明日、もしくは明後日中にAクラスに宣戦布告し、『試召戦争』を行い、勝敗を完全に決し、Cクラスが勝つてAクラスの設備を手にするか、負けてDクラス相当の設備に落とされるかだ。和平交渉などでの終結は一切認めない」

小山「なっ！なんで私たちがAクラスに宣戦布告しなきゃいけないのよ!？」

反論するなら提示した条件の意味を十分に理解してからにして欲しい。

説明するのなんて面倒なだけなんだから。

橙夜「もう少し冷静に話し合いが出来ないのか？だからヒステリーなんて呼ばれるんだ。一つ目の条件だけなら普通に俺たちは設備交換すればいいのに、二つ目の条件でお前たちは最低でもDクラスの設備になるだけなんだ。Fクラスの設備になるよりはましだろう？」

C生『これは受けるべきだ!』

C生『そうよ！Fクラスの設備になるよりはDクラスの方が断然マシよ!』

今度こそ条件の内容を理解したようでCクラスの生徒たちは代表の小山に呑むように促している。

小山「少し静かにしなさい!……分かったわ。Cクラスはその条件を呑むわ」

橙夜「これで和平交渉は終了だ。きちんと約束は守ってもらうからな」

小山「約束くらい守るわ。私はそんなクズに成り下がった覚えは無いわ。そっちこそ守りなさいよ」

橙夜「当然だな。それじゃあ、俺たちは自分たちの教室に戻るぞ」

雄二「ああ」

明久「あ、うん」

睦月「ほーい」

康太「……………（コクン）」

瑞希「あ、はい」

美波「わかったわ」

須川「……………神楽兄と坂本以外って来た意味あったのか？」

俺の言葉に従ってFクラスの教室に戻る。

そして、須川。それは言っちゃいけないことなんだぜ？

時が過ぎて翌日。

Bクラスとの戦争再開まで後30分ある。

そこで今、俺は雄二と話し合っていた。

橙夜「昨日Cクラス相手に一方的な虐殺やっちゃったけど、俺って今日どうすればいいんだ？」

雄二「俺もそれについては悩んでいた。お前がCクラスを一方的に倒したのはあの場にいた根本たちから残りのBクラスの連中には知られているだろう。手段は知られていないがな。で、結局のところどうやったんだ？」

橙夜「やっぱ知られてるよな。まあ、雄二にだけは教えとくか。俺の召喚獣の武器は昨日見ただろ？」

雄二「ああ。確か鉄扇を一つ持っていたな。だが、それだけである真似は到底出来ないだろ」

橙夜「その通りだ。俺の召喚獣の本当の武器は違う。鉄扇は誤解さ

せるための小道具みたいなものだな。そして本当の武器は
「雄二「本当の武器は？」

橙夜「 糸だ」

雄二「はあ？」

流石の雄二も、この答えには啞然としていた。

雄二「糸？糸っていうと裁縫したりするときに使う糸か？」

橙夜「その糸でも間違いでないんだが、基本的には鋼糸スティールワイヤーだな」

雄二「鋼糸？つまりワイヤーってことか？だとしてもどうやったらあんな風に敵をやれるんだ？」

橙夜「簡単に言えば、俺の召喚獣が扱っている糸は目に見えない程に細い。糸つてのは細ければ細いほど鋭さを増していく。それをフールド全体に張り巡らせれば畏の完成。後は敵が動いて勝手に自滅するのを待つだけさ。」

他にも任意で糸を操作することも可能だから相手が動いていなくても簡単に倒せる。糸自体の強度などは点数によって変わるんだがな。

だが、まあ、これにはデメリットというか試召戦争における最大の弱点があるんだ」

雄二「弱点？一体なんだそれは」

橙夜「いや、簡単に分かるぞ。これのせいで俺は迂闊に動けないからな。なんとって」

そこで深刻そうな顔をして間を空ける。

橙夜「 敵味方関係なく皆殺しだから」

雄二「皆殺し？それがいった……ああ、そう言うことか。確かに迂闊に動けないな」

橙夜「分かったか？」

雄二「ああ。つまり一対多向き、というかそれ以外で糸を上手く有効活用できないって感じだろ。いくら操作出来たところで多対多での使用が難しいなら乱戦になる試召戦争では確かに弱点になるな。

張り巡らせてしまうと、敵味方関係なく糸の餌食ってわけか。それなら昨日のCクラスの時は一人のほうが逆に都合が良かったわけだな」

橙夜「そう言うことだ。で、結局俺って今日どうすればいいと思う？」

そして再び問答は最初に戻るわけだ。

雄二「そうだな……。橙夜は鉄扇だけでも対処出来るか？」

橙夜「出来ないこともない」

雄二「なら基本は指揮のみで、戦況が危なくなったら鉄扇だけで対処するというのはどうだ？」

橙夜「まあ、その辺が妥当か。それで使用する教科は？」

雄二「Bクラスの邪魔がなければ一応数学と古典、そしてシメに保健体育だな」

橙夜「なら雑兵たちで押し込みつつ、危なくなったら俺と睦月、明久に瑞希で体勢を立て直すってところか」

雄二「そうなるな。まあ、主戦力4人が揃っていれば危険はないだろう。状況によっては保健体育はいらなくなりそうだな」

橙夜「と言うか、最初から俺が蹂躪してもよくないか？」

雄二「ふむ……」

俺の提案を少々思案する雄二だが、すぐに答えを出す。

雄二「それもそうだな。無駄に戦力を減らす必要もないし、見せびらかす必要もないだろう。なら作戦変更で橙夜に任せるとするか」

橙夜「それじゃ、Bクラスに勝った後のことを考えておいてくれよ」

？」

雄二「何をだ？」

橙夜「根本の扱いに決まってるだろ？昨日のこともあって俺も若干キレ気味なんだ」

雄二「そうだな……。俺もアイツのことは目障りだったからな。いい機会だ、トコトン貶めてやるとするか」

そう言った雄二の表情は、とても邪悪な笑顔だった。

恐らく向かい合っていた俺の表情も似たり寄ったりだったのだからうけど。

午前9時になり、Bクラスとの試召戦争が再開された。

とりあえず俺は、再開の合図と共にFクラスから最前線のBクラス前に来ていた。

橙夜「さて、お前ら。作戦に変更があった。とりあえず数学フィールドは睦月と明久、瑞希といった主戦力を筆頭に教室に押し込め」
F男『了解！』

俺の指揮に従い、Fクラスは数学フィールドで右側の出入り口を押し込んでいた。

橙夜「残りの古典フィールドにいる奴は戦闘を俺が引き継ぐから全員数学側、もしくは回復試験へ。それじゃ竹中教諭。Fクラス神楽橙夜がフィールド内のFクラス16人に代わりこの場のBクラス全員に古典勝負を挑みます」

B生「神楽橙夜って根本が言っていた数学の点数が化物のやつだろ？」

B生「古典の成績がどうなのかは知らないが近づいて数で攻めきれば勝機はあるはずだ！」

B生「とにかく行くぞ！」

竹中「古典勝負、承認します」

『^{サモン}試獣召喚！』

とりあえず俺以外にFクラスの召喚獣がないのを確認し、出現と同時にフィールド内に鋼糸を張り巡らせる。

『Fクラス 神楽橙夜 VS Bクラス16人

古典 ???点 VS 合計約3200点』

B生「突撃イー！」

B生「やっちまええー！」

B生「食らええー！」

俺が罫を張っていると知らずに様々な方向から突っ込んでくるBクラスの召喚獣たち。

『Fクラス 神楽橙夜 VS Bクラス8人 & B

クラス8人

古典 ???点 VS 合計約1600点 &

0点』

B生「なっ！ただ近づいただけなのに戦死しただど！」

B生「一体どうして！」

B生「誰か今の分かる奴はいないのか！」

特攻部隊の最前列にいた8人が早くも戦死。

一応まだ俺の点数表示されていないんだけどね……。

橙夜「俺の点数が表示されるまで待つとかしないのかよ……。変身ヒーローモノならここは待つところだろうに……」

なんて向かい合っているBクラスにも聞こえる程度の大きさで呟いてみた。

B生「いやいや。そんなことするのなんてフィクションだけだったのー!」

B生「そうだそうだ!」

B生「今は現実で、ノンフィクションなんだからそんなこと関係ないんだっての!」

ですよー!

なんて思っていたら残りも接近してきていた。

『Fクラス	神楽橙夜	VS	Bクラス16人
古典	725点	VS	0点

結局俺の点数が表示されたのはBクラスが全滅した時だった。

俺って動かずに鋼糸を張り巡らして罨作ってただけなんだよね。なんつーか、勝ち方がしょぼいって言うか、地味って言うか……。

B生「7、725点?」

B生「根本たちに聞いた数学は約1000点だったって話じゃねーか！」

B生「なんだよこいつ！数学と古典は正反対の教科のはずなのになんでどっちも教師レベルなんだよ！」

いや、そんなのどうでもいいよ。

Bクラスの16人は16人とも一度に鉄人に補習室に連行された。

橙夜「竹中教諭、このまま左側の出入り口からBクラスに入りますから、一旦フィールドを消してついて来てもらえますか？」

竹中「あ、はい。分かりました」

うーむ。確かこの人ってヅラって話だったな。どうでもいいんだが。

そう思いながら左側の出入り口をくぐる。

橙夜「さーて、早速戦死したい自殺志願者はいるか？」

根本「なっ！そっちには20人近くいたはずだろ！」

橙夜「そんなもんとづくに補習室送りにしてやったって」

根本「くそっ！戦闘に参加していない奴らは古典の方に向かえ！」

B生「分かった！」

B生「俺たちが相手になる」

えーと、数学側には12人位で、俺のほうには8人程度か。

橙夜「では、竹中教諭。再びFクラス神楽橙夜が戦闘に参加していないBクラス8人に古典勝負で挑みます」

B生「20人程を相手にして来たんだ、油断するな！」

B生「でも、少しくらいは点数が下がっているはずだ！」

竹中「承認します」

なんだかんだ言ってるがそんなことは無意味だ。

『Fクラス 神楽橙夜 VS Bクラス8人
古典 725点 VS 合計約1800点』

んー、さっきの残った8人よりは点数が高いみたいだな。一人平均大体230点ってところかな？

B生「7、700点超え！」

B生「本当にこいつ20人弱を相手にしてきたのかよ！」

B生「とにかく接近して叩き潰すしかない！」

そんなこと言ってるけどさ、圧倒的戦力の前にただの兵士は平伏すしかないんだっての。

『Fクラス 神楽橙夜 VS Bクラス8人
古典 725点 VS 0点』

B生「なんで近づいただけで俺の召喚獣の首が刎ねられてんだよ！」

B生「俺のほうは四肢が千切れてるぞ！」

B生「なんで私の召喚獣がバラバラ死体のようになっているのよ！」

そう言われても、また出現時に鋼糸を張り巡らせて罠を作っただけだしな。

戦死したのは自滅というか自殺だし、ね？

橙夜「睦月。そっちの方は大丈夫か？」

睦月「橙夜兄か。そっちは瞬殺、だった、みたい、だな。こっちは明久と、瑞希もいるから、大丈夫だ」

明久「あ、橙夜。こっちのほうは、しんっ、ぱい、いらないよ！」
瑞希「睦月君と、明久君の言うとおり、大丈夫ですよ。『熱線』！」

俺の質問に器用に召喚獣を操作して敵の攻撃をかわしながら返事を
をする睦月と明久と瑞希。

他にもFクラスの戦死していない9人程も多対一で頑張ってるよ
うだ。

橙夜「それなら良いところ取りしちゃってもいい？」

睦月「代表の首級獲り？別にいいんじゃないか？」

睦月ならそう言うと思っっていたんだ。その為にちよつと伝令して
雄二に頼んでおいたことがあつたしな。

雄二「待たせたな、橙夜」

橙夜「やっときたか雄二。それで頼んでおいたことは？」

雄二「勿論大丈夫だ。頼みどおり、鉄人を連れてきた」

橙夜「よし。それじゃあ早速。西村教諭、Fクラス神楽橙夜がBク
ラス代表根本に」

何で鉄人を連れてきてもらったかだつて？そりゃ簡単だ。鉄人は
補習監督教師。つまり全科目のフィールドを展開することが可能だ。
キノコには絶望してもらおうと思つてね。

橙夜「公民科目勝負を挑む！」

根本「くそっ！その勝負受ける」

鉄人「公民科目勝負、承認した！」

近衛兵も全滅状態だからキノコは受けるしかないしね。

『試験^{サマシ}召喚！』

俺とキノコの喚声に応じてそれぞれの召喚獣が姿を現す。

『Fクラス	神楽橙夜	VS	Bクラス	根本恭二
公民	????点	VS		183

ふーん、Aクラス下位の点数と同じくらいか。一応Bクラス代表だからそれくらいは取れてなきゃだめだろうしな。

根本「公民科目はあまり勉強してないと思って選んだかもしれんが、残念だったな！」

ああーキノコがうざい。あのニヤニヤ顔見ると一発殴りたくなる。

橙夜「何を勘違いしているか知らんが、その程度か？」
根本「なにっ!?!」

橙夜「俺は昨日、Cクラスの教室で言ったはずだ。数学と並んで公民科目の」

『Fクラス	神楽橙夜	VS	Bクラス	根本恭二
公民	1032点	VS		18

橙夜「政経は得意だと！」

根本「1、1000点超えだど！」

橙夜「それじゃあさよならだ」

そう言って俺は召喚獣を操作して一瞬でキノコの召喚獣に近づき、
手に持った鉄扇で叩き飛ばした。
今ここに、Bクラス戦は終結した。

S i d e . e n d

第七問目 交渉とBクラス戦終結（後書き）

裂「今回はもみじさんリクエストの」

シ「梓外主人公の私、神儀紫稀と」

橙「今作品主人公の俺、神楽橙夜と」

吉井明久（以降：明）「原作主人公の僕、吉井明久の3人と裂やんの4人でお送りします！」

シ「初めてのリクエストだな。で、早速だが、私って来た意味あるのか？」

裂「リクエストがあったんだからあるんだろ？」

シ「まあー久々に梓外が更新されて気分がいいから別にいいんだがな？」

橙「そういえば梓外更新したんだっただな。で、今はこっちを更新中なわけだ」

明「ところで、Bクラス戦って原作では僕大活躍だったよね？」

裂シ橙「「「そういえばそうだったな」「」」

明「僕の影って薄くなってない？」

裂「その通りだな」

明「言い訳くらいしてよー！」

裂「だってさ、明久が活躍した理由って姫路のラブレターだろ？」

明「そ、そうだね……」(ダラダラ)

橙「ラブレターは俺が既に取り返してたから活躍する理由がなくなつたわけか」

裂「そういうことだな」

明「僕の活躍なんてそんなものさ……」(イジイジ)

裂「いじけるなよ。この作品内ではお前、成績良くなってんだからいいだろ？」

明「そ、それもそうだね！」

裂シ橙()(単純な奴。流石バカの中のバカだな)()

明「……今何か失礼なこと考えなかった？」

裂「気のせいだ」

橙「話し変わるんだけど、裂やん」

裂「なんだ？」

橙「紫や燐、Aクラスの女子勢のフォローしなくていいのか？前回

出すみたいなこと言ってたが」

裂「……………」(ダラダラ)

シ「忘れてたのか？」

裂「いや、忘れてはいなかった。いなかったんだけど、Bクラス戦
最終で区切りが良かったんだ……………」

橙「次回の後書きで紫たちが来なければいいな？」

裂「そう…だな…」

シ「じゃ、怯え始めた裂やんを放っておいて次回の後書きに出て欲
しい3人を以下から選んでくれ」

神楽橙夜 神楽睦月 神楽紫 桜儀燐 吉井明久

工藤愛子

坂本雄二 霧島翔子 土屋康太 須藤結子 木下秀吉

木下優子

姫路瑞希 島田美波 久保利光 神儀紫稀 速水劉太

清水美春

藤堂カヲル 西村宗一 福原慎 高橋洋子

明「連続出演は可能らしいよ。後区切り次第でバカテストがない場
合もあるんだって」

シ「そこで裂やんはオリジナルのバカテストを出すべきか悩んでい
るらしい」

裂「なので1・出す 2・いらぬいの二つの内先に5票になった方
を実行します！」

明「随分設定値が低いんだね」

シ「枠外と違ってこちらはあまり登録件数が多くないからだだよ」

橙「その辺はもういいとして。それじゃ、次回もよろしくだ」

シ「枠外の方も更新されたらよろしくってことで」

裂「それじゃ」

シ「橙明」「また次回」「」

第八問目 悪逆非道の報いとAクラス戦前交渉（前書き）

【バカテスト】 保健体育

問 以下の問いに答えなさい。

『女性は（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希、神楽橙夜、神楽睦月の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

神楽紫の答え

『初潮（これはセクハラだと思います）』

教師のコメント

正解ですが、それは冤罪です。

桜儀燐の答え

『初潮（セクハラで訴えられても知りませんよ？）』

教師のコメント

ですから、ただの問題ですので私たち教師にやましい気持ちはありません。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経と言う。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43kgに達することに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳しくすぎです。

「優等生を演じて何が悪いのよ！」by木下 優子

第八問目 悪逆非道の報いとAクラス戦前交渉

Side・明久

僕は睦月と瑞希ちゃんたちとBクラスの生徒たちの相手をしながら、橙夜と根本君の勝負を見ていた。

けど、あれって勝負って言うよりは……蹂躪？

いや、一撃で終わったからそれ以前の話なのかな？

それにしても公民科目で1000点超えか……。

公民科目は必須の受験科目じゃないからあんまり勉強する人ないんだよね。AクラスでもAクラス相応程度位だろうし、まず400点を取れる生徒は10人いるかどうかで、他は教師くらいしかないんだろうな。

そんなことを考えていると雄二が橙夜と根本君の近くに動いていた。

雄二「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談と行くか。な、負け組代表？」

根本「……」

床に座り込んでいる根本君。さっきまでの強気が嘘のようにおとなしいね。

僕は交渉術なんてものは持ち合わせていないから戦後対談は橙夜と雄二に任せよう。

雄二「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の発言に、ざわざわと周囲の皆が騒ぎ始める。

橙夜「落ち着け。試召戦争を始めるときに言ったが、俺達の目標はAクラス。ここがゴールじゃない」

秀吉「うむ、確かに」

雄二「橙夜の言うとおり、Bクラスはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるうかと思う」

橙夜の説明に秀吉と雄二が肯定と補足をした。

それを聞いたFクラスのみんなはどこか納得したような表情になった。Dクラス戦の時と同じだし、雄二の性格を理解し始めたのかな？

と言うか、秀吉はいつの間にも僕や睦月の近くに來たんだろう？

根本「……条件はなんだ」

橙夜「条件？それはお前だよ、負け組代表」

根本「俺、だと？」

雄二「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

橙夜「それに昨日のこともあるからな。その件については、俺たちFクラスの試召戦争が終わったら罰が与えられることは確定しているが、俺もあまり気の長いほうじゃないからな」

雄二と橙夜の言い様は凄いいけど、そうやって言われるだけのことを彼はやっている。だからこそ周りの人間は誰もフォローしないし、本人もそれはわかっているみたいだ。

雄二「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」

昨日の昼に雄二と橙夜が言っていた、あの取引の材料を提案する。

雄二「Aクラスに行つて、試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるだけで伝えるんだ」

根本「……それだけでいいのか？」

疑うような根本君の視線。最初はそれだけでよかつたんだけどね。

橙夜「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

そう言つて橙夜が取り出したのは、どこから調達したのかわからないフリルが満載のメイド服。

実を言つと橙夜は昨日のことについて若干キレ気味みたいなんだよね。あの感情が根本君じゃなくて僕に向いてたら近寄ることすら躊躇うと言つか、絶対に近寄りたくないね！

根本「ば、馬鹿なことを言つな！この俺がそんなふざけたことを……！」

そりゃ、嫌がるよね。でも、根本君。残念なことに、君には拒否権は一切存在しないんだ。

B生「Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！」

B生「任せて！必ずやらせるから！」

B生『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな!』

Bクラスの仲間達の暖かい声援。これを見るだけで根本君が今までどういった行動を取ってきたのかがわかる気がする。

雄二「んじゃ、決定だな」

根本「くっ!よ、寄るな!変態ぐふうっ!」

B男「とりあえず黙らせました」

雄二「お、おう。ありがとう」

橙夜「んじゃ、よろしく」

一瞬で代表を見限って腹部に拳を打ち込んだBクラスの男子。流石の雄二も変わり身の早さに驚いていた。……橙夜は全く驚いていないようだけど。

雄二「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」

明久「了解っ」

ぐったりと倒れている根本君に近付き、制服を脱がせる。

男の服を脱がせるなんてこの上ない苦痛だけど、仕方が無い。逆らったりしたら橙夜が怖いからね。

根本「う、うう……」

根本君がうめき声をあげる。目を覚まされるとまずいね。

明久「ていつ!」

根本「がふっ!」

橙夜「一発殴っておきたかったんだ。つうことで、ついでに俺も、つとっ!」

根本「ぐえっ！」

念の為に追加攻撃したら、橙夜もトドメとばかりに殴っていた。その後に見慣れた男子の制服を剥ぎ、メイド服をあてがう。

明久「うーん……。これ、どうするんだらう？」

通常の服とは違い、全然やり方がわからない。順序はどうなっているんだ？

そうやって困っていると

B女「私がやってあげるよ」

Bクラス女子の一人がそう提案してくれた。

明久「そう？悪いね。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて」

B女「それは無理。土台が腐ってるから」

橙夜「ついでにこっちもよろしく」

B女「わかった」

ついでとばかりに女子の制服も渡す橙夜。それにしても酷い言いようだ。

明橙「「じゃ、よろしく」」

僕と橙夜はその女子に根本君を託し、手に彼の制服を持ってその場を離れた。

それにしてもメイド服の着付けの仕方を知っているってことは、彼女はメイドカフェとかでバイトしてたりするのかな？まあ、どうでもいいよね。

明久「これどうしよつか？」
橙夜「捨てちまえ。折角だからあいつにはメイド服か女子の制服の着心地を家まで楽しんでもらおう」

根本君の制服を持って考えていたら、橙夜がそう提案してくれたからそのまま実行することに。

Bクラスのゴミ箱じゃすぐに見つかりそうだから廊下においてあるゴミ箱で良いかな？

そう思って、Bクラスの教室の近くにいたFクラスの人々と一緒に自分達の教室のある旧校舎に戻る際に捨てておいた。

睦月「それにしても再開してからまだ1時間も経ってないんだな……」

教室に戻って早々、睦月がそう言った。

確かに、橙夜の無双っぷりで忘れてたけど、まだ10時前なんだね。

『こ、この服、ヤケにフリルがいっぱいじゃないか！』

『いいからキリキリ歩け』

『さ、坂本に神楽め！よくも俺にこんなことを』

『無駄口を叩くな！これから撮影会もあるから時間がないんだぞ！』
『き、聞いてないぞ！』

と、いきなり廊下から響いてきた言い争い。どうやら始まるみたいだ。

伝令だけじゃなくて、いつの間にか撮影会までスケジュールに入れられたみたいけど。きっと根本君は一生忘れられない素晴らしい思い出を背負うことになるだろう、悪い意味で。

橙夜「ざまあーないな」

雄二「全くだな！」

さっきのが聞こえていたのだろう。橙夜と雄二の二人は腹を抱えて笑っていた。

秀吉「さっき聞こえた撮影会とやらは、二人の指示なのかな？」

橙夜「流石秀吉、鋭いな」

雄二「その通りだ。提案してきたのは橙夜なんだがな」

どうやら橙夜の考えだったらしい。哀れ、根本君……でもないね。自業自得としか思えないや。

それじゃ、Aクラスとの試召戦争に備えて、補給試験を頑張るとしようかな。

Side・end

Side・橙夜

点数補給のテストを終えた二日後の朝。

遂に残すところAクラス戦となった俺たちはFクラスの教室で最後の作戦の説明を受けていた。

雄二「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の強力があってのことだ。感謝している」

あれ？あの雄二が素直に礼を言うなんて、一体なにが！？もしかして偽物……？

明久「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

睦月「そ、そうだ。らしくないぞ、雄二？」

雄二「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

明久と睦月も俺の思いと同様のようだ。

雄二「ここまで来た以上、絶対Aクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を。教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

最後の勝負を前にクラス全員の気持ちが一つになっているようだ。

雄二「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

『どういうことだ？』

『誰と誰が一騎討ちをするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

雄二の考えにざわめきたつFクラスだが、すぐに机をバンバンと叩いて落ち着かせ、説明を続ける。

雄二「やるのは当然、俺と翔子だ」

Aクラス代表の翔子とFクラス代表の雄二。クラス間の戦争を代理で行うなら、代表同士の一騎討ちは当然といえば当然だ。

明久「馬鹿の雄二が勝てるわけなああっ！？」

なにやら明久が口に出したらカッターが明久の頬掠めて飛んでいった。

雄二「次は耳だ」

どうやら次からは本気で殺すつもりらしい。これでこの雄二が本物だと証明出来たような気がする。

雄二「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともによりあえば勝ち目はないかもしれない」

認めるなら明久に向かってカッターを投げるなよ。

雄二「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じようだっただろっ？まともによりあえば俺たちに勝ち目はなかった」

Dクラス戦は明久と瑞希が、Bクラス戦はそれに加えて俺や睦月がいたからこそなんだけどな。

雄二「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺たちの勝ち揺るがない。俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今みんなに見せてやる」

『おおーっ！！』

意思を確認するまでもなく、全員が雄二を信じきっているようだ。俺としては信用は出来ても信頼は辛いんだが……。

雄二「さて、具体的なやり方だが……一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ」

秀吉「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

雄二「日本史だ」

明久たちは此間の昼食会で翔子に苦手科目がないことを知っているから不審になっているようだ。

雄二「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

やはりそうか。翔子にはあれがあるからな……。

明久「でも、同点だったら、きつと延長戦だよ？そうになったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しいくない？」

秀吉「確かに明久の言うとおりじゃ」

確かにブランクのある雄二よりは日本史が得意な明久が出るべきだろう。そっちの方が確実にだからな。

雄二「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまですでに頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

明久「??それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか?」

雄二「いいや。アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

そりゃ教師の監視がある中での妨害程度で、あの翔子の集中が揺らぐことなんてないだろ。

秀吉「雄二。あまりもったいぶるでない。そろそろタネを明かしてもいいじゃろう?」

雄二「ああ、すまない。つい前置きが長くなった」

業を煮やした秀吉が先を促し、雄二はかぶりを振って、改めて口を開いた。

雄二「俺がこのやり方を選った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

そりゃ間違えるって。大切な、本当に大切なお前との思い出の一つなんだからな。

雄二「その問題は 『大化の改新』」

明久「大化の改新?誰が何をしたのか説明しろ、とか?そんなの小学生レベルの問題で出ないよね?」

雄二「確かにそんな掘り下げた問題は出ないだろう。もっと簡単な問いだ」

秀吉「簡単というと 何年に起きた、とかかのう？」

雄二「おっ。ビンゴだ秀吉。お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺たちの勝ちだ」

確かに勝てるだろうな……満点を取れるという話ならだが。

雄二「大化の改新が起きたのは、645年。こんな簡単な問題は元バカの明久やこの場にいるお前たちすら間違えない」

雄二はそう言うけど、一部の奴らが雄二の方を向いていた顔をいきなり逸らしたり、俯きだしたぞ。まさかとは思うが……。

雄二「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺たちの勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

と説明している雄二なんだが、一部の奴らがさつきからずっと思案しているんだよな。

横溝「なあー坂本」

雄二「ん？なんだ横溝」

横溝「さつきから霧島さんのことを『アイツ』とか『翔子』とか呼んでいるが、どういう関係だ？」

やっぱりその話題かー。このあとの反応が手に取るように分かるぞ……。

雄二「ああ。アイツとは幼馴染だ」

速水「総員、狙ええっ！」

雄二「なっ！？なぜ速水の号令で皆が急に上履きを構える！？」

速水「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

雄二「俺が一体何をしたと！？」

速水「遺言はそれだけか？……待つんだ須川。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

須川「了解です隊長」

やっぱりこうなったか……。このクラスの団結って呆れを通り越して感心してしまいそうだ。

橙夜「とりあえず落ち着け、お前ら。そうしてくれないと話が進まない」

速水「むっ……それもそうだな」

須川「冷静になってみると、確か霧島にはあの噂があつたな」

横溝「むしろ興味があるとすれば……」

福村「……そうだな」

そんな感じに話がまとまり、昼食会に参加した男子を除いたメンバーの視線が一人に集中する。

瑞希「な、なんですか？もしかして私、何かしましたか？」

安心しろ、瑞希。お前は何かもしちゃいない。他の奴らが勘違いしているだけだ。

雄二「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ。アイツは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年主席の座にいる」

確かに一度覚えたことは忘れないほどに頭が良い。覚え直そうと

思えば簡単に直せた。だけど翔子は雄二との思い出を選んだ。それが今回は仇に……ならないと思うな！。

雄二「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺たちの机は

」

『システムデスクだ！』

本当にこのクラスの団結力は色んな意味で凄いと思った。

？「一騎討ち？」

橙夜「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。

今回は代表の雄二を筆頭に、俺、睦月、明久、瑞希、秀吉に康太と首脳陣勢揃いでAクラスに来ていた。

毎回こうして数人で宣戦布告していたら誰も怪我をすることもないのにな。

？「うーん、何が狙いなの？」

現在俺と交渉テーブルについているのは優子。

本来は雄二だったのだが、あえてAクラスとの交渉は俺がすることにした。

橙夜「もちろん俺たちFクラスの勝利が狙いだが？」

確かに訝しむのも無理はないだろう。下位クラスの俺たちが主席の翔子に一騎討ちを挑むこと事態が不自然なのだから、裏があると考えるのが当然だな。

……勿論優子の言う取り、裏があるんだけどな。

優子「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないかな」
橙夜「流石に賢明だな、優子は」

これは予想通り。相変わらず優等生という猫を被った反応だが、交渉の本番はここから。

橙夜「ところで、Cクラスとの試召戦争はどうだった？」

優子「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」

和平交渉どおり昨日Aクラスに攻め込んだCクラス。戦争自体は半日で決着がついて今はDクラス相当の設備に落とされている。

橙夜「Bクラスとやりあう気はあるか？」

優子「Bクラスって……、昨日来ていたあの……」

橙夜「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだのようだが、さてさて、どうなるかね」

優子「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずよね？」

試召戦争の決まりの一つ、準備期間。

戦争に敗北したクラスは三ヶ月の準備期間を経ない限り宣戦布告

をする権利がない。これは敗北クラスがすぐに再戦を申し込んで、試召戦争を泥沼化させない為だ。

橙夜「知っているだろ？実情はどうあれ、対外的には『和平交渉にて終結』ってなっていることを。規約には何の問題も無い。…… Bクラスだけでなく、Dクラスもな」

設備を入れ替えていないからこそ出来る芸当なんだがな。

優子「……それって脅迫なの？」

橙夜「人間きが悪いぞ、優子。ただのお願いってやつだ」

優子「うーん……わかったよ。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

明久「え？本当？」

意外とあっさりとした返事に驚いたようで、会話に参加していなかった明久が声を出していた。

優子「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……」

確かにあれは嫌だろうな。俺も勘弁してもらいたい程だ。

優子「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い五人か七人ずつ選んで、一騎打ちで三勝か四勝した方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

明久「う……」

かかったっ！雄二がどうかは知らんが、この場にいる連中は俺の思惑は知らない。

元々俺は五対五か七対七を望んでいたからな。上手く話が進んでいる。

だからここここは、落ち着いて何事もないように冷静に言葉を返すんだ。

橙夜「なるほど。こっちから俺や睦月、瑞希が代表者として出る可能性を警戒しているんだな？」

優子「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて橙夜たちが絶好調だったら、万が一があるかもしれないしね」

橙夜「安心しろ。こっちからは雄二が出るから」

雄二「橙夜の言うとおり俺が出るつもりだ」

優子「その言葉を鵜呑みにするのは無理だよ。これは競争じゃなくて 戦争だからね」

確かに、俺たちがこれからやるのは戦争だ。そこに約束なんてものは意味を成さないからな。

橙夜「そうか。それなら七対七の条件を呑んでも良いだろう。雄二も良いだろう？」

雄二「ああ、それで構わん」

俺と雄二の言葉に睦月以外が驚いているようだが、まだ話は終わっていない。

優子「ホント？嬉しいな」

優子の笑顔に睦月の顔が少し赤くなったのはきつと気のせいだ。

橙夜「ただし、勝負する内容の決定権は七つのうち四つはこっちが、三つはそっちとさせてもらう」

優子「え？うーん……」

再び悩む優子。勝利条件の四勝分の科目決定権をこっちが持たせるといふ事はかなりの危険を生じさせることになる。その辺を考慮するなら、クラスの交渉役となっている優子が慎重になるのは当然のことだ。

？「……受けてもいい」

明久「うわっ！」

翔子か。大方突然現れたことに明久は驚いて声を出したといったところか。

翔子「……橙夜たちの提案を受けてもいい」

優子「あれ？代表。いいの？」

翔子「……その代わりに、条件がある」

優子「条件？」

翔子「……うん」

頷いて、翔子は俺を見ていた視線を雄二に移し、じっと見つめていた。そして、気が済んだのか俺のほうに向き直って言い放つ。

翔子「……負けたほうは何でも一つ言っ事を聞く」

なるほど。これを盾に雄二に交際を強制するつもりだろう。

康太「……………」（カチャカチャ）

明久「ムツツリー二、まだ撮影の準備は早いよ！というか負ける気満々じゃないか！」

やっぱりこいつらは阿呆だったようだ……。

橙夜「明久と康太が何を考えたか知らんが、お前ら二人はその想像通りにならないことを既に知っているはずだろっに……」

いい加減その手やら思考をやめないと明久は紫だけでなく瑞希や島田嬢に、康太は須藤嬢にお仕置きされるぞ……。

優子「代表が良いみたいだから、七対七の一騎討ち七回勝負で科目選択権は私たちAクラスが三つ、橙夜たちFクラスが四つで、負けたほうが一ついう事を聞かって事でいいよ」

橙夜「それじゃ交渉成立だ」

翔子「……勝負はいつ？」

橙夜「だそうだが雄二、どうする？」

雄二「そうだな。十時からでいいか？」

翔子「……わかった」

橙夜「これで交渉は成立した。一旦教室に戻るぞ」

明久「そうだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね」

そうして交渉は終了し、Aクラスを後にする。

これで舞台は整った。後は時間ときが来るのを待つだけだ。

S i d e . e n d

第八問目 悪逆非道の報いとAクラス戦前交渉（後書き）

裂「作者こと裂やんと今回は八神 迅さんリクエストの
ラダラ」

シ「前回に引き続いて私、神儀紫稀と
「ダッ！（裂やんが逃亡する音）」

紫「明久のヒロイン予定の私、神楽紫と
「ガシッ！（そんな裂やんを紫稀が捕まえる音）」

燐「秀君のヒロインの私、桜儀燐の4人でお送りします！」

シ「裂やんは逃げんなよ」

裂「は、放せ！私を放すんだ、紫稀！」

紫「あら？どうして逃げるのかしら？」

燐「やましいことがないなら逃げる必要はないよね？」

裂「……………」（ダラダラ）」

紫「それじゃ、弁解があるのなら聞こうかしら」

裂「えつとですね……………」

燐「うん？」

裂「前はキノコを戦死させたところで区切りが良かったもので…」

紫「それならしょうがないわね」

裂「あれ？許してくれるんですか？」

燐「うん、その事に関しては許してあげるよ。だけどね……」

裂「へっ……！？」（ダラダラ）

紫「だけど、今回も出ていないのよね？」

裂「ひっ!？」

燐「そうそう、今回も出ていないんだよね。だから」

裂「く、来るんじゃない!」

裂「やんはログアウトと念じた。

……しかし、ログアウトは出来なかった。

紫「燐」「OHANASHIしましょうか（しよつよ）」「」

裂「い、イヤアアあああああああああああああああああああああああああ
あああ!？」

シ「わ、私は何も見ていない……見ていない……っと、恐怖に震えている場合じゃなかった」

シ「私以外の三人が少し離れているが話を続けなとな」

シ「今回の原作との相違点は根本、もといキノコの格好と一騎討ちの勝負回数だな」

シ「次回からはいよいよ原作第一巻の目玉？のAクラス戦開始だ」

シ「誰と誰が戦うかを予想してみるといいだろう」

紫燐「「ただいまー」」

シ「裂やんはどうしたんだ？」

(服にある返り血のような真っ赤な染みには突っ込まんぞ！)

紫「じっくりとOHANASHIしたから今頃じっくりと眠っているとと思うわ」

燐「そうそう。1話分はここに来ないと思うよ」

シ「そ、そうか……。じゃ、次回の後書きは今回退場した裂やんの分も入れて出て欲しい4人を以下から選んでくれ」

神楽橙夜 神楽睦月 神楽紫 桜儀燐 吉井明久

工藤愛子

坂本雄二 霧島翔子 土屋康太 須藤結子 木下秀吉

木下優子

姫路瑞希 島田美波 久保利光 神儀紫稀 速水劉太

清水美春

藤堂カヲル

西村宗一

福原慎

高橋洋子

紫「オリジナルバカテストに関しては出すに1票入っているわ」

燐「引き続きどっちかが5票になるまで続けるみたいだからよろしくね」

シ「そういえば忘れていたんだが、感謝コーナーやってない」

紫「確かにそうね。それじゃ今回からやりましょう」

燐「そうだね。えーと……」

シ「ポテヤマ様、もみじ様、八神 迅様。感謝です」

紫燐「「ありがとうございます」「」

シ「それじゃ、次回もよろしく」

紫「また次回ね」

燐「またね」

第九問目 一騎打ち七回勝負形式試召戦争Aクラス戦、開始（前書き）

【バカテスト】 生物

問 以下の問いに答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

木下優子の答え

『？ 睦月（訂正） 脂質？ B L 本（訂正） 炭水化物？ タンパク質？ ビタミン？ ミネラル』

教師のコメント

流石は木下さんです。 ですが、消された部分がとても気になります。

神楽睦月の答え

『？ 優子？ 優子の笑顔？ 橙夜兄？ 紫？ 橙夜兄の作る食べ物』

教師のコメント

君が木下さんのことを好きだという事がとてもわかりました。

吉井明久の答え

『？ 紫（何故か思い浮かびました）？ 橙夜作のお弁当？ 睦月作のお弁当？ 紫作のお弁当？ 燐作のお弁当』

教師のコメント

君たちは交代制でお弁当を作っているんですね。 それと自分の気持ちに早く気付けるといいですね。

神楽紫の答え

『？明久？明久の世話？橙夜兄さん？睦月？燐』

教師のコメント

あなたが吉井君やご家族のことを好きなのがよくわかりました。

土屋康太の答え

『？エロ？本能？夢？希望？結子』

『初潮年齢が十歳未満のときは早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに十八歳になっても初潮がないときは原発性無月経といい……』

教師のコメント

？と？の答えで色々と台無しです。それと保健体育のテストは一時間前に終わりました。

須藤結子の答え

『？康君？康君？康君？康君？康君？康君』

教師のコメント

土屋君と結ばれるといいですね。先生は応援しています。

「やっと僕にも活躍の場が！」by吉井 明久

第九問目 一騎打ち七回勝負形式試召戦争Aクラス戦、開始

Side・睦月

? 「では、両名共準備は良いですか？」

? 「ああ」

? 「……問題ない」

今日はここ数日の戦争で何度も世話になっている、Aクラス担任で学年主任の高橋女史が立会人を務める。今日も知的な眼鏡とタイトスカートから伸びる脚がとても綺麗だと思う。

睦月「ッ!？」

何か今、背筋に悪寒が……。

えーと発信源はと……えーと、優子か？俺を睨んでるみたいだからまず間違いないな。

睦月「そんなに俺を睨んでどうしたんだ？優子」

優子「なんでもないわっ!」

俺が聞いてみるとそう言って顔を背けた。

? 「(……この鈍感め)」

睦月「橙夜兄、何か言ったか？」

橙夜「なんでもない。気にするな」

一体なんだっただ……？

そうそう何故優子がいるか説明していなかったな。
と言うより正しくは優子がいるんじゃないやなくて俺たちがいるんだが
な。

ここはAクラスの教室だ。一騎討ちの会場となっている。腐った
畳のFクラスよりは断然こっちの方がいいしな。

高橋「それでは一人目の方、どうぞ」

優子「アタシから行くよっ」

睦月「なら、俺が出よう」

Aクラスからは優子が出て、Fクラスからは俺が出る。

Fクラス側はどういう順番で出るかは決めてはいないが、誰の相
手をするかは決まっている。

つまり優子が出たら俺がでるって感じにな。

高橋「教科はどうしますか？」

高橋女史が教科を聞いてくる。

睦月「それでは数学で。優子もいいよな？」

優子「ええ、それでいいわ」

四つの科目選択権の方も誰が指定するかは決めてある。雄二と康
太の二人は確定なんだ。

雄二は翔子との日本史勝負だし、康太はさ……保健体育以外は壊
滅的だからな……。

それで残った選択権を俺ともう一人がもらったってわけだ。あと
一人が誰かは予想でもしてみてくれ。

優子「ねえ睦月」

睦月「なんだ？」

優子「本気でやってね？」

睦月「勿論だ。例え優子が相手でも俺は本気でやる。だから数学を選ばせてもらった」

優子「睦月って音楽の方が得意だった記憶があるけど、そう言うならそれでいいわ」

睦月「確かに音楽も得意だけど同じくらい数学も得意だからな。それに」

優子「それに？」

睦月「優子との勝負を楽しみたかったから数学にした。だってお前音……」

優子「私は何？」

睦月「いえ。何でもありません！」

こ、怖かった……。音楽が苦手って言おうとしたら目が笑ってない笑顔をされたぜ。危つく魂と肉体がさよならするところだったぜ。

優子「何か今、私に対して失礼なことを考えなかった？」

睦月「め、滅相もございません！」

鋭すぎる！もしかして優子はニュータイプなのか！？

高橋「そろそろ召喚を開始してください」

おっと、思考が変な方に向かっていたようだ。

優子「あ、はい。試獣召喚」

睦月「それじゃ、試獣召喚」

俺たちの喚声と共にお互いの召喚獣が姿を現す。
俺のは前見た通り紺色の剣道着に二本の日本刀。
対する優子は、瑞希と同じような西洋鎧にランス。
二体とも当然のように腕輪をしている。

『どっちも腕輪をしてるぞ！』

『400点超え確定！？』

先に優子の方の点数が表示された。

『Aクラス 木下優子』

数学 428点』

睦月「流石は優子だな」

優子「そう言う睦月だって腕輪してるってことは400点超えてる
ってことじゃない」

睦月「そりゃそうだ。久々にテストを真面目に受けたからな」

そして遅れて俺の点数が表示される。

『Fクラス 神楽睦月』

数学 863点』

『なっ！』

『本当にあいつはFクラスなのか！？』

『教師よりも点数が高いぞ！』

863点つてことは数学の最高点更新か？

優子「なんなのよその成績は！？」

睦月「これが俺の本気ってやつだよ」

優子「本気でそんな点数取れるなんて聞いてないわよ！……って、確か音楽も同じくらい得意って言ってたわよね？」

睦月「確かに言ったな」

優子「という事は、音楽も本気で受けたら同じくらい取れるってこと？」

睦月「そう言うことだな。確か点数表を持ってたな。えーと……」

ズボンのポケットに手を突っ込んで点数表を取り出して確認する。

睦月「今回の音楽は849点だった」

優子「なっ！……もう良いわ。お喋りはやめて、そろそろ勝負を始めましょう」

睦月「そうだな。今回の戦争が終わったら優子に言いたいこともあるし、なっ」

そう言っつて召喚獣を操作して右手の刀で優子の召喚獣に斬りかかる。

優子「それっていった、キャッ！」

聞き返そうとした優子は慌てて持っていたランスでそれを防いだ。

優子「ちょっと！最後まで言わせなさいよ！」

そうは言っけどさ……。

睦月「勝負は召喚獣を召喚した時から始まっているんだ。さっきまで喋ってたのがおかしいんだから、な」

優子「た、しかに、そう、だけ、ど、聞き、返しても、いい、じゃ

ない！」

喋りながらも俺は攻撃の手を休めずに左右に持つ二本の刀で優子の召喚獣に斬りかかり続ける。

優子の方も声を出しながらそれをランスで防いだりかわしたり、隙を見て突き返す。

『Aクラス	木下優子	VS	Fクラス	神楽睦月
数学	375点	VS		815点』

お互い50点程しか消費していないな。

優子「そろそろ腕輪を使わせてもらおうわ！」

優子がそう言うと俺の召喚獣に向かって炎の球が飛んできた。

俺は召喚獣を横に飛ばしてそれをかわす。

睦月「優子の腕輪の能力は炎系か」

優子「その通りよ。名前は『^{フレイム}火炎』。点数を消費して炎を飛ばすことも出来るし、こんな風に武器に纏わせることも出来るの」

優子が言った後、優子の召喚獣が持つランスの表面に炎が現れた。

優子「威力の方も消費点数に応じて高くなったりするけどね。それじゃ、説明も終わったから、勝負再開よ！」

今度は優子が炎を纏ったランスで突いてきたり横薙ぎしたりしながら攻めてくる。

それを俺は先ほどの優子のようにかわしたり、刀で受け止めたり、時には受け流したりする。

『Aクラス 木下優子 VS Fクラス 神楽睦月
数学 218点 VS 538点』

睦月「お互い結構点数が減ってきたな」

優子「未だに500点以上あるくせに何言ってるのよ。それにそっちは腕輪を使っていないじゃないの」

睦月「俺の腕輪は使うタイミングが難しいんだよ」

優子「そう。ならそのまま戦死するといいわ!」

優子の召喚獣が腕を揚げると腕輪が発光し、頭上に直径40cm程の大きな炎の球が現れた。

優子「150点を消費して作った炎の球よ。いくら500点あっても耐え切れないと思うわ。じゃあ、ね!」

優子が宣言した直後、炎の球が俺の召喚獣に迫る。

睦月「『……無効化』」
ナリファイケーション

俺がそう唱えると同時に召喚獣は炎に包まれた。

優子「これで、私の勝ちね」

睦月「そうでもないぞ、優子。ディスプレイの点数を見てみるといい」

優子「え?」

自分の勝ちだと思っている優子にそう告げる。

『Aクラス 木下優子 VS Fクラス 神楽睦月』

数学 68点 VS 338点『

優子「200点しか減っていない？……もしかして！」

優子は気付いたようだな。

睦月「優子の想像通りだと思うぞ」

優子「腕輪の能力を使ったのね」

睦月「そつだ。今度は俺の腕輪の能力の説明だな。名前は『無効化』ナリフイケーション。200点を消費することで30秒間あらゆるダメージを無効化する」

優子「無効化って……そんなの反則じゃない！」

睦月「そつでもない。一度の戦争で使用できるのは2回までだからな」

優子「それって通常の戦争でなら使いどころが難しいと思うけど、今回のような一騎討ちじゃある意味最強じゃないのよ！」

まあ、そうなんだけどな、と喋りながら俺は苦笑した。

睦月「それじゃ、30秒経つ前に終わらせてもらっ」

優子「ちよつと待ちなさいって、キヤア」

優子が何か言っていたがあえて無視して優子の召喚獣の左胸に刀を刺した。

『Aクラス 木下優子 VS Fクラス 神楽睦月
数学 0点 VS 338点』

高橋「勝者Fクラス」

睦月「俺の勝ちだな」

優子「負けたわ……」

睦月「そう落ち込むなよ、優子」

優子「そういわれてもね……それと話したいことって？」

睦月「それは今回の戦争が終わってから言って言っただろ」

優子「ならなんの話しか楽しみにしながら待つわ」

かなり勇気が必要の話だからな。落ち着いた場所で二人つきりて話したいし。

橙夜「お疲れさん」

睦月「あ、橙夜兄。ありがとう」

雄二「よくやったぞ、睦月。まずは俺たちの一勝だ」

明久「結構きつかったみたいだね。元々の点数より半分以下になっ
てるし」

睦月「まあ、優子も400点を超えてたからな」

間違いなく腕輪の能力が『無効化』ナリフイケーションじゃなかったら、最後の炎の
球で負けてただろうしな。

高橋「では、次の方どうぞ」

さて、向こうは誰が出るんだ？

？「じゃ、私が行くわ」

って、紫か。向こうが紫という事はこっちからは

雄二「それじゃ頼んだぞ、明久」

明久「分かってるよ。睦月が勝ったんだから僕も頑張らなくちゃね」

明久だ。

睦月「明久……勝てよ」

明久「そのつもりだよ」

そう言っただけで俺と明久は左手でハイタッチした。

Side・end

Side・明久

Aクラス対Fクラスの一騎打ち七回勝負の一戦目は睦月が勝った。

高橋「では、次の方どうぞ」

紫「じゃ、私がいくわ」

向こうの二人目は紫。

雄二「それじゃ頼んだぞ、明久」

明久「分かってるよ。睦月が勝ったんだから僕も頑張らなくちゃね」

科目選択権はAクラス……つまり紫にある。

紫の得意教科は地理歴史科目。それに対抗できるのは点数の高い
橙夜か睦月、それに歴史科目が得意で操作技術の高い僕だけ。

睦月「明久……勝てよ」

明久「そのつもりだよ」

睦月とハイタッチをして僕は前に出た。

高橋「教科はどちらが選びますか？」

明久「紫が選んでいいよ」

高橋先生の質問に僕はそう返した。

紫「なら高橋先生、世界史をお願いします」

高橋「世界史ですね。わかりました」

やっぱり紫は世界史を選んだね。

明久「本当に世界史でいいの？世界史は僕の得意教科でもあるんだよ？」

紫「そんなの知っているに決まっているじゃない」

知っていて選ぶんだね。

高橋「それでは召喚してください」

『試獣召喚！』
サモン

そして姿を現した召喚獣。

僕のはB、Dクラス戦のときと変わらず改造学ランと木刀。

紫のは白の弓道着に手には召喚獣の半分くらいの大きさの弓と腰には小太刀が二本差している。

明久「やっぱり紫は弓なんだね」

紫「ええ。そういう明久の装備ってアレよね……」

明久「しょうがないんだよ。観察処分者の召喚獣は物理干渉能力があるから、下手に刃物とか持てないんだよ」
紫「そういえばそうだったわね」

僕だつてまともな装備が欲しいよ……。

明久「そろそろ点数が表示されるかな？」

紫「私のほうはまだだけど、明久の方は表示されたわよ」

点数表はもらつてるんだけど確認してないんだよね。えーっと……

『Fクラス 吉井明久

世界史 619点』

600点超えだね。Bクラス戦の時よりも高くなってるね。

『600点超え！』

『さつきから教師レベルの点数って本当にあいつらはFクラスなのか！？』

紫「619点ね。結構高いわね」

明久「そう言う割には焦ってるようには見えないね」

紫「それはそうよ。何となく予想はしてたわ」

明久「そうなの？どうして？」

紫「明久、それは愚問よ。あなたに勉強を教えていたのは私たちよ？そして地理歴史科目の担当は」

紫が喋っていると同時にディスプレイに紫の点数が表示される。

『Aクラス 神楽紫

紫「この私よ」

『7、775点……』

『教師レベルの点数持ちがなんでこんなにいるんだよ！』

『一体どうなってるんだよ！』

明久「流石は紫って感じだね。始める前に準備するよ。『リーインフォースメント武装強化』」

僕が唱えると木刀は形を変えた。

紫「腕輪の能力ね。それでその剣の名前は何？」

そつえば紫は僕の腕輪のことを知らないだったっけ？

明久「腕輪の能力であることは確かだけど、ちょっと違うんだ。と
りあえずこの剣の名前はアスカロン。ゲオルギウス、英語名では聖
ジヨージがドラゴンを殺した時に使ったとされる伝説上の剣だよ。
と言ってもこれはあるラノベの聖剣アスカロンなだけだね」

紫「ああ、あのラノベね。橙夜兄さんに借りて読んだけど結構面白
かったわね」

橙夜は実の妹をどうしたいんだろう……。

紫「それで、腕輪の能力が違うって言うのは？」

明久「あ、うん。まず、この腕輪の名前は『リーインフォースメント武装強化』。本来は点

数を消費して装備を強化するものなんだけど、一度に150点以上
を消費した場合はこんな感じに形状が変化するんだ」

紫「確かに私が推理した能力とは違うわね」

『Aクラス 神楽紫 VS Fクラス 吉井明久
世界史 775点 VS 419点』

明久「それじゃあ、お喋りはこれくらいにしてそろそろ始めようか」
紫「ええ、始めましょう」

そう言っつて僕は召喚獣を操作してアスカロンを構えながら紫の召喚獣に突っ込んでいく。

紫「腕輪を使用して200点消費しても400点超えていると速いわね」

それを見ながらも紫は焦らずに弓に番えた矢を放ってくる。数は二十本以上。

僕は召喚獣のスピードを少し落として全ての矢を斬り落とす。

『Aクラス 神楽紫 VS Fクラス 吉井明久
世界史 625点 VS 331点』

しかし、フィードバックによる痛みで気がつくくと、僕の召喚獣の腕や脚に矢が三本刺さっていた。

明久「ッ！全て斬り落としたはずなんだけど、紫の腕輪の能力かな？点数も消費しているみたいだし」

紫「ええ、そんなところね。私の腕輪は『^{アブソリュート}必中』。150点消費して放った矢を必ず当てる。腕輪使用时には最大で三本しか同時に射出出来ないのだけだね。今のは最初に放った矢の弾幕に紛れて腕輪

を使った矢を放ったってことよ」

明久「なるほどね。視界を狭められた状態で放たれると厄介以外にないね。それなら」

僕はフィードバックの痛みを耐えながら操作して再び紫の召喚獣に迫り、アスカロンを振り落とす。

明久「矢を放たせる余裕を与えなければいいだけだよ！」

紫「くっ！」

『Aクラス 神楽紫 VS Fクラス 吉井明久
世界史 572点 VS 331点』

そこからは僕がアスカロンで紫の召喚獣に斬りかかり続けたり、紫からの攻撃をかわしたりしながら防いでいた。

『Aクラス 神楽紫 VS Fクラス 吉井明久
世界史 356点 VS 247点』

紫の方は手に持つ弓で防いだり腰に差していた小太刀も使いながら攻撃して来る。

『Aクラス 神楽紫 VS Fクラス 吉井明久
世界史 85点 VS 106点』

ここで僕たちは跳んで一度距離をとる。

紫「流石は観察処分者の操作技術と言ったところかしらね、明久」

明久「そんなところだね。紫の方はそろそろ厳しいんじゃないの？」

紫「確かにそうだけど、明久だってフィードバックがきついでしょ

？」

明久「正直に言ってかなり痛いよ。だから、これで最後にしよう」
紫「そうね。そうしましょう」

僕はアスカロンを構えて紫の召喚獣に近付く為に疾走する。

紫は弓に矢を番えて一度に二十本以上の矢を放つのを繰り返す。

その矢の雨を僕はかわし続け、かわせない矢をアスカロンで斬り落としてながら前に進む。

そうして次第に僕と紫の召喚獣の距離は近くなる。

紫は矢を放つよりも小太刀で対応した方が早いと判断し、小太刀を二本持って地を駆ける。

それに対して僕は変わらずアスカロンを構えながら疾走する。

そして二つの影は一瞬重なり、再び離れた。

一つの影は崩れ、一つの影は立ち続けた。

立ち続けていた影は

『Aクラス	神楽紫	VS	Fクラス	吉井明久
世界史	0点	VS		7点』

僕の召喚獣のものだった。

高橋「しよ、勝者、Fクラス！」

『吉井が勝ったー！』

『熱い戦いだっただぞ！』

『よくやったぞ、吉井！』

流石の高橋先生も初戦からFクラスが二連勝したことに驚いて
いるみたいだ。

紫「負けちゃったわね。明久は強いわね……」

明久「そう言う紫だって十分強かったよ。それじゃそろそろ戻ろう
か」

紫「そうね。次の人に迷惑になるから早く戻ることにはしましょう」

そう言うって僕と紫はそれぞれのクラスメイトが待つ場所に戻った。

Side・end

Side・橙夜

AクラスとFクラスの珍しい一騎討ち七回勝負形式の試召戦争。

一人目の睦月と二人目の明久は無事に勝った。

そして明久が勝てたのは良かった。

これであと二勝するか、一勝二敗一分すれば俺の目的は達成され
る。

高橋「では、三人目の方どうぞ」

康太「……………（スック）」

高橋女史の声を聞いて、康太が立ち上がる。

？「それじゃ、私が行きます」

そう言ってAクラスから出てきたのは康太の幼馴染の須藤嬢。
康太が出るといふなら相手は須藤嬢になるとは思ってはいたが、
本当に来るとわな。

高橋「教科は何にしますか？」

康太「……………保健体育」

結子「やっぱり科目選択権は康君のためにあつたみたいだね」

確かに科目選択権の四つの内の一つは康太の為だし、また一つは
雄二の為だ。

保健体育以外壊滅的な奴に科目選択権与えなくてどうするよ？っ
て感じだからな。

結子「康君が相手ならお喋りは必要ないよね。試獣召喚」^{サモン}

康太「……………試獣召喚」^{サモン}

須藤嬢の召喚獣は優子と同じで西洋鎧にランスに腕輪か。ランス
の表面が凍っているという事は優子の『^{フレイム}火炎』の腕輪の氷版って感
じなのか？

康太の召喚獣の方は忍者装束に小太刀の二刀流に腕輪。流石は『^{ムッシュリーニ}寡黙なる性識者』。保健体育で腕輪持ちか。

須藤嬢は、召喚獣をランスを構えながらかなりのスピードで康太
の召喚獣に詰め寄る。

結子「それじゃ、勝たせてもらっね。康君」

そう言っって槍を斜めに振るっ。

明久「ムツツリーニっ！」

なにやら明久が慌てているようだが、あの程度なら問題ないだろう。

康太「……………加速」

康太が呟くと康太の召喚獣の腕輪が輝き、その姿がブレた。

結子「……………え？」

流石の須藤嬢も康太の召喚獣が射程外にいることに驚き、戸惑っているようだ。明久も状況が分かっていない顔をしているみたいだし。

まあ、康太の召喚獣の腕輪の能力が加速だと分からなきゃ当然といえば当然だが。

康太「……………加速終了」

再び、康太がポツリと呟く。

一呼吸おいて、須藤嬢の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

『Aクラス	須藤結子	VS	Fクラス	土屋康太
保健体育	439点	VS		572点』

康太の保健体育が凄いのは知っているが、須藤嬢も中々だな。

高橋「し、勝者、Fクラス」

高橋女史も動揺を隠せないか。自分が担任の学年最上位クラスが

学年最下位クラスに一勝も出来ずに三連敗中なんだから仕方が無いがな。

それでもしつかりとコールが出来るなんて流石としか言えないな。

結子「やっぱり、康君は強いね」

須藤嬢もこの結果は予想できていたみたいだな。

康太「……………保健体育で俺に勝とうとするのは、結子にはまだ早い」

結子「うん、そうだね。でも、いつか、リベンジするからね」

康太「……………その時も振り返り討ちにするだけ」

うん、何かあそこで桃色空間が発生しているな。FFF団が邪魔になりそうだからそろそろ現実に戻ってきて欲しいんだがな！

まあ、康太のお陰であと一勝でFクラスの勝利だ。

Aクラスの四人目は誰が出るのか楽しみだ。

Side・end

第九問目 一騎討ち七回勝負形式試召戦争Aクラス戦、開始（後書き）

橙「さて、今回は後書き出演メンバーのリクエストがなかった」

睦「つまり適当にキャラが登場するというわけだな」

シ「しかも前回、紫と燐の二人に裂やんはOHANASHIされて退場中だ。次回には復活しているだろうさ、前例的に」

橙「今回は一騎討ち七回勝負の内三人目まで終了だ」

睦「組み合わせはもみじ様が予想したとおりに進んでいるんだよな」

シ「睦月×優子、明久×紫、康太×結子だからな」

燐「という事は、私の相手は秀君？」

木下秀吉（以降：秀）「そういうことになるじゃろうな」

姫路瑞希（以降：瑞）「それじゃ、私の相手はどうなるんですか？」

橙「瑞希の相手は久保になるだろうな、原作的に」

瑞「なるほど」

睦「そういえば出番的に優子、明久、康太は原作通りなんだよな、相手が違うだけで」

シ「確かにな。でも、最初は優子と康太の順番は違ったらしい」

睦「へえー。どうして順番を変えたんだ？」

愛「なんでも、最初に三連勝させようと思ったかららしいよ」

翔「……詳しくは次回、裂やんに聞くべき」

橙「そうだな。それじゃ、今回はこれくらいで、次回の後書きに出演して欲しい3人を選んでくれ」

神楽橙夜 神楽睦月 神楽紫 桜儀燐 吉井明久

工藤愛子

坂本雄二 霧島翔子 土屋康太 須藤結子 木下秀吉

木下優子

姫路瑞希 島田美波 久保利光 神儀紫稀 速水劉太

清水美春

藤堂カヲル 西村宗一 福原慎 高橋洋子

睦「オリジナルバカテストの件について投票がないからもうやることに決めたらしい」

明「そうなんだ。それじゃ、感謝コーナー」

紫「もみじ様感想感謝です」

橙「裂やんが手紙をよこして来た。どうやってよこしたかはご都合主義って奴だから気にしないでくれ」

『もみじ様が言うとおり、小学生の時に大化の改新で中臣鎌足と中大兄皇子が蘇我入鹿をつて習った覚えがある。』

原作者はそう習わなかったのか？うん、謎だ』

橙「らしいんだが」

睦「どうでもいいな」

明「それじゃ、今回はこれくらいで」

紫「また次回も」

愛「よろしく」

燐「おねがいしまーす」

第壹零問目 一騎討ち七回勝負形式試召戦争Aクラス戦、終結（前書き）

【バカテスト】 生物

問 以下の問いに答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希、久保利光の答え

『？脂質？炭水化物？タンパク質？ビタミン？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さんと久保君。優秀ですね。

木下秀吉の答え

『？演技？演劇？舞台？燐？家族』

教師のコメント

木下君は演劇部のホープでしたね。桜儀さんとの仲はとてもよいよ
うなので微笑ましいです。

桜儀燐の答え

『？秀君？秀君の笑顔？秀君の演技？家族？実験』

教師のコメント

桜儀さんは家族よりも木下君のほうが大切なようですね。

坂本雄二の答え

『？脂質？炭水化物？タンパク質？ビタミン？ミネラル』

教師のコメント

坂本君が正解するなんて珍しいですね。

霧島翔子の答え

『？雄二？雄二？雄二？雄二？雄二』

教師のコメント

霧島さんと坂本君は幼馴染とは聞いていましたが、これは一体……？

神楽橙夜の答え

『？愛子？家族？本？昼寝？食事』

教師のコメント

お兄さんの方の神楽君はたまに珍解答をしますね。

工藤愛子の答え

『？放送禁止？放送禁止？放送禁止？放送禁止？橙夜君作のシュークリーム』

教師のコメント

あなたは一体、人生に何を求めているんですか……。

「ワシじゃってFクラスの一員として頑張るのじゃ！」by木下秀吉

第零問目 一騎討ち七回勝負形式試召戦争Aクラス戦、終結

Side・橙夜

AクラスとFクラスの一騎討ち七回勝負形式の試召戦争も既に四人目、折り返し地点だ。

高橋「……零対三ですね。次の方は？」

流石の高橋女史もかなり動揺しているようだ。

Fクラスが無敗でAクラスの喉元に剣を突きつけているような状態だから無理もないだろうが。

雄二「それじゃ、姫路。頼む」

瑞希「あ、は、はいっ」

どうやら雄二はここで勝負を決めたらしい。
分からなくもないがな。

？「それなら僕が相手をしよう」

Aクラスから出てきたのは やはり久保利光。
瑞希が振り分け試験で途中退席したことで二学年の次席の座にいる。

高橋「科目はどうしますか？」

この勝負の科目選択権は一応Aクラス側だ。

久保「総合科目で……と行きたいところですが、現代国語でお願いします。姫路さんもいいかい？」
瑞希「構いません」

ふむ……。恐らく余裕があつたなら総合科目で挑んだのだろう。運も実力のうちとは言つても、どっちが本当の次席か決める為に勝負したかつたのだろうな。

だけど状況がそれを許さなくなった。ここで危ない橋を渡って負けたらAクラスがFクラスよりも下となるわけだからな。

高橋「それでは……」

『試験召喚！』
サモン

高橋女史がフィールドを展開し、瑞希と久保が召喚獣を喚び出した。

瑞希の召喚獣はB、Dクラスの時と同様に西洋鎧に大剣と腕輪。

久保の召喚獣は鎧袴に二振りの大鎌と腕輪。

どちらも400点超え確定だな。

さて、点数はどうなつたるかな？

□ Aクラス	久保利光	V S	Fクラス	姫路瑞希
現代国語	462点	V S		439点

23点差で久保のほうが有利っぽいな。

『23点差で点数は久保が勝つてるぞ！』

『どちらも腕輪持ちだから能力次第ではどっちが勝つか分からないわ！』

『二人とも十分点が高いんだが、さっきの三人の点数を見た後だと

何だかな……」

『ああ、その気持ちは俺も分かるぜ』

久保「やはり姫路さんの点数は凄いな」

瑞希「そう言う久保君の方が点数が高いじゃないですか」

久保「一応これでも文系科目は得意だからね。姫路さんこそ、どうやってそこまで点が取れるんだい？」

瑞希「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

人の為につてところに該当するのは明久くらいだと思っただがな……。
他の連中は設備に不満があるからだし、雄二や俺は自分の為にならなくてただだからな。

久保「Fクラスが好き？」

瑞希「はい。だから、頑張れるんです」

久保「そうか……。でも、僕もAクラスの為にも負けられないんだ」

流石はAクラス男子の代表格つてところか。

立派にクラスを背負ってるじゃないか。

瑞希「そろそろ、行きますっ！『熱線』！」

久保「（……交換）」

瑞希が腕輪の能力で光線を久保の召喚獣に向けて奔らせる。

光線が当たる直前、久保が何かを呟いたと思ったら、瑞希と久保、それぞれの召喚獣の立ち位置が入れ替わった。

結果、瑞希の召喚獣が放った光線はその光線を放った瑞希の召喚獣に当たった。

瑞希「い、一体今何が……？」

「おい。今何があったんだ！」

「俺には久保と姫路の召喚獣の場所が入れ替わったようにしか見えなかったぞ」

外野のほうも困惑しているようだ。

橙夜「久保。それがお前の腕輪の能力か？」

久保「確か君は、お兄さんの方の神楽君だったね。君の言う通り、今は僕の腕輪の能力だ。名前は『交換^{スイッチ}』。200点消費することで対象の召喚獣と場所を入れ替えることが出来るんだ」

場所の入れ替えという事は敵に囲まれた時や飛び道具相手なら有効だな。

『Aクラス	久保利光	VS	Fクラス	姫路瑞希
現代国語	262点	VS		74点

点数の方も約200点差になったか。

今回は瑞希自体の点数の高さが裏目に出たな。

腕輪の威力は消費点数だけでなく、使用者本来の点数も関係している。

瑞希の腕輪の『熱線』を例とするならば、使用者本来の点数が400点と600点なら、同じ消費点数でも600点の方が威力が高い。

様は消費点数と本来の点数は比例するという事だ。計算式は威力^y = 消費点数^x 召喚時の点数だな。

と言っても、Aが10でXが400でもYが4000になるわけ

ではないんだがな。

高橋「勝者、Aクラス」

『Aクラス	久保利光	V S	Fクラス	姫路瑞希
現代国語	143点	V S		0点

あれ？気付いたら勝負が終わってた。

瑞希「すいません、負けちゃいました……」

雄二「気にするな。こっちはまだ橙夜が残っているし、俺もいるからな」

雄二に、お前はきつと勝てない、って言ってやりたい。

高橋「これで一対三ですね。では、五人目の方どうぞ」

久保が勝ったことで高橋女史も少し緊張が和らいだようだ。先ほどまでの戸惑いはなくなっているし。

？「それじゃ、私が行きます」

Aクラスからは燐が出てきた。それならFクラスから出るのはいっただけ。

橙夜「という事らしいから、頼んだぞ、秀吉」

秀吉「うむ、精一杯頑張るのじゃ」

そう言って、秀吉は前に出た。

S i d e ・ e n d

S i d e ・ 秀吉

Aクラスとの一騎討ち形式の試召戦争は、Fクラスが三勝して、王手をかけた状態じゃ。

高橋「これで一对三ですね。では、五人目の方どうぞ」

燐「それじゃ、私が行きます」

Aクラスの五人目はいよいよ燐じゃ。

燐が相手ならば、ワシが出なくてはならぬ。

橙夜「という事らしいから、頼んだぞ、秀吉」

秀吉「うむ、精一杯頑張るのじゃ」

そう言っつてワシは前に出て燐と向き合う。

燐「優ちゃんには睦月、紫には明久を当ててきたときから予想はしていたけど、やっぱり私の相手は秀君なんだね」

秀吉「やはりバレておったのじゃな」

わざとらしすぎたようじゃな。

と言っつても、この組み合わせを考えたのは橙夜と雄二じゃから、ワシには関係ないのじゃがな。

高橋「科目はどうしますか？」

秀吉「ならば、地理で頼むのじゃ」

燐「秀君って結構いじわるだね。私が地理歴史科目、不得意だと知っていて選んだでしょ？」

秀吉「それはそうじゃ。そうしなければ、ワシが燐に勝てる見込みは一つもないのじゃ」

燐「それもそうだね。じゃあお互い頑張ろうってことで。試験召喚」

秀吉「そうじゃな。ワシも試験召喚じゃ」

そして姿を現した召喚獣。

ワシのは袴に薙刀。当然のように腕輪はしておらぬ。

燐の召喚獣は軍服に赤いコートを纏い、両手には銃を持っておる。

燐「秀君のは薙刀だから近中距離ってところかな？」

秀吉「そう言う燐のは銃じゃから中遠距離じゃな」

そろそろ点数が表示される頃じゃな。

『 Aクラス	桜儀燐	VS	Fクラス	木下秀吉
地理	284点	VS		149点

『桜儀って地理は苦手科目って言ってなかったか？』

『それでもAクラス上位の点数ってのは凄いな』

『木下の方もCクラス相当の点数だ』

燐「秀君、その点数どうしたの？」

秀吉「うむ、それはじゃな、睦月に勉強を見てもらったのじゃ」

燐「そう言うことかあ。お互い、準備出来たから始めよう」

秀吉「始めようかのう」

ワシは自分の召喚獣を操作して燐の召喚獣に向かって走らせる。

じゃが、それを燐は容易く許さず、銃を使ってワシの接近を防いでいく。

ワシは銃弾をかわして避けたり、薙刀で受けるが、処理しきれず次々と被弾していく。

『Aクラス 桜儀燐 VS Fクラス 木下秀吉
地理 279点 VS 97点』

既にワシの点数は50点も削られておるのじゃ。

ん？ワシは攻撃しておらぬのに燐の点数も減っておるとはどういうことじゃ？

秀吉「燐、何故お主の点数も減っておるのじゃ？」

燐「やっぱり気付くよね。それは私の武器は銃だから。銃弾十発につき1点消費されるんだ」

なるほどのう。それじゃ、既に50発撃ったということになるのじゃな。

じゃが、それが分かってもワシには勝ち目がないのじゃ。

こうなったら勝利は出来ずとも、一矢くらいは報いたいじゃ。

そう思ったワシは、燐の攻撃をもともせず燐の召喚獣に向かって駆けた。

結果、ワシは負けたのじゃ。

『Aクラス 桜儀燐 VS Fクラス 木下秀吉
地理 197点 VS 0点』

高橋「勝者、Aクラス」

じゃが、ワシは満足しておる。
なんとか隣に一撃を与えられたのじゃからな。

Side・end

Side・橙夜

高橋「勝者、Aクラス」

やはり秀吉は負けたか。

期待していなかったわけじゃないが、武器の差が出たな。

しかし、負けたのに随分と晴れ晴れとした雰囲気を出しているな。
何を思ったかは秀吉の自由だから、聞く気はないが。

高橋「これで二対三ですね。それでは六人目の方どうぞ」

六人目と言っても、俺か雄二しか残ってないんだがな。

俺の予想通りなら雄二は負けるだろうから先に行かせるか。

雄二「それじゃ」

橙夜「いや、雄二が行って来い」

雄二「は？なんで代表の俺が先に行かなきゃいけないんだ」

橙夜「別に俺が行こうが雄二が行こうが勝てるつもりなんだから？
だったらどっちが先でもいいだろ」

雄二「だが、しかしだな」

橙夜「自分が先に行つて翔子に負けるのが怖いなら別に俺が行くだけだな」

雄二「なっ！そこまで言われちゃ黙っていらねえ。代表の俺が行つてFクラスを勝利に導いてやるよ！」

橙夜「じゃ、期待してる」

なんかあつさり挑発に乗ってくれた。

雄二に対して翔子の名前は凄い威力だな。

雄二「Fクラスの六人目は俺が出る。Aクラスからは 翔子。お前が来い！」

翔子「……分かつてる。雄二の相手は私がするつもりだった」

そりゃ、初めは両クラスの代表同士の一騎討ちの予定だったからいいんだけどな。

高橋「教科はどうしますか？」

雄二「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ……！

雄二の宣言で、Aクラスにざわめきが生まれた。

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベル。満点確實じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

過去の雄二ならいざ知らず、現在の雄二が満点取れるか不思議だな。

高橋「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」

そう言って高橋女史が教室を出て行く。

それから高橋女史が教室に戻ってくるまで雄二は明久たちと話していた。

高橋「では、六番目の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」

戻ってきた高橋女史はクラス代表の雄二と翔子に声を掛けた。

翔子「……はい」

雄二「じゃ、行ってくるか」

そう返事をして二人は視聴覚室に向かった。

Aクラスの教室に残された俺たちは壁のディスプレイでテストの様子を見ることがになった。

Side・end

Side・雄二

橙夜のわざとらしい挑発に乗って先に翔子と勝負することになった俺。

翔子の名前を出されたときには冷静さを失っていた気がするな。

俺は先に視聴覚室に入った翔子に続いて入り、同じように席に着いた。

教師「では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です。不正行為などは即失格になります。いいですね？」

翔子「……はい」

雄二「わかっているさ」

監督の教師に問題用紙を渡され、注意を促される。

教師「では始めてください」

所詮、小学生レベルの問題だ。神童だった俺ならそんなもん簡単だな。

そう思いながら、裏返した問題用紙を表にした。

□ 次の() に正しい年号を記入しなさい。

() 年 平城京に遷都

() 年 平安京に遷都

() 年 鎌倉幕府設立

() 年 大化の改新

□

これで、俺たちの設備はシステムデスクだ！

……と思っていた時期が俺にもあった。

日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島翔子

97点

V S

Fクラス 坂本雄二

74点

俺は翔子に負けた。

Side . end

Side . 橙夜

雄二と翔子の日本史勝負。

日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島翔子

97点

V S

Fクラス 坂本雄二

74点

結果はやはり雄二が負けた。

Dクラス戦後に日本史を勉強しとけと言ったのに真面目にやらなかったようだ。

高橋「勝者、Aクラス」

雄二と翔子が教室に戻ってきたのを見て高橋女史が宣告。

その直後、Fクラスの面々は雄二に殺到し、問答をしていた。

高橋「これで三対三ですね。最後の一人、どうぞ」

やれやれ、やっと俺の出番だな。

睦月「橙夜兄なら何の問題もなさそうだな」

明久「雄二と違って橙夜なら安心できるよ」

秀吉「負けたワシが言うのもなんじゃが、頑張るのじゃー！」

康太「……………頑張れ（ビツ）」

瑞希「わ、私も負けちゃいましたけど、頑張ってくださいね！」

立ち上がると、一騎討ちに参加した面々に励ましの言葉をかけられた。

雄二「まさかとは思うが、橙夜。お前分かってて先に行かせたな？」

橙夜「当たり前だ、バカ。お前は『元』神童なだけだ。そんなやつが翔子が間違えるのが分かっているも勝てるわけないだろ」

雄二「くっ！……………まあ、いい。後はお前に任せた」

橙夜「お前に任されるまでもない」

雄二と言葉を交わし終え、今度こそ前に出た。

？「Fクラスからは橙夜くんか」。それならボクが出るしかないね」

そう言ってAクラスから出てきたのは愛子。

愛子「Fクラスは知らない人の方が多いと思うから自己紹介するね。

一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

橙夜「まあ、愛子がこの一騎討ち勝負に参加するのは分かっている

んだけど、最初の方に出ると思ってただけだな」

愛子「ボクもそのつもりだったんだけど、他のみんなが先に出ちゃったからね。それにボクの相手は橙夜くんって決まってたしね」

橙夜「決まってたとなると、他の面々も狙ってたって事か？」

愛子「うん、大まかにだけど決まってたよ。優子は睦月くんとやりたいて言ってたし、代表は最初から坂本くんとやることになってたからね。決まってたのは隣ちゃんとか久保くんくらいだよ」

なるほどな。ある意味、こちらのメンバーも予想済みだったわけか。

高橋「それでは、最後の教科はどうしますか？」

橙夜「こっちの科目選択権は四つとも使い切ったから愛子が決めてくれ」

愛子「そういえばそうだね。それじゃ、保健体育でお願いします」

二度目の保健体育。

橙夜「やはり保健体育か。それで来るとは思ってたけどな。試験召喚」

愛子「橙夜くんの苦手科目はないって話だからね、ボクは得意科目を選ぶしかないんだよ。それじゃ試験召喚」と

まあー苦手科目なんて本当にないからな。得意科目については話したことがあるが。

喚び出しに応じて姿を現した召喚獣。

俺のはC、Bクラス戦の時同様に、黒のシャツにズボンにコートを着て、頭には狐の仮面、手には鉄扇。

対する愛子の召喚獣はセーラー服に模様の入った大斧。腕輪もし

ている。

何やら外野が騒がしい。

大方、装備の差を見てAクラスは安堵し、Fクラスは慌ててるんだろつ。

愛子「橙夜くんの点数が何点かは分からないけど、すぐに終わらせてもらっよ」

そう言って笑いかけると同時に腕輪を光らせて、召喚獣を動かした。

大斧に雷光を纏わせ、俺の召喚獣に向かってかなりのスピードで迫る。

愛子「それじゃ、バイバイ。橙夜くん」

そして、斧を振るう。これは避けるのが大変な攻撃だな。だが、避けるつもりはない。

右から向かってくる斧に対して、俺は鉄扇を閉じた状態で斧を突くように右手に持たせて待つ。

愛子の斧が俺の鉄扇の先に当たる直前に言葉を出す。

橙夜「エクスプロージョン『爆破』」

その言葉と共に、鉄扇の先に爆発が起こり、愛子の召喚獣は元いた場所よりも遠くに落下し、その近くに大斧も破損した状態で地面に刺さっていた。

愛子「……え？」

一瞬の出来事に戸惑いの声を上げる愛子。

『Aクラス	工藤愛子	VS	Fクラス	神楽橙夜
保健体育	446点	VS	683点	583点』

『保健体育で600点だっ！』

『ムツツリー二より100点も高いぞ！』

『腕輪で点数を消費したにも関わらず、未だに点数が上だぞ！』

明久「ムツツリー二……君より橙夜の方が点数高いけど、どう？」

康太「……ありえない」

明久と康太が何やら話しこんでいる。

康太の方は驚愕しているが。

愛子「そ、そんな……！この、ボクが……！」

愛子も愛子で床に膝をついている。相当ショックだったらしい。

橙夜「俺の得意科目は政経、数学、国語、英語と言ったが、他は国語、英語より劣るだけで苦手なわけじゃない。つまり俺に死角はない」

『普通で700点弱って得意科目はそれ以上だという事か！』

『一体あいつは何者なんだ……！』

何やら再び騒がしくなった。どうでもいいことなのに。

高橋「神楽君……。いつも、それくらい真面目に試験を受けてくだ

さい。そんなんだから、『幻の入試トップ』やら『幻の学年主席』なんて呼ばれるんですよ」

『なっ！』『幻の入試トップ』って入試のときに6000点オーバーを取ったって噂のあれか！』

『『幻の学年主席』って、俺らが試験を受けた後にそいつだけ再試験を受けてその後に公開されるテスト順位の毎回名無しの主席のことか？』

橙夜「高橋女史、その情報は機密扱いのはずなんですけどね……」

高橋「すいません。つい、うっかり喋ってしまいました」

『神楽と高橋女史が認めたってことは本人ってことか！』

『まさか奴がそうだったとは……』

橙夜「とりあえず高橋女子、宣告を」

高橋「そうですね。最後の勝負は、勝者Fクラス。よって三対四でFクラスの勝利です」

そうして、戦争は終わった。

残ったのは戦後対談のみとなった。

S i d e . e n d

裂「なんとか復活した、裂やんだ」

橙「別に復活しなくても良かったんだがな」

シ「私もそう思う」

裂「生みの親に対して酷いな、お前ら」

睦「諦める。それがお前だ、裂やん」

裂「もういいよ……お前ら二人には姫路の料理を化学兵器食わせてやる……」

橙睦「それだけはやめるー!!」

裂「さて、少しは気が晴れたから本題に入るか」

紫「今回結構早足気味だったけど、何かあったの？」

裂「特に何も無い。繋げ方は無理やりだと思っけど」

燐「ふーん？私は出番あったからいいけどねー」

明「そういえば、没になったネタがあったらしいけど、それって何だったの？」

裂「それは次回の戦後対談後に教える」

橙「そうか」

翔「……Fクラスに負けた。約束が……」

愛「ボクも橙夜くんに負けちゃったなー。700点弱とか卑怯臭いよね」

裂「安心しろ、翔子。屁理屈をこねれば簡単に付き合える。けど、屁理屈をこねなくても橙夜が守らせるから。愛子のはあえてスル―するが」

翔「……それなら安心」

愛「それって酷いよ！」

シ「それじゃ、今回はこれくらいか？次回の後書き出演キャラを3人選んでくれ」

神楽橙夜 神楽睦月 神楽紫 桜儀燐 吉井明久

工藤愛子

坂本雄二 霧島翔子 土屋康太 須藤結子 木下秀吉

木下優子

姫路瑞希 島田美波 久保利光 神儀紫稀 速水劉太

清水美春

藤堂カヲル 西村宗一 福原慎 高橋洋子

橙「一度リクエストした人だったとしても何度でもリクエストしてもいいらしい」

紫「あと、こっちだけ感想をユーザーだけでなく全開放したらしい

わ
「

裂「それじゃ、感謝コーナー！」

燐「もみじ様、感想感謝です！」

翔「……ありがとう」

睦「それじゃ、また次回も」

愛「よろしく」

紫「お願いするわ」

第10問目 Aクラス戦、戦後対談（前書き）

【バカテスト】 歴史

問 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

□ （ ）年 キリスト教伝来

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った1993年』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

「これにて試召戦争終結」 by 神楽 橙夜

第壹巻 問目 Aクラス戦、戦後対談

Side・橙夜

高橋「よって三対四でFクラスの勝利です」

F生「おおおーっ！」

A生「そ、そんな……」

高橋女史の宣言によりFクラス側からは歓喜の叫びが、Aクラス側からは嘆きの叫びがあがった。

橙夜「さて、それじゃ戦後対談といくぞ。翔子」

翔子「……分かった」

そう言って、俺と翔子は近くのテーブルに向かい合って座る。

一騎討ちに参加したメンバーは俺たちの後ろ側に、その他の面々は囲むように聞いている。

橙夜「まず、設備のことだが、Aクラスの面々は気にしなくてもいい」

一同「は？」

おおー、AもFも関係なく俺の発言に啞然としていた。

翔子「……どういう意味？」

橙夜「AクラスとFクラスの設備を交換する気はない」

F生「なっ！」

F生『どういうことだ!』

F生『俺たちはAクラスの設備を手に入れるために頑張ってたんじゃないのかよ!』

橙夜「お前らは落ち着け。俺はAクラスとFクラスの設備を交換しないと言っただけだ」

雄二「橙夜、説明しろ」

橙夜「言葉の通りだ。Aクラスの設備とFクラスの設備は交換しない」

F生『神楽を血祭りにあげるー!?!』

F生『おおおーっ!?!』

こいつら、やっぱりバカか……。

橙夜「お前らは俺の話を聞いていなかったな……」

翔子「……なるほど」

明久「霧島さん、分かったの?」

翔子「……橙夜はAクラスとFクラスの設備を交換しないと云っただけ。Fクラスの設備がそのままとは言っていない」

橙夜「気付いたか。流星は翔子だな」

雄二「俺もそれには気付いた。だが、どうやってやるんだ?」

橙夜「それは既に手を打ってある。……そろそろ出てきたらどうですか?学園長」

一同『は?』

バカを見るような目で見られた……。お前らのほうがバカじゃないか……!

学園長「やれやれ、バレていたのかい?」

橙夜「そりや当然でしょう。あの条件を満たしてFクラスが勝った場合には、学園長からも説明してもらわなければいけませんから」
雄二「橙夜、どうしてバ……学園長がここに来ているんだ」

橙夜「Dクラス戦後、俺は学園長とある約束をした」

明久「約束？」

俺の言葉に周りは何を言っているのか分からない顔をし、明久が質問してきた。

橙夜「ああ、約束だ。ある条件を満たしFクラスがAクラスに勝利するか、引き分けたらFクラスの設備をAクラス同等の設備にしてもらう、というな」

明久「それで、ある条件って言うのは？」

橙夜「それはな……明久……お前の勝利だ」

明久「ば、僕の勝利？」

『何で吉井の勝利が条件になるんだ？』

再び周りがざわつく。

橙夜「お前らは明久がなんなのか忘れたのか？」

雄二「観察処分者という事か？」

橙夜「そうだ。こいつは観察処分者に認定されて学園一のバカと認知された」

この言葉に一同が頷いた。

明久「ちよつと待って！僕は学園一のバカじゃないよ！」

橙夜「だが、こいつはAクラスの紫に勝った。それに、学力自体もAクラス相当にあがっているしな」

あえて、明久の発言はスルーする。

雄二「確かに、観察処分者の明久の学力がAクラス相当に上がったと分かれば、下位クラスの生徒も自分も出来ると思っただけで勉強に励むかもしれない。上位クラスの方も抜かれないように頑張るだろうからな」

橙夜「つまり明久はカンフル剤ってことだ。……で、学園長。約束は守ってもらいますよ」

学園長「分かっているさ。約束どおりFクラスの設備をAクラスと同等の設備にしてやるさね」

F生「やったああああ！」

F生「ついに畳と卓袱台からおさらばだー！」

ババア長の言葉を聞いてFクラス側は再び歓喜の叫びを上げた。

橙夜「設備に関してはこれで終わりだ。ここからはAクラスとFクラスの間の交渉だ」

翔子「……続けて」

橙夜「こつちが提案する三つの条件を呑むのなら、今回の戦争は和平交渉にて終結という形にする」

翔子「……条件は？」

橙夜「まず、一つ目。この一学期間、AクラスはFクラスに宣戦布告をしない」

翔子「……分かった。でも、Aクラスには宣戦布告の権利がない」
橙夜「今回、FクラスがAクラスに勝ったから、AクラスはFクラスにのみ宣戦布告出来るようになったんだ。学園長のせいだな。」

それで二つ目。Aクラスには週に何度かFクラスに勉強を教えに来てもらいたい」

翔子「……最後は？」

橙夜「最後は条件じゃなくてご褒美みたいなものだ」

翔子「…………ご褒美？」

橙夜「ああ。今回、一騎討ちに参加した俺と翔子を含む14人を対象に、勝った方は戦った相手に命令、もしくはお願いを一つ言っている」

翔子「…………もしかして」

橙夜「翔子の考えている通りだ。明久なら紫に、俺なら愛子に。そして翔子なら雄二に命令できる」

雄二「なっ！橙夜！何を言ってるやがる！？」

橙夜「これで交渉は成立って事で。後はご褒美の実行ってことで」

雄二が慌てているが、知ったことじゃないな。お前は苦労すればいいんだ。

橙夜「最初は瑞希と久保でいいか。久保は瑞希に何か命令したいこととかはあるか？」

久保「僕は特にないよ」

橙夜「因みに権利を行使しないなら対戦相手の方が言いたいことがあるなら言っていていいからな。で、瑞希は何かないか？」

瑞希「わ、私ですか？私も特にはありませんけど……………」

まあー、この二人は分かったことだけだな。

橙夜「じゃ、次は燐と秀吉の番な」

燐「え、えっと。そ、それじゃあね。秀君。わ、私と、っ、つき」

秀吉「ま、待つんじゃない！」

燐「…………どうして、止めるの？秀君」

秀吉「そ、そういうことは！男のワシに言わせてもらいたいのじゃない！」

燐「そ、それでもしかして…………／／／」

秀吉「う、うむ。ワシは燐のことが好きなのじゃ！だから、ワシと

付き合ってくれぬか？」

燐「私で……いいの……？」

秀吉「燐だから言っておるのじゃ！」

燐「こ、こんな私でいいのなら喜んで……／＼／」

秀吉「う、うむ。これからもよろしくなのじゃ……／＼／」

燐「よ、よろしくね……／＼／」

F生「ひ、秀吉に彼女があああああ！」

F生「お、俺たちのオアシスがあああああ！」

F生「神は俺たちを見捨てたのだ……！」

燐と秀吉が桃色空間を作り出した頃、Fクラスの連中が血涙を流していた。どうでもいいな……。

橙夜「次は康太と須藤嬢だが、何かあるか？」

康太「………特にない（プイッ）」

結子「それなら、康君」

康太「………なんだ？」

結子「私と付き合って」

康太「………断るといつたら？」

結子「お願いじゃなくて命令だから無理だよ」

そう言って須藤嬢は康太の頬にキスをした。

康太「!?!?（ブシャアアアアア）」

ああー………康太は死んだな。

橙夜「さて、次は翔子と雄二だな」

翔子「………うん」

雄二「わかつている。何でも言え」

翔子「……それじゃ、雄二、私と付き合って」

一同『……はい?』

あつ、一部を除いて皆驚いてるわ。

百合疑惑があつたからしょうがないか。

雄二「やっぱりか。お前は、諦めないのか」

翔子「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

雄二「その話は何度も断っているだろ?他の男と付き合つ気はないのか?」

翔子「……私には雄二しかない。他のひとなんて、興味ない」

雄二「拒否権は?」

翔子「……ない。これは命令だから。それに橙夜がこの事を言わなくても約束だから」

雄二「は?約束って宣戦布告のときのか?あれは、勝ったクラスのことって意味じゃないのか?」

翔子「……違う。あれは私と雄二の『個人的な』約束。今からデートに行く」

雄二「ぐあつ!放せ!やっぱその約束もなかったことに」

ぐいつ　つかつかつか

翔子は雄二の首根っこを掴み、歩き出した。

橙夜「ちよつと待て、翔子」

翔子「……なに?」

雄二「橙夜!俺を助けてくれるんだ」

橙夜「これを持っていけ。駅前の映画館の無期限パスだ。これがあれば無料で映画が見放題だ」

雄二「なっ！橙夜、貴様っ！ぐえっ！」

翔子「……橙夜、ありがとう」

橙夜「デート楽しんでこいよ」

翔子「……うん」

そう言っただけで翔子は雄二を引っぱって教室を出て行った。

橙夜「んじゃ、五組目。睦月と優子でいいか」

睦月「俺か？んー……本当は戦争が終わって二人っきりのときに話そうと思ってたけどいいか。優子！」

優子「な、何？」

睦月「俺はお前のことが好きだ！初めて会ったときから今までずっと。これからもそれは変わらない。だから！俺と付き合ってくれ！」

優子「ほ、本当に……？」

睦月「ああ、本当だ！って、何で泣いてるんだ！」

優子「ヒック……だって……ヒック……うれしくて……」

睦月「それじゃ、返事は……」

優子「うん……こんなアタシでよかったら、睦月の彼女にして欲しい……／／／」

睦月「ああ、勿論だ……／／／」

今度はこいつらが桃色空間を作り出した。

もういいや。スルーしよ、スルー。

橙夜「残ったのは俺と明久だけか」

明久「そうみたいだね」

橙夜「明久。紫に何か言いたいこととかあるか？」

明久「うーん……。特にないかな？」

橙夜「それじゃ、紫はあるか？」

紫「そうね……丁度いい機会だから、言っちゃおうかしら。明久」

明久「ん？なに？」

紫「付き合つて頂戴」

明久「うん、いいよ？」

一同『へ？』

一瞬、この場の時が止まった。

さつきまでイチャついていた睦月や優子、燐や秀吉たちですら止まっていた。

紫「私が言った意味、わかってるわよね……？」

明久「勿論だよ。買い物荷物持ちつてことでしょ？」

紫「はあ……」

橙夜「ここまで鈍感だとわな……」

明久の答えを聞いて、この場にいるみんながみんな、ため息をついた。

FFF団だけは例外だったが。

明久「え？違うの？」

紫「違うわよ……」

明久「じゃあ、どういう意味なの？」

紫「さつきまでの雰囲気から察しなさいよ……。まあ、いいわ。もう一度言うから、ちゃんと聞きなさい」

明久「う、うん……」

紫「私は小さい頃からずっと明久のことが好きよ、勿論異性としてね」

明久「え！？それつてもしかして……」

紫「だから、私の恋人になってほしいの。ダメかしら？」

明久「ダメじゃないけど……僕でいいの？お世辞にも僕はかっこよくもないし、頭も良いわけじゃないよ？」

紫「そんなこと関係ないわ。私は明久だからこそ恋人になっただけよ。私が明久のことを好きなのは、明久が優しくて他人の為に一生懸命になれるからよ」

明久「……恋愛感情っていうのが、どういふものか僕にはまだ分からない。それでもいいなら、紫の恋人になるよ」

紫「必ず分かせてあげるわ。だから、よろしくね」

明久「うん、よろしく」

恋人（仮）に落ち着いたか。

明久が自分の気持ちに気付ければすぐに本当の恋人同士になるだろうから、心配はいらなそうだな。

明久「それじゃ、最後は橙夜の番だね」

橙夜「そうだな。愛子、いいか？」

愛子「うん、いいよ。どんな命令でもね？」

そう言っただけ、愛子は茶化すようにウィンクをした。

橙夜「俺のは命令というよりはお願いって感じなんだがな」

愛子「どんなお願い事をされちゃうのかなあ？もしかして、あんなことや、そんなことかな？」

うん、そんな奴だよお前は。

あえて、その部分はスルーして話を続けるけどな。

ここからは真面目に行こう。

橙夜「俺と愛子が会って三ヶ月も経っていないのにこんなことを言うのもアレなんだが」

愛子「うん」

橙夜「愛子……いや、工藤愛子さん。貴女の事が好きだ。こんな俺

でよければ彼女になってほしい」

愛子「えっと…その…はい。ボクも橙夜くんのことが好きです。ボクを橙夜くんの彼女にしてほしい…です…／／／」

橙夜「あ、ああ…これからも、よろしくな…／／／」

愛子「う…うん……よ、よろしくね。…え、えいつ！／／／」

橙夜「なっ！？お、おい、愛子。い、いきなりなにを！」

愛子は恥ずかしそうに顔を俯かせたと思ったら、次の瞬間には俺の体に抱きついてきていた。

愛子「今からボクと橙夜くんは恋人同士なんだから、抱きついたって問題ないでしょ…？」

橙夜「ッ！？そ、そうだな…」

抱きついてきた愛子の顔は、俺の目線より下にあるわけで、自然と上目遣いの形に。その上、若干涙目で見られるとなんと…
…たまらない！！

これを狙ってやってるなら悪女だが、確実に天然だろうな…。

愛子「（ビクッ）」

気付いたら体が勝手に愛子の体を抱きしめ返していたみたいだ。

無意識で欲望が理性に勝ってしまったようだ。これからは自重しよう、自重。

？「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

この声は…。

明久「あれ？西村先生。僕らに何か用ですか？」

鉄人「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思ってるな」

我がFクラス……？鉄人よ、遂に頭がイカれちゃったのか？

鉄人「今度から福原先生に変わって俺に担任が変わるそうだから1年、死に物狂いで勉強できるぞ」

F生「なにいつ！？」

クラスの男子生徒全員から悲鳴があがった。

鉄人「いいか。確かにお前らはよくやった。開校してまだ短いけど、FクラスがAクラスに勝つという偉業を成し遂げた時は正直驚いた。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の1つなんだ。だからないがしろにしてもいいものじゃない」

確かにその通りだな。

鉄人「それに、今のFクラスの設備はAクラス同等になっている。その費用はある所からの寄付金で準備される予定だから、今年度1年間は新学期になっても今朝までの設備に戻ることはない。つまり、他のクラスに戦争を申し込まれ、敗北すれば設備は交換となるわけだ。その設備を守るためにも学力向上は必要不可欠というわけだ」

鉄人のいう事も正しいな。折角の設備を奪われちゃたまらないな。

鉄人「吉井。お前は観察処分者だが、最近の生活態度を考慮して監視は大目に見てやろう」

明久「本当ですか！？」

鉄人「ああ、本当だ。それと坂本は……って、姿が見えないがどうした？」

明久「それならAクラス代表の霧島さんに連れて行かれました」

鉄人「ふむ、そうか。坂本には『A級戦犯のお前は特に念入りに監視してやる』と伝えといてくれ」

明久「分かりました。伝えておきます」

やはり日頃の行いの悪い雄二には監視がつくのか。どうでもいいか。

鉄人「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう。神楽兄弟と吉井、姫路の四人はAクラス相当の成績だから補習は免除だ」

そういい残して鉄人はAクラスの教室から退出していった。

橙夜「それじゃ、愛子」

愛子「なにかな？」

橙夜「初デートってことで映画でも観に行かないか？」

愛子「うん、いいよ」

という事で愛子とデートに行くことになった。

次いでとばかりに睦月と優子、紫と明久、燐と秀吉の六人も誘つてのフォース？デートとなったとき。

Side・end

第10巻 問目 A クラス戦、戦後対談（後書き）

裂「若干、スランプだ……」

橙「原作とはかなり違う流れだからな」

裂「枠外も若干スランプ気味なんだけどな……」

シ「枠外はそれなりに原作に沿ってたからな。それにネギま！は漫画で、バカテスはラノベだからな」

紫「所詮、それは言い訳でしょう？」

燐「裂やんが頑張れば問題ないってことだよな？」

裂「私だって、頑張ってるさ……」

睦「で、次回はアニメのデート回やるのか？」

裂「さあー？美波と約束してないから美春と絡むことないから、飛ばすんじゃない？」

秀「それでよいのかのう？」

裂「書くのを後回しにするって手もあるがな」

橙「それで、ラブレター騒ぎはどうするんだ？」

裂「それはやるつもり。ちょっとしたフラグのような伏線のために」

シ「そうか。それじゃ、次回の後書きに出演してほしい3人を選んでくれ」

神楽橙夜

神楽睦月

神楽紫

桜儀燐

吉井明久

工藤愛子

坂本雄二

霧島翔子

土屋康太

須藤結子

木下秀吉

木下優子

姫路瑞希

島田美波

久保利光

神儀紫稀

速水劉太

清水美春

藤堂カヲル

西村宗一

福原慎

高橋洋子

睦「それでは、感謝コーナー」

燐「もみじ様、毎回感想ありがとうございます！」

秀「ありがとうなのじゃ！」

橙「それでは、また次回」

翔「……よろしく」

愛「お願いしまーす」

第壹式問目 デートとキスとスタンガン（前書き）

【バカテスト】 地理

問 以下の問いに答えなさい。

『海に面していない都道府県を全て挙げなさい』

神楽橙夜、神楽睦月、神楽紫、姫路瑞希、霧島翔子、工藤愛子、吉井明久、木下優子、木下秀吉の答え

『岐阜県、群馬県、埼玉県、滋賀県、栃木県、長野県、奈良県、山梨県』

教師のコメント

正解です。該当する都道府県は八つですね。

吉井君や木下君が正解していて、驚きました。

桜儀燐の答え

『岐阜県、群馬県、埼玉県、栃木県、長野県、奈良県、山梨県』

教師のコメント

滋賀県が抜けています。惜しかったですね。

坂本雄二の答え

『岐阜県、京都府、群馬県、埼玉県、滋賀県、栃木県、長野県、奈良県、山梨県』

教師のコメント

京都府が余計です。

土屋康太の答え

『相生、飯田、加西、国分、瀬田川、千歳、中島、牧ノ原』

教師のコメント

それは『都道府県』ではなく『市町村』です。

「勢いでやっちゃったけど、今思い返すと恥ずかしい……／＼／」

by 工藤 愛子

第壹弍問目 デートとキスとスタンガン

Side・橙夜

Aクラスとの試召戦争と戦後対談終了後、俺たちは映画館に来ていた。

橙夜「さて、どれ観るんだ？」

睦月「色々あるな」

明久「こんな時期でも結構あるんだね」

秀吉「そうじゃな」

俺たち男性陣は入り口にある上映作品の目録を見て上映作品の多さに若干驚いていた。

愛子「やっぱりデートで観るなら恋愛モノかなー？」

優子「恋愛モノで上映してるのあるかしら？」

紫「確か3、4作あったはずよ」

燐「紫の言つとおり数作あったよー」

女性陣は目録を見ながらどれを観ようか考えていた。

橙夜「それで、どれ観たいか決めたのか？」

愛子「うん。ボクは『世界の中心で僕の初恋2』が観たいんだけどいいかな？」

橙夜「俺は何でも大丈夫だ」

睦月「優子はどれにするんだ？」

優子「アタシも愛子と同じのだけどいい？」

睦月「ああ、いいぞ」

明久「紫は決めたの？」

紫「ええ。この『君に出会えたこの場所で』なんだけど、いい？」

明久「うん、大丈夫だよ」

秀吉「燐はどれなのじゃ？」

燐「うん、私は『どこまでも君と』だよ」

秀吉「確かそれは有名な役者が沢山出てくるやつじゃな。楽しみじや」

橙夜「それじゃ、売り場に行くか」

一同「うん（はい）（ええ）（そうじゃな）」

そう言つて俺たちはチケット売り場に向かった。

そしてチケット売り場に着くと見知った人物がいた。

橙夜「お前ら、チケット売り場で何してるんだ？」

雄二「……男とは……無力だ……」

翔子「……あの後、雄二が途中で逃げ出して、捕まえてたらこんな時間になった」

なるほど。だから手を繋いでるんだな。

翔子「……雄二、どれが観たい？」

雄二「早く自由になりたい」

翔子「……じゃあ、『地獄の黙示録：完全版』」

雄二「おい、待て！それ3時間23分もあるぞ！」

翔子「……二回観る」

雄二「一日の授業より長いじゃねーか！」

翔子「……授業の間、雄二に会えない分の……埋・め・合・わ・せ」
雄二「やっぱ帰る！」

そう言っただけ立ち去ろうとする雄二。翔子はそれを追ひ、雄二の制服の裾を掴む。

さらに翔子は上目遣いで雄二を見る。

翔子「……私と映画を観るのは、イヤ？」

雄二「そ、そうは言っていない！」

翔子「……じゃあ、どうして？」

雄二「流石に約7時間も座って観ていられない」

翔子「……なら、隣で寝ててもいい」

雄二「分かった！分かったから、そんな目で見るな！」

翔子「……うれしい」

雄二「はあー……」

制服の裾を掴まれるだけなら逃げれたかも知れんが、流石に上目遣いもされたら、誰だって逃げられないよな。

翔子「……学生二枚二回分、これで」

店員「では、拝見させてもらいますね。……こ、これは!？」

雄二「どうしたんだ、一体？」

翔子「……それ、使えないの？」

店員「いえ、そうではございません。これはVIP専用の無期限パスなので、お客様はどちらでこれを？」

橙夜「それなら、俺がやった」

店員「へ?……って、と、橙夜様!いらっしゃってたのですか!？」

さっき、目の前で会話してたのを見ていないのか？

橙夜「まあな。で、こいつらは俺の友人で予備のをやったってわけだ」

店員「そうでしたか」

愛子「橙夜くん、この状況について説明してほしいんだけど」

橙夜「ん？ああ。そういえば言っただけな。この映画館、実は家の系列の会社が経営してんだ」

愛子「そうだったんだ」

橙夜「状況説明も済んだから、こっちの二人にチケット渡してやれ」

店員「は、はい！学生二枚、二回分ですね。こちらになります」

翔子「……ありがとう。雄二、行く」

雄二「分かってるから、引っ張るな」

そう言っただけ、雄二と翔子は奥へ進んでいった。

橙夜「じゃ、『世界の中心で僕の初恋2』を四枚、『君に出会えたこの場所で』と『どこまでも君と』をそれぞれ二枚の学生八枚分をこれで」

店員「はい。チケットはこちらになります」

橙夜「ありがとう。チケット代は俺が負担してやったが、飲み物とかは各自で負担してくれよ。じゃ、それぞれの受け取ってくれ」

一同『はい』

それぞれ飲み物を買って、映画を観て各自帰宅した。

Aクラスとの試召戦争と愛子との初デートを終えて、翌日。

いつもと同じ通学路をいつもと同じ五人で歩いて登校し、下駄箱につくと、そこには雄二がいた。

橙夜「よう、雄二」

睦月「そんなところで何してんだ？」

明久「おはよう雄二」

紫燐「坂本君、おはよう」「

雄二「よう。おはよう」

挨拶を交わしながら俺たちは靴を履き替える。

雄二「で、お前ら、昨日はどうだった？」

橙夜「結構楽しかったが？」

睦月「俺も同じくだな」

明久「僕もかな」

雄二の質問にそれぞれ答える。

と言っても、二人は端折ったが。

雄二「なんだ、つまらん」

橙夜「そういう雄二こそ、どうだったんだ？」

雄二「面倒だったから映画が始まる前から寝たんだが」

睦月「最初くらいは起きとけよ！」

雄二「……目が覚めると繋がれた牛が殺されるシーンだった」

明久「へ、へえー……。それで？」

雄二「気分が悪くなって寝て、また目を覚ましたらまた牛が……！」

明久「……本当に二回観たんだ」

雄二「また寝ようとしたんだが、永遠に牛が殺されるシーンで目覚め続けるんじゃないかと脅迫観念に襲われて、眠れなかった」

橙夜「永遠に映画の最初は観れなかったんだな」

軽く雑談をして俺たちは教室に向かった。

あの後、何の問題も起こらず時間が過ぎ、週末。

俺はクレープを食べに行くという愛子との約束で、出掛けていた。明久もいつの間にか瑞希と島田嬢と約束していたらしく、待ち合わせの時間と場所が同じだったから一緒に行くことにした。

明久「僕っていつ、瑞希ちゃんや島田さんと約束したんだろう？」

橙夜「それは俺も聞きたい」

明久「それと、今月はちょっと厳しいんだよね……」

橙夜「そうなのか？」

明久「うん。此間の映画観た時に少し使っちゃたからね」

橙夜「なるほど」

それならほれ、と言いながら俺は明久に三千円を渡す。

明久「橙夜、いいの？」

橙夜「ああ。実を言うと、この金は毎回仕送りの一部を保険として渡してなかったやつだからな」

明久「ええ！何でそんなことをしてるのさ」

橙夜「お前に金を渡したら殆どを趣味に使い込むからだろうが……」

明久「……反論……出来ない……っ！」

橙夜「それと、今までも同じように渡していない金があって、それは明久に知られないように秋さんが作った、お前名義の口座に保管

しているから安心しろ」

明久「そんなものまであったんだ……」

因みに、仕送りは全てその口座に振り込まれている。

橙夜「そろそろ、待ち合わせの場所だな」

明久「そうだね。時間の方も結構余裕があるよ。って瑞希ちゃんと工藤さん、もう来てるよ！」

橙夜「マジかよ……」

現時刻は9時40分。一応待ち合わせは10時に駅前の噴水となっているが、こういう時に遅刻するわけにはいかないから、余裕を持って早めに着くように出てきた。

そんな俺の腹積もりは、既に愛子と瑞希が来ていたことで意味がなくなつたが。

橙夜「それじゃ、声を掛けるか。おー……い……」

明久「どうしたの、橙夜。いきなり立ち……止まっ……て……」

愛子たちに声を掛けようとした俺たちが見たのは、数人の男が愛子と瑞希の前に立ち、その内の二人が愛子たちの手首を掴んでいる場面だった。

愛子『あの、手を放してもらえませんか？』

モブ『いいじゃん。俺たちと遊ぼうぜ？』

瑞希『わ、私たち、ひ、人を待ってるので』

モブ『そんな奴放っておいて、俺たちと行こうぜ？』

なるほど、ナンパか。気をつけないと殴っちまいそうだな。

とりあえず愛子たちのところに行くか。

橙夜「明久、行くぞ」

明久「うん、分かってる」

そう言つて俺と明久は二人＋ に近付く。

橙夜「俺たちの連れに何か用か？」

明久「彼女たちから手を離してもらえませんか」

愛子と瑞希の手首を掴んでいる男の腕に触れながら声を掛ける。

モブ「ああ？なんだお前ら？」

明久「僕たちのことは別にどうでもいいんですよ」

橙夜「そうそう。とりあえず、お前らは」

橙明「その手を離せばいいんだ（よ）！」

モブ「ぎゃあああああ」

何をしたかつて？普通に腕を握り締めてやっただけさ。

俺と明久は握力が50kg超えてたりだったたりするんだけどな。

橙夜「愛子、大丈夫か？」

明久「瑞希ちゃんも大丈夫？」

愛子「うん、大丈夫だよ。助けてくれてありがとう、橙夜くん」

瑞希「は、はい。大丈夫です」

男が手を離したのを確認して、俺たちは愛子たちに声を掛けた。

モブ「おい！てめえら、よくもやってくれたな！？」

モブ「覚悟できてんのか！ええ！？」

ナンパ野郎共がうるさい。

橙夜「お前らはさっさとナンパをやめて家に帰ってりゃいいんだよ」
明久「嫌がる女の子を無理やり連れて行くこととした時点で失敗して
るんだから、諦めればいいのにな」

モブ「舐めやがってっ……！もういい。やっちまえお前ら！」
モブ「おうっ！」

挑発にもならない言葉を聞いて逆ギレか……。

橙夜「明久、二人と一緒に下がってる」

明久「いいけど……一人で大丈夫？」

橙夜「これくらいなら平気だ」

明久「それじゃ、気をつけてね」

橙夜「お前のほうこそ二人を頼むぞ」

そう言っつて俺は男たちの前に立った。

数分後。

数人の男相手に本気で喧嘩して、本気の拳や蹴りを入れた末に、
数体の屍を満足気な表情で見ながら立つ無傷の男子高校生の姿が、
そこにはあった。

ていうか、俺だった。

あれ？今の振り、どこかで覚えが……。まあ、いつか。

愛子「橙夜くん、大丈夫だった！？怪我とかしてない！？」

橙夜「落ち着け、愛子。この通り無事だし、怪我もしていない」

愛子「よ、よかった」。橙夜くんが怪我とかしちゃってたらどうしようかと思つて、心配したんだよ？」

橙夜「心配してくれてありがとうな。本当に何にもないから安心しろ」

明久「相変わらず橙夜は強いね。流石つてところかな？」

瑞希「橙夜君が無事でよかったです」

橙夜「そっちこそ、大丈夫だったか？」

明久「全員、橙夜の方に向かつていったから大丈夫だったよ」

橙夜「ならよかった」

現時刻は9時50分を回ったところ。

ナンパ野郎共は撃退と言つか、撃破したから何の問題もないな。

橙夜「それじゃ、愛子。俺たちはもう行くこうぜ。時間も勿体ないからな」

愛子「うん、そうだね」

明久「橙夜たちはもう行くだね」

橙夜「ああ。俺たちは適当に見て回って『ラ・ペデイス』って喫茶店に行く予定だから、映画を観終わったお前らと会うかもしれんな後、明久、これもつけて」

俺は映画館で使える無期限パスを明久に渡す。

明久「あ、うん、ありがとう。でもいいの？」

橙夜「気にするな。それも翔子にやったのと同じで予備だ。まあ、きちんと返してもらうけどな」

明久「分かつてるよ。橙夜と工藤さん。会えたらまたね」

橙夜「ああ、またな」

愛子「それじゃあね、吉井くん、姫路さん」

瑞希「あ、はい。橙夜君と工藤さんもまた」

そう言って、俺と愛子は明久たちと別れた。

明久たちと別れた俺と愛子は、駅前にある、大きなデパートに来ていた。

橙夜「で、愛子は何か買いたい物とかあるのか？」

愛子「うーん……明確に買うつもりってわけじゃないけど、服を見たいと思ってね」

橙夜「なるほど。ちょうど、近くに服売り場があるから行くか」

愛子「うん！」

笑顔が凄く可愛いです！？

因みに愛子の服装は水色のＴシャツに藍色のハーフパンツだ。

愛子「橙夜くん。試着してくるね。覗いたらダメだよ？」

橙夜「はあー……。女の子がそう言うこと言ったらダメだろ……」

よくよく考えると、試着室の前に一人でいるのって初めてなよう
な……？

紫や燐、優子とかと服を買いに行くときは睦月や明久、秀吉の誰
かが必ず一人は一緒だったからな。

愛子「橙夜くん、お待たせー」

どうやら俺が思考の海に沈んでいる間に試着を終えて出てきていたらしい。

愛子「これ、どうかな？」

そう言う愛子の格好は、先程までのTシャツとハーフパンツとは打って変わって、紺色の薄手のカーデイガンにはオレンジ色の無地のシャツ、下は丈が膝上の薄緑色のスカートだ。

橙夜「俺は似合ってると思うぞ」

愛子「本当！他にも気になってるのがあるから次の試着してくるね」

その後も愛子はワンピースやニットベストなど十数着の試着を続けた。

その中で愛子は特に気に入ったものや俺が特に似合っていると言ったものを買った。

勿論、費用は俺持ちだが。

服売り場を後にした俺たちはデパートの中を見て回った。

CD売り場などで視聴したり、書籍売り場で参考書や小説・漫画を買ったりした。

そして、時間もいい感じになったから、俺たちは『ラ・ペディス』に向かった。

Side・end

S i d e ・ 明久

橙夜と工藤さんと別れてから五分後くらい的时候会に島田さんがや
ってきた。

美波「おはよう。瑞希、吉井」

瑞希「おはようございます。美波ちゃん」

明久「おはよう。島田さん」

美波「二人とも早いね。出てくるときに何を着てくるか迷っちゃ
ってね。去年のブラウスがまだ着れてラッキー」

明久「へー。それって去年から全然膝の関節があらぬ方向に曲がる
うと痛って！まだ何が言っていないのにイイイイイイ！」

美波「言いたいことは分かっているからいいの！」

明久「ロープ、ロープ！」

？「おおお！みえ、みえ、みえ、みえー」

明久「なんでムツツリーニが此処にいい」

康太「自主トレ」

こんな感じの一悶着があったが、僕らは映画館についた。

瑞希「明久君は何が観たいですか？」

美波「意見くらいは聞いてあげるわよ」

明久「僕？」

チケット代に関しては橙夜にパスを借りてるから気にしなくても
いいから、何がいいかな？

？「……雄二。何観たい？」

？「俺の希望は……叶えられるのか？」

僕らの後ろから知った声を聞き、振り返るとそこには霧島さんと霧島さんと手を繋いでいる雄二がいた。

翔子「……じゃあ、『戦争と平和』」

雄二「おいそれ7時間4分もあるだろ！」

翔子「……二回見る」

雄二「14時間8分も座ってられるか！」

翔子「……退屈なら、途中で寝てていい」

雄二「ちよつと待て！そのスタンガンどこから入手した！と言うか、それは気絶だろうが」

翔子「……ずっと一緒にいるのは同じだから、大丈夫」

雄二「の！の！ノーモア！！」

翔子「……学生二枚、二回分、これで」

店員「はい、学生一枚、気を失った学生一枚、無駄に二回分ですね」

霧島さんは雄二にスタンガンを押し当て、気絶させた後、チケツトを受け取って雄二を引き摺っていった……。

瑞希「はつきり気持ちを伝えられる人って羨ましいです」

美波「憧れるよねえ」

2時間くらいのにしよ……。

と言うか、霧島さんの今の行動を羨ましがったり、憧れたりしたらダメだと思う。

2時間30分くらいの映画を観終わった僕らは次の予定を話し合っていた。

明久「これからどうしようか？」

美波「そうね。時間も時間だし、お昼にしましよう？」

瑞希「でしたら、『ラ・ペデイス』に行きませんか？橙夜君と工藤さんも既に行っているかもしれないし、喫茶店なのでお昼に適した料理もあるでしょうから」

確か橙夜は、クレープを食べる以外にはデパートとかを見て回るとかって言ってたから、橙夜の方も行っているかもしれないね。

明久「じゃあ、次は『ラ・ペデイス』で決定かな？」

美波「ウチもいいわよ」

瑞希「では、行きましようか」

そうして、僕らは『ラ・ペデイス』に向かった。

Side・end

Side・橙夜

ウインドウショッピングなどを一旦終えた俺たちは『ラ・ペデイス』で昼食をとっていた。

愛子「このナポリタン、美味しい」

橙夜「俺のカレーも結構いけるぞ」

愛子「本当？」

橙夜「ああ。一口食べてみるか？」

愛子「それじゃお言葉に甘えて、一口もらおうかな」

橙夜「それなら、ほれ。あ〜ん？」

愛子「あ、あ〜ん（モグモグ）……ほんとだ、美味しい。それじゃ、お返しに。あ、あ〜ん……」

橙夜「あ〜ん（モグモグ）……ナポリタンも中々いけるな」

そういえば、無意識？無自覚？であ〜んってやったけど、普通に間接キスじゃ……？

愛子の方も理解したのか顔が真っ赤になってるし。

でも、前にも箸であ〜んってやったから今更間接キスで恥ずかしがらなくてもいいんじゃない？

それから、雑談をしながらそれぞれのお昼を食べ終わり、食後のデザートとして頼んだクレープを食べていると新しい客がやって来た。

店員「いらつしやいませ」

？「三人で禁煙席でお願いします」

店員「それでは、こちらへどうぞ」

ん？今入ってきたのって明久たちか？

どうやら俺たちの隣の席に案内されるみたいだから、声掛けるか。

橙夜「よ、明久。お前らも来たのか。時間的にはお昼ってところか？」

明久「あ、橙夜。やっぱり来てたんだね。うん、お昼だよ。橙夜たちは何を食べたの？」

橙夜「俺はカレーで愛子はナポリタンだ」

明久「味はどうだった？」

橙夜「結構いけるぞ」

明久「橙夜がそう言うなら他のも期待できそうだね」

美波「工藤さん。少し顔が赤いけど、どうかしたの？」

愛子「な、なんでもないよ！大丈夫だから、気にしなくていいよ！」

美波「そう？それならいいけど」

瑞希「風邪とかには気をつけてくださいね？」

愛子「う、うん。心配してくれてありがとう」

どうやらまだ余韻が残ってたっぽいな。島田嬢の指摘で思い出して、また少し赤くなってたけど。

それからは俺たちは明久たちが今日観た映画の感想を聞いたり、逆にこっちはどうだったか聞かれたりした。

橙夜「さて、デザートのカレープも食べ終えたから俺と愛子は午前の続きをしますか」

愛子「そうだね。それじゃ、吉井くん、姫路さん、島田さん。今日はもう会わないと思うから、また学校でね」

食後のコーヒーと紅茶を飲み終えた俺と愛子は、そう言って席を立った。

明久「うん、また明日」

美波「また学校でね」

瑞希「また明日学校で」

そんな俺たちにその声を掛けてきた三人。

ああ、そうだ。明久と島田嬢には言うておかないといけないこと

があつた。

橙夜「明久、島田嬢」

明久「橙夜、どうしたの？」

美波「何？神楽兄」

橙夜「この喫茶店、清水美春の家だから気をつけるよ？」

そついい残して、俺は愛子の手を握つて足早に立ち去つた。

後ろで明久と島田嬢が何やら喋っていたが、スルーだ、スルー。

『ラ・ペデイス』から立ち去つた後、俺たちはファンシーショップやアクセサリーショップを見て回つた。

愛子「橙夜くん。今日は楽しかつたね」

橙夜「そつだな。俺も楽しかつた」

周囲は既に夕暮れ時。楽しい時間を過ごした俺と愛子は、帰路についていた。

愛子「送つてくれてありがとう。家もすぐそこだから、ここまでで十分だよ」

橙夜「そつか。万が一があつたら大変だけど、すぐ近くだし大丈夫だな」

愛子「ふふふ。橙夜くんつて結構心配性だよね」

橙夜「そつかもしれないな。これでも一応、長男だからな……」

愛子「どうしたの？橙夜くん」

橙夜「いや、なんでもない。それとこれ。此間は放課後デートだったから買えなかったけど」

初デートの記念の遅いプレゼントだ、と言って、俺は持っていた荷物の中から梱包された長方形の箱を取り出して愛子に差し出した。

愛子「ありがと。今、あけてもいい？」

橙夜「ああ」

「一体どんなのかなー？と言いながら丁寧に梱包を解いていく愛子。

愛子「これってネックレス？」

橙夜「ネックレス以外に見えるのか？」

「どうやら、箱を開けて中を確認したらしい愛子に茶化しながら肯定する。」

愛子「形はハートなんだね」

橙夜「そりゃな。愛子の愛はLoveって意味だからな」

愛子「嬉しいな。ボクのことを考えて選んでくれたんだね」

橙夜「まあ、アクセサリーショップに寄ったときに二千円程度で買った安物だけだな」

愛子「そうだったとしても、嬉しいよ。橙夜くん、これつけてもらってもいいかな？」

橙夜「いいぞ。貸してみろ」

ネックレスを受け取って愛子の後ろに回る。

留め金を外して腕を前に回して首の横を通して首の後ろで留め金を留めて、前に回る。

愛子「ありがとう。これ、大切にするね」

橙夜「そうしてくれると、俺も嬉しい」

愛子「それじゃ、橙夜くん。お礼したいから目を閉じて」

橙夜「一体何をするつもりだ？」

まあ、いいけど、と言って俺は目を閉じた。

それから数秒後、不意に、唇に柔らかいものがあたった感触がして、目を見開くと目の前に愛子の顔があった。

愛子「えへへ。ボクのファーストキスだよ。……それじゃ、また明日学園でね！」

橙夜「あ、ああ。また明日な」

そう言って、真っ赤な顔をして愛子は走り去っていった。

……明日から、どうやって顔を合わせればいいんだろう？

Side・end

Side・明久

『ラ・ペデイス』で一緒になった橙夜が、去り際に残酷なことを言い残していった。

橙夜「この喫茶店、清水美春の家だから気をつけるよ？」

美波「ちよっと、神楽兄！それって……って、もういない！」

清水さん？誰のことだろう？

それと僕は一体何に気をつけたらいいんだろう？

明久「よく分からないけど、とりあえず注文したクレープが来たから食べよう」

美波「そうね……。嫌なことは後で考えましょう……」

瑞希「美味しそうですよ」

島田さんに一体何があつたんだろう？

ん？島田さんと清水さん？そういえば、清水さんって島田さんのことを好きな同性愛者って噂があつたような……？

美波「吉井のチョコクレープ美味しそうね、ウチのバナナクレープと一口交換しない？」

瑞希「それなら私のストロベリークレープも一口交換しませんか？」

明久「いいの？なら交換しようか」

美波「それじゃ、はい。あゝん」

瑞希「明久君、どうぞ。あゝん」

明久「あ、あゝん」

そんな感じに、瑞希ちゃんと島田さんのクレープがもう少しで口に入ろうかとした瞬間、横からフォークが飛んできた。

？「いけません、お姉さま！」

声が出た方を向くと、女の子がフォークを持って僕のことを睨みつけていた。

もしかして、彼女が清水さん？

美春「ひどいです！お姉さまの甘い甘いクレープを、その口をつけたフォークごと、薄汚い家畜に与えるなんて！美春許せません！これ以上豚が図に乗って狼藉を働かないよう」

明久「ぶ、豚あ？」

美春「今、この場で成敗します！」

明久「ええ？僕う！？」

それからは完全な逃走劇だった。

僕は先頭を走って逃げ、清水さんはそんな僕を追い、瑞希ちゃんと島田さんは僕と清水さんを追う。

途中で瑞希ちゃんと島田さんと合流して、三人で引き続き逃走。そんな僕たちは通りかかった公園で秀吉と遭遇した。

秀吉「おお、明久。何をしておるのじゃ？」

明久「秀吉、こっちに！」

秀吉「何じゃ！」

とりあえず、清水さんが見えたから秀吉も一緒に草陰へ。

清水さんが発していた言葉を聞いて、とても怖くなって島田さんを避けてしまったのはしょうがないと思う。

秀吉「よく分からんが、お主らは、追っ手から逃げておるのか？」

明久「そうなんだ。何か逃げ切るいい方法はないかな？せめて僕の召喚獣を使えばいいんだけど」

瑞希「学園を離れると召喚システムを使えないんですよね」

美波「うん……」

召喚獣を使えば何とかなる……。でも、学園を離れると使えない……。それなら学園に？

でも、学園に行ったら清水さんも召喚獣を使える……。その上で逃げ切るには？

明久「あっ！そうか！」

美波「吉井、何かいい方法閃いたの？」

明久「うん、これなら何とかなるよ」

瑞希「それはどういう方法ですか？」

明久「学園に行くんだ。それで　　だ」

秀吉「なるほどのう。ならば、急いで学園に向かつと良いじゃろう」

明久「うん。それじゃ、秀吉。また明日、学園でね」

美波「木下またね」

瑞希「木下君、また明日学園で」

秀吉「うむ。また明日じゃ。気をつけるんじゃぞ」

そうして、僕らは逃走劇を再開して学園に向かった。

学園に着いた僕らは現国の竹内先生に遭遇した。

瑞希「竹内先生、模擬試召戦争をやりたいんですけど」

竹内「え、あ、はい。承認します」

明久「よし。試験召喚獣、試獣召喚！」

美波「試験召喚獣、試獣召喚！」

瑞希「試験召喚獣、試獣召喚！」

僕らが召喚を終えた直後、清水さんが追いついてきた。

美春「ひどい！私の愛を邪魔する気ですか！試獣^{サモン}召喚！」

清水さんも召喚に応じて召喚獣を出す。

明久「瑞希ちゃんの召喚獣がいれば、怖いものなしだ！この勝負、勝てる！」

瑞希ちゃんの召喚獣を先頭にして立ち向かう。

『Fクラス	国語	島田美波	16点
		姫路瑞希	345点
		吉井明久	175点
	VS		
Dクラス	国語	清水美春	132点

瑞希「清水さん、ごめんなさい！」

美春「そうはいきません！」

そう言うと、清水さんの召喚獣は瑞希ちゃんの召喚獣を飛び越えて島田さんの召喚獣に攻撃した。

美波「ウチにい！？うそー」

攻撃直後の隙について、瑞希ちゃんが清水さんの召喚獣に攻撃して戦死させた。

鉄人「0点になった戦死者は補習ううー！」

美波「ええ！今日はお休みなのにー！？」

美春「美春はお姉さまとなら、鬼の補習も天国です！」

美波「私はいやあああああああ！」

島田さん、ごめん。僕には補習はどうにも出来ないんだ。

それから、島田さん　いや、美波の補習が終わるまで僕と瑞希
ちゃんは待って、一緒に帰った。

補習から解放された美波に、僕は関節技をかけられこれからは名
前で呼ぶように言われたんだ。

関節技をしている時の美波曰く、「よくもさっきは見捨てたわね
!」らしい。

美波が戦死したのって、一切とは言わないけど僕には関係ないよ
ね!?

S i d e . e n d

第壱式問目 デートとキスとスタンガン（後書き）

橙「今回もリクエストないんだな」

裂「そうだな……」

睦「ついでに言うと、感想もないぞ」

裂「うっう……」

シ「それにしても、今回結構甘い話じゃないか？」

裂「頑張った」

紫「一度消えたらしいわね？」

裂「消えて活動報告をテンパリながら書いた後に、何とか復元できた」

燐「そうなんだ」

裂「で、お前らは何か言いたいこともあるのか？」

全「いや、全然」

裂「まあいいや。次回はラブレター騒動を書いて、次にオリキャラ紹介で書いた出ていないキャラが遂に本編出演だ」

橙「3・5巻の一部を書いてやっと2巻突入か。初稿からもつ3週

間経ってるんだよな」

シ「枠外は3週間で40部程書いてたけどな」

裂「枠外は毎日更新だったんだから言うな」

睦「今回の裏事情はもういいな。それじゃあ、次回の後書きに出演して欲しい3人を選んでくれ」

神楽橙夜 神楽睦月 神楽紫 桜儀燐 吉井明久

工藤愛子

坂本雄二 霧島翔子 土屋康太 須藤結子 木下秀吉

木下優子

姫路瑞希 島田美波 久保利光 神儀紫稀 速水劉太

清水美春

藤堂カヲル 西村宗一 福原慎 高橋洋子

紫「そういえば、今回のバカテストなんだけど、かなり悩んだらしいわ」

裂「オリジナルバカテスト関係のアンケートした時には数個浮かんでいたはずなのに、現在はもう忘れているという罨」

燐「とりあえず、作者の裂さんは感想が欲しいらしいよ」

橙「贅沢な欲だな」

シ「全くだな」

裂「だまらっしやい！感想があるのとないのとじゃ、執筆のモチベ

「シヨンが違っんだ！」

紫「駄作者の裂やんのはどこかに置いてってっ」と

橙「また次回も」

シ「よろしく願います」

燐「またね」

第巻参問目 俺と幼馴染とラブレター（前書き）

【文月新聞】

《二年F組 吉井明久さんのコメント》

僕が小さな頃、祖父がよくこう言っていました。

『明久、泥棒でも何でもいい。一番を目指して精進しなさい』

今、僕は天国にいる祖父にこのことを教えてあげたいと思います。

爺ちゃん……

これで、いいかい……？

以上、

【女装が似合いそうな男子ランキングNo.1】

【モテそうな男子（同性愛編）ランキングNo.1】

【短期間で急激に成績を向上させた生徒ランキングNo.1】

の三冠を達成した吉井明久さんからのコメントでした。

*尚、女装が似合いそうな男子にノミネートされていた木下秀吉さんは審議の結果、アンフェアであるとの結論に達した為除外されています。

予定されていた第二特集

【須川亮、また失恋！？連敗の裏側にある真実とは！】
は都合により延期となりました。

「ガンホー！ガンホー！」 byFFF団

第巻参問目 俺と幼馴染とラブレター

Side・橙夜

明久「うん……ありえない登校時間だ」

晴れ渡る空。澄んだ空気。暖かな日差し。

そんな風に思っていると俺の隣を歩いている明久が不意にそう言った。

橙夜「確かにお前の登校時間は大体1時間は後だからな」

明久「まあ、早起きは三文の徳って言うから、何かイイコトがあるといいなあ」

てか、何で俺は明久と二人で登校してるんだ？

ああ、そうか。朝早く起きた俺は何か面白いことが起こりそうな予感がしたんだった。

明久「さてさて、こんな時間から何をしようかな　ん？ねえ、橙夜」

橙夜「なんだ？」

明久「校門の近くにいるのって鉄人じゃない？」

橙夜「ああ、ほんとだな。挨拶しとくか」

明久「そうだね」

そのまま歩いて、俺たちは後ろから鉄人に声を掛けた。

橙明「西村教諭（先生）、おはようございます（ございます）」

「

鉄人「おう、おはよう！部活の朝練か？感心だ」

鉄人は爽やかな笑顔で振り向いたと思ったら、動きが止まった。

明久「先生？」

鉄人「すまん。間違えた」

明久「人違いですか？いやそんな、別に謝る必要なんて」

鉄人「神楽兄は良いとして、吉井、こんな早朝に学校に来て、今度は何を企んでいる」

そう言っただけ鉄人は、爽やかな笑顔を一転させ、警戒心を露にした表情になった。

明久「あの……間違えたのは接する態度ですか？」

鉄人「お前を警戒するのは癖みたいなものだ。去年のお前の行動を知っているだけにな……。それはそうと、丁度良かった。観察処分者のお前がいるなら手間が省けるからな」

明久「と言つと、また力仕事ですか？」

鉄人「そう言うことだ。古くなったサッカーのゴールを撤去してくれ」

明久「僕も早く起きすぎてやることなかったのでもいいですよ」

鉄人「それじゃ、吉井はグラウンドに來い。神楽兄は教室に行って良いぞ」

橙夜「それならお言葉に甘えて先に行きます。明久、鞆貸せ。持つて行ってやるから」

明久「あ、うん。お願いするよ」

明久から鞆を受け取って、俺は校舎に向かった。

教室に着いた俺は窓際が一番後ろにある自分の席に座る。

Aクラスとの試召戦争の結果によって、Fクラスの設備はAクラスと同等になった。

そこで自分たちの席を固定しようと思いが出て、決めることに。その際、一騒動あったが詳細は省く。

他の席は、俺の隣は順に瑞希、明久、雄二。

俺の前に睦月、その隣に秀吉、島田嬢で秀吉の前の席に康太だ。

それと何故か、瑞希、明久、雄二の三人の後ろに空席がある。後で鉄人にでも聞くとしよう。

さて、HRまで時間あるし寝るとするか。

数人がけのソファで寝ていると誰かに頬を突かれている感じがした。

？「んー。中々起きないなー」

そう言いながらも、未だに突き続ける誰か。

俺はその誰かに気付かれないように手を動かして、頬に触れるものを掴む。

？「きやつ」

橙夜「で、何をしているんだ？愛子」

と言うか、声を聞いたら愛子だとすぐに分かった。

因みに俺の手が掴んでいるのは愛子の手だ。

愛子「橙夜くんに会いに来たんだよ。それで来て見たはいいけど、お目当ての橙夜くんは居眠り中。だから、寝ている隙にちょっとした悪戯をしようと思ってるね」

橙夜「そうか。まあ、いい。で、今何時だ？」

愛子「HRまでまだ30分はあるってところだね」

橙夜「なら、また寝なおすか」

愛子「それじゃ、膝枕してあげようか？」

橙夜「折角だし、頼む」

愛子「うん、頼まれたよ。HR開始の5分くらいに起こすね」

橙夜「ああ、よろ……しく……」

そう言っただけ俺は再び眠りについた。

愛子の膝枕はとても気持ちよかった、とだけ言っておこう。

その後、普通に愛子に起こされて、席に座っている。

起こしてもらった時に愛子の顔が少し赤くなってたが大方、瑞希や島田嬢にいじられたのだろう。

「工藤」「はい」「久保」「はい」

チャイムと同時に、明久が教室に駆け込んできて、間髪容れずに鉄人もやって来て出席を取り始めた。

俺と睦月は既に呼ばれたが。

そういえば、教室に駆け込んできた時の明久の拳動が不審だったが、まあいいか。

「近藤」「はい」「斉藤」「はい」

淡々と進む気だるい毎朝の恒例行事。
それにしても眠い……。

ああ、静かで長閑なひとときが訪れている。

いつもと変わらない平穏な日常が

鉄人「坂本」

雄二「……………明久がラブレターを貰ったようだ」

『殺せええっ!!』

雄二の一言でブチ壊された。

皆殺しにスルカナ……。

Side・end

S i d e ・ 明久

明久「ゆ、雄二！いきなりなんてことを言い出すのさ！」

明らかに小声だったのにクラスの誰もが聞き逃さなかった様子。この連中は本当にどこがおかしいとしか思えない。

だがしかし、今回はそんなことを考えている余裕はない。間違えた。気にしている余裕もないだった。

『どういうことだ！？吉井がそんなものを貰うなんて！』

『それなら俺たちだって貰っていてもおかしくないはずだ！自分の席の近くを探してみる！』

『ダメだ！腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない！』

『もつとよく探せ！』

『……出てきたっ！未開封のパンだ！』

『お前は何を探しているんだ！？』

怒号が飛び交う我が教室。予想通りクラス全員の妬みに狂う光景が展開されていた。

と言うか、パンが出てくるってどういうことぞ。

鉄人「お前らっ！静かにしろ！」

シン

と、鉄人の一喝でクラスに静寂が舞い戻ってくる。ふう、良かった……二重の意味で。

鉄人「それでは出欠確認を続けるぞ」

出席簿を捲る音が教室内に響く。

「手塚」「吉井クロス」「藤堂」「吉井クロス」「戸沢」「吉井クロス」

明久「皆落ち着くんだ！なぜだか返事が『吉井クロス』に変わっているよ！」

鉄人「吉井、静かにしろ！」

明久「先生、ここで注意するべき相手は僕じゃないでしょう！？このままだとクラスの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！」

「新田」「吉井クロス」「布田」「吉井マジ殺す」「根岸」「吉井ブチ殺す」

あ、これは終わった

橙夜「初日に言ったはずだ。明久たちに危害を加えるならクロスと」

『ヒッ！！』

みんなが。

橙夜「特に雄二」

雄二「な、なんだ……？」

橙夜「念入りにクロスしてやる」

橙夜は相当殺気立っている。僕に危害を、って言っているけど、絶対に建前だね。幼馴染だからじゃなくても、橙夜の好きなモノを知っていれば断言できるね。

それで本音は、さっきまでの静かで長閑な平穏な時間を邪魔されたからだろうね。

特に、この騒動の発端である雄二に対しての怒りが半端じゃないみたいだし。

鉄人「よし。遅刻欠席は無しだな。本日も、一日勉強に励むように」

そんなやり取りを見ていないかのように、出席簿を閉じ、教室を後にしようとする鉄人。

『待つてくれ先生！可愛い生徒たちを見殺しにしないでくれ！』

保身の為に必死に鉄人を呼び止めようとするみんな。

鉄人「間違えるな、お前たち」

鉄人が扉に手をかけたまま告げる。一体、何を言いたいのだろうか？

鉄人「お前たちは不細工だ。そして、自業自得だ」

『そ、そんな！』

鉄人「授業は真面目に受けるように」

みんなの叫びも空しく、鉄人は教室を出て行った。

『こ、こうなったら自棄だ！』

『殺られる前に神楽兄を殺るんだ！』

教室に満ちた橙夜の殺気にてられて、冷静な判断が出来なくなっているみたいだ。

とりあえず僕は

美波「アキ、ちよ〜っと話を聞かせてもらえる？」

こっちをどうにかしないといけないようだ。

Side・end

Side・橙夜

「こ、こうなったら自棄だ！」
「殺られる前に神楽兄を殺るんだ！」

鉄人が教室を出て行ってから男子数人が襲い掛かってきた。

俺がそれに対応している間に俺と睦月、明久、秀吉を除く男子が
二手に分かれ、明久は瑞希や島田嬢と何か話した後、教室から脱走
していた。

一方は俺の方に、もう一方は脱走していった明久の方に向かった。

明久の救援にも行かなきゃならなくなったか。

まあ、とりあえずまずは、俺に向かってくる愚者を沈めるとしま
すか。

Side・end

S i d e . 明久

僕は瑞希ちゃんと美波と話した後、教室から逃げ出した。

そして、それを追ってくるクラスのみんな。

まずは、今朝方外したサッカーのネットとスタンガンを使って空き教室で数人を撃破。

次に旧校舎の古書保管庫の本棚の入り組みを利用して、みんなの視界に入らないように部屋から出て出入り口を封鎖した。

その直後、ムツツリーニが僕の元にやって来た。

明久「ム、ムツツリーニ!？」

僕は警戒心を露にしてムツツリーニと対峙する。
が、次に思わぬ言葉をかけられた。

康太「……………橙夜からの預かり物を届けに来た」

明久「橙夜からの預かり物?ムツツリーニは敵じゃないの?」

康太「……………違う。橙夜に逆らっても良いことはない。だから、そっち側」

なるほど。橙夜はムツツリーニを制する何かを持っているようだ。
……………多分、脅迫だろうけどね。

康太「……………それで、これが預かり物」

そう言ってムツツリーニが差し出してきたのは

明久「木刀？」

何故か木刀だった。

何故木刀なのかはこの際置いておくとして、どこから調達したのだろうか？

今朝、橙夜は木刀なんてものを持っていなかったはずだ。
という事は、睦月の私物かな？

……あつ！そういえば、橙夜つて暗器術使えたんだつたね……。

調達元がどこかもこの際どうでもいいとして、武器を入手できたことは大きいね。

明久「ありがとう、ムツツリーニ。お礼に今度、僕の秘蔵コレクションの中から一冊持ってくるよ」

康太「……………教室に戻る（グッ）」

親指を立てながらそう言って、ムツツリーニは僕に背を向けて去っていった。

その後は、屋上に向かおうとしたら、美波に発見され逃走再開、途中遠藤先生に遭遇し機転をきかせてなんとかやり過ごした。

その際に美波の今日の色がライトグリーンだと知れたのは、柵から牡丹餅としか言いようがないね。

そして、再び屋上に向かうと三階の廊下で須川君が待ち構えていた。

しかも、須川君は剣道部から借りてきたらしい木刀を取り出してきた。

そう言う僕もムツツリーニから木刀を受け取っているんだけどね。

木刀のお陰もあってか、須川君も撃破。その場に須川君を残して階段を昇る。

四階の廊下を越えて、階段を昇れば

雄二「やはりここまで来たか、明久」

瑞希「明久君、言う事を聞いてください」

明久「雄二に瑞希ちゃん……！」

屋上へと続く階段。その前に立つのはラスボスの雄二と瑞希ちゃんだった。

Side・end

Side・橙夜

俺は向かってきた連中を全員沈めた後、明久を追っていた連中をどうにかしようと歩いてた。

その際に、康太とエンカウント、戦闘という名の交渉交渉をして、木刀を明久に届けてもらうことにした。

あれ？戦闘という名の交渉交渉じゃなくて、交渉という名の脅迫が正しいのか……？

交渉の内容が何かって？寡黙寡黙なる性識者である康太にとって最大級の痛手を与えることが出来ることさ。

つまり、学園敷地内にある全ての盗聴器と隠しカメラの排除。

実を言うと俺、康太が仕掛けた盗聴器と隠しカメラの位置を余すところなく把握しているんだ。

話がそれたな、閑話休題。

その後は、授業開始時刻となり俺は教室に戻った。

気絶していたはずのバカ共はいつの間にかいなくなっており、教室にいたのは睦月と秀吉の二人だけだった。

……いよいよ瑞希もFクラスに染まってきてしまったようだな。

授業開始から暫くして康太が静かに教室に戻ってきた。

無事に木刀を明久に届けてくれたようだ。

それにかなり機嫌がいいようだ。木刀を渡す以外に明久と何があったんだ？

さらにその後、悲しい表情をした明久と、何かをやりきったような満足な表情をした雄二、何かを決心したような表情の瑞希が戻ってきた。

明久に話を聞いた限りだと、瑞希が明久に届いたラブレターを破り紙くずにし、その紙くずを雄二が未練を断ち切るためと言って容赦なく燃やしたらしい。

他人の書いた手紙を破り捨てたら問題だろうが、今回は問題ないだろう。

そのほかの連中は途切れ途切れに教室に戻ってきた。

これにてラブレター騒動は終わりを告げた。

因みに雄二への仕返しは、秀吉に雄二の声真似をさせて、『翔子、綺麗だ。翔子、愛してる』と言ってもらい、それを録音して翔子に渡すことだ。

というよりも、既に渡しておいたんだがな。

雄二……幸せにな(笑)。

S i d e . e n d

第巻参問目 俺と幼馴染とラブレター（後書き）

裂「私、裂やんと今回はもみじ様リクエストの」

紫「明久の恋人（仮）の私、神楽紫と」

島田美波（以降：波）「ボコデレ？なウチ、島田美波と」

瑞「えーと、趣味はお料理^{化学兵器}、姫路瑞希の4人でお送りします」

波「ところでボコデレってなんなの？」

裂「詳しくは北海道某所にあるらしいファミレスの日常を描いた漫画を読んでくれ」

紫「それって直訳すると『働いています』って言う漫画よね？」

裂「そうだ。さて、その辺のことは置いておくとして、もみじ様のリクエストで三人の登場なんだが、話題もリクエストされているんだ」

瑞「どういう話題なんですか？」

裂「何でもお前たち三人で明久トークをして欲しいらしい」

波「な、なんで、ウチがアキのことを話さなきゃいけないの!？」

紫「いい加減、素直になっただろう？照れ隠しに私の彼氏（仮）の明久に関節技とか、かけてほしくないのよ。」

それにOHANASHIする私の都合も考えて欲しいわ」

波「うつ!?!」

瑞「ゆ、紫ちゃんも落ち着いてください」

裂「とりあえずありきたりだが、お前らどうして明久のことを好きになっただんだ?」

紫「私の理由は第壱巻問目 Aクラス戦、戦後対談を読んで頂戴」

波「ウチの理由は作者が未読だから原作7・5巻の『ウチと日本と知らない言葉』を読んで欲しいって、カンペに書いてあるわ」

瑞「わ、私の理由も原作3・5巻『僕と暴徒とラブレター』52ページを読んで欲しいそうです」

裂「で、どうするのお前ら?」

波「どうするってなにをよ?」

裂「明久巡って四角……いや五角関係でもするわけ?」

瑞「五角って明久君を取り合ってるのって私と紫ちゃんと美波ちゃんの三人ですから、四角関係じゃないんですか?」

紫「いいえ、瑞希。裂やんの言うとおり五角なのよ……。二人は知らない方がいいことだから教えないけどね」

裂「本当、知らなくていい情報だよ……。アイツの扱い、どうし

ようか悩んでる。原作どおりの気持ちで行かせるか、若干修正するかで」

紫「確かに悩みどころよね……」

裂「まあ、この話は後回しにするとして、清涼祭の時に瑞希の気持ちとは決着がつく予定だ」

瑞「そ、そうなんですか!？」

紫「予定、ね……」

波「ウチのは……?」

裂「美波はまだ考えていない。けど、必ず決着はつけさせるさ。」

それと瑞希の気持ちの決着時には紫に大変な思いをしてもらうことになっている」

紫「なに、その意味ありげな発言。フラグ建築しないでほしいわ」

波「まあ、いいわ。そろそろ恒例のアレやりましょう。いい加減にしないと長くなるわ」

瑞「そ、そうですね。それでは、次回の後書きに出演して欲しい三人を選んでください」

神楽橙夜 神楽睦月 神楽紫 桜儀燐 吉井明久

工藤愛子

坂本雄二 霧島翔子 土屋康太 須藤結子 木下秀吉

木下優子

姫路瑞希 島田美波 久保利光 神儀紫稀 速水劉太

清水美春

藤堂カヲル 西村宗一 福原慎 高橋洋子

裂「それじゃ、感謝コーナー！」

紫「もみじ様、感想ご意見いつもありがとうございます」

瑞波「「ありがとうございます」」

裂「それでは、また次回も」

瑞「よ、よろしくお願いします」

紫波「「お願いします」」

第巻四問目 Fクラスと三人の転入生（前書き）

【バカテスト】 生物

問 以下の問いに答えなさい。

『ソ連の生理学者イワン・パブロフの行った実験によって発見され、有名となった行動と、その実験の通称を答えなさい』

神楽橙夜、神楽睦月、吉井明久、姫路瑞希、織斑朱雀、神原日向の
答え

『行動……条件反射

通称……パブロフの犬』

教師のコメント

正解です。条件反射とは、訓練や経験によって後天的に獲得される反射行動のことです。

通常の反射行動の殆どは、無条件反射と呼ばれています。

木下秀吉の答え

『行動……反射』

教師の答え

惜しいです。反射だけでは無条件反射のことにも含まれるので不正解です。

神原焔の答え

『通称……パブロフのわんちゃん』

教師のコメント

意味的には合っていますが、正確ではないので不正解です。

土屋康太の答え

『通称……女王様の下僕』

教師のコメント

君は生物学を舐めていませんか？

坂本雄二の答え

『行動……翔子を目撃したら即逃亡』

教師のコメント

坂本君の解答は何故だか鬼気迫るものを感じます。

「俺の幸せの邪魔をするんじゃないやねえー！」by織斑 朱雀

第巻四問目 Fクラスと三人の転入生

Side・other

とある平日の文月学園の学園長室にはいくつかの人影があった。

一つは部屋の主である学園長である、藤堂カヲル。

一つは二年Fクラス担任である、通称鉄人こと西村宗一。

一つは二年Aクラス担任であり才女と名高い学年主任でもある、高橋洋子。

一つは転入生である少年と少女二人の計三人。

以上、六つである。

学園長「アタシが学園長の藤堂カヲルだよ。それで、アンタらが、例の転入生だね？」

？「はい。俺は、織斑朱雀です」

？「私は、神原日向です」

？「私が、神原焰です」

鉄人「俺は二年Fクラス担任の西村宗一だ」

高橋「私は二年Aクラス担任で学年主任の高橋洋子です」

ババア長が発言したことで、順に自己紹介をしていく面々。

学園長「そんで、アンタらが振り分けられるクラスに関してなんだけどね、先日行った転入学試験と転出元の学校での成績を鑑みればAクラスが妥当だろうね。」

けど、転入学試験は振り分け試験ではないから、アンタらにはFクラスに入ってもらおうよ」

朱雀「え！……あの、失礼ですが、2年生以上のFクラスはそれぞれの学年の最底辺のバカが集まるクラスだと聞いているんですが？」

朱雀はババア長の思わぬ発言に驚愕を露にして、質問した。

学園長「その辺は安心するさね。アンタらが入る今年の二年Fクラスは例年とは違うからね」

日向「違うとはどこら辺が違うのですか？」

ババア長が朱雀の質問に答えると、今度は日向がその答えについて質問した。

鉄人「そこからは俺が説明しよう。今年の二年Fクラスは新学期早々から試験召喚戦争を行った」

焰「試験召喚戦争って、試験召喚獣を使ったクラス間での設備の奪い合いでしたっけ？」

ババア長に代わって日向の質問に答える鉄人。

その答えを聞いて、焰は未だに聞きなれていない『試験召喚戦争』と言っ言葉について確認した。

鉄人「その通りだ。そして二年Fクラスは初戦にDクラス、次にBクラス、諸事情でBクラスとの休戦中にCクラスと戦争し、最終的には和平交渉にて終結となっているが、実際には勝ち続けた」

高橋「そして、最後には私が担当している二年Aクラスと一騎討ち七回勝負と言う変則形式で戦争をし、三対四という結果でAクラスは負けてしまいました」

朱日焰「……それって本当なんですか！？」

鉄人「ああ、本当だ。Aクラスとも和平交渉で終結となっているが、二年Fクラスの現在の設備はAクラスと同等だ」

焰の確認を肯定した鉄人は言葉を続け、一度言葉を切った。
そこからは高橋女史が引き継いで、FクラスがAクラスに勝った
と言う事実には朱雀たち三人は驚愕していた。

学園長「そういうことさね。だから、アンタらにはFクラスに入っ
てもらうことになるよ。それじゃ、西村先生。後は任せたよ」

鉄人「はい、分かりました。では失礼します。織斑、神原姉妹つい
て来い。教室に案内する」

朱雀「あ、はい！」

日向「し、失礼します！」

焰「失礼します」

説明を終えたばかりに、ババア長は後を鉄人に任せた。

鉄人はそれを受け、朱雀たち三人を連れて、学園長室を後にした。

学園長「それにしても、『織神』のところの織斑と神原のガキが転
入してくるとはね……。何が起こるかわからないもんさね」

高橋「そうですね。彼らと同じ二学年には資産家の家系の霧島さん、
『神楽グループ』の神楽君たち兄弟妹三人。そして、今度は『織神
グループ』の織斑君と神原さんたち。国内で有名な家系が四つも集
まっていますね」

学園長「何にしても、何も起こらなきゃいいさね」

鉄人たち四人が退出した後の学園長室で、そんな会話があっただ
かなかったとか。

Side・end

Side・橙夜

先日のラブレター騒動から数日が経った。

あれからも俺たちが愛子たちと弁当食べたり、手を繋いだりと言った、イチャイチャとか形容できそうなことをする度にFFF団が襲撃してきて大変だった。

戦闘力はそれほどでもないくせに、数が多いわ、復活が早いわで気が滅入りそうだ……。

鉄人「席に着け！HRを始める」

考え事していたらHR開始の時間になっていたようで、鉄人が教室に入ってきた。

そして、そのまま出席を取った。

鉄人「よし。遅刻欠席は無しだな。そして、お前らにお知らせがある」

橙夜「西村教諭。それは明久たちの後ろにある空席と関係あるのか？」

鉄人「その通りだ。このクラスに転入生だ」

「先生！！女子ですか」

鉄人の「転入生」発言で盛り上がるFクラスの男子たち。

鉄人「ああ、男子一人と女子二人の三人だ」

「おおおおおおおおおおおおっっ！！！！！！！！！！」

「このクラスの女子が二人も増えるぞおおおおおお！！！！！！！！！！」

やはりこいつらは騒がしい……。

それにしてもこの時期に転入つてのは珍しいな。
まだ五月にもなっていないと言うのにな。

鉄人「静かにしろ！……静かになったな？転入生の紹介をする。
入ってこい」

騒がしい男子たちに向かって一喝する鉄人。

静かになったのを確認して転入生入室を促した。

まず入ってきたのは、肩に届くか届かないくらいの青みがかかった黒髪の男子。

次に入ってきたのは、俺と同じくらいの長さの髪をストレートにした女子。

最後に入ってきたのは、長さは腰くらいまでありそうな髪をポニテールにした女子。

女子の二人はどちらも赤みのかかった金髪で顔立ちも似通っているから双子だろう。

鉄人「それじゃあ、織斑、神原姉妹。自己紹介してくれ」

？「分かりました。俺は織斑朱雀。織斑でも朱雀でも好きに呼んでくれ。家の都合で転入してきた。特技や趣味は実家の家業的に日曜大工だな。これからよろしく」

？「神原日向です。呼び方は苗字でも名前でも構いません。趣味は料理です。隣にいる焰とは双子の姉妹です。私たちも家の都合で転入してきました。よろしくお願いします」

焰「神原焰。姉さんの説明どおり双子で私の方が妹。私も呼び方はどちらでもいいです。趣味は料理と読書。よろしく」

雄二の後ろの空席に神原妹が座った。

鉄人「それじゃ、HRを終わる。一日勉強に励むように」

そう言つて、鉄人は教室を出て行つた。

明久「僕の名前は吉井明久。吉井でも明久でもどう呼んでくれてもいいよ。よろしく、織斑君、神原さんたち」

朱雀「それなら明久で。俺のことも朱雀でいい。よろしく」

日向「吉井君だね。よろしく」

焰「よろしくお願いします、吉井君」

明久「そう？なら、よろしく、朱雀、神原さんたち」

明久が一番に織斑たちに声を掛けたか。明久のそういうところは尊敬出来るな。

瑞希「わ、私、姫路瑞希と言います。これからよろしくお願いします」

美波「ウチは島田美波。高校進学前までドイツで暮らしてたから、日本語の読み書きは苦手よ」

日向「うん、よろしくね。瑞希ちゃん、美波ちゃんって呼ぶから、私のことは日向って呼んでほしいな」

焰「なら、私のことも焰で。よろしく、瑞希、美波」

朱雀「姫路と島田だな、よろしく」

瑞希「は、はい。よろしくお願いします、日向ちゃん、焰ちゃん、織斑君」

美波「よろしくね、日向、焰、織斑」

次は瑞希と島田嬢か。すぐに名前を呼び合うところは流石は女子同士ってところか。

雄二「俺はFクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも好きに呼んでくれ。よろしくな、織斑、神原姉妹」

焰「では、坂本君で。私のことも好きに呼んでください。よろしくお願いします」

日向「うん、よろしくね、坂本君」

朱雀「雄二でいいか。俺のことも朱雀で構わない」

雄二「それで、そこにいる無口なのが土屋康太、女顔なのは木下秀吉だ」

康太「……………土屋康太」

秀吉「木下秀吉じゃ。よく女子に間違われるが、ワシはれつきとした男じゃからな」

さて、雄二たちも話したようだし、俺たちもそろそろ話に加わるか。

橙夜「話し中悪いな。俺の名前は神楽橙夜。隣のこいつは神楽睦月って言つて、俺の年子の弟だ。俺のことは名前や神楽兄とか好きに呼んでくれ」

睦月「神楽睦月だ。橙夜兄の言った通り、橙夜兄とは年子でAクラスに俺の双子の妹がいる。俺のことは名前の睦月か神楽弟でいい。神楽で統一されると誰を呼んでいるか分からなくなるからな」

朱雀「なら、橙夜と睦月でいいな。俺のことも朱雀でいい。よろしく」

日向「橙夜君、睦月君って呼ぶね。私のことは日向って呼んで欲しいかな。よろしくね」

焰「それならここはあえて、私は神楽兄、弟で呼ぶことにするわ。よろしく」

睦月「ああ、よろしく。朱雀、神原姉、神原妹」

橙夜「よろしく。それで、朱雀と神原姉妹に質問とつか、確認し

たいことがあるんだが、いいか？」

朱雀「答えられる範囲でなら構わない」

橙夜「なら、単刀直入に聞くが、朱雀たち三人の実家って『織神グループ』じゃないか？」

雄二「橙夜……『織神グループ』ってあのか？」

日向「よく分かったね、橙夜君。今まで教えるまで気付いた人なんてそんなにいなかったのに」

やっぱりか。なんだって、こつも大企業の子供が文月学園に揃うんだか謎だな。

明久「『織神グループ』ってなんだっけ？」

雄二「明久、お前はバカか……いや、すまん。お前はバカだったな」

明久「なっ！雄二だけにはバカと言われたくないよ！」

雄二「とにかく、『織神グループ』ってのは国内で有名な大企業の一つだ」

明久「へえーそうなんだ」

朱雀「明久はそんなに驚いてないようだな」

明久「それはそうだよ。『織神グループ』は日本国内で有名なんでしょ？僕は世界で有名な企業の人間を知ってるから、今更、国内っただけで驚けと言われても驚けないんだよね」

朱雀「世界で有名な企業？それってどこだ？」

日向「私も気になるな」。私たちの実家の名前を聞いて驚かなかつた人間はいなかったからね」

焰「私も気になる。世界で有名なら私たちも聞いたことはあるだろうから」

雄二「（そうか、そういえば忘れていた……。あいつの隣人で、幼馴染の家はあの大企業だったな……）」

秀吉「（ワシもすっかりしておった。従兄弟であるあやつらの家が大企業すぎてワシの基準がおかしくなっておるのを今まで忘れてお

「つたぞ……」

瑞希「（私も忘れていました。明久君は企業とか会社に関してだけは世間ズレしていたのを。十何年も隣にあの大企業の人間がいればズレていてもおかしくないですが……）」

「なんか雄二と秀吉、瑞希がぶつぶつと何か言い合っているみたいだな。

よく聞こえないからどうでもいいが。

明久「朱雀たちも絶対に知ってるよ。だって」

明久は一旦言葉を切って何を言うつもりだ？

明久「今、目の前にいる橙夜と睦月のことだからね」

一同（雄秀瑞以外）「は？」

「そういえばそうだった。最近経営の方に指示出していなかったから忘れていたが、家は世界有数の大企業だったな。」

美波「ちよつとアキ！それってどういうこと！説明しなさいよ！」

康太「……………説明求む」

朱雀「橙夜と睦月が、ってどういうことだ？」

日向「橙夜君たちが世界有数の企業の人間って一体？」

焰「神楽兄と神楽弟が……って、神楽？神楽ってもしかして」

流石に神原妹のほうは気付いたようだな。

「苗字に兄、弟をつけているだけだから、気付いてもおかしくないが。」

明久「橙夜たちの家はこの『神楽グループ』なんだよ」

当、女子って凄いな。

因みに、最近の弁当は各個人で作っている。

簡単に言えば俺と愛子が一日交代で弁当を作ってくるとか、一人前を作ってそれを交換し合うって感じだな。

ついでに言うと、慣れてしまったのか、最近では殆どの組み合わせで「はい、あ〜ん」状態だ。

朱雀や神原姉も普通にやってから別にいんじゃないかね？って感じだが。

と言うか、相手のいない瑞希と島田嬢は居心地が悪そうだ。

二人は明久狙いだったからな、余計だろう。

何だかんだ言っているが、このちょっと刺激的で退屈な日常を俺は楽しんでいる。

これからもこの日常が続けば良いな。

波乱溢れる清涼祭は、近い。

S i d e . e n d

第巻四問目 Fクラスと三人の転入生（後書き）

裂「さて、リクエストは今回ももみじ様で」

久保利光（以降：利）「Aクラス男子筆頭の僕、久保利光と」

速水劉太（以降：速）「Dクラス戦までは出番のあった俺、速水劉太と」

清水美春（以降：春）「美波お姉さまLove、清水美春の四人でお送りいたしますわ！」

裂「とりあえず、速水を除く二名は原作から来てもらっています。俺の日常と召喚獣の二名とは関係ございません！美春は知らないけど、久保はまだ分からない！」

利「それはどういう意味だい？」

裂「だつてお前、3巻の強化合宿時に同性愛宣言を高らかにやったじゃねーか……」

春「なんで美春が豚野郎共と一緒に場にいなきゃいけないんですか！せめて美波お姉さまくらい呼んでおきなさい！」

裂「それ私のせいじゃない。この組み合わせをリクエストしたのはもみじ様だからな？」

速「ところで、Dクラス戦の時までは出番あった俺ってどうなってるの？」

裂「出番欲しいのか？一応、2巻の冒頭部分で出すつもりではあったけどな」

速「本当か！？めつきり出番がなくて結構寂しかったんだよなー」

春「美春とお姉さまの甘いアバンチュールを書きなさい！さあ、早く！ー！」

裂「却下だ、美春。お前と美波の出会いってなんだっただよ！原作で描写されてんなら書けないこともないが、妄想でお前らの恋愛なんて書けないっての！ー」

春「黙りなさい！あなたみたいなた豚野郎は黙って美春とお姉さまの恋愛を書いていればいいのです！ー」

裂「黙れ、このスニーキング女郎！お前と久保くっつけさせるぞ！？」

利春「「なっ！？」」

春「久保利光が男と言う豚野郎の中でまだまともとはいえ、豚野郎と付き合うなんて御免ですわ！ー」

利「清水さんのことは嫌いではないけど、遠慮しておくよ。僕は吉井君一筋だからね！ー」

速「（なんで俺以外のゲストは同性愛者しかいないんだろうか……。清水が久保の吉井に対するスタイルで島田に迫ったら案外上手く行きそうなんだけどな……。いつ気付くんだろう？）」

裂「（速水が黄昏ている……これはちょっと危なくなってきたか）
不毛な言い争いはコレでおしまいだ。久保！話を進めろ！」

利「分かったよ。次回の後書きに出演して欲しい三人を選んでくれ」

神楽橙夜 神楽睦月 神楽紫 桜儀燐 吉井明久

工藤愛子

坂本雄二 霧島翔子 土屋康太 須藤結子 木下秀吉

木下優子

姫路瑞希 島田美波 神儀紫稀 織斑朱雀 神原日向

神原焰

久保利光 速水劉太 清水美春 西村宗一 福原慎

高橋洋子

藤堂カヲル

速「織斑と神原さんたち三人増えたんだな」

裂「そりゃ、本編にきちんと出演したからな。じゃあ感謝コーナー」

利「もみじ様、感想ご意見ありがとうございます」

春「不本意ですが、美春からも感謝します」

速「それでは、次回も」

裂「よろしくお願いします！」

利「今回は主要キャラ同士の呼称を載せるらしいんだけどね」

裂「執筆するときに呼び方どうだったっけ？って混乱しがちだからな」

二人称一覧・案募集（前書き）

今回は設定集的なもの。

前書きのバカテストはありません。

二人称一覧・案募集

二人称一覧

橙夜

名前呼び捨て：睦月・紫・明久・雄二・秀吉・康太・愛子・翔子・
優子・燐・瑞希・朱雀

名前＋さん……煉・玲・吉井親・木下親・桜儀親

姓＋兄弟姉妹……日向（神原姉）・焰（神原妹）

姓＋嬢付け……美波・結子・美春・その他女子

姓呼び捨て……久保・速水・その他男子

姓＋教諭……教師・鉄人（地の文）・高橋女史・学園長（地の文・
ババア長）

睦月

名前呼び捨て：紫・明久・雄二・秀吉・康太・愛子・翔子・優子・

燐・瑞希・朱雀

名前＋さん……玲・明久親・木下親・桜儀親

名＋兄弟姉妹……橙夜（橙夜兄）・煉（煉兄）

姓＋兄弟姉妹……日向（神原姉）・焰（神原妹）

姓呼び捨て……美波・結子・美春・久保・速水・その他男女

姓＋先生……教師・鉄人（地の文）・高橋女史・学園長（地の文・
ババア長）

紫

名前呼び捨て：睦月・明久・秀吉・愛子・翔子・優子・燐・結子・
瑞希・日向・焰

名前+さん……玲・明久親・木下親・桜儀親

名+兄弟姉妹：橙夜（橙夜兄さん）・煉（煉兄さん）

姓+君……雄二・康太・朱雀・その他男子

姓+さん……美春・その他女子

姓+先生……教師

燐

名前+君……秀吉（秀君）

名前呼び捨て：橙夜・睦月・紫・明久・優子

名前+ちゃん……愛子・翔子・結子・瑞希・美波・日向・焰

名+兄弟姉妹……煉（煉兄）

姓+君……雄二・康太・朱雀・その他男子

姓+さん……美春・その他女子

姓+先生……教師

結子

名前+君……康太（康君）

名前+ちゃん……紫・愛子・翔子・優子・燐・瑞希・美波・日向・焰

姓+君……………橙夜・睦月・明久・雄二・秀吉・朱雀・その他男子
姓+さん……………美春・その他女子
姓+先生……………教師

朱雀

名前呼び捨て……………橙夜・睦月・明久・雄二・康太・秀吉・日向・焰
姓呼び捨て……………愛子・翔子・優子・燐・結子・瑞希・美波・その他
男女
姓+先生……………教師

日向

名前呼び捨て……………朱雀・焰
名前+ちゃん……………愛子・翔子・優子・燐・結子・瑞希・美波
名+くん……………橙夜・睦月
姓+君……………明久・雄二・康太・秀吉・その他男子
姓+さん……………美春・その他女子
姓+先生……………教師

焰

名前呼び捨て……………愛子・翔子・優子・燐・結子・瑞希・朱雀
兄弟姉妹敬称……………日向（姉さん）

姓＋兄弟姉妹…橙夜（神楽兄）・睦月（神楽弟）
姓＋君……………明久・雄二・康太・秀吉・その他男子
姓＋さん……………美春・その他女子
姓＋先生……………教師

明久

名前呼び捨て…^{△ウツリニ}橙夜・睦月・紫・燐・雄二・秀吉・朱雀・美波
あだ名……………^{△ウツリニ}康太
兄弟姉妹敬称…玲（姉さん）
名前＋ちゃん…瑞希
名前＋さん……………煉
姓＋君……………速水・久保・その他男子
姓＋さん……………愛子・翔子・優子・結子・美春・その他女子
姓＋先生……………教師・鉄人・学園長^{ババア}

雄二

名前呼び捨て…^{△ウツリニ}橙夜・睦月・明久・秀吉・翔子・朱雀
あだ名……………^{△ウツリニ}康太
姓呼び捨て……………燐・結子・愛子・瑞希・美波・美晴・速水・久保・
その他男女
姓＋兄弟姉妹…紫（神楽妹）・日向（神原姉）・焰（神原妹）・優
子（木下姉）
姓＋先生……………教師・鉄人・学園長^{ババア}

秀吉

名前呼び捨て……橙夜・睦月・紫・燐・明久・雄二・翔子・朱雀

あだ名……^{カツリーニ}康太

兄弟姉妹敬称……優子（姉上）

姓呼び捨て……結子・日向・焰・瑞希・美波・美晴・速水・久保・
その他男女

姓＋先生……教師・鉄人（地の文）・学園長

康太

名前呼び捨て……橙夜・睦月・明久・雄二・結子・朱雀

姓＋兄弟姉妹……紫（神楽妹）・日向（神原姉）・焰（神原妹）・優
子（木下姉）

姓呼び捨て……燐・瑞希・美波・美晴・速水・久保・その他男女

姓＋先生……教師・鉄人（地の文）・学園長

愛子

名前呼び捨て……優子

名前＋くん……橙夜・睦月

名前＋ちゃん……紫・燐・結子・日向・焰・瑞希・美波
姓＋くん……明久・雄二・朱雀・久保・その他男子

姓＋さん……美春・その他女子

特殊呼び……………翔子（代表）・秀吉（弟くん）・康太
姓＋先生……………教師

△ツツリーニくん

優子

名前呼び捨て……………橙夜・睦月・紫・燐・秀吉・愛子・結子・日向・焰・
瑞希・美波

姓＋くん……………明久・雄二・康太・朱雀・久保・その他男子

姓＋さん……………美春・その他女子

特殊呼び……………翔子（代表）

姓＋先生……………教師

翔子

名前呼び捨て……………橙夜・睦月・紫・燐・雄二・愛子・優子・結子・日
向・焰・瑞希・美波
姓呼び捨て……………明久・康太・朱雀・久保・美春・その他男女
姓＋先生……………教師

瑞希

名前＋君……………橙夜・睦月・明久

名前＋ちゃん……………紫・燐・愛子・翔子・優子・結子・日向・焰・美波
姓＋君……………雄二・康太・秀吉・朱雀・久保・その他男子

姓＋さん……………美春・その他女子
姓＋先生……………教師

美波

姓呼び捨て……………雄二・康太・秀吉・朱雀・久保・その他男子
名前呼び捨て……………紫・燐・愛子・翔子・優子・結子・日向・焰・瑞希・
美春

姓＋兄弟姉妹……………橙夜（神楽兄）・睦月（神楽弟）

特殊呼び……………^{アキ}明久

姓＋先生……………教師

キャラ募集

清涼祭終了後に新キャラを出したいと考えています。

既に3キャラの大まかな設定は出来ていますが、細かい設定は出来ていません。

そこで思い切って読者様方の想像力をお貸しいただきたいと思っています。

以下、既に出てきている案

もみじ様より

Aクラス転入生の高飛車キャラ

名前：

得意教科：

苦手教科：

その他教科の点数：

召喚獣の武装：武器、防具

趣味特技：

性格：高飛車

背景：

作者案

Fクラス転入生の帰国子女

名前：

得意教科：

苦手教科：

その他教科の点数：

召喚獣の武装：武器、防具

性格：

趣味特技：

背景：美波がドイツにいたころの幼馴染

初恋相手は美波で今も好き

作者案

Aクラス転入生の水泳部

名前：

得意教科：

苦手教科：

その他教科の点数：

召喚獣の武装：武器、防具

性格：

趣味特技：

背景：

これらを肉付けするための案も募集しています。

髪型とか髪色などのかなり細かい部分も出来れば欲しいですね。

特に3キャラ目はプール回の時の原作で途中参加する愛子の代役にしたいので急ぎ目をお願いします。

勿論、AとFクラス以外の所属キャラでも大丈夫です。

二人称一覧・案募集（後書き）

今回は本編ではなく設定集みたいなものなので、作者である裂やん一人でお送りします。

とりあえず、新キャラの案募集してみたり。

バカテスモノってオリキャラを沢山入れやすいですよ。何故かは分かりませんが。

私の作品を読んでいて、自分もバカテスモノを書いてる！

と言う読者様兼作者様がいらっしゃいましたら、橙夜なり、睦月なり、紫なり、このオリキャラたちを持っていつでも構いません。ご自由にお使ください。

444

次回の後書き出演キャラはもみじ様リクエストの
『霧島翔子 織斑朱雀 神原焰』の資産家の子供達でお送り予定です。

次回以降の後書き出演キャラの予約を今回から受け付けようかと。何件も来た場合は、古い順に使用していきますけどね。

第巻五問目 Fクラスと祭の準備（前書き）

「……雄二」

「なんだ？」

「……『如月ハイランド』って知ってる？」

「ああ。今建設中の巨大テーマパークだろ？もうすぐプレオープンっていう話の」

「……とても怖い幽霊屋敷があるらしい」

「廃病院を改造したっていうアレか？」

「……日本一の観覧車とか」

「おお、相当デカいみたいだな。聞いた話だけでも凄そうだな」

「……世界で三番目に速いジェットコースターも」

「速い上に色々な方向を向いたり、ぐるぐる回ったりするってヤツか。どんなモンなのかわからんが、考えるだけでワクワクしてくるな」

「……他にも面白いものが沢山ある」

「それは凄いな。きつと楽しいぞ」

「……それで、今度そこがプレオープンしたら、私と」

「ああ、お前の言いたいことはよくわかった。そこまで行きたいなら」

「……うん」

「今度友達と行ってこいよ」

「……そうじゃない」

「分かった！分かったから、その先を」

「……私と雄二、二人で一緒に行く」

「理解したからこそ誤魔化したんだろうがっ！それにオープン直後は混みあっているから嫌だっ！」

「……それならプレオープンチケットがあつたら行ってくれる？」

「プレオープンチケット？あれは相当入手困難らしいと聞いている」

「が？」
「……………行つてくれる？」
「んー、そうだなー、手に入ったらなー」
「……………本当？」
「あーあー。本当本当」
「……………それなら、約束。もし破つたら」
「大丈夫だつての。この俺が約束を破るようなヤツに見えるか？」
「この婚姻届に判を押してもらつ」
「命に代えても約束を守ろつ」

【清涼祭】 アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『あなたが今欲しいものはなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良いかもしれませんね。写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本（訂正）成人向けの写真集』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか。

吉井明久の答え

『クラスメイトに追いかけられない日々』

教師のコメント

君たちは一体なにをしているのですか？

神楽橙夜の答え

『愛子との思い出』

工藤愛子の答え

『橙夜くんとの思い出』

神楽睦月の答え

『優子との思い出』

木下優子の答え

『睦月との思い出』

木下秀吉の答え

『燐との思い出』

桜儀燐の答え

『秀君との思い出』

神楽紫の答え

『明久との思い出』

須藤結子の答え

『康君との思い出』

教師のコメント

あなた方は、節度を守ったお付き合いをして下さい。
決して、先生は羨ましくなんて……ありません。

「お父さんを見返すんです！」 b y 姫路 瑞希

第巻五問目 Fクラスと祭の準備

Side・橙夜

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。

俺たちの通う文月学園では、新学年最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

お化け屋敷の為に教室の改造を始めるクラス。焼きそばの為に調理道具を手配するクラス。この学校ならではの『試験召喚システム』について展示を行うクラス。学園祭準備の為にLHRロンがーんの時間は、どの教室を見ても活気が溢れている。

だが、我らがFクラスはというと

橙夜「さて、お前ら。何かやりたいことないか？」

明久「いいのかなあー……勝手に決めて……？」

睦月「気にするな。遊んでいるあいづらが悪いんだからな」

秀吉「あやつらは相変わらずじゃ……」

朱雀「これがFクラスの日常か……」

美波「坂本も向こうに行つちやつて、ここにいないしね」

日向「本当にこんなでいいのかな……？」

瑞焰「あはは……」

橙夜「と言うか、流石に俺たち九人じゃ決めるのに無理があるな」

現在、教室には俺と睦月、明久、秀吉、朱雀、瑞希、島田嬢、神原姉、神原妹の九人しかいなかった。

因みに他のFクラスメンバーはと言うと

須川『速水！こいつ！』

速水『勝負だ、須川！』

須川『お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！』

準備もせずに、校庭で野球をして遊んでいた。

てか、なんで声が聞こえるんだ？

？「どうだ？出し物は決まった……か……。……これはどういうことだ？」

橙夜「ああ、西村教諭か。それなら校庭をご覧になれば分かると思いますよ」

鉄人「まったく、あいつらときたら……」

教室の様子を見に来た鉄人に、そう促した。

鉄人は窓から校庭を確認し、額に手をつけて大きく息を吐いた。

鉄人「……あのバカ共を連れ戻してくる」

睦月「ご苦労様ですね」

鉄人「あいつらには吉井のように改心して欲しいものだ……」

明久「可能性としては雄二とムツツリーニはまだありえると思いますが、他のみんなは無理だと思えますよ……」

確かに、雄二と康太は翔子と須藤嬢がいるからな。

そう思っているうちに鉄人は教室を出て行った。

『Only』』 RAILGUN』』 shoot』』 必ず

明久「橙夜、携帯なってるよ？」

橙夜「ん？ああ。っと、これは愛子か。一体なんだろう？」

【From：工藤愛子

件名：清涼祭

Fクラスは清涼祭でなにやるの？

ボクたちAクラスはメイド喫茶だよ。

それと当日、一緒に清涼祭回って欲しいな？】

Aクラスはメイド喫茶か。向こうは女子の方が多いから妥当と言えは妥当だな。

それならこっちは でもやってみるか？

橙夜「Aクラスはメイド喫茶をやるらしい」

明久「この学園は美人揃いだから人気が出るんじゃないかな？」

秀吉「その筆頭が霧島じゃからのう」

睦月「それで、橙夜兄。何か思いついたんだろ？」

美波「そうなの？神楽兄」

瑞希「そうなんですか？橙夜君」

流石睦月。伊達に俺の弟はやってないってことか。

橙夜「ああ。出し物の提案なんだが、俺たちFクラスは で
いこうと思う」

明久「 ？確かに清涼祭までに指導とかすれば結構盛り上がるかもね」

橙夜「それで、もう一つ提案なんだが……Aクラスのメイド喫茶と
と思う」

睦月「それって可能なのか？」

橙夜「その辺は俺が引き受けるから任せろ」

秀吉「橙夜がそう言うのなら、任せるべきじゃな」

美波「まあ、坂本やアキより神楽兄のほうが上手いようだしね」

日向「他の人が賛成なら私はいいいよ？」

瑞焰「私もですね」

さて、愛子に電話電話つと。

この場にいる八人からは賛同してもらったし、早速交渉しないと
な。

橙夜「つと、愛子か？俺だけど、さっきのメールの件だけどいいぞ
ああ、うん。それでちよつと翔子に話があるから代わってもらえる
か？ああ、ありがとう。……あつ。翔子か？ちよつとした提案なん
だけど」

それから数分後。

翔子との交渉が終えた頃にFクラスのメンバーは鉄人に連れられ
て教室に戻ってきた。

雄二「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなく
ちやいけない時期が来たんだが」

鉄人に連れ戻されてきた雄二が俺らを見ながらそんな宣言してき
た。

雄二「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。

そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

心の底からどうでも良さそうな態度の雄二。あいつ、興味がないからって全部人に押し付けるつもりだな？

瑞希「明久君、橙夜君。坂本君って学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

日向「それ、私も気になる」

朱雀「試召戦争の時はすごい張り切ってたって聞いたんだが……？」

話し合いの邪魔にならない程度の小声で話しかけてきたのは、瑞希と転入生で雄二のことをよく知らない神原姉と朱雀の三人。

明久「直接聞いたわけじゃないからわからないけど、楽しみにしているってことはなさそうだね」

橙夜「それに、興味があるならもっと率先して動いてるはずだ。試召戦争のときのようにな」

瑞希「そうなんですか……。寂しいです……」

瑞希の表情に少し翳りがさした。

瑞希「私は……明久君や橙夜君、Fクラスの人々と一緒に、学園祭で思い出を作りたいです」

明久「やるからには思い出に残る学園祭にしたいね」

瑞希の場合は特に明久との思い出を作りたいんだろうな。

雄二「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

美波「え？ウチがやるの？うん……、ウチは召喚大会に出るから、ちよっと困るかな」

明久「雄二。実行委員なら、美波より瑞希ちゃんの方が適任なんじゃないの？」

瑞希「え？私ですか？」

橙夜「明久。瑞希には無理だ」

明久「え？どうして？」

雄二「姫路の場合、全員の意見を丁寧に聞くだろうから、聞き終わる頃にはタイムアップだ」

美波「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

明久「え？そうなの？」

瑞希「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

明久「学校の宣伝みたいな行事なのに。二人とも物好きだなあ」

美波「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希ってば、お父さんを見返したいって言うてきかないんだから」

明久「お父さんって、小父さんを？」

何でここで瑞希のお父さんが出てくるんだ？

明久も「どうしてだろう」と思うくらい謎だ。

美波「うん。家で色々言われたんだって。『Fクラスのことをバカにされたんです！許せません！』って怒ってるの」

日向「此間転入してきたばかりで付き合いは短いけど、瑞希ちゃんが怒るなんて珍しいんじゃないかな？」

瑞希「だって、皆のことを何もわかっていないくせに、Fクラスっていう理由だけでバカにするんですよ？許せませんっ」

橙明「……………」

すまん。こいつらを知っている俺でも、Fクラスは一部を除いてバカの集まりだと思うわ。

明久も口には出していないが、顔を見れば同じ事を思っているのは丸分かりだ。

美波「だからFクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

確かに、公開されている実力学年次席の瑞希と、問題さえ読めればそれなりの島田嬢が組めば、優勝も不可能じゃないだろうな。…
…イレギュラーがなければ。

雄二「お前ら。こつちの話が続けていいか？」

おつと。話が随分逸れていたな。

明久「あ、ゴメン雄二。美波が実行委員になる話しだったよね？」

美波「だからウチは召喚大会に出るって言ってるのに」

雄二「なら「雄二」なんだ？橙夜」

橙夜「実行委員は俺がやる。いいだろ？」

雄二「橙夜がやりたいなら構わないが。んじゃ、あとは任せたぞ。ふあ〜……」

俺と入れ替わって席に戻った雄二。欠伸を堪える気も全くないよ
うだ。

橙夜「さて、やりたいことがあれば挙手してくれ……と、言いたいところだが、お前らの意見を聞くつもりはない。やることはこつち
の方で勝手に決めた」

『横暴だ！』

『実行委員ならクラスの意見くらい聞け！』

『そつだそつだ！』

俺の発言を聞いて一斉に反論しだすクラスの男子達。

なんでこいつときだけチームワークがいいんだよ、こいつら…。

橙夜「黙れ！さっきまで野球していたお前らに発言権などあるわけがないだろっ！」

『うっ！』

それに正論を返すと、連中は口を閉ざした。

橙夜「静かになったところで俺たちがやるものだが……執事喫茶だ」

『執事喫茶？』

『おかえりなさいませ、お嬢様。ってやる執事喫茶か？』

橙夜「ああ、その執事喫茶だ。それと、今回の清涼祭ではAクラス
のメイド喫茶と共同戦線を張ることになっている」

『なん…だと…？』

『それは……本当なのか？』

こいつら、ノリを分かってやがる……っ!?

橙夜「本当だ。既にAクラス代表の翔子と話をつけてある。と言っても、AとFクラスの厨房担当を数人トレードして、出す予定のメニューの何品かをお互いの教室で出すだけだがな。それと出し物の人気投票で上位に食い込めば打ち上げもAクラスと合同で行う予定だ」

『おおおおおおー！?』

『やる気出たああああー！?』

『みWなWぎWつWてWきWたW W W』

流石Fクラス男子。女子と話が出来ると知っただけでやる気になるのか……。

こいつらの学力をアップするのって実は簡単だったりするんじゃないかね？

『学力が高ければ女子にモテる』とか言っちゃれば勉強しそうですし。

まあ、今はどうでもいいな。

橙夜「それじゃ、喫茶店で出すメニューを決めていくぞ」

須川「それなら軽食として炒飯とかはどうだ？」

速水「喫茶店と言えばカレーやサンドイッチもだろ？」

近藤「だったらスパゲティとかもいいんじゃないか？」

藤堂「食後のデザートとかでケーキとかも準備するべきじゃないか？」

次々と提案されるメニューを俺と副実行委員として指名しておいた睦月とでノートパソコンに打ち込んで、提案メニューが壁のディスプレイに表示される。

鉄人「お前たち、清涼祭の出し物は決まったか？」

先ほど野球をしていた連中を追い掛け回した鉄人が戻ってきた。

橙夜「出し物は執事喫茶に決まりました。今は出すメニューを考えているところです」

鉄人「そうか、神楽兄弟が実行委員なら安心だ。お前ら、ちゃんと取り組めよ。それと神楽兄はコレが終わったら学園長室に来るよう

にとのことだ」

橙夜「分かりました」

そう言って鉄人はすぐに教室から出て行った。

どうやら、きちんとやっているかの確認の為に来ただけらしい。

橙夜「大まかなメニューは出揃ったな。メニューの選定はひとまず置いておいて、厨房班とホール班を先に決める。まず、厨房班は俺と睦月のところに。ホール班は秀吉のところに集まってくれ」

須川「なら、中華系は俺が引き受けよう」

康太「……………（スクツ）」

明久「ムツツリーニ、料理なんて出来るの？」

康太「……………紳士の嗜み」

康太が立ち上がったことを不思議に思ったのか明久が質問した。

康太の回答だが、絶対にそれは違うな。大方、喫茶店とか飲食店のウェイトレスの制服見たさに色んなところに通っているうちに覚えただろうな。

日向「私も厨房班にしようかな」

焰「私も」

橙夜「ん？神原姉妹は料理が出来るのか？」

日向「うん、出来るよ。私よりも焰の方が料理上手だけど」

焰「任せてもらっても構わない」

そういえばこいつらの実家は飲食店関係だったな。それなら大丈夫だな。

橙夜「なら、任せよう。神原姉妹にはホールの方も担当してもらおうと思うが」

日焰「分かった」

女子勢にはホールで働いてもらわないとな。華的な意味で。

瑞希「それじゃ、私も厨房班に」

明久「ダメだよ、瑞希ちゃん。キミを厨房に入れさせるわけにはいかない！」

ナイスだ明久！瑞希の料理を食べて食中毒になって運ばれたら喫茶店の経営どころじゃないからな！

瑞希「わ、私だってあれから料理のお勉強もきちんとしています！だから、私も厨房班に」

明久「そうだったとしてもダメだよ！瑞希ちゃんは客観的に見て可愛いからホールでお客様に接した方がお店として利益が痛あゝっ！み、美波！僕の背中にはサンドバックじゃないよ！？」

瑞希「か、可愛いだなんて……。明久君がそう言うなら、ホールで頑張りますねっ」

よくやった、明久！これで客の心配はいらなくなった。島田嬢の関節技は今回は止めないでやろう。

美波「アキ。ウチは厨房にしようかな？」

明久「美波の料理は美味しいけど、客観的に見たら美波も十分に可愛いからホールにも出て欲しいかな？」

美波「そ、そっか／＼アキがそう言うなら頑張るわね！」

どうやら、明久は死亡フラグを回避したらしい。
っと、忘れるところだった。

橙夜「因みに執事喫茶の制服は男女関わらず執事服を着てもらっ
執事服の方はこっちで用意するから、それぞれの体のサイズを紙に
メモって俺のところを持ってきてくれ」
『おう！（は〜い）（はい！）』

この調子なら結構期待できそうだ。

睦月「あと、当日まで接客指導もするからそっちもしっかりするよ
うにな。コーチもこっちで手配するから安心しろ。立派な執事の動
作をマスターしてもらっからな」

『きちんとエスコート出来れば俺たちにも彼女が出来るんじゃ……
？』

『可能性はあるぞ！』
『もつとみWなWぎWつWてWきWたWWW』

睦月の発言を言いように理解したバカの台詞でさらにやる気にな
つたらしい。

それじゃあ、頑張るとしますかね。

S i d e . e n d

第巻五問目 Fクラスと祭の準備（後書き）

裂「今回の後書きは」

翔「……将来の姓は坂本、霧島翔子と」

朱「建築会社の息子の俺、織斑朱雀と」

焰「飲食店経営の娘の私、神原焰の四人でお送りします」

裂「話を発展させづらい面々が揃ったな……。とりあえず翔子。何か言いたいことは？」

翔「……雄二は誰にも渡さない」

裂「予想通りだな。じゃあ、次は朱雀」

朱「日向は俺の嫁！手を出す奴は許さない」

裂「これも予想通りだな……。焰は何かあるか？」

焰「姉さんと朱雀のイチャつきぶりにはもう慣れたわ……」

裂「哀愁漂ってるな……。で、資産家の子供なわけだが、それに関するの悩みはあるのか？」

翔「……仲の良い友達が中々出来なかった」

朱「家の財産とか地位目的に近付いてくる連中が多かったな」

焰「私と姉さんは誘拐されかけたことがある」

裂「金持ちには金持ちなりの悩みってのがあるわけだな」

翔「……そう。だから色眼鏡なしで私を見てくれる雄二は大切な人で、橙夜たちは大切な友達」

朱「俺もそれは分かる。転入してくるまでいた学校は所謂お金持ち学校だったからな。一言目に名前を言ったと思ったら、二言目にはどこそこの令嬢とか政治家の息子とかって煩わしかったな」

裂「そういうもんかね」

焰「そう言うものよ。その点神楽君たちは凄いわ。必要なときには家の力を使うけど、使わなくてもいい時は自分達の力で解決するって言うところが特に、ね」

翔「……初対面で霧島の跡取りとしてではなく、霧島翔子と言う、私個人として接してくれたのは雄二や橙夜たちだけだった」

裂「まあ、橙夜は力を持つメリットやリスクを知っているからな。ひけらかすことはしないってことさ。だから、誰が相手でも対等に接するようにしてるのさ」

朱「橙夜の過去に何が合ったかは知らんが、いいな、そういうの」

焰「それはいいけど、話が長くなっちゃったわ」

裂「そうだな。そろそろしめよう」

翔「……次回の後書きに出演してほしい三人を選んで欲しい」

神楽橙夜 神楽睦月 神楽紫 桜儀燐 吉井明久

工藤愛子

坂本雄二 霧島翔子 土屋康太 須藤結子 木下秀吉

木下優子

姫路瑞希 島田美波 神儀紫稀 織斑朱雀 神原日向

神原焰

久保利光 速水劉太 清水美春 西村宗一 福原慎

高橋洋子

藤堂カヲル

裂「それでは、感謝コーナー！」

朱「もみじ様、毎回ありがとうございます！」

焰「……やる意味あるのかしらね？このコーナー」

裂「それを言うんじゃない……っ！」

翔「……新キャラ案まだまだ募集中」

朱「それでは、また次回」

焰「おねがいします」

翔「……よろしく」

第巻六問目 放課後と逃走の雄二（前書き）

【バカテスト】 地理

以下の問いに答えなさい。

『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

神楽橙夜、神楽睦月、姫路瑞希、織斑朱雀、神原日向、神原焰の答え
『リトアニア エストニア ラトビア』

教師のコメント
そのとおりです。

吉井明久の答え
『魏 呉 蜀』

教師のコメント
それでは三国志になってしまいます。

土屋康太の答え
『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント
土屋君にとっての国の定義が気になります。

「スランプじゃー！スランプなんじゃー！！」by 裂やん

第巻六問目 放課後と逃走の雄二

Side・橙夜

LHRとHRも終わり、放課後。

俺は教室でメニューの選定をしながら、あることを考えていた。

清涼祭当日の動きのことだ。

流石に俺と睦月の二人だけで43人（朱雀たちが転入してきたことでクラス人数は53人）もの男子を統率するのは難しい。

秀吉や女子の指示ならすんなり聞くんだろうけどな……。

康太は……ムツツリ商会を使えばその辺は簡単にクリア出来るな。朱雀は転入してきたから、まだ日が浅いから仕方がないとして、

明久は言わずもがな、期待するほうが間違っているしな。

色々と考えてはみたものの、結論は、やはり雄二の統率力が必要という事か。

さて、問題はどうやって雄二をやる気にさせるかだな……。
って、これが一番難しいじゃねえーか！

明久「橙夜、いきなり頭を抱えだしてどうしたのさ？」

橙夜「ん？明久か。ちよつと考え事をな……。」

どうやら、無意識のうちに頭を抱えていたらしい。

明久「考え事って何を？」

橙夜「雄二を清涼祭に引つ張り出せないかと思ってな。どうやって

焚きつけようか考えていたんだ」
睦月「それは難しいんじゃないか？」

明久が考え事の内容を聞いてきて、それに答えると、今度は睦月が会話に入ってきた。

橙夜「やっぱり、そう思うよな……」

秀吉「ところで、どうして雄二を引っ張り出そうと考えたのじゃ？」

橙夜「当日の動きをシュミレーションと言っか、考えてみたんだが、雄二の統率力が必要だと思ってな」

明久「なるほどね。それなら、まずは雄二に連絡を取らないとね」

睦月の発言を肯定すると、秀吉が疑問に思っただことを聞いてきた。

それにも答えると、明久は理解したらしく、ポケットから携帯を取り出して、操作し、耳に当てた。

恐らく雄二の番号を呼び出したのだろう。

明久「あ、雄二。ちょっと話が……え？雄二。今何してるの？…

…もしもし！もしもーし！」

睦月「雄二はなんだった？」

通話が終わったと判断した睦月が明久に声を掛けた。

明久「えっと、『見つかつちまった』とか『鞆を頼む』とか言っただ」

橙夜「ああ、なるほど。翔子か関係しているな」

秀吉「橙夜の言うとおり、逃げ回っているのじゃろ。アレはああ見えて異性には滅法弱いからの」

睦月「いい加減、雄二も受け入れてやればこうはならないのにな」

明久から通話内容を聞いた俺と秀吉はすぐに理解し、推測を述べた。

それに同調するように睦月も口を開いた。

これで、雄二の行き先や隠れ場所はかなり絞り込める。

翔子の場合、雄二のことになると男子トイレや男子更衣室っていう女子禁制の場所に一切の躊躇いもなく進入するからな。

雄二はそのことを心底理解しているだろうからな。

橙夜「さて。明久も雄二の考えが読めているだろうから、発見の方をよろしく」

明久「うん、了解」

そうやって俺は、次の手を準備しながら明久を送り出した。

S i d e . e n d

第巻六問目 放課後と逃走の雄二（後書き）

裂「今回の後書きは、もみじ様リクエストの」

西村宗一（以降：鉄）「Fクラス担任の俺、西村宗一と」

藤堂カヲル（以降：学）「文月学園学園長のアタシ、藤堂カヲルと」

橙「久々登場の俺？、神楽橙夜の4人でお送りするぞ！」

裂「なんで……なんで、ババア長がリクエストされるんだよおおおおお……」

学「ババア長って失礼さね！」

裂「妖怪は放っておこう。でさ、何故が知らんが、今回こんなものが大量に準備されてんだよな」

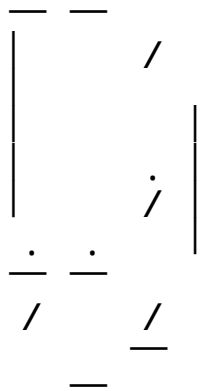
Calorie
Mate

鉄「カロリーメイト、うますぎるっ」

裂橙「スネエエエエエエエエエエエエエエエエエエク!!」

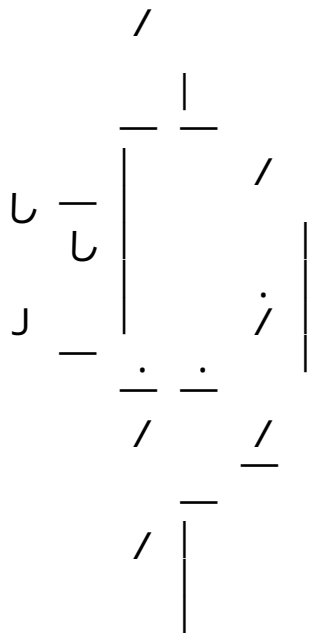
学「いきなり叫ぶんじゃないよ!全く、落ち着きがないね」

裂「後さ、こんなのも大量にあるんだけどさ……」



橙「ダンボールだと……っ!」

鉄「なるほど、いいセンスだ」



裂「見た途端被りやがった……っ!」

橙「流石はスネークだ……。ダンボールへの愛が溢れてやがる……っ!」

学「アンタら、いい加減にきな!何のためにアタシらが呼ばれたんだか分からないじゃないか……」

裂「それもそうだな……いきなりだが、橙夜。腕輪の件どうなってるんだ？」

橙「『白金の腕輪』か？ネタバレになるから、ここで発言するのは憚れるんだが……一つ、落とし穴があつてな……」

学「まさか、あんな落とし穴があるとは思っても見なかったさね」

橙「と言うか、作者のお前は知ってるはずだろうに」

裂「こつこつという話の振り方は必要なんだ」

鉄「ところで、Fクラスの連中はどうにかならんのか？」

裂「無理じゃね？矯正するとなると、清涼祭後だろうし。私的には矯正できないと思ってるんだがな」

橙「裂やんの言うとおり、難しいだろうな……。学力に関しては矯正可能だろうが、FFF団の活動とかは不可能だろうし……」

学「本当、この学園は教師や生徒問わず、問題な連中ばかりさね……」

橙「（学園長も十分問題だらけだな……）」

学「何か言ったかい？」

橙「いえ、なんでも」

裂「さて、そろそろ以降の後書きに出演して欲しい三人を選んでく

れ」

神楽橙夜

神楽睦月

神楽紫

桜儀燐

吉井明久

工藤愛子

坂本雄二

霧島翔子

土屋康太

須藤結子

木下秀吉

木下優子

姫路瑞希

島田美波

神儀紫稀

織斑朱雀

神原日向

神原焰

久保利光

速水劉太

清水美春

西村宗一

福原慎

高橋洋子

藤堂カヲル

裂「それでは、感謝コーナー！」

橙「もみじ様、則次 火焰様ありがとうございます！」

学「感謝するよ」

裂「次回の後書きは、則次 火焰様リクエストの鉄人・ババア長・社長の三人でお送り予定だ」

鉄「次回も俺の番か」

学「やれやれ……年寄りをそつ、こき使うもんじゃないさね」

橙「新キャラ案、まだまだ募集中だ！」

鉄「次回もよろしくだ」

第七問目 捕獲された雄二と選択肢(きょうはく)(前書き)

今回のバカテストはお休みとさせてもらいます。

……決して、思い浮かばなかったからではない。

「ちょっと！アタシの出番は！？」by木下優子

「そんなもの、今回はありません。名前だけです」by裂やん

第七問目 捕獲された雄二と選択肢（きょうはく）

Side・橙夜

明久が教室を出て行ってから十数分後、携帯に着信が入った。

『格下げダンボール 〜〜〜 メールで送ったら 〜〜〜 人違い
』

これは明久だな。という事は、見つけたか。
それにしても、結構時間が掛かったな。十分以内に見つかると思
ったんだが。

橙夜「もしもし？」

雄二『その声は橙夜か。一体何の真似だ？』

橙夜「ああ、雄二だな。ちよつと待て。今替わる」

雄二『替わる？誰と 』

雄二が何か喚いていたが、無視して作戦を実行することに。

橙夜（翔子の声真似をして、どこにいるか聞いてくれ）

秀吉（了解じゃ）

アイコンタクトで会話しながら、秀吉に携帯を渡す。

何故、アイコンタクトが出来るかだつて？

フツ、愚問だな。この程度、従兄弟スキルさ。

秀吉「『…………雄二。今どこ』」

雄二「人違いです」

秀吉「通話を切られたのじゃが、どうすればいいのじゃ？」

橙夜「ああ、切られるのは想定どおりだ。暫くすれば明久と一緒に教室に戻ってくるだろ」

そう言っつて、俺は秀吉から携帯を受け取る。

それから明久と雄二が戻ってくるまで、俺たちは持ち込んでいた市販の菓子と飲み物を口にしながら待つことにした。

通話を切られてから数分後、明久と雄二が戻ってきた。

橙夜「やっと戻ってきたか」

雄二「ああ。秀吉に翔子の声真似させてまで、学園祭の喫茶店に引っ張り出した理由は何か？」

橙夜「統率力の増強がしたかっただけだから、特筆する理由なんてないが？」

雄二「それだけの理由で、秀吉に翔子の声真似をされ、それに本気で怯えた俺は一体……」

雄二の質問に嘘偽りなく答えてやると、いきなり雄二はorz状態になった。

橙夜「とりあえず、清涼祭当日、雄二にはきちんと働いてもらうかな」

雄二「俺に拒否権は？」

橙夜「雄二に拒否権はありますん」

雄二「どっちだよ！」

やばいやばい、うっかりネタに走ってしまった。

睦月「まあ、有って無いようなものだな」

橙夜「睦月の言うとおり、形ばかりの拒否権で、実質強制労働だな」

雄二「そう言われると、尚更やりたくないな」

雄二ならそう言つと思つていたさ。だからこそ、ここで奥の手を
使う！

橙夜「ああ、拒否してもいいぞ。その場合は、秀吉にお前の声真似をさせて、この紙に書かれていることを言わせて録音するだけだからな」

雄二「ぐあああああ！またか！？またその手か！？前との内容が違うが、これはこれで俺の人生が終わるぞ！！物理的に！！」

橙夜「そういえば明久」

明久「何かな？」

橙夜「捜しに行つてから電話掛けるまで結構時間があつたが、何かあつたのか？」

明久「あはは……。見つけるのは簡単だつたんだけどね……」

奥の手を使ったことジョーカーで、喚きだした雄二を華麗なスルースキルで無視しつつ、俺は事情聴取的なことを明久相手にすることに。

当の明久もスルースキルで雄二を無視しながら、顔に乾いた笑みを浮かべ、はぐらかすように答えを返してきた。

睦月「大方、雄二が隠れてた場所が男子禁制の女子更衣室で、女子の誰かと鉢合わせて、叫ばれた上に西村先生に追いかけられたつて

ところだろ？」

明久「あはは……。よくわかったね、睦月。それ正解……」

睦月「え？まじ？等閑なおよさと言うか冗談だったんだが……」

明久「鉢合わせたのが木下さんだったから弁明しようと思ったんだけど、する前に鉄人を呼ばれてね。逃げるのが大変だったよ」

睦月「木下さんってことは優子か」

秀吉「どこか抜けておる姉上のことじゃ。どうせ、着替えようと更衣室に向かったら中に明久たちがいて、平静を失い、テンパったと聞いたところじゃろう」

明久がはぐらかした答えを、睦月が冗談気味に言っていると、見事に当たっていたらしく、遠い目をしてはぐらかしたことを喋りだした。

それを聞いていた秀吉は、微妙に優子を貶すようなことを言っていた。

秀吉が言ったことが、優子の耳に入らないように祈っておこう……

……
という事で、俺は秀吉の口から出た言葉は、ナニモキイテナイ。

因みに、等閑なおよさと言うのは、「いい加減」「おそろか」「本気でない」と言う意味。御座成りは類語。

橙夜「その辺は優子への明久たちのフォローを秀吉に頼むとして、

雄二。清涼祭の手伝いするよな？」

雄二「……脅しておいて、それか。……まあいい、やってやるよ。十代の身空で死にたくはないからな」

よっしゃー！統率力という名の労働力ゲットおおおおお！

脅迫は犯罪？ナニソレ、クエンノ？

雄二「そういえば橙夜。お前、学園長にHR終わったら学園長室に来るように言われてなかったか？」

橙夜「ああ、そんな用事もあったな。すっかり忘れてたわ。それじゃ、今から行くとするか」

雄二に指摘されて、そのことを思い出した俺は、立ち上がった教室の出入り口に向かうが、再び雄二に声を掛けられ、立ち止まる。

雄二「なあ、橙夜。俺も一緒に行っていいか？」

橙夜「別に構わないが、一体どうしたんだ？」

雄二「いやなに。俺の本能が今は橙夜と一緒に学園長室に行けって叫んでるんだよ」

橙夜「なんだその理由……。まあ、来るならついてこいよ」

そう言う雄二に理由を聞くと、理由とも言えない理由を言われた。

雄二の本能は、翔子が関係することだとの的中率はほぼ100%だが、今回はどうなんだか。

雄二「そうと決まったら。明久、睦月。お前らも来い」

明久「雄二の意図が分からないけど、いいよ」

睦月「面白そうなことになりそうだから、俺もいいぞ」

ついてくる気満々だった雄二は、明久と睦月を道連れにする気のようにだ。

特に危険じゃないはずだから、道連れも何もないだろうけど。

秀吉「ワシはどうすればいいのじゃ？」

橙夜「秀吉は朱雀たちと喫茶店ですメニューの選定をしておいてくれ」

秀吉「うむ。了解じゃ」

指名されなかった秀吉が、そう聞いてきたから、この珍騒動の前に俺がやっていたメニューの選定を頼むことにした。

橙夜「それじゃいくか」

睦月「おう」

明久「うん」

雄二「ああ」

俺がそう言うと、睦月たちは三者三様の返事をし、一緒に教室を出て、学園長室に向かった。

S i d e . e n d

第巻七問目 捕獲された雄二と選択肢（きょうはく）（後書き）

裂「今回の後書きは、則次 火焰様リクエストで」

鉄「連続出演の俺、西村宗一と」

学「同じく連続出演のアタシ、藤堂カヲルと」

福原慎（以降：福）「元Fクラス担任の私、福原慎の4人でお送りします」

裂「さて、前回の更新から約3週間だな……」

鉄「そうだな」

福「その間、一体、何をやっていたのででしょうか？」

裂「まず、前回更新後から枠外の59話を執筆を開始。

それが1週間前の20日に出来て、その日に公開。

そしてこっちの執筆を開始して今に到る」

学「枠外の方を始めた時は順調に執筆できていたのにねえ。確か一ヶ月は連続更新だった覚えがあるよ」

裂「まあ、ネギま！だったからだな。うん」

鉄「そういえば、新作を書きたいとか言っていたらしいじゃないか」

裂「ああ、うん……。完全新作の場合は2作品、簡単なプロットは

構想出来てるんだがな。

まずは、ネギま！の双子モノで薬味アンチ……というよりは、薬味無視モノ。

次は、バカテスモノで雄二と翔子の幼馴染モノ。ヒロインは未定で、雄×翔推奨だな。

これも雄×翔推奨モノだけど……一応」

福「完全新作の場合、と言うことは他にも数作あるという事でしょうか？」

裂「枠外の外伝モノとして2作品ある。

一つは本編で公言しているリリなの世界に飛ばされて。と言うやつ。時代背景は、魔法世界救援後だな。

もう一つは秘密……ではなくて、活動報告でヒントだしているんだよな」

学「新作や外伝の話もいいけど、こっちのPVとか凄いことになっているじゃないか」

裂「そうそう、ネギま！モノと違って、バカテスモノはあまりネームバリューが強くないんだが、なんと総PVが4万1千、総ユニークは5千超えてるんだぜ」

福「それは素晴らしいことですね。記念的なことはやる予定なのでしょうか？」

裂「やらない」

鉄「そこは普通、やると言うところだろうー」

裂「正しくは『やれない』だな。私って本編の方は書けるんだが、番外編とかがつてのを書くのが苦手で……。

特にバカテスモノで番外編とか書く場合は未来の話しか過去の話になるわけだろ？」

学「まあ、そうさね」

裂「清涼祭編終了後の日常 弐で2話程度過去の話を書くつもりなんだよな。予習編とオリジナルで」

福「それが書けるのなら書けるのでは？」

裂「いや、それが全く。その2話は伏線回収やらで書くから書けるのであって、そう言うのを考えないで現在以外の時間軸の話を書くのが難しいんだ」

鉄「なるほどな……。おっと、そろそろ時間のようだ」

福「それでは、今回以降の後書きに出演して欲しい三人を選んでください」

神楽橙夜 神楽睦月 神楽紫 桜儀燐 吉井明久

工藤愛子

坂本雄二 霧島翔子 土屋康太 須藤結子 木下秀吉

木下優子

姫路瑞希 島田美波 神儀紫稀 織斑朱雀 神原日向

神原焰

久保利光 速水劉太 清水美春 西村宗一 福原慎

高橋洋子

藤堂カヲル

裂「それでは、感謝コーナー！」

学「もみじ様とやら、毎回の感想、感謝するよ」

裂「次回の後書きは、もみじ様リクエストの社長・同性愛者・ムツツリの三人で送る予定だ」

福「おや？次回も私の出番ですか？」

学「そのようだね。本編では、殆ど出番ないからね、福原先生は…
…その救済目的じゃないかい？」

鉄「福原先生以外の二人が至極不安だな」

裂「新キャラ案、まだまだ募集中だ！指定された設定じゃなくても、
『使って欲しい』と言うキャラ案があれば、受け付けている」

福「それでは、次回もよろしく願います」

第巻八問目 依頼受領（前書き）

すいません。今回もバカテスはお休みです。次回は原作の書きま
す。

それと、11/05中に書きあがらず1時間ほど遅れました。

「これだから、駄雄二は……」by神楽兄弟

「誰が駄雄二だ!？」by坂本駄雄二

第巻八問目 依頼受領

Side・橙夜

？『……賞品の……として隠し……』

？『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

教室を後にして、新校舎の一角にある学園長室まで来ると、扉の向こうから誰かが言い争っているのか、声が聞こえてきた。

賞品と言うと、清涼祭での召喚大会のことか？

雄二「どうした橙夜、明久」

明久「いや、中で何か話しているみたいなんだ」

雄二「そうか。つまり中には学園長がいるわけだろう。橙夜を呼んだって事は、橙夜のほうが先約という事になるから、さっさと中に入るぞ」

まあ、雄二の言い分は最もだがな、流石に取り込み中だと思われるところに入るのはな……。

明雄「失礼しまーす！」

って、考えてたら、明久と雄二は学園長室のドアをノックして、ずんずんと中に入っていた。

その二人の行動に睦月は苦笑を浮かべていた。

俺の方と言うと、啞然としていた。他人が見れば、相当間抜けな顔だっただろう。

？「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

そんな、ババア長だと思われる女性の声を聞いて、我に返った俺は、睦月と一緒に部屋の中に進む。

？「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません。……まさか、貴女の差し金ですか？」

部屋に入ったところで耳に聞こえてきた声の方を向くと、眼鏡を弄りながら学園長を睨みつけていた教頭の竹原教諭がいた。鋭い目つきとクールな態度で一部の女子生徒には人気が高い。

明久個人としてはあまり好きになれないのだろう。そうとしか取れない顔に浮かんだ微妙な不快感を必死に隠そうとしながら明久は、竹原教諭を見ていた。

ついでというわけではないが、俺と睦月ははっきりと言うが、竹原教諭のことは嫌いだ。

家が『神楽グループ』という事を知って、頻繁に俺たちに取り入ろうとしてくるのだから、当然だ。

こんなヤツに教諭なんていう尊敬称をつけたくないのだが、社交辞令ってヤツだよ。

学園長「馬鹿を言わないでおくれ。どうしてこのアタシが、アンタ程度にそんなセコい手を使わないといけないのさ。負い目があると言うわけでもないのに」

竹原「……それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですよ」

ババア長の、『程度』発言に少タイラついたのか、竹原教諭の額

に薄めに青筋が浮かんでいた。

学園長「さつきから言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見間違いさ」

竹原「……そうですね。そこまで否定されるならこの場はそういうことにしておきましょう」

そう告げると、竹原教諭は部屋の隅に一瞬視線を送り、

竹原「それでは、この場は失礼させていただきます」

橙夜「ああ、竹原教諭。ちょっといいですか？」

踵を返して、学園長室を出て行くこととしたが、そこで俺は声を掛けた。

竹原「なんでしょうか、神楽橙夜君」

橙夜「先ほどの差し金がうんぬんってところを訂正させてもらおうと思ひまして」

竹原「訂正？それは一体どういう意味ですか？」

呼び止められ、振り返った竹原教諭は、俺が嫌悪しか抱かない一部女子が見れば喜ぶであろう笑みを少し浮かべながら俺をフルネームで呼び、用件を聞いていた。

それに俺は答え、再び竹原教諭はそう質問してきた。

橙夜「実は俺、HR終了後の放課後に学園長室に来るようにとLHRの時に西村教諭から伝えられていたんですよ」

竹原「それで？」

橙夜「来るのが遅れてしまいましたが、俺の方が先約と言うわけですよ。つまり今回は、先約があったのを知らなかったとはいえ、事

前連絡もなく来た竹原教諭の方に非があったと言えますね」

竹原「……そうですか。そう言うことでしたら、今後は気をつけましょう。それで、用件はそれだけですか？」

橙夜「ええ、それだけです。このあと、予定があったと思いますが、お呼び止めしてすいませんでした」

竹原「いえ、この程度なら大丈夫ですよ。それでは、今度こそ失礼させてもらいます」

質問の答えを返し、俺なりの推論と言つか暴論を話す。

俺が、『そっちの方に非がある』と言ったところで、竹原教諭は少タイラついたのか、表情に出たが、すぐに引っ込めた。

そして、会話が終了後、今度こそ竹原教諭は学園長室を出て行った。

学園長「んで、神楽の兄の方はアタシが呼んで、その弟がついてくるのはいいとして。そっちのガキども。アンタらは何の用だい？」

先ほどまで、空気と化していたババア長が喋りだし、ついて来ていた明久と雄二に声を掛けていた。

雄二「いえ。学園長に呼ばれていた橙夜について来ただけです」

学園長「はあ？それだけかい？」

雄二「ええ、それだけです。まあ、理由とは言えませんが、少々嫌な予感もしたもので」

なん……だと……？

あの雄二が。あの駄雄二が、敬語を使っている……だとっ!？

駄雄二「おい、橙夜。お前、今俺に対して失礼なことを考えただろ
う？それと、誰が駄雄二だ！？」

なんだ？遂に電波でも入ったか？……全く、これだから駄雄二は。
学園長「ん、んんっ！とりあえず、まずは名前を名乗りな。それが
社会の礼儀ってモンさ。何れアンタらも社会に出るんだから覚えと
くと、損はしないよ」

若干、心の中で駄雄二をからかっていると、再び空気になりかけ
ていたババア長がわざとらしい咳払いをして喋りだした。

……前にも思ったが、ババア長にだけは礼儀を説かれたくないな。

雄二「失礼しました。俺は二年F組の坂本雄二」

睦月「知っているようですが、同じく二年F組で神楽橙夜の弟の神
楽睦月です」

雄二「それで、こっちは」

雄二が隣に立っている明久を示し、紹介する。

雄二「二年生を代表する元バカです」

やはり雄二は、駄雄二だった。こういうときは普通に名前を言え
よ……。

学園長「ほう……そうかい。アンタたちがFクラスの坂本と吉井か
い」

明久「ちよつと待って学園長！僕はまだ名前を言ってますんよ！？」

諦める、明久。お前の学生時代を知る人間からは一生、元バカで

認識されるんだ。

学園長「神楽兄、ちょっと耳を貸しな」

橙夜「まあ、いいですが」

睦月たちには聞かれるわけにはいかない話題ってことか。

そう考えながら、ババア長の机を回って、隣に行き小声で会話を始める。

橙夜「(それで、なんでしょう?)」

学園長「(例のアレのことさ)」

橙夜「(……片方は解決しましたが、もう片方の
つても無理でした)」

がどうや

学園長「(そうかい……。そうになると、少々厄介なことになったね)」

橙夜「(召喚大会ですか?)」

学園長「(その通りさ。今更、賞品から外すことも出来ないしね……)」

橙夜「(だったら、明久たちを出場させましょう)」

学園長「(ああ。そういえば吉井は観察処分者だったね。それなら
問題ないね)」

橙夜「(それと、もう一つの賞品のチケットの良くない噂のことも
思い出したんですが)」

学園長「(そっちのほうも知ってたかい。なら、チケットの回収を
建前にして、アンタらに腕輪を回収してもらおうかね)」

橙夜「(わかりました。) 睦月、明久、雄二」

ババア長との話も終了し、俺は睦月たちに声を掛けた。

睦明雄「「なんだ(なに)?」「」

橙夜「学園長が俺らに頼みごとがあるそうだ」

雄二「頼みごと?内容は?」

返事をした三人に簡単に言つと、雄二は真意を測りかねているよ
うで、慎重に聞いてきた。

学園長「アタシが説明するよ。清涼祭で行われる召喚大会は知って
るかい?」

明久「ええ、まあ」

橙夜「じゃあ、その優勝賞品を知っているか?」

明久「え?優勝賞品?」

どうやら明久は、召喚大会自体は知っていたようだが、賞品があ
ると思っていなかったみたいだな。

睦月「確か、正賞に賞状とトロフィーと試召戦争に使える召喚者用
の『白金の腕輪』と『蒼天の腕輪』、副賞に『如月ハイランド プ
レオープンプレミアムペアチケット』が優勝ペアに2組分、準優勝
者ペアに1組分だったか?」
学園長「その通りだよ」

睦月がペアチケットと言つた時に、雄二がピクツと反応していた
が何だ……?」

明久「それで、それと頼みごとに何の関係が」
学園長「話は最後まで聞きな。慌てるナントカは貰いが少ないって
言葉を知らないのかい?」

乞食だったな。

明久「確か、乞食でしたっけ？」

学園長「ほう……。成績が向上したのは嘘じゃなかったみたいだね」

明久が知っていたことに、ババア長は驚きのようだな。

学園長「で、この副賞のペアチケットに関するところで、ちょっと良くない噂を聞いてね。出来れば回収してもらいたいのさ」

明久「回収？それなら賞品にしなければいいんじゃないですか」

学園長「それが出来たら、アンタらに頼んでないさ。この話を教頭が進めたとは言え、既に学園と如月グループ間で行った正式な契約だ。今更覆せないのさ」

そういえばこの人、試験召喚システムの開発に手一杯で、経営に關しては竹原教諭に丸投げしてるって話だったな。

睦月「契約する前に気付いて欲しいですね。一応、学園長なんですから」

学園長「うるさいガキどもだね・白金の腕輪と蒼天の腕輪の開発で手一杯だったんだよ。それに、この噂を聞いたのが最近だったのさ」

ババア長が眉を顰める。一応、それなりに責任は感じているみたいだな。

そういえば、さっきから雄二が静かなんだが、一体どうしたんだ？

明久「それで、悪い噂って言うのはどんなのなんですか？」

つまらない内容なんだけどね、と前置きして、ババア長は口を開いた。

学園長「如月グループは如月ハイランドにある一つのジnkクスを作るうとしてるのさ。『ここを訪れたカップルは幸せになれる』っていうジnkクスをね」

明久「？そのどこが悪い噂なんですか？良い話じゃないですか」
橙夜「そのジnkクスを作る為に、プレミアムチケットを使ってやって来たカップルを、多少強引な手段を使ってでも、結婚までコーディネートするつもりらしい」

雄二「な、なんだと!？」

学園長の言葉の後をついで、俺が説明すると、先ほどまで静かだった雄二が突然が大声を上げた。今度は一体なんだ？

明久「どうしたのさ、雄二。そんなに慌てて」

雄二「慌てるに決まってるだろう！今橙夜が言ったことは、『プレミアムチケットでやってきたカップルを如月グループの力で強引に結婚させる』ってことだぞ!？」

明久「う、うん。それくらい分かってるよ。それと、言い直せてないよ」

雄二のヤツ、うるたえすぎじゃないか？ペアチケットに関することとで何かあるのか？

学園長「そのカップルを出す候補が、我が文月学園ってわけさ」

雄二「くそつ。うちの学校は何故か美人揃い、試験召喚システムという話題性もたっぷりだからな。学生から結婚までいけばジnkクスとしては申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然ってことか」

そつ言って、悔しげに唇を噛む雄二。もしかして……。

橙夜「なあ、雄二。推測なんだが、如月ハイランドのプレオープン
のペアチケットが手に入ったら、一緒にいってやるって、翔子と約
束したのか？」

雄二「ああ、その通りだ……。絶対にアイツは参加して、優勝を狙
う……。行けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚……
…。俺の、将来は……！」

流石に、安請け合いしすぎだろう……。

学園長「ま、そんなワケで、本人の意思を無視して、うちの可愛い
生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

本当に可愛い生徒だと思っているのかは、謎だな。

学園長「無事にチケットを回収してくれたら、何か一つだけ頼みご
とを聞いてあげるよ。無論、優勝者とかからの強奪なんて真似はな
しだよ。譲ってもらうのも不可だ。このことを他の生徒に知られる
わけにも行かないからね。私はお前たちに召喚大会で入賞を独占し
る、と言ってるんだからね」

不正を許さないってところは、まあ、一応教育者と言ったところ
か。

雄二「個人的にも俺にも利があるから、この話、引き受ける」

学園長「そうかい。なら、依頼成立だね」

雄二「ただし、こちらからも提案がある」

学園長「なんだい？言ってみな」

雄二「召喚大会は二対二のタッグマッチ。形式は4つのブロックに
分かれ、準決勝、決勝はそれぞれの勝利ペアでのトーナメント制、
試合科目も一回戦毎に変えて進めていくと聞いている」

一回戦が数学なら、全部の一回戦を数学で戦い、二回戦からは、数学以外の科目で戦う。

点数が減っていけば、それだけで戦力が落ちることになる。一応、学園の宣伝行事だから派手さに欠けるわけにはいかないのだろう。

学園長「それがどうかしたかい？」

雄二「対戦表が決まったら、その科目設定を俺にやらせてもらいたい」

そう告げる雄二は、ババア長の反応を試すように鋭い目つきをしている。なるほど。真意を探っていると言うわけか。

学園長「ふむ……。いいよ。点数の水増しなら兎も角、科目指定くらいなら強力してあげるさね」

雄二「……ありがとうございます」

雄二の目つきが更に鋭くなった。どうやら、真意を完全ではないが、把握し始めたと言ったところか。

学園長「さて。そこまで協力するんだ。当然召喚大会で優勝、準優勝を独占出来るんだろうね」

雄二「無論だ。俺はともかくとして、こっちは学園最高峰成績保持者が2人はいるんだ。出来て当然だ」

橙夜「一応言うが、雄二。俺はお前らとペアは組めないからな？」

雄二「どういうことだ？」

橙夜「既に愛子とペア組んでるってことだ」

雄二「なるほど、そう言うことか。ペアに関しては後で話すとしてよ」

まあ、俺と睦月が別のペアなら、俺と睦月がペアになるよりも独占できる可能性も高くなるからな。

学園長「それじゃ、ボウズども。任せたよ」

四人「「「「ああ（おうよっ）！」「」「」

「っして、時が過ぎていく。

Side・end

第壱八問目 依頼受領（後書き）

裂「今回の後書きは、お馴染みのもみじさまリクエストで」

福「連続出演の私、福原慎と」

利「第壱四問目以来の僕、久保利光と」

康「……………俺はムツツリじゃない、土屋康太の四人で送る」

裂「ムツツリーニの出番がないな……………」

康「……………ムツツリじゃない」（ブンブン）

福「土屋君、嘘はいけませんよ。君は客観的に見ても、ムツツリスケベです」

康「……………そん……………な……………！」orz

裂「薔薇思考のヤツよりはマシだと思うがな……………」

利「それって誰のことを言ってるんだい？」

裂「お前しかいないだろうが！この薔薇野郎！？」

利「同性愛をバカにしないでくれたまえ！？」

裂「同性愛をバカにしているわけじゃない。お前のことだけだ」

福「久保君。同性愛をバカにするつもりはありませんが、そんな非生産的なことはやめた方がいいと思いますよ?」

利「そんな……!」orz

裂「ゲスト二人がorz状態になったな……」

福「これ以上は続けられそうにありませんし、閉めましょうか」

裂「それじゃ、次回以降の後書きに出演してほしい三人を選んでください」

神楽橙夜 神楽睦月 神楽紫 桜儀燐 吉井明久

工藤愛子

坂本雄二 霧島翔子 土屋康太 須藤結子 木下秀吉

木下優子

姫路瑞希 島田美波 神儀紫稀 織斑朱雀 神原日向

神原焰

久保利光 速水劉太 清水美春 西村宗一 福原慎

高橋洋子

藤堂カヲル

裂「それでは、感謝コーナー!」

福「則次 火焰様、LAN武様、もみじ様。感想ご意見、ありがとうございます
うございます」

裂「次回の後書きは、則次 火焰様リクエストの吉井明久と姫路瑞^{バカ}
希と一島田美波《人間兵器Ver照れ隠し》の三人でお送りする予
定です」

福「吉井君以外は初めて？いえ、リクエスト来る前には何度か出ていましたね」

裂「キャラ案まだまだ募集中だ！感想でも、メッセージでもどちらでも構いませんので送ってください。因みに、コラボもやりたいなあーっと思ってます」

福「それでは、次回の更新をお待ちください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2371w/>

俺の日常と召喚獣

2011年11月6日02時08分発行